私たちが、あなたの夢、応援します。

日建学院

Ready GO

日建学院

たくさんの素敵な笑顔が咲くように。*
私たちはここにいます。頑張る人を応援しています。
これまでも、これからも、達成の笑顔が私たちの誇りです。

建設関連資格試験 累計合格者数 *85万人突破

実績 *平成21年12月末日現在までの累計数 *11万2761人の一級建築士　15万6592人の二級建築士　7万9809人の宅地建物取引主任者を輩出

日建学院コールセンター 0120-243-229

株式会社建築資料研究社　東京都豊島区池袋2-50-1　受付／AM10:00～PM5:00(土・日・祝祭日は除きます)

NICHE 2010 VOL.33

CONTENTS

会長あいさつ
田野邉 幸裕 日本初の建築学部誕生 ……6

伊藤鄭爾先生追悼（工学院大学元理事長・学長）
谷口 宗彦・中山 繁信 ……8

日本初の「建築学部」設立
「工学院大学の建築」は新たな時代へ
－工学院大学建築学部設置に関するご報告－ 長澤 泰・野澤 康 ……10

新しい風に聞く 新任の挨拶
藤森 照信 ……11
柳 宇 ……11
鈴木 敏彦 ……12
中村 勉 ……12
三好 勝則 ……12
遠藤 新 ……12
西川 豊宏 ……13
久保 智弘 ……13

工学部建築系学科・大学院からの便り
大橋 一正 第一部建築学科の近況 ……14
後藤 治 建築都市デザイン学科の近況 ……14
遠藤 和義 大学院建築専攻の近況 ……15

NICHE Topics
①十代田昭二先生の叙勲を祝う会 ……16
②藤木 隆明 イギリスで藤木研究室の作品展、カタログ出版 ……17
③第2回高校生の建築フレッシュ・アイデア・コンペ
テーマ「家族の空間・自分の空間」 ……18
④一級建築士合格者数全国第5位 ……19
⑤後藤研究室 山梨県建築文化奨励賞 受賞 ……20
⑥田村 雅紀
工学院大学学園創立122周年記念大学表彰 受賞 ……20
⑦平井 充・山口 紗由・鈴木 暁子
杉コレクション2009 in 日南 堀川運河上向くカタチ 入選 ……21
⑧加藤 直樹・島田 将宏
2009住宅設計コンペ50年デザイン住宅 入賞 ……21
⑨辻 雄貴 JAPAN ART FESTIVAL IN 沼津2009 入選 ……22
⑩古川 雄太 第9回韓国・日本建築材料施工ジョイント
シンポジウム 発表論文賞受賞 ……22
⑪浅羽 英男・蔡 龍保 工学院大学の“輝かしき先輩たち”講演会
……23
⑫建築系学科同窓会総会 ……23
⑬天野太郎の建築展 ……24
⑭卒業生の求職・転職をサポート ……24

学科ホームページ ……25

新刊書紹介（BOOK 9冊） ……26

学校法人 工学院大学創立125周年 特別企画
浅羽 英男 建築コンペと工手学校 ……28
蔡 龍保 進藤熊之助と日本統治時代初期の台湾鉄道 ……32
二村 悟 製鉄から建築技術者へ木下益次郎 ……36

輝かしき先輩達⑪
初代・通天閣は新しい時代のランドマークであった「設楽貞雄」
（レポート：類洲 環） ……40

卒業生に聞く
杉村 貞夫氏社長就任（ジェイアール東日本建築設計事務所） ……44

建築デザイン特論
畑 聰一 森林と砂漠の思考形式 集まって住む空間と暮らし ……47

特別企画
二宮 正一
東洋のアルカディア（桃源郷）「循環する風土をつくる」 ……52
渡邊 誠 医療法人社団高邦会 福岡山王病院 ……56

世界の建築家と工学院大学⑦
樋口 清 私の訳した本 ……60

around the World
石塚菜々子 パリの仕事について－ドミニク・ペロー事務所 ……64
佐藤 弘規 建築から経営学へ、そして、アジアへ ……70
小松 春奈、佐々木慶太、宮崎 貴徳
台湾の都市計画区域内農業地域と日本の生産緑地地区の
環境・防災視点からの比較研究 ……74
中山 友里 台湾市民レジャーの新潮流
～多様なレジャー農園の展開～ ……78

NICHE PASSPORT
渡辺 裕一 美術館建築と光を巡る旅 ……80
加納 学 シナンという建築家とイスタンブールと僕 ……83
江口 拓 トルコの都市と自然の遺産を巡る ……86
長塚 幸助 フランス・旅の記録 ……88
鍋内 翔太 アジアとヨーロッパをつなぐ
－ボラポラス海峡工事見学 ……90

同窓生を訪ねて
関谷 真一 第11回長崎県木造住宅コンクール最優秀賞 ……92
細村 研一 象徴としてのアルミパンチングメタル ……96

同窓生からの便り
下崎 信 人と暮らす樹木、匠で活躍 ……100
加藤 浩司 地域に学ぶ研究室「有明高専カト研」の活動 ……102

博士論文 News
伊坂 道子 建築と都市の歴史からみた増上寺境内と芝公園の研究
……104
鱒沢 曜 免震レトロフィットに関する研究 ……108
西川 豊宏 建物運用時の廃棄物資源回収と環境性能に関する研究 ……112

NICHE GALLERY
吉田 立 WIDE VIEW HOUSE ……114
鍋田 雅生 伊豆高原ゲストハウス ……118
田中 栄作 総和町の家 ……122
浅野 泰弘 建築学科を出てプロダクトデザイナーに ……126

また会う日まで
初田 亨 建築学科の教員を退職するにあたって ……130

2009年度 各研究室の在籍者名簿 ……131

2008年度 卒業研究題目 ……132

表紙デザインのコンセプト、編集後記 ……138

工学院大学建築系学科同窓会誌 NICHE（ニッチ）2010 VOL.33

●発行日 2010年3月31日 ●発行／工学院大学建築系学科同窓会 会長 田野邉幸裕 ●住所／163-8677 東京都新宿区西新宿1-24-2
電話 03-3342-1211（内線）2746 ●編集長／大場光博 ●編集委員／谷口宗彦、楠昭、田野邉幸裕、伊藤真人、浅野賢一、大塚篤、高木雅行、鰺坂誠之 ●編集協力／日嘉雄大（工学院大学大学院修士2年）、坂間慶介（同大学院修士1年）●表紙デザイン／池谷高浩（同大学院修士1年）
●建築系学科同窓会年会費（郵便振込4,000円／VISAカード引き落とし3,000円）●本文デザイン・印刷／株式会社 春恒社

確認申請は
住宅性能評価センター へ
正確・迅速・丁寧な対応を、お約束します。

事業のご案内

■住宅性能評価
■【フラット35】適合証明
■住宅瑕疵担保責任保険検査：(財)住宅保証機構、住宅あんしん保証、日本住宅保証検査機構、ハウスジーメン
業務区域：上記の3つに関しては日本全域

■建築確認
業務区域：東京都(島しょ部を除く)、神奈川県、埼玉県、千葉県、茨城県、栃木県、群馬県、宮城県、山梨県、長野県、静岡県、愛知県、岐阜県、三重県、富山県、石川県、新潟県、福島県、島根県、鳥取県、広島県、山口県、熊本県、宮崎県、鹿児島県、長崎県、大分県、福岡県及び佐賀県の全域

各地区所在地

北関東地区出張所：
栃木県宇都宮市中河原町 3-19 宇都宮セントラルビル7階／ TEL：028-610-7140

西関東地区出張所：
東京都町田市原町田 2-6-13 ベルストーク3階／ TEL：042-709-0420

本社：
東京都新宿区新宿2-3-11御苑前311ビル5階
TEL 03-5367-8730(代)　※1階が「セブンイレブン」です。

山陰地区出張所：
島根県出雲市平田町 140-13
TEL：0853-62-5931

南九州地区出張所：
鹿児島県鹿児島市中央町 9-10 創夢第一ビル4階／ TEL：099-299-1200

新出張所オープン！　長崎県長崎市、佐賀県鳥栖市(本年中)

採用情報

代表取締役・田野邉 幸裕は、工学院大学建築学科の卒業生です。現在多数の卒業生がスタッフとして活躍しています。新卒、一級建築士の方、建築基準適合判定資格者の方、住宅性能評価センターで審査者・検査員として働いてみませんか? 当社では安心して働いていただける環境が整っています。
まずは、担当：宮田(平成15年修了)電話：03-5367-8730までご連絡ください。

国土交通大臣 指定確認検査機関／国土交通大臣 登録住宅性能評価機関 ／住宅金融支援機構 協定指定機関／住宅瑕疵担保責任保険検査機関

株式会社 住宅性能評価センター

www.seinouhyouka.co.jp
住宅性能評価センター　検索

正確で迅速な判定で
法改正による確認審査の長期化を打破します！

建築確認申請時の構造計算適合性判定はぜひ当機関に

構造計算書偽装問題の再発防止のため、平成19年6月20日に改正建築基準法が施行されました。それにより、高さ20mを超える鉄筋コンクリート造などで、一定の高さ以上等の建築物や高度な構造計算をした建築物については、指定構造計算適合性判定機関による構造計算適合性の判定（ピアチェック）が義務付けされました。

多くの方々にご協力を頂き、専門家知識を持つ第三者機関として、下記の13地域で判定業務を行っています。

私たちは、国民の建築業界に対する不安から信頼を取戻し、業界の発展と安心な建築物造りに貢献してまいります。　また、建築構造を学ぶ学生達に、生きた現場構造に触れる機会として「インターンシップの場」を提供し、後進の育成に協力して参ります。

代表取締役社長　田野邉　幸裕

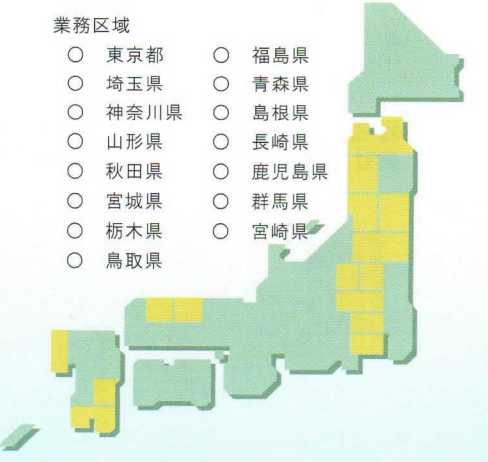
指定構造計算適合性判定機関
株式会社 建築構造センター

事前にご連絡いただければOBが担当いたします。

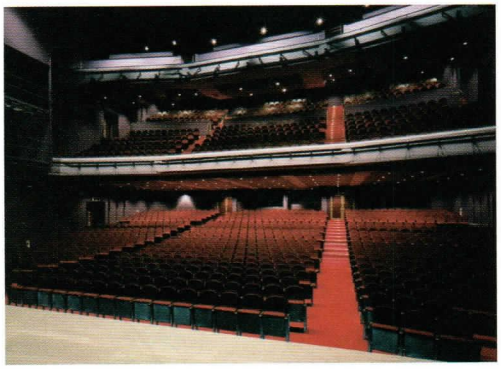
加藤　隆弘	建築学科1977年卒業
五月女　元良	建築学科1976年卒業
有山　定男	建築学科1970年卒業

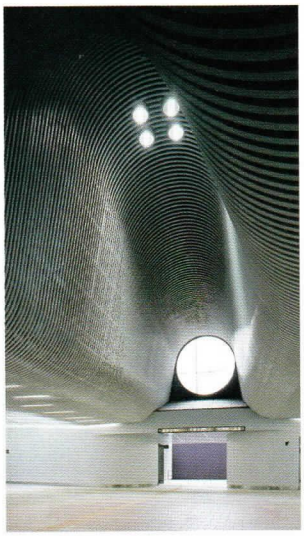
業務区域

- ○ 東京都
- ○ 埼玉県
- ○ 神奈川県
- ○ 山形県
- ○ 秋田県
- ○ 宮城県
- ○ 栃木県
- ○ 鳥取県
- ○ 福島県
- ○ 青森県
- ○ 島根県
- ○ 長崎県
- ○ 鹿児島県
- ○ 群馬県
- ○ 宮崎県



本社　〒160-0022　東京都新宿区新宿2-1-2　白鳥ﾋﾞﾙ2階　TEL：03-6413-5777
http ://www.kozocenter.co.jp
長崎事務所　〒850-0033　長崎県長崎市万才町6-33 高木ﾋﾞﾙ501号室　TEL：095-829-5222
山陰事務所　〒690-0874　島根県松江市中原町6番地　TEL：0852-60-0144
神奈川事務所　〒220-0004　神奈川県横浜市西区北幸2-10-39　日総第5ﾋﾞﾙ3階　TEL：045-534-7773
東北事務所　〒980-0014　宮城県仙台市青葉区本町2-10-28　ｶﾒｲ仙台ｸﾞﾘｰﾝｼﾃｨ4階　TEL：022-726-5885





空間と環境の
総合クリエイター

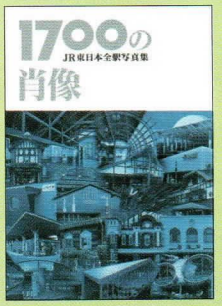
株式会社 ジェイアール東日本建築設計事務所

〒151-0053
東京都渋谷区代々木2-2-6 JR新宿ビル
TEL 03-5371-3381

■東北事務所　TEL 022-262-9225
■上信越事務所　TEL 027-330-1600

http://www.jred.co.jp

JRE設計



1700の肖像
JR東日本全駅写真集

木造駅舎やガラス張りの現代的な駅舎、地元に愛されている素朴な駅舎など、JR東日本の全旅客駅1700箇所のカラー写真を収録。駅舎建築に関心のある方必携の書。

（A4版 296頁）

定価 5,000 円（税込）

お求めは大手書店またはインターネット書店で！

水面に放たれたエネルギーが、
力強く、幾重にも波紋を描いていくように。
創り上げたひとつひとつの建設物が、
一人ひとりのゆたかな暮らしを拡げていく。
そんな街づくりをすすめていくことが、
創業以来100年にわたって変わることのない
“F＝FUJITA”の仕事です。
想像を超える創造力で、
果てしなく広がる未来の起点になる。
私たちは、100年目のフジタです。

2010年、おかげさまでフジタは創業100周年。

100 ANNIVERSARY

次の100年を築く。

FUJITA

www.fujita.co.jp

日本初の建築学部誕生
来年度(平成23年4月)募集開始

工学院大学建築系学科同窓会　会長
田野邉　幸裕
昭和44年工学院大学1部建築学科卒業
鹿児島県立鹿屋高等学校出身

建築系同窓会会長を高木氏から引継いでから、9年(3期)の歳月が経過いたしました。この間、多くの皆様のご協力とご支援で、何とか無事に務めることが出来ましたことに、関係の皆様方に感謝申し上げます。この同窓会誌NICHE(vol.33)が届く頃には、新会長が決定している事と思います。

さて、昨年度は、オバマ政権が発足し、世界の主要問題を話し合うための枠組みも、先進国主体のG7から新興国を交えたG20の体制に以降しつつあります。世界同時不況からの脱出、地球環境問題等の重要課題は、地球規模で取組む必要があると認識させられた1年でした。わが国では、百年に一度の凄まじいまでの不況の幕開けとなり、今も尚、その影響が続いています。民主党が国民から圧倒的支持を得て、鳩山内閣がスタートしましたが、ＪＡＬが破綻するなど、デフレスパイラルから抜け出ることもない状況のまま、新年度に突入いたしました。この状況を打破する為には、各企業と国民一人一人の自助努力が、最も大切な一年になると思います。

その原動力となるのが、我々技術者の創意工夫とチャレンジではないでしょうか。私は、何事も、その場面・場面でのチャンスは一回しかないと思います。行動・決断するチャンスが到来したと捕らえたなら、同窓会の「ネットワーク」を有効に活用することも、この逆境を乗り切る一つの方法であると思います。

■ 「工学院の建築」は新たな時代へ
—工学院大学建築学部誕生－

2011年春、日本初となる「建築学部」が発足、伝統ある「工学院の建築」は次の時代へ向けて新しい一歩を踏み出します。

新たな建築学部は、これまでの工学部建築系学科をベースに、ますます多様化する生活や社会のニーズに対応し、建築系学科の中では扱って来なかった新分野も取り入れ、**まちづくり学科、建築学科、建築デザイン学科**の3学科で構成されています。

是非、同窓生の皆様方は、「工学院大学建築学部」に関心をお寄せいただき、学生募集や卒業生の就職などで、直接、間接のご支援をお願い申し上げます。

■ 【チャンスは一度】

最近「飛行機のある風景」をテーマとした撮影に出かけています。昨年10月10日に松山空港近くの垣生山から3000m先「きらめく海面と旅客機」の撮影中にプロカメラマンと知合い、11月23日は熊本が面白いよとの情報を得て、再開を約束いたしました。約束前日から熊本入りしたが、豪雨で撮影不可、しかし当日快晴となり撮影ポイントは、100名を越すカメラマンの列となりました。また、フライト出発時間が約10分遅れ・手前（東側）からのランデングのチャンスに幸運・幸運。11月23日17時09分（日没12分ごろ）に熊本空港滑走路の東側土手から撮影い

松山空港 2009年10月10日午後17時17分

熊本空港 2009年11月23日午後17時09分［ストライク］

たしました。【チャンスは一度】とシャッターを約75秒間に180コマ以上の連写中の1枚です。反省、幸運すぎて焦り、ピントがもう一つ、次回にチャレンジを心に誓う。

■「102名の一級建築士誕生」おめでとうございます

難関資格、一級建築士の平成２１年度合格者が、１２月１７日に発表ありました。その結果わが工学院大学は、102名（昨年82名）の合格者、大学別の合格者数ランキング5位（昨年6位）に躍進しました。

これも、母校の伝統ある建築教育と難関資格にチャレンジ精神の高い、皆様の努力の賜物と言えましょう。こうした実績をさらに発展させるべく、建築系同窓会ではOBや現役学生へ、様々な支援事業を実行しております。特に1級・2級建築士・宅地建物取引主任者の「資格支援Ｗｅｂ講座」を特別価格(別途ご案内参照)にて、提供させて頂けることが実現致し、受講者から多くの合格者が生まれています。

・・・・・今後の活躍を期待申し上げます・・・・・

■　第44期　2009年度　工学院大学建築系学科同窓会　総会

2009年5月31日（日）10時30分から13時までの間、新宿キャンパス20階（第6会議室）にて、多数の会員の参加を得て開催致しました。
43期（2008年度）事業結果及び収支決算及び44期（2009年度）事業計画及び予算などの承認や変化の厳しい建築業界について有意義な意見交換の後、午後13時30分より校友会の総会に参加いたしました。

■　第9回ホームカミングデーを11月3日(火・祝)開催

ホームカミングデーは、学園各学校の卒業生に、学園の現状を直接ご覧いただき、懐かしい恩師や学友との再会と交流・親睦を深めていただくために、平成１３年から開催している行事です。9回目を迎えた昨年度は、11月3日(月・祝）に新宿キャンパスで開催されました。

当日は、招待年次の卒業生、5年目（平成17年)、10年目（平成12年)、15年目（平成7年)、20年目（平成2年)、25年目（昭和60年)、30年目（昭和55年)、35年目（昭和50年)、40年目（昭和45年)、45年目（昭和40年)、50年目（昭和35年)、55年目（昭和30年）にあたる方、現在全国各地の中学校・高等学校で教員をされている卒業生、校友会関係者、学園各学校を退職された元教員など、約250名の参加者を迎え、歓迎式典が盛大に執り行われました。

なお、本年度の第10回ホームカミングデーは、詳細が決定次第、大学のホームページ等でご案内されますので、ご参加をお願いいたします。

■　学校法人工学院大学創立１２５周年記念事業募金の建築系同窓会の推進状況

推進委員長：加藤隆弘　　副委員長：高木雅行、三好薫、斉藤敏博　　委員：同窓会評議委員全員

平成24年までに建築同窓会では、5,260万円の募金目標として開始いたしました。平成21年12月末現在524万円（累計65名）の方から寄付を頂きました。まだまだ目標には程遠い状況です。皆様方のご支援とご協力をお願いいたします。

■　年会費の納入お礼

我々建築の「同窓会活動」は、卒業生のみならず在校生への各種支援、及び本学を受験し、合格者を出した全国１５００高校（昨年実績）にも「NICHE」を配布し、大きな母校躍進のイメージアップに貢献しています。こうした活動を発展・持続させるには、たゆまぬ努力と皆様のご協力が是非とも必要です。この意義をご理解いただき、会費を納入いただきました卒業生の皆様ありがとうございました。この誌面をお借りしてお礼申し上げます。

同窓会総会

校友会新年会風景

工学院大学 元理事長・学長 伊藤鄭爾（ていじ）先生ご逝去

「都心型超高層大学」構想の大功労者！

2010年1月31日午前2時35分、呼吸不全のため東京都練馬区の病院で死去、88歳。

伊藤鄭爾先生（建築史家、建築評論家）　略歴

1922年岐阜県生まれ。1945年東京帝国大学工学部建築学科卒業。東京大学生産技術研究所を経て、ワシントン大学客員教授、工学院大学学長・理事長、文化庁文化財保護審議会委員、文化財建造物保存技術協会理事長など歴任。工学博士。著書に「中世住居史9」東京大学出版会、「日本の民家」（二川幸夫氏と共著）A.D.A.EDITA Tokyo、「民家」平凡社、「城」読売新聞社、「借景と坪庭」淡交社、「日本都市史」「西洋建築史」（建築学大系）彰国社、「Nature and thought in Japanese Design」WODECO、「結界の美」淡交社、「日本の工匠」鹿島出版会、「日本の庭園」講談社インターナショナル（「The Gardens of Japan」として英訳版も刊行）、「重源」新潮社など。1959年度毎日出版文化賞、1961年度日本建築学会賞受賞。

今から23年前、1987年7月、本学は老朽化した新宿校舎の再開発事業（第Ⅰ期工事：大学高層棟）に着手した。日本初の高度情報学園街区「都心型超高層大学」のスタートであった。この事業は、日本生命、第一生命と工学院大学の三者の共同開発として、本学が一銭も建設費の負担なしで、校舎を新築するという夢のような成果をあげた。

この発案推進者が伊藤鄭爾元学長である。14,755㎡の空中権譲渡と僅か210坪の借地権設定で、両生保から290億円という巨額の建設資金を着工前に受け取った。これにより第Ⅲ期工事が終了するまで9年にわたる街区再開発事業の流れができあがり、まさに今日の工学院大学の礎が築かれた。

建築系学科同窓会 会長補佐
谷口 宗彦
工学院大学建築都市デザイン学科 教授

■「日本デザイン論」

私が本学に助手として採用された1971(昭46)年、伊藤鄭爾先生は建築学科に着任された。本学に招聘された理由は、民家研究や建築評論の世界で大活躍されていた先生を迎え、建築史とデザイン教育・研究で建築学科の一層の活性化を願ってのことであった。特に先生の名著「日本デザイン論」は、来られる前から我々学生には日本建築を見直す大きな影響を与えていた。多忙な先生を補佐する中山繁信助手を中心として行った伊藤研の民家・町並研究やそのデザインサーベーもまた新鮮で、全学生が大いに啓発されたものである。それらの想い出から「NICHE」2006Vol.29では、特別企画『「日本デザイン論」をめぐって』という表題で寄稿をお願いした。戦前から戦中戦後、東大での内田祥三・丹下健三・内田祥文先生達とのやり取り、米国の大学招聘から「日本デザイン論」が形づくられるまでの想い出をまとめて戴いた。今となっては大変貴重な記録となった。しかし伊藤先生の着任はご自分の専門領域にとどまらず、その後の工学院大学発展史に大きな功績を残すこととなった。

■学長選出と再開発事業

本学着任して間もなく、1975年には突然「学長」に選出されることとなってしまった。この年は第一次オイルショックとインフレで、本学園財政は一層逼迫し、全国的に学生闘争の嵐が吹き荒れ、本学にても学園紛争に明け暮れする過酷な職務となった。しかし、本学のおかれた厳しい環境から1980年「学園将来計画委員会」を立ち上げ、再開発計画立案について審議した。そこで得た方針は「新宿校地という資産は売却しない条件で検討を進める。ただし地上権譲渡等はあり得る」とした。当時十数年に渡って検討を重ねた学園将来計画は、伊藤学長によってはじめて八王子校舎結集を含む移転案は消滅した。伊藤学長主導で高山英華氏が理事長として招かれ「都心型大学」という新しいイメージをもった「学園将来計画大綱」が提示された。この提案は文部省から「都心におけるひとつの実験校」として再開発事業の許可を得る呼び水の役割を果たし、多くの大学が都心に戻るモデルとなった。

■再開発計画の障害

しかし、当時の本学には、超えなければならない三つの大きな障害があった。一つは、大学設置基準による「私立大学の校地面積は、校舎床面積の6倍を必要」とし、新宿校舎では大きく不足していることであった。二つめは借金の返済。三つ目は借金に伴う新宿校地の根抵当権の解消であった。まず、第一の障害である校地制限については、伊藤学長の各省庁への働きかけもあり、1981年「工場等規制法」の見直しと大学設置基準の問題の一部が改正された。第二、第三の障害となった借金（利息返済を含め14億円にのぼる）とそれにリンクする抵当権の解消については、厳しい財政抑制策で借入金の完済1987年にこぎつけ解決した。これにより、再開発最大の障害をクリアすることとなった。しかし、1928(昭3)年以来複雑な増改築を繰り返し老朽化した新宿校舎を解体して、再開発に踏み切るとい

う発想に至るには、授業の継続(教室面積2554㎡の維持確保)、建設資金の調達など想像を絶する困難が山積していた。

■KDN委員会と建設資金

「学園将来計画大綱」の決定後、理事会の諮問機関として新たな「学園将来計画委員会」が伊藤学長主導のもとに組織され「学園将来計画要綱」の作成に入った。同時期、本学の再開発計画を知った新宿校舎に隣接する二つのビルオーナー（2生命保険会社）から街区一体化計画に、参加申し入れがあった。1985年発足の3地権者によるKDN委員会（K:工学院大学、D:第一生命、N:日本生命の略）は、本学が所有できる容積約70,587㎡のうち、14,755㎡を生保に売却する。これら「空中権（air right)」の譲渡。学園所有地の一部（約690㎡：210坪）をオフィスビル建設のために貸与（借地権設定）することで、合計290億円の費用を本学に支払うことで決着した。同時に特定街区として共同開発する再開発手法について協議をすすめ、これによって無借金で学費収入とまったくリンクしない再開発着手が初めて可能になった。しかも、高層化による維持管理費増大に備え、オフィスビルの中に収益権を残すことも考慮している。1973(昭48)年の「学園移転問題」に端を発する再開発論議は、その着工迄に実に十数年の年月を要し、着工以来9年、街区全体の建設総工事費だけでも500億円を超える再開発事業として、1994年の第Ⅲ期工事（公開空地広場とその地下街)の竣工と共に予算的にもゆとりをもって終了した。

■その後の論議と歴史的評価

Ⅰ期工事に着工する中で、工事予算額の超過・有効面積の不足など様々な問題点が判明した。学園全教職員はもちろん、評議員会、校友会・建築学科同窓会にて議論は沸騰した。はからずも、私一人が教員として再開発本部に入ることとなり、計画内容の修正に加わることとなった。その重責たるや、日々身の細る思いであった。改善には限度があったが、Ⅱ・Ⅲ期工事の見直しを同時に検討し、現在の校舎が完成した。

今にして思えば、伊藤学長の判断による両生保からの建設資金の獲得は、バブル経済に支えられた絶好の時期に契約成立したと言えよう。この時期が早すぎればⅢ期工事は建設費の高騰で予算不足となり、遅れていれば再開発着手のための可能金額の取得は困難で、開発に踏み切れなかったと考えられるからである。

いずれにせよ、再開発計画の一端を担った者の一人として、船頭の多い大学の舵取りの難しさを痛感した。

日本初の「超高層大学再開発事業」という学園始まって以来の大事業に、強い意志で踏み切り舵取りを行った伊藤先生の判断と実行力に深く敬意と感謝のを表し、謹んでご冥福をお祈り申し上げたい。

中山 繁信
工学院大学特別専任 教授
元伊藤研究室助手

■伊藤鄭爾先生を偲ぶ

大学にとっても、建築界においても掛け替えのない人を失った。先生から教えられたことは数知れないが、正直先生に出会えたから、現在の自分があると思っている。

思い起こせば、様々な分野で先生の先見性と洞察力には驚かされる。

「民家」は庶民の家を指すが、当時の建築史の分野では庶民の家など研究対象の俎上に乗らないほど意味のない存在と思われていた。しかし、先生は近代化の流れの中で、地方各地で消失してゆく農村や漁村の民家を採集、研究して歩いた。結核を患い、死の淵から這い上がってきた体で、よく過酷な道を歩いたと思う。ある時、なぜ権威の無い民家という分野に執着し続けたのかを聞いたことがある。返ってきた返事はただ「誰もやっていなかったから・・・」知っての通り、その後民家は見直され、学問の対象として、その地位は確立されていった。それは先生の労を重ねた功績の何物でもない。だから、学生に対して「人と同じことをやるな・・」という独自性をもつことの重要性を説いていた。

また、デザインサーベイというフイールドワークを初めて日本に紹介したことでもよく知られている。この分野の嚆矢であり、学問的地位を確立したのも先生の大きな功績のひとつである。集落全体を実測調査し、共同体の形態を視覚化する研究である。それによって村や町の仕組みや人々の関係を知ることができ、その時代の共同体の形態を図面として資料化することができるようになった。

工学院大学には、来春日本初の「建築学部」ができ「まちづくり学科」ができる。現代の私たちの住む共同体の姿は醜悪といって言い過ぎではない。それを真剣考え、学ぶ環境ができることは有意義なことである。その中に「デザインサーベイ」という科目ができる。伊藤先生が日本にはじめて紹介し、広まった研究の分野が、一つの科目として大学の教室で語り継がれることになれば、改めて先生の偉大さを感じてやまない。

先生、安らかにお休みください。私たちは永遠に先生のことを忘れることはありません。

日本初の「建築学部」設立

「工学院大学の建築」は新たな時代へ
—工学院大学建築学部設置に関するご報告—

副学長・建築学科教授
長澤　泰

建築都市デザイン学科教授
野澤　康

※この文章は、2010年1月に執筆しており、その段階では「建築学部」は新設へ向けての準備をしている最中です。2010年3月までに学内手続きと文部科学省との事前相談を終えて、2010年4月に正式に文部科学省へ設置申請することとなっています。したがって、ここに書かれた内容は最終決定のものではなく、今後、若干の変更があり得る内容であることを予めご了承下さい。

2011年春、伝統ある「工学院の建築」は次の時代へ向けて新しい一歩を踏み出します。既に一般紙・業界紙で報道され始めていますが、ついに、念願の「建築学部」が発足します。他大学でも同様の準備を進めているところがあるようですが、日本初となることは間違いないようです。

1999年に、現在の2学科体制となってから約10年を経過し、これまでの実績が評価されて学部化することになりました。この数年間、何度か建築系学科の学部化の話は持ち上がっていましたが、なかなかうまく行きませんでした。昨2009年春から再々度、学部化の準備をスタートして、その後は加速度的に構想の作成・取りまとめや学内調整がスピードアップし、ようやくこうしてご報告できるところにまでに至りました。

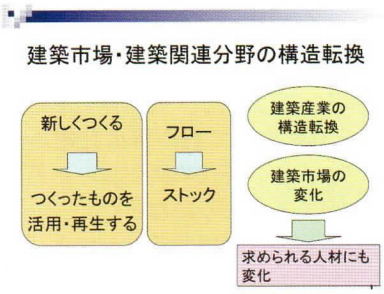
この建築学部は、これまでの工学部建築系学科での教育の実績をベースにして、ますます多様化する私たちの生活や社会のニーズに対応して、これまでは独立していなかった分野や、そもそも建築系学科の中では扱って来なかった関連分野も取り入れて、教育・研究の柱に位置づけています。学生は建築に関する基礎的な素養を網羅的に身につけるとともに、幅広く用意された専門分野の中から自らの進路に合わせて深く学修する分野を選択して、より高度な専門知識を身につけられるようなカリキュラムが用意されています。

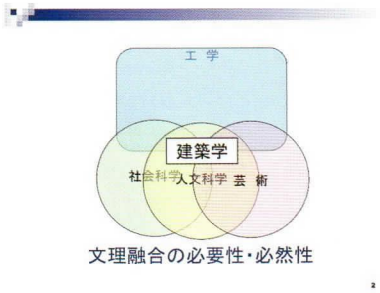
そのような専門分野は大きく見ると12分野用意されていて、それらを組み合わせて、まちづくり学科、建築学科、建築デザイン学科の3学科が構成されています。これはVitruvius「建築十書」に言われる建築の3つの立脚点「用・強・美」になぞらえることができます。すなわち、「用」は建築やまちを使うという視点を強く意識したまちづくり学科、「強」は私たちの日常生活を守る強さを持った建築をつくる建築学科、「美」はまさにデザイン的な視点から美しく快適な建築を提案する建築デザイン学科に対応しています。

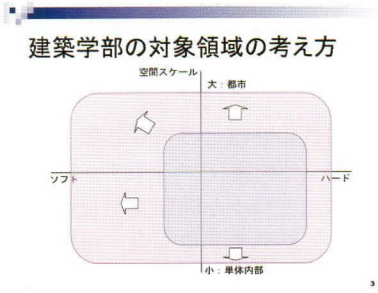
まちづくり学科は、都市デザイン、ランドスケープデザイン、環境共生、安全・安心の4つの分野で構成されています。行政の仕事から市民の役割へと広がりを見せるまちづくりを、さまざまな専門的な技術を持ってマネジメント・支援できる人材、計画策定や技術提案などで中心的存在となり得る人材の育成を目指しています。都市建築デザインコース設置以来発展してきた都市計画分野を土台として、近年、積極的に取り組んでいる地震防災や環境共生、一般には建築分野よりも造園分野に含まれるランドスケープデザインを取り入れた学科です。

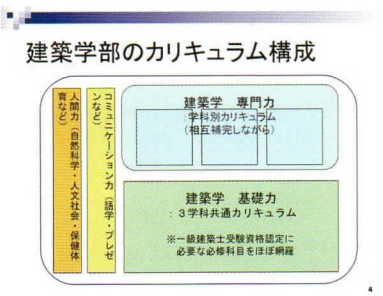
建築学科は、建築計画、建築構造、建築生産、建築設備の4分野で構成されます。伝統的でオーソドックスな分野構成となっていますが、教育・研究の内容は最先端の技術・素材・理論を扱うことになります。建築に対する新規の需要は大きく増えない時代にあって、既存の建築を使い続けるための技術、地震などの災害にも強い建築、人間や環境にやさしい建築のあり方を追求していく学科となります。高度な要素技術を習得して、「つくる」のみの立場から脱却して、「使い続ける」立場から、新鮮な発想を持って広く社会で活躍できる人材を輩出していきます。

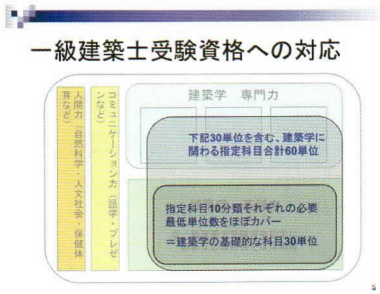
建築デザイン学科は、建築デザインだけではなく、インテリアデザイン、福祉住環境デザイン、保存・再生デザインも含めた4分野で構成されます。建築デザインについては、本学は伝統も定評もある分野です。その他に、これまでの建築系学科ではメインの分野として取り上げられてこなかったインテリアデザイン、これからの社会のニーズを先取りした福祉住環境デザイン、保存・再生デザインを柱に据えます。これによって、単に美しいだけではなく、機能性、快適性にも優れたデザインを追求し、高齢社会やサ

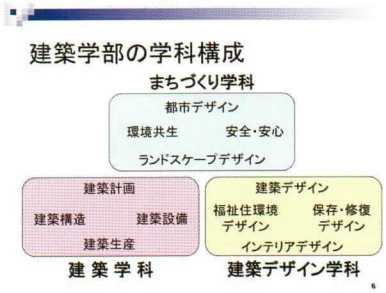


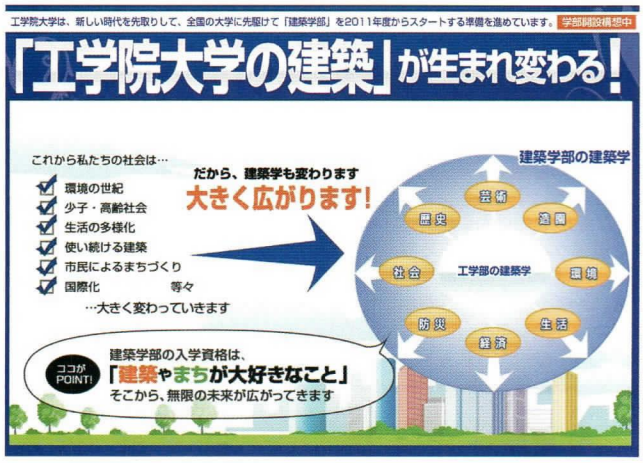












ステイナビリティを求められる社会のニーズに対応できるデザインを提案できる人材を育成しようと考えています。

以上のような3学科で構成されますが、これまで通り運営は一体的に行われます。1,2年次の建築の基礎を学ぶカリキュラムは3学科共通であり、教員も所属学科に関係なく科目を担当します。3,4年次には学科毎あるいは研究室毎にさらに高度で専門的な教育・研究を進めますが、学生は入学した学科から転科することも可能ですし、転科しないまでも自ら所属する学科以外の教員に習うことも可能な仕組みを採ります。

これに関連して、入試も大きく変わります。学科を選択して入学するタイプと、学科は決めずに「建築学部」に入学するタイプを併用します。また、工学部から「建築学部」に改組することで、受験生ターゲットは理系に限定せず、高校では文系に所属していたとしても、「建築が好きである、まちに興味がある」というやる気のある人材に入学してほしいと考えて、そのような入試の仕組みを構築していきます。

さて、このように日本初の新しいものをつくりあげていく高揚感がある一方で、大学をめぐる状況、建築業界をめぐる状況には大変厳しいものがあります。これから入学してくる18歳人口の減少、建築・建設関連産業の景気の冷え込みなど、私たち現職教員の努力だけでは如何ともしがたい状況があります。

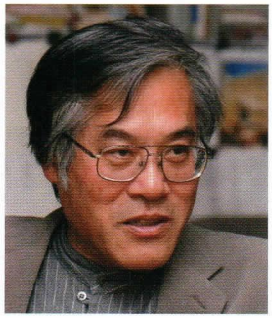
是非、同窓生の皆様方や関係の皆様方には、「工学院大学建築学部」に関心をお寄せいただき、学生募集や卒業生の就職などで、直接、間接のご支援をいただけることをお願い申し上げます。

建築学部開設は2011年度となりますが、既に新体制が構築されつつあります。建築学部の3学科の主任教授は、まちづくり学科；倉田直道教授、建築学科；遠藤和義教授、建築デザイン学科；澤岡清秀教授が、建築学部長は長澤が予定者として内定しています。

また、2009年度、2010年度には以下にご紹介する先生方にスタッフに加わっていただいていますが、この方々も建築学部で大いに活躍していただけると期待しています。

新任挨拶　新しい風に聞く

建築学科教授　藤森照信（ふじもり てるのぶ）



1946年生まれ　長野県出身
1971年　東北大学工学部建築学科　卒業
1973年　東京大学大学院修士課程　修了
1982年　東京大学生産技術研究所
　　専任講師を経て助教授
1996年　東京大学国際・産学協同研究
　　センター教授
1998年　東京大学生産技術研究所教授

九州大学・広島大学・東北大学・昭和女子大・東北芸術工科・長岡造形大学　非常勤講師
2010年　工学院大学工学部建築学科教授

日本建築学会論文賞、日本建築学会作品賞、日本芸術大賞、他多数受賞
（NICHE編集部）

このたび工学院大学で建築を教えることになった藤森照信です。これまで長らく、東京大学において日本近代建築史の研究と授業を受け持ってきましたが、本学においても、同様の研究と授業に励むつもりです。

ただ、東大とは少し違う展開も志しており、建築の設計と建設の方面にも手を伸ばします。東大時代も建築史研究に加え、設計活動もしていましたが、大学での仕事は、あくまで歴史研究に限定し、設計と建設は外での仕事としてきました。本学では、歴史に加え設計と建設の分野も加えようと考えています。

工学院大学とその前身の工手学校とは、これまでも何かとご縁がありました。たとえば、明治42年に工手学校を卒業した松本與作氏には生前、昔話をうかがい、辰野金吾の設計事務所での畳敷きに製図板を置いての日々とか、東京駅設計のときの辰野のデザインの進め方とか、辰野が息を引き取ったときの辰野邸での思い出とかを聞きました。今和次郎について、柳田国男からの破門の真相などを教えてくれたのも工学院大学の竹内芳太郎先生でした。

また、現教授の長澤泰、倉田直道、後藤治、前教授の初田亨先生とは、高校や大学の学生時代からの長い長い付き合いがあり、私が本学に親しみと信頼を寄せる一因となっています。

そうした大学で、設計と建設の分野も新しく手を染めるわけですが、具体的には、自然と建築の関係のあり方をテーマにします。自然環境の中でどんな建築を作ればいいのか、木や土や石や草といった自然由来の材料をいかに現代建築に取りこむか、あるいはそうした過去の試みについての歴史的研究です。こなれない言葉ですが、私の研究室の名は、“自然建築研究室”と名乗ります。大学案内用のキーワードとしては“手”、“建築”、“自然”の三つをあげました。本当はこれに加え、“歴史”と“文化”をあげるべきですが、それではあまりに幅が広がりすぎるので、三つに抑えました。

本学では、来年度よりいよいよ建築学部を発足させると伺っています。その時代の科学技術と芸術と文化と経済と制度と社会の融合体としてしか生まれない建築というフクザツカイキな物体をこととする分野としては、一つの学部を名乗るのがふさわしいでしょう。

最後に私の苦手を述べますが、保育園の入園の日から、机やテーブルに座るのがつらく、今もなおっていません。よろしくお願いします。

建築学科教授　柳宇（やなぎ う）

国立公衆衛生院研究課程修了
Doctor of Public Health・博士（工学）
1992年　新日本空調・技術研究所副主査
2002年　国立保健医療科学院・建築衛生部室長
2009年　東北文化学園大学・科学技術科学部教授
2010年　工学院大学工学部建築学科教授

・日本建築学会奨励賞
・Indoor Air 2005 Best Poster Award
・日本空気清浄協会論文賞
・第26回空気清浄とコンタミネーションコントロール研究大会会長賞　他多数受賞
（NICHE編集部）

2010年4月1日より、工学部建築学科の教授を勤めさせていただくことになりました．長い歴史があり、著名な先生も数多い本学の建築学科の一員に加われることを大変光栄に思っております。

簡単な自己紹介でご挨拶に代えさせていただきたいと思います。出身地は中国の上海で、大学卒業後3年間助手を勤めた後、昭和63年に来日しました。その年は平成元年でもありましたので、今年は22年目になります。その後、厚生労働省の研究と教育の機関である国立公衆衛生院（現国立保健医療科学院）で公衆衛生学を学んだ後、建築設備会社の技術研究所研究員、国立保健医療科学院（旧国立公衆衛生院）建築衛生部室長、東北文化学園大学科学技術学部教授を経て現在に至っています。

大学での専門は建築設備で，国立公衆衛生院では公衆衛生学を学びました。民間の研究所では主に室内空気質・温熱環境・空調設備関連の研究に従事し、国立保健医療科学院では行政の研究、室内空気質などについて幅広く取り込んでいました。その傍ら、「空調システムにおける微生物の汚染実態の解明とその対策に関する研究」で東京大学大学院より博士（工学）号を戴きました。現在は、国立保健医療科学院の建築衛生部と東京大学生産技術研究所の客員研究員をしております。

国立保健医療科学院に入職した翌年、SARS（急性重症呼吸器症候群）の

世界的な流行がありました。その間に厚生労働省の仕事で、アジア諸国での調査を行い、研究報告書にまとめました。SARSの問題においては、行政、医学の視点からの取り組みがまず重要ですが、建築環境工学からのアプローチも不可欠であることを痛感いたしました。建築は“健築”でなければならないと思っております。

大学の教員は教育と研究の両方にバランスよく取り組む必要があります。高度な研究成果を教育に反映させることは、社会に貢献できる人材の育成につながります。また、よい人材を育成することは、本学、そして社会に貢献できることであり、大学の教員の責務であると考えています。本学においては，セミナーや卒業研究を通じて、社会的なニーズに合った人材を育成することを心がけるつもりでおります。知識をお教えし、知恵に発展できるような教育と指導をしていきたいと思っております。今後、様々な視点からのご指導やご助言をいただきますよう、何卒宜しくお願いいたします。

建築都市デザイン学科教授　鈴木　敏彦（すずき　としひこ）

1978年　東京工業大学工学部附属工業高等学校卒業
1982年　工学院大学建築学科 卒業
1984年　工学院大学大学院修士課程 修了
波多江研究室
1984年　黒川紀章建築都市設計事務所
1985年　フランス新都市開発公社 EPA marne
1992年　文化庁芸術家インターン
1995年　早稲田大学建築学専攻博士課程
1999年　東北芸術工科大学生産デザイン学科助教授
2007年　首都大学東京システムデザイン学部准教授
2010年　工学院大学建築都市デザイン学科教授、首都大学東京システムデザイン学部大学院客員教授　受賞作品多数
（NICHE 編集部）

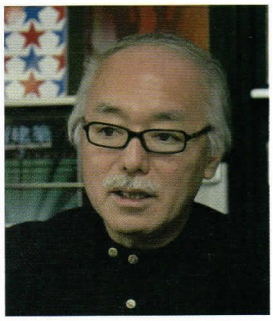
本年4月より建築学科専任教授として着任する鈴木敏彦です。建築・デザインを担当します。

来年には、本学に日本初の建築学部が誕生します。これは、建築の概念の拡張を意味するのではないでしょうか。建築には2つの側面があります。街を形成する役割としての都市的側面と、人々の生活を内包する内的側面です。このうち、ぼくは内的側面を重視し、あたかも建築と都市の関係性のように、モノと空間の関係性を構築したいと考えています。この構想は、建築をプロダクトデザインの領域まで拡張することに他なりません。

ぼくは、今から25年前に、工学院大学建築学科波多江研究室の修士課程においてアーバンデザインについて学びました。卒業後は、黒川紀章建築都市設計事務所に就職し、フランスの新都市開発公社を経て、復職後はヨーロッパ地域の都市的スケールの大規模プロジェクトを数多く主担当しました。その後独立してからは、一転して住宅の設計を通して、家具・住空間のスケールを実践しました。こうして都市デザインから建築、そして家具に至るまでのスケールを経験した後、早稲田大学の建築構法の博士課程に進学しました。部分と全体、モノと空間の成り立ちがこの頃からの研究テーマとなります。以降、東北芸術工科大学と首都大学東京で教鞭をとりつつ、モノと空間の関係性を考察し、家具より大きく、建築より小さなスケールに確かな存在価値を見出しました。

プロダクトと空間。家具とそれによって構成される内部。その内部を持つ建築。そして建築から構成される都市との連続した関係性。振り返ると、モノと空間を横断する連続的かつ階層的関係性を学んできたのだと、今、改めて思います。ここに、建築さらには都市の持続可能性に貢献する答えが在ると考えています。共に建築の未来を探っていきましょう。

建築学科特別専任教授　中村　勉（なかむら　べん）



1946年生まれ
1964年　東京大学工学部建築学科卒業
1964年　(株)槇総合計画事務所入社
1977年　(株)AUR 建築都市研究コンサルタント取締役副所長
1988年　(株)中村勉総合計画事務所　所長
2003年　ものづくり大学教授
2008年　ものづくり大学名誉教授

東京大学大学院・東北大学大学院　他にて非常勤講師
2009年　工学院大学工学部建築学科特別専任
日本建築学会作品選奨・グッドデザイン賞・公共建築賞優秀賞 BCS 建築賞など、受賞作品多数
（NICHE 編集部）

環境建築の専門家として学校や福祉の施設を設計している建築家の中村勉です。ものつくり大学で体験的、実践的な建築を目指して講義、演習、設計を教えてきました。昨年4月から工学院大学で建築設計を教えています。工学院大学の学生たちにもできるだけ具体的な方法で感性を磨き、実体験をしながら力の流れを感じ、空間を創る楽しさを知ってほしいと思っています。頭で○や△、□といった形態を操ることも必要ですが、もっと具体的な力を感じ、形を変化させるとどのように力が変わるのかを知ってほしいのです。人間は後頭葉で外界の刺激を認識し、右の前頭葉でそれがどんな意味を持つのか判断するのですが、その前頭葉の動きが鈍くなっているようです。これが活躍する訓練を自分なりに工夫してほしいと思っています。

私はゼロカーボン環境建築を設計してきました。その経験から住まいに必要なエネルギーは本当はそれほど多くなくてもよいのに、利便性と快適性を過度に求めるあまり、建物をしっかり作るよりもスイッチ一つでエネルギーの力で快適にする方を選んでしまっているのです。そういう原理を良く知ってもらい、自然の力をどのように利用するかを皆さんの感性で自然の力を感じ、建築への工夫ができる設計者を育てたいと思っています。その一つに自分が子どものときからどんな時に自然のどんな状況にあって快適な印象を持っているかを描いてもらいました。また木造の木組みで新しい空間をつくるワークショップを行いました。そういった経験をしながら身体で覚えたうえで新しい建築を目指してほしいと思っています。

建築学科特任教授　三好　勝則（みよし　かつのり）

1953年　香川県生まれ
1972年　香川県立高松高等学校卒業
1977年　東京大学法学部卒業
1977年　自治省入省
1994年　自治省 財政局財政企画官兼自治大臣官房参事官
1995年　兵庫県南部地震消防庁現地対策本部長
1995年　総理府 阪神・淡路復興対策本部事務局上席局員
1997年　国土庁 防災局防災業務課長
2004年　香川大学大学院地域マネジメント研究科 教授
2006年　総務省消防庁消防大学校長
2010年　工学院大学建築学科特任教授
（NICHE 編集部）

2009年4月から、工学院大学の特任教授として、建築学科に所属しました。防災と公共政策に関する分野でお役に立ちたいと考えております。

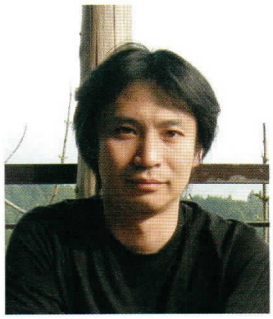
私は、国家公務員の上級職（法律職）として、自治省（現在では総務省になります）に採用されました。国の各省庁で仕事するほかに、京都府、大分県、徳島県、東京都という地方自治体にも勤務しました。主として、地方財政や公務員制度に関する企画立案と執行に携わってきました。また、地域の振興や活性化のために、計画を策定して事業を実施することも担当しました。大分県では公害規制課長として、公害防止と環境保全に関して、企業や小中学生と一緒に活動もしました。経済や社会状況が変化する中で、変わらなければならないことと変えてはいけないことを見極め、現在と将来の間をどのように関連づけて、道筋を付けられるか、いつも悩んでいました。

また、15年前の1995年1月に兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）が発生したときは、自治省で災害担当をしていたことから、直ちに現地に赴き、地割れによる段差ができ、火災で熱と煙に囲まれながら、被害の状況を見て回りました。そして、応急対応をどう進めて良いか、県や市町村からの要請を受けて国と調整する日々が続きました。曜日も時間も関係なく、文字通り昼夜分かたず連絡調整に明け暮れました。復興については、地元と国との考え方の隔たりが更に大きく、どちらの立場に立てばよいのか、苦悩する事案も多くありました。国土庁防災局（現在は内閣府に所属）では、阪神・淡路大震災の教訓を防災に活かすことが至上命題となり、震災から2年後に防災業務課長となった私が、緊急対応（危機管理）の最前線に立つことになりました。さらに、東京都の震災対応、消防職団員の教育訓練なども、担当してきました。

さらに、2004年から2年間は、中国四国地方で初めて開設されたビジネススクール（専門職大学院）で、地域のリーダーを養成するため、地域の現状分析と政策のあり方について、教育してきました。

これらの経験を活かした教育研究に取り組んでいきます

建築都市デザイン学科准教授　遠藤　新（えんどう　あらた）



1973年　愛知県碧南市生まれ
1995年　東京大学工学部都市工学科　卒業
1997年　東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻修了
1997年　東京大学大学院工学系研究科助手（都市工学専攻）
2005年　金沢工業大学講師（建築都市デザイン学科）
2009年　工学院大学　准教授（建築都市デザイン学科）
2004年　日本都市計画学会論文奨励賞
2005年　GOOD DESIGN AWARD（建築・環境デザイン部門／環境デザイン）

専門は都市デザイン、都市計画。日本各地の自治体で活性化や整備計画等の作成、まちづくり支援、都市計画や景観関連の委員を歴任。
主著に『米国の中心市街地再生』（学芸出版社）など
1991年　愛知県　愛知県立岡崎高等学校　卒業
東京大学工学部都市工学科卒業　都市デザイン研究室
（NICHE 編集部）

工学院大学の都市計画系教員として2009年4月より着任しました。

専門は都市デザインおよび都市計画です。都市をつくる仕事（都市の変化を制御する仕事、という表現のほうが相応しいか？）は全体像が見えにくく、

それに関与する主体も多様です。自治体の中を見てもいわゆる縦割りの各組織が各々のやり方で動いています。官民全体をつなぐシナリオを描き、計画として合意形成し、実現にむけて具体的に動いていく、その支援（ときには当事者となりますが）につながる提案・研究・活動が私の毎日のテーマです。都市に関わる仕事の魅力をつたえ、日本の都市を一つでも多く魅力的にすること、居住者が生涯住み続けたいと思える街をつくる手助けをすること、その志を学生たちと共有していきたいと思っています。（学生の皆さん、よろしく！）

これまで、地方都市の仕事に関わる機会が多くありました。北は北海道から南は福岡まで、数えてみると23箇所になります。各地で出会った多くの皆さんから日本各地の魅力や実問題を教えられました。都市は外に開かれ、多様な人やモノや考え方を受け入れることで成長している。しかし、都市にはそこに暮らす人達が脈々と受け継いできた守るべきもの（文化や空間資産）がある。それを熱く語り、次世代へと受け継ごうとする人達はとてつもなく格好良い。そんな人達の力になりたいし、そういう故郷への思いを持ち続けられるような学生を1人でも多く研究室から世に送り出したいと思っています。

話は変わりますが、個人的な研究の機会があって、アメリカのスノーベルト地帯（北東部～中西部）と称されるエリアに位置する都市群をもう10年以上も調査しています。例えばクリーブランド、バッファロー、ボルチモア、ピッツバーグなど昔は社会の教科書にも登場していたような都市は、産業等の衰退によってすっかすかに空洞化しました。今で言う「縮小する都市」です。しかし、米国の都市は創意工夫や実験的チャレンジを重ね、その状況から脱しようとしている。こうした都市がどのように、再生の道筋を建てて、それを成し遂げてきたか。そんなことを調べつつ、日本の都市への応用のあり方を考えています。複眼的に都市を見る。地元愛や生活感覚も大事ですが、一歩ひいた客観的な視線や思考も大事です。Hot & Coolに。皆さん、今後ともよろしくお願いします。

建築学科准教授　西川（にしかわ）　豊宏（とよひろ）

1971年　山梨県甲府市生まれ
1994年　工学院大学工学部建築学科卒業
1996年　工学院大学大学院修士課程修了
2009年　工学院大学大学院博士課程修了
1996年　三井建設株式会社
2004年　三井住友建設株式会社
2005年　株式会社ノエル
2009年　株式会社日本設計
2005年　工学院大学工学部建築学科（兼任講師）
2010年　工学院大学工学部建築学科准教授
博士（工学）・一級建築士・建築設備士等
（NICHE編集部）

「ジョギングとウォーキングから生まれる思考」

早朝、夜明け前の多摩川河川敷をジョギングする。意志薄弱な私なので当然毎日とは行かない。サボる理由を勝手に決め、気ままに走ったり、散歩にしたりする。何も考えない時間を作りたいと思い走り始めたが、走り始めるととにかく色々考えてしまう。法文や数式から人生観まで、とにかく何でも頭に浮かぶ。しかしながら不思議と嫌ではない。筋肉の躍動によるエネルギーが煩悩のしこりを解きほぐし、発汗によりそれらを浄化しているかのよう。そして体の芯が温まる頃、思い浮かぶ様々な情報を整理し、今日向き合う一日について思考を凝らす。この原稿についてもジョギング中にイメージしてしまおうと少し長めにゆっくり走ってみた。最初に浮かんだのは本学との出会い。新宿校舎が竣工したばかりの大学受験の頃、1990年に遡る。年号は昭和から平成へ、東西冷戦の終結など、その頃はいろいろな事があり、将来この年が温室効果ガス削減目標の基準年になることなど夢にも思わなかった。そして多くの在学生は、この1990年頃に誕生されたことになるのですね。そんな思いに浸りつつ、今後の大学での研究や教育について考えてみた。

●研究について

新たな研究や実務に直面した時、何らかの境界を設定してその成果を説明、体現する。家を新築する場合を例にとっても、与えられた敷地（境界線）に対して最適な計画（成果）は何かを検討し、人に説明するように。私は研究として、建築の外殻（外皮）を境界線とした研究テーマと一定の建築周辺を境界領域とした研究テーマを設定したいと思います。前者は建物側の設備的な需要や要求に対する建築物の性能を実験や電算機を利用して評価するものであり、どちらかというと建築物のハード面の掘り下げとなります。私が修士課程の時代までに体験した実験的研究手法をより高度かつ広範に展開したいという思いからでしょう。また、後者は建築物から消費、排出されるエネルギー、水、廃棄物等を取り挙げ、周辺環境への影響度を推定し、建築物が系として最適となるシステムや運用管理手法、すなわち建築物のソフト面からのアプローチとなります。この両者と実務社会で体感したこととを結び付け、環境、建築、設備のキーワードで有機的に融和させ、教育に展開したいと考えています。

●教育について

5年前より本学建築学科の兼任講師として、また3年前より大学院博士課程に学生として在籍していましたので、最近の学内の雰囲気は幾らか体感できております。近年は国内で急速に進む少子高齢化により、建築分野においても産業構造のみならず、技術や知識の継承が危惧されています。私は、次世代を担う代表ともいえる現役大学生に対して、普遍的技術の伝承と継承が出来る体力を在学中に具備してもらえるよう、また、本学の歴史や教育理念を理解し、個々人の適性や発展を創出してもらえるよう共に彼等と向き合っていきたいと思っています。

いろいろな壁に直面した時、ジョギングやウォーキングから生まれる思考に多く助けられたものです。外に出て歩き始めると、そこで体感する光や風、視界に入る空や大地が四季の移ろいを知らせてくれます。そんな時空間に身を委ねて思考を廻らせると、慌てず、しなやかに、自然体を意識しようと思ってなりません。皆様、今後もどうぞ宜しくお願いいたします。そして、拙文にお付き合い下さり有難うございました。

特任助教　久保（くぼ）　智弘（ともひろ）
TKK助け合い連携センター

1978年　東京都江戸川区生まれ
1997年　宮城県立 仙台第三高等学校 卒業
2001年　工学院大学 工学部 第1部 建築学科 建築学コース 卒業
2003年　工学院大学大学院 工学研究科 建築学専攻 修士課程 修了
2003年　ABSコンサルティング
2009年　工学院大学建築学科 特任助教 兼 工学院大学 TKK助け合い連携センターコーディネーター
（NICHE編集部）

このたび、2009年11月にTKK助け合い連携センター コーディネーター兼建築学科特任助教として、着任した久保智弘です。

私は、2003年3月に工学院大学大学院を卒業後、ABSコンサルティングという、第三者機関として、主に自然災害・人的災害のリスク分析やリスクマネジメントに関するコンサルティングを行う会社に就職しました。

これまでABSコンサルティングでは、大学で学んだ建築構造や地震工学の知識を活用して、不動産取引で必要とされる地震リスク評価や金融機関向け業務継続・復旧計画の策定支援、GISソフトを活用した自然災害ハザード分析、化学プラントにおける地震リスク分析、CATBOND発行に用いる地震ハザード評価などの地震災害に関する業務を行ってきました。

さらに地震や建築に関する業務以外にも、化学物質の大気拡散分析、原子力発電施設の確率論的安全性評価、国産ジェット機の信頼性評価のためのモデル構築といった、リスク分析において、幅広い業務に携わってきました。同時に研究活動として、久田嘉章教授や村上正浩准教授と一緒に地域防災や工学院大学における地震防災対策について、地域社会の皆様や大学の教職員の皆様にご協力をいただきながら、行ってきました。

自分の専門分野に加えて、専門分野外のことやさまざまな人たちと交流することにより、仕事や研究、人と人同士のつながりの大切さを学びました。さらに、このようなつながりを通じて、自分の専門分野をより深めることができ、さらに幅広い知識を得ることができました。

今回、私が担当する3大学（東北福祉大学、工学院大学、神戸学院大学(TKK)）連携プロジェクトのTKK助け合い連携センターのコーディネーターは、ボランティアや社会貢献・防災教育といった分野で防災・減災を行っている東北福祉大学と神戸学院大学とを工学技術の分野で防災・減災を行っている工学院大学をつなぐ役割を担っており、そのような仕事に携わることができ、とてもうれしく思います。文系の大学と理系の大学が防災・減災という共通の課題に対して、遠隔システムによる共通授業やイベント、地域社会への貢献を行うことは日本初であり、さまざまな課題や問題もあると思いますが、3大学の教職員やコーディネーターが協力して、新しい防災・減災の在り方を開拓できればと思います。

さらに特任助教授として、これまでリスク分析やリスクコンサルティングで学んだことを活かし、都市減災研究センターの研究プロジェクトや大学の危機管理・防災対策に携わりながら、さらに学生さんたちと活動をともにしながら、研究・教育活動とその成果を社会へ結び付けていくことを引き続き行っていきたいと考えております。

私は、中層棟6階のTKK助け合い連携センターにおりますので、ぜひ防災・減災やリスクマネジメント、他大学との交流などに関心のある方は、お気軽にお越しください。TKK助け合い連携センターでは、これまで行ってきた防災訓練や研究・活動のポスターや映像も展示しております。

工学部建築系学科・大学院からの便り

第一部　建築学科の近況　　社会が求める「建築学部」設立に向けて

建築学科　主任教授
大橋　一正

長澤 泰 先生が副学長に就任

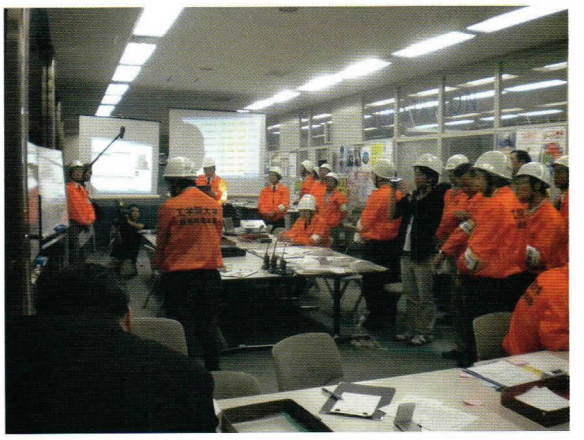
2009年4月より長澤先生が副学長に就任されました。建築系学科として大変喜ばしい事で、卒業生が社会に喜んで受け入れられる「建築学部」（設立予定2011年4月）に向け大きな一歩となると期待しております。

○一級建築士の受験とカリキュラムの改革

ご存知の通り、建築士受験には新たに「国土交通大臣の指定する建築に関する指定科目」を修得していることが求められました。早速、1,2年次を共通カリキュラムとして一部建築系学科を卒業すると受験資格の要件が得られるように改革しました。卒業生の多くが合格し、全国の大学で合格者数第5～7位を常に獲得し、大変うれしい事です。

○地震防災研究の成果

文部科学省の平成20年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に採択されました。本学の特色を生かし学生と地域社会との連携により両キャンパスを地域防災拠点とする総合的な取り組みです。又、「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」として、3大学（東北福祉大学・工学院大学・神戸学院大学）連携プロジェクト、そして「新規学習ニーズ対応プログラム」も採択され、地震防災分野の研究で大きな成果が期待されます。



大学の災害対策本部が短時間で立ち上がる

○平成２１年度の就職先と教育方針

昨年と大きく変わり求人数が減少しております。しかしながら建設会社の施工部門等での求人は多く有ります。学生の希望と実社会が求めている職種との喰い違いをどう就職と教育に反映するかが課題です。世の中で活躍する場所が無い卒業生を送り出す事はフリーター予備軍を養成してしまいます。改めて、教員・学生共しっかり足元と社会を見直す事が必要です。

○教員の動向

今年度は建築史の初田亨先生、設計指導の特別専任中山繁信先生、建築音響の塩田正純先生が退職されます。4月より設計指導の中村 勉特別専任教授、防災の三好勝則特任教授、防災プロジェクトの久保智弘特任助教が着任されました。今後の学生指導や研究に関し大きく期待しております。

以上、紙面の関係から十分お知らせ出来ません。是非、各ホームページをご覧下さい。

建築都市デザイン学科の近況

建築都市デザイン学科　教授
後藤　治

本年度に入学した1年生から、1・2年生については建築学科と共通のカリキュラムとなりました。また、1年生については、建築学科と建築都市デザイン学科を分けずに「建築系学科」として入試を統一したため、新たに入学した学生が各学科に分かれるのは3年生からということになります。これは現在建築系学科で進められています建築系の学部化に向け、試行的に行われたものということになります。

ところが、昨年は建築系学科という形で入試を行ったため、「建築都市デザイン学科」が本学に存在することがわかりにくくなってしまい、結果として、受験者数を大きく減らす形になってしまいました。このため本年は、その反省をふまえ、建築学科、建築都市デザイン学科を分けて受験を行う形に戻し、入学後の教育については本年度入学の学生と同様に両学科統一のカリキュラムで教育を行うこと

にしました。

このカリキュラムの統一は、3年生に進級した時点で、学生に建築に対する興味を見直してもらい、自らの適性と興味に応じた学科への進学を促そうとすることを目的にしています。学科別に入学したことによって、その目的に支障をきたすことがないように、クラス分けについては両学科の区別なしに行うことを予定しています。最初の所属にかかわらず、3年次における両学科の間での学生の転科が活発に行われることを望みたいからです。

2年生以上については、社会の経済不況にともなう学生の就職難という状況はみられますが、設計や実験に取り組む学生の姿は、例年通りといったところです。

さて、本年度から主任を務めることになりましたが、建築系学科は、先にも記した通り、私の前任の野澤先生をはじめ、各先生の絶大なご尽力のもと、全国初の建築学部の誕生に向け突き進んでいるところです。主任としての私の任期は次年度までですが、次年度は新たな学部設立に向けた仕上げの年になる予定です。同窓会の皆様が胸を張って誇れる学部となるよう、私も微力ながら努力したいと考えております。学部化を果たせた暁には、皆様からのさらに一層の御支援をお願いする次第です。

大学院建築学専攻の近況

工学研究科建築学専攻
大学院運営委員

建築学科　教授

遠藤　和義

本学大学院建築学専攻は、1964年に修士課程、1966年に博士後期課程を開設し、以来、46年の歴史を刻んできました。

2009年11月現在の建築学専攻在籍大学院生は、総勢155名で本学大学院の中でも最大規模となっています。その内訳は、博士課程3年生2名、同2年生5名、修士課程2年生78名、同1年生70名となっています。

私が本学にお世話になった16年前、1993年の総在籍数は60名程度でしたから、この間に約2.5倍の規模に成長したことになります。院生と社会の間にある高度な知識・能力の需給関係の拡大には目を見張るものがあります。

こうした院生の教育に関わる教員は、専任（特別専任、特任各1名を含む）33名、全専攻共通3名、非常勤講師14名で、来年度はさらに専任数名が加わる予定となっています。専任のうち、修士論文の指導を担当する教員が31名、また、そのうち博士論文の指導を担当する教員が19名で、社会の要請に応えるべく広範囲な専門領域をカバーしています。

こうした陣容による建築学専攻のアクティビティの結果、2008年度末には、70余名の修士課程修了者、さらに博士学位授与者3名、また2009年度前期末には博士学位授与者2名を送り出すことができました。

大学院運営委員としては、学部生の就職状況が厳しさを増していることから、専門知識・能力を高めるニーズは強く今後も修士を中心に院生の増加が見込まれ、それに対応した研究・教育の予算、スペースの確保に頭を悩ませているところです。その一方で、10年ぶりに博士課程入学者が途切れたことについても少し心配をしております。

院生はもちろん、広く社会に期待される建築学専攻となるよう、自己評価運営委員会やFD（Faculty Development、教育改善）委員会、専攻内外の様々な機会で自己点検、改善を進めているところです。

そうした活動の一つの成果であり、建築学専攻にとっての2009年度最大のトピックは、昨年度から申請準備を進めていた「建築士試験の大学院における実務経験の審査」について、「大学院におけるインターンシップ及びインターンシップ関連科目の単位数を国土交通省告示第1033号が規定する単位数に加えることができる」と（財）建築技術教育普及センターから確認を頂いたことです。

2008年の修士課程入学者までは、一級建築士受験資格となる学部卒業後2年間の実務経験を修士課程における「建築に関する研究」で無条件に充当可能でした。これが2008年9月に公示された受験資格の変更によって今年度入学生からは認められなくなり、上記の大学院におけるインターンシップ等の単位数によって1年ないし2年の実務経験とすることになりました。これは大学院における教育目標や具体的な内容、その存在意義にまで関わる大きな制度変更でした。

我々が受けた確認は、意匠（建築設計）について、インターンシップ等の単位取得状況によりに2年までの実務経験充当、構造設計と設備設計については、同じく1年の充当という申請通りの結果となりました。建築学専攻としては、今後も実務との距離を意識し、実務家の非常勤講師招聘やインターンシップ先選定で本学の都心立地の強みを生かしたいと考えています。

本学大学院全体としても、2011年4月開設を目標に「システムデザイン専攻」設置の申請準備が進められています。同専攻は、工学専門教育をベースにマネジメント関連分野を加えたMOT（Management of Technology、技術経営）教育を学部全学科、社会人を対象に広く門戸を開くものです。建築学専攻からも、社会システム、防災・安全・安心関連の科目を供出する予定です。設計事務所や建設業の実務家の継続教育の場としても広く活用いただければと考えております。

十代田（そしろだ） 昭二（しょうじ）先生の叙勲を祝う会

平成21年6月27日　於：ホテル　モリノ

平成21年春，十代田昭二先生(82歳)は瑞宝中綬章の叙勲を受けられました。

十代田(そしろだ)先生は構造系の科目担当として昭和31年に着任し，平成7年に定年退職されました。39年間の在職期間中に主任教授として建築都市デザインコース(現建築都市デザイン学科)の立ち上げなどの学科運営にあたられました。また，大学運営では4期に渡って評議委員・評議委員会議長を務められ，八王子校地の整備・新宿校舎の高層化などでご尽力されました。昭和30年の建築学科設置以来，工学院大学建築系学科の今日を築かれた重鎮のお一人です。

2009年6月27日に「叙勲をお祝いする会(研究室OB会)」を開催しました。研究室OBは500名を超えますが，当日都合が着いて出席くださったOBは90名でした。十数年ぶりのOB会で，先生を囲み，懐かしい顔に談笑が盛り上がりました。

現在，先生は川崎市麻生区(小田急多摩線栗平駅)に奥様とお住まいです。ときおり，音楽仲間を招きホームコンサートを開いているそうです。そこで先生はチェロを弾くそうです。先日，叙勲のお祝い(大学法人より)で吉田先生(建築生産担当：常務理事)のお供をして先生宅を伺いました。お住まいは駅近くの高台に建つマンションの最上階で，パイプオルガン・ピアノ・チェロ・フルート・クラリネットなど多くの楽器に囲まれて楽しくお暮らしでした。

(情報提供/准教授近藤龍哉・OB)

イギリスで藤木研究室の作品展が開かれました

2009年6月15日から10月23日まで、イギリス中部の都市ウェークフィールドにて、藤木研究室の作品を紹介する展覧会が開催され、大学院生5名とともに、イギリスに行ってきました。3週間ほど現地に滞在し、展覧会の準備やオープニング・レクチャー、カレッジ学生とのワークショップ、外部会場での一般対象レクチャー、作品の記録など、盛り沢山な日程でしたが、6月はベストシーズンらしく、良く晴れた気持ちの良い毎日でした。今回の展覧会は、2006年に制作し、越後妻有アートトリエンナーレに出品した実験建築《Aqua-scape》が、イギリスの建築賞であるAR Awardに入賞し、国内外、特に、海外の雑誌メディアに多数取り上げられたことがきっかけで開催の運びとなったものです。バーションアップした《Aqua-scape》を、丸一年という歳月をかけて研究室の学生とともに新たに制作し、緑の芝生の上に浮かべました。イギリスの歴史遺産でもある美術館と、新しい建築を目指してつくられた《Aqua-scape The Orangery version》が、美しいコントラストをつくりだしました。

皆で記念撮影

作品とこどもたち

展覧会会場の風景

News

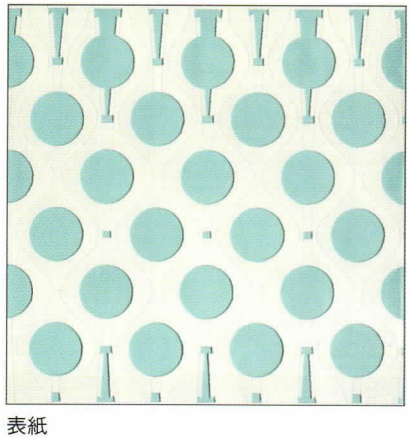
'Jellyfish' hideout on show

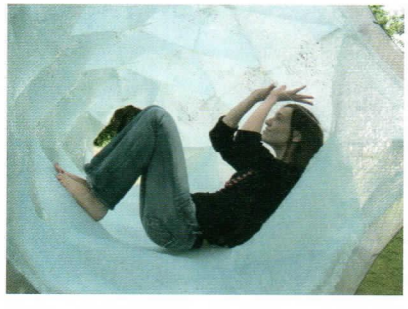
現地の新聞記事

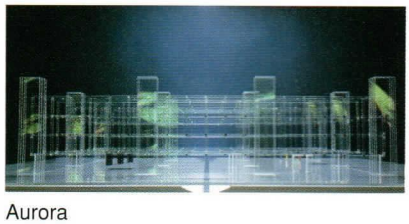
展覧会のカタログが出版されました

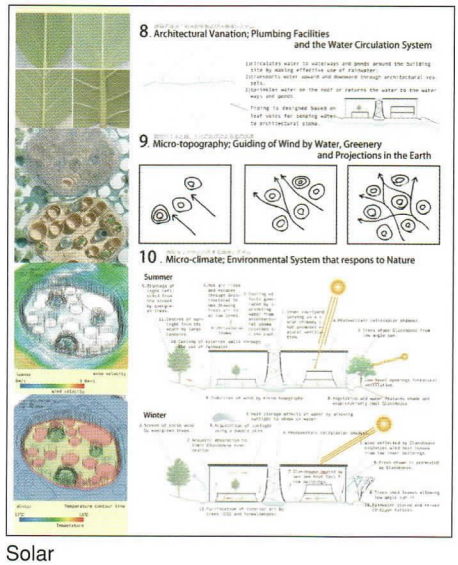
建築のコンセプトがそのまま表紙になっている本です

内部のギャラリーでは、藤木研究室でこれまで取り組んできた環境建築に関する実験的なプロジェクトや佐藤由紀子と協働したF.A.D.Sの実施作品などを数多く展示しました。2001年に藤木研究室ができて以降、ほぼ毎年1回以上のペースで、国際コンペでの入賞や芸術祭へ招待参加する機会を得てきましたが、これらに実施作品を加えて、Solar,Air,Water,Ground,Auroraなど、自然から着想を得たカテゴリーに分けて紹介しました。当初は2ヶ月間の会期であったため、カタログの制作は難しいと諦めていたのですが、好評につき、更に2ヶ月会期が延長され、これにあわせて急遽カタログが書籍として出版されることになったものです。単なる作品集ではなく、新しい環境建築の考え方や可能性が詰まった一冊であると自負しています。イギリスで出版された本ですが、工学院大学の生協をはじめとして、都内の建築・アート書籍を扱う主な書店、Amazon.co.jpなどで入手できます。英語と日本語で書かれていますので、是非お手に取っていただければ幸いです。


表紙




Aurora



Solar

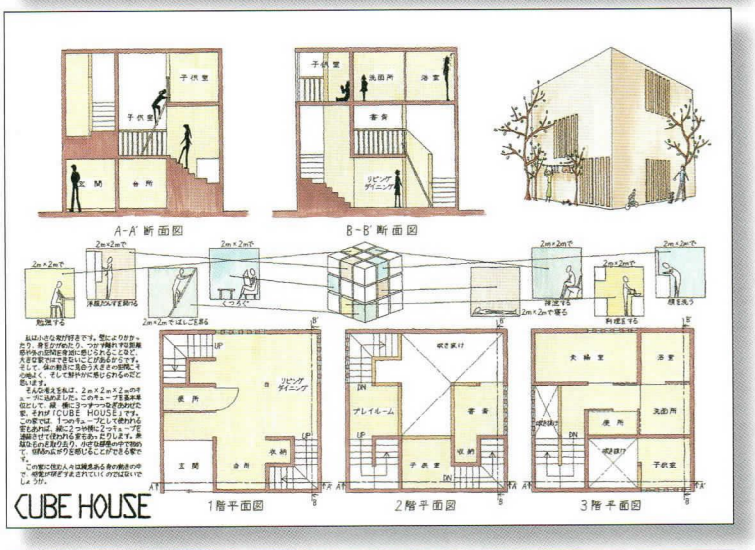
コンセプト模型

書籍情報：Aqua-scape
The Nature-oriented Architecture of Ryumei Fujiki
《アクア・スケープ展》：藤木隆明の自然指向型建築
ISBN-13 978-0-9540748-2-1

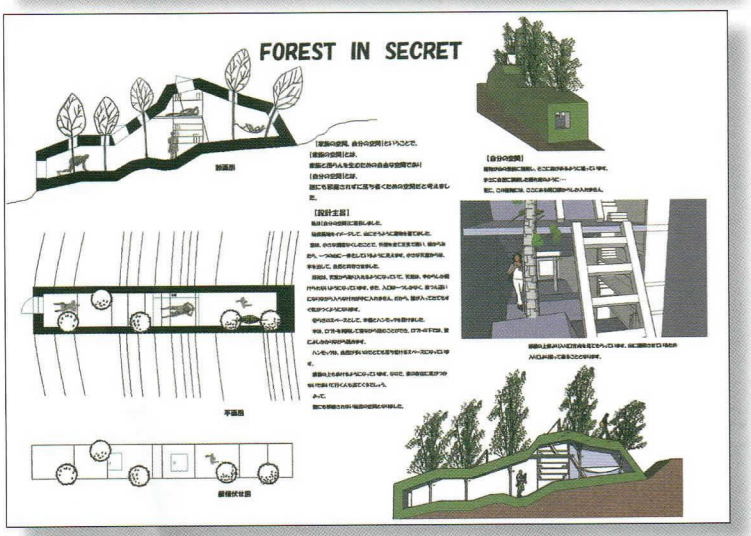
2009年10月

第2回 高校生の建築フレッシュ・アイディア・コンペ テーマ「家族の空間・自分の空間」

絵の部門 最優秀賞
声の通る光の家 會田 圭
埼玉県立熊谷工業高等学校 3年



絵の部門 優秀賞
CUBE HOUSE 青木 小夏
富山県立富山工業高等学校 3年



絵の部門 優秀賞
FOREST IN SECRET 吉田 周司
富山県立富山工業高等学校 3年

『住まいには家族や友達と楽しく過ごす「みんなの居場所」と自分ひとりで誰の目にもふれずに過ごす「ひみつの場所」があるのではないでしょうか。あなたの理想はどんな住まいですか』。

「第2回 高校生の建築フレッシュ・アイディア・コンペ」は「家族の空間、自分の空間」というテーマに対し、「絵の部門」へは66点、「文の部門」へ67点と多数の応募がありました。厳正な審査の結果、受賞作品が決定しました。今回も優秀な作品が多かったため、特別に「選外佳作」が選出され、フレッシュで斬新でありながら、充分に練られ、わかりやすくまとめられたアイデアに審査員一同、感銘を受けました。

2009年10月12日、工学院大学新宿校舎オープンキャンパスに併せて、入賞作品を展示しトーク・イベント・表彰式を開催いたしました。多数の応募者と指導の先生方、学生参加者の中で行われました。第2回も、第1回同様に、秋の今回は副賞として「建築家と巡る東京建築バスツアー」も実施することができました。今後とも引き続き多くの高校生の皆様に、本コンペに参加いただけますことを心より願っております。

工学院大学建築系学科
コンペ審査委員会

＜審査結果＞

部門	賞	タイトル	学校名	学年	氏名
絵の部門	最優秀賞	声の通る光の家	埼玉県立熊谷工業高等学校	3年	會田　圭
	優秀賞	CUBE　HOUSE	富山県立富山工業高等学校	3年	青木　小夏
	優秀賞	FOREST IN SECRET	富山県立富山工業高等学校	3年	吉田　周司
	審査員特別賞	光と暮らす家	国立豊田工業高等専門学校	2年	井上　瑞基
	審査員特別賞	一体化する別空間	静岡県立沼津工業高等学校	2年	野津　康平
	審査員特別賞	casa Aalto' s tree 2009	私立藤村女子高等学校	3年	本田　しおん
	審査員特別賞	Doughnut house～ドーナツな話・和・輪が家～	富山県立富山工業高等学校	3年	密山　智佳
	審査員特別賞	六角の家～祇園祭の町会所として	京都市立伏見工業高等学校	3年	横木　相汰
	選外佳作	～家族の空間、自分の空間～	埼玉県立熊谷工業高等学校	3年	今村　尚貴
	選外佳作	家族が集う"輪"の庭　私の居場所、ひみつの庭	静岡県立科学技術高等学校	2年	海野　洸哉
	選外佳作	アメーバ空間	群馬県立館林商工高等学校	1年	栗原　陽平
	選外佳作	階段の家	富山県立富山工業高等学校	3年	栂　美由紀
	選外佳作	家族と自分	静岡県立島田工業高等学校	3年	堀田　和矢
文の部門	最優秀賞	該当無し			
	優秀賞	燈台守の家	京都市立伏見工業高等学校	3年	亀田　祥平
	優秀賞	Wind+Eye=Window　風の目が作る空間	鹿児島県立垂水高等学校	1年	山田　萌子
	審査員特別賞	ひきこもり家じの僕･･･～サヨナラ･･･ボクノヘヤ～	山梨県立甲府工業高等学校	1年	石川　雅敏
	審査員特別賞	新たなる門出～私の居場所・家族の居場所～	岩手県立盛岡工業高等学校	3年	小田嶋　瑞貴
	審査員特別賞	採光住宅	京都市立伏見工業高等学校	3年	前田　倫史
	選外佳作	MUSIC CONNECTION～彼女と家族とボクの空間～	山梨県立甲府工業高等学校	1年	小林　奈々
	選外佳作	House in togetherness family' s town～四世代家族の町～	京都市立伏見工業高等学校	3年	堀尾　育弘
	選外佳作	六角の家～祇園祭の町会所として	京都市立伏見工業高等学校	3年	横木　相汰
	選外佳作	私の理想の暮らしについて	山梨県立富士北稜高等学校	2年	渡邊　穂奈美

文の部門　優秀賞
燈台守の家　亀田　祥平
京都市立伏見工業高等学校3年

NICHE Topics 4

一級建築士試験合格者数は、全国第5位（平成21年度）

掲載日：2009年12月18日

平成21年度一級建築士試験
「設計製図の試験」の属性（大学）における
合格者数一覧
財団法人建築技術教育普及センター
（http://www.jaeic.or.jp）より

大学名	合格者数（人）
東京理科大学	187
早稲田大学	131
芝浦工業大学	115
工学院大学	**102**
大阪工業大学	96
近畿大学	91
法政大学	79
東海大学	74
明治大学	74

2009年（平成21）12月17日国土交通省から、平成21年度一級建築士試験「設計製図の試験」の合格者が発表されました。工学院大学出身の合格者は昨年より20名増えて102名、出身大学別合格者数では昨年よりアップし、全国で第5位となりました。平成21年の一級建築士試験は、実受験者数46,942名、合格者数5,164名、合格率は11.0%です。

本学は、2004年に大学別ランキングが初めて発表されて以来、常に5～6位を維持しています。本学における高い建築専門教育とその卒業生の健闘振りが、建築業界において高く評価されています。

1級建築士合格者＜全国大学別ランキング ベスト20位＞ 国土交通省:建築技術教育普及センター発表

ランク	2004年（平成16） 大学名	合格者数	2005年（平成17） 大学名	合格者数	2006年（平成18） 大学名	合格者数	2007年（平成19） 大学名	合格者数	2008年（平成20） 大学名	合格者数	2009年（平成21） 大学名	合格者数
1	日本大学	370	日本大学	333	日本大学	205	日本大学	243	日本大学	262	日本大学	273
2	東京理科大学	147	芝浦工業大学	125	東京理科大学	101	東京理科大学	131	東京理科大学	147	東京理科大学	187
3	近畿大学	133	近畿大学	122	芝浦工業大学	82	京都工芸繊維大学	90	早稲田大学	124	早稲田大学	131
4	芝浦工業大学	129	東京理科大学	121	早稲田大学	82	早稲田大学	89	京都工芸繊維大学	97	芝浦工業大学	115
5	**工学院大学**	110	早稲田大学	119	近畿大学	73	芝浦工業大学	72	芝浦工業大学	95	**工学院大学**	102
6	早稲田大学	100	**工学院大学**	92	**工学院大学**	63	**工学院大学**	71	**工学院大学**	82	大阪工業大学	96
7	明治大学	99	大阪工業大学	80	京都工芸繊維大学	56	近畿大学	70	明治大学	82	近畿大学	91
8	大阪工業大学	96	明治大学	80	大阪工業大学	56	関西大学	57	大阪工業大学	68	法政大学	79
9	東海大学	78	東海大学	74	明治大学	48	大阪工業大学	55	神戸大学	64	東海大学	74
10	武蔵工業大学	76	神戸大学	70	法政大学	46	明治大学	52	名城大学	63	明治大学	74
11	神戸大学	71	金沢工業大学	65	金沢工業大学	44	法政大学	47	法政大学	60	京都大学	72
12	金沢工業大学	67	関西大学	64	名城大学	43	名城大学	47	関西大学	58	名城大学	68
13	名古屋工業大学	65	愛知工業大学	63	関西大学	42	神戸大学	45	東海大学	56	神戸大学	65
13	京都大学	65	法政大学	62	千葉大学	42	広島大学	44	千葉大学	55	金沢工業大学	57
15	法政大学	64	名城大学	60	東海大学	42	東海大学	43	武蔵工業大学	52	千葉大学	55
16	関西大学	57	京都大学	55	東京工業大学	42	千葉大学	35	名古屋工業大学	50	関東学院大学	51
17	京都工芸繊維大学	56	千葉大学	51	神戸大学	38	武蔵工業大学	35	愛知工業大学	46	京都工芸繊維大学	50
18	関東学院大学	55	武蔵工業大学	50	広島工業大学	35	九州大学	34	横浜国立大学	43	東北大学	50
19	東京電機大学	54	広島工業大学	47	大阪市立大学	35	東京工業大学	34	大阪大学	43	関西大学	49
20	千葉大学	50	東京工業大学	46	愛知工業大学	34	名古屋工業大学	34	東京工業大学	43	東京都市大学	49

編集：工学院大学 広報部広報課

NICHE Topics 5

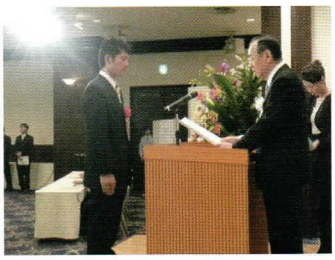
後藤研究室が山梨県建築文化奨励賞を受賞

工学院大学建築都市デザイン学科後藤研究室は、山梨県甲州市上条集落内にある約200年前に建造された観音堂の保存修理工事において具体的な提案をし、設計者として平成21年度の「良好なまちなみ景観を形成している建築物等の部門」において「山梨県建築文化奨励賞」を受賞した。（施工は石川工務所）今回の保存修理工事によりトタン屋根となっていたものを元の茅葺き屋根へと再生することや基礎の改良、防災対策等がなされた。また、施工に際しては、研究室活動の一環として、NPO法人山梨家並保存会が主催する茅葺きや土壁塗りワークショップに集落住民と共に参加した。

選評：この観音堂は、木喰百道の作である「一木百観音像」を安置するためのお堂として約200年前に建造されたものである。観音堂のある上条集落は、切妻突き上げ屋根を持つ甲州民家が数多く残っている集落で、集落の入口の高台に位置する観音堂は地域の景観を形成する要素として重要な役割を持っている。切妻民家集落の景観を守り伝える活動の拠点及びシンボルとなる観音堂をこの度の保存修理工事によって、本来の姿に再生したことは意義深く、また、NPO法人の人達と上条集落の住民が一緒になって工事に携わり観音堂を再生させたことは、地域参加の地域、まちづくりの観点からも高く評価できる。

工事前写真

2009.3.20 竣工写真


代表として修士2年の高山基が表彰を受ける

2009.11.6 文化賞受賞式
左から上条集落区長、石川工務所常務、高山基、石川工務所社長

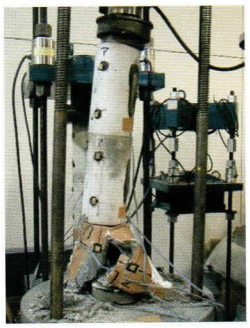
NICHE Topics 6

工学院大学学園創立122周年記念大学表彰を受賞

建築都市デザイン学科准教授
田村 雅紀

田村 雅紀
masaki-t@cc.kogakuin.ac.jp

平成21年10月31日にとりおこなわれた工学院大学学園創立122周年記念表彰式において，建築都市デザイン学科の田村准教授が大学表彰を受賞しました。表彰理由は，2008年7月開催の（社）セメント協会・第62回セメント技術大会において，研究内容と講演方法が優れていた35歳以下の若手研究者に与えられるセメント技術大会優秀講演者賞を，第60回，第59回に引き続き連続で受賞したことによる。田村准教授は，同大会で過去最多の受賞となっており，第62回では，「首都圏に流入する骨材の輸送時環境負荷と完全循環型コンクリートの供給可能性に関する基礎的検討」と題する論文により，地球環境と建設材料との環境改善に資する成果を挙げるとともに，本学の名誉を高めることにも大いに貢献した。


骨材回収型コンクリートのクリープ破壊（第60回）

輸送時二酸化炭素排出量解析ルート（第62回）

樹脂型枠による部材表面分析（第59回）

NICHE Topics 7

杉コレクション2009 in 日南
―堀川運河上向くカタチ―
入賞「スギなべ」

―平井 充・山口 紗由・鈴木 暁子

このコンペは、宮崎の杉の間伐材を利用した面白いアイデアを募集するもので、毎年行われ、今回で5回目となります。建築からプロダクトデザインまで幅広い分野から応募されています。審査員は、内藤廣氏、有馬孝禮氏、篠原修氏、川上元美氏、南雲勝志氏など様々な分野の方が名を連ねています。今回のテーマは、堀川運河上向く杉のカタチ「笑えるデザイン」です。私たちは、人が杉の温もりに包まれてユラユラ揺れる「スギなべ」を提案しました。これは、普段とはちょっと違う身体感覚を持つことで、楽しい微笑を生む遊具です。

平井 充

北海道立函館稜北高等学校
1992年卒業
工学院大学2部建築学科初田研究室 2004年卒業
2004年～東京工科専門学校講師
工学院大学大学院修士課程
初田研究室 2006年修了
工学院大学大学院博士課程
初田研究室 2009年満期退学
2009年～一級建築士事務所
Drawing notes 主宰

山口 紗由

日本女子大学付属高等学校
2004年卒業
日本女子大学家政学部
住居学科篠原研究室
2008年卒業
日本女子大学大学院
家政学研究科住居学専攻
小谷部研究室在籍

鈴木 暁子

都立工芸高等学校 2003年卒業
東京工科専門学校 2008年3月卒業
2008年4月
伊坂デザイン工房

NICHE Topics 8

2009住宅設計コンペ
50年デザイン住宅 入賞

―建築学科2部 学部3年 加藤 直樹・島田 将宏

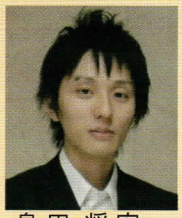
このコンペは、実際の敷地が与えられ、そこへ50年後の未来にも支持されるデザインを考えるものでした。私たちのプランは、素材の経年変化によって、ゆっくりと空間の境界線が形成される提案でした。

367組の上位30位に残りましたが、上位進出は叶いませんでした。しかし、学外の同年代の人の考え方やプレゼンテーションボードを拝見することができた事は非常に参考になりました。

「MATERIAL HOUSE」

加藤 直樹

栃木県立黒磯高等学校
2005年卒業
東京工科専門学校 2008年卒業
工学院大学2部建築学科3年



島田 将宏

千葉県銚子市立銚子高等学校
2003年卒業
工学院大学2部建築学科3年

『JAPAN ARTFESTIVAL IN 沼津 2009』で入選 竹アートの特設舞台を製作

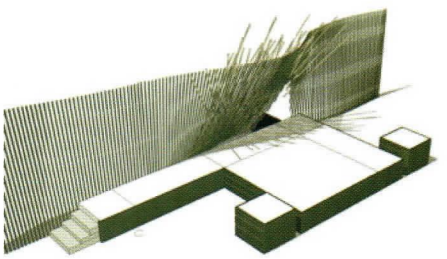
修士2年 辻 雄貴

辻 雄貴（つじ ゆうき）
1983年 静岡県生まれ。
辻雄貴空間研究所 代表。
竹中麗湖に師事。草月流 師範。
工学院大学大学院
工学研究科建築学専攻
修士課程在籍。

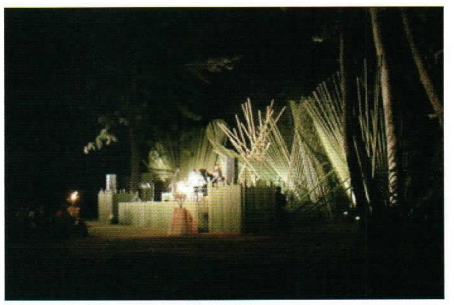
共著として
「フラワーアーティストの花と造形 sense of solid」（草土出版）
2009年 Japan Art Festival の舞台デザインなどを手掛ける。
2010年 『植物デザイン』（草土出版）にて建築と植物の新しい向き合い方を紹介する内容の連載を始める予定。

2009年10月1日～11月17日に静岡県の沼津市にある沼津御用邸記念公園でNPO法人 沼津観光協会が主催する文化事業の一環として『JAPAN ART FESTIVAL IN 沼津 2009』が行われました。

その中で草月流 華道家の竹中麗湖さんの竹のインスタレーションアートの竹の特設舞台の企画設計に工学院大学大学院 修士2年 中島智章研究室の辻雄貴さんが選ばれ、設計をしました。



7mの竹を300本近く使い、組み合わせることによって直線の竹をいかに演者の妨げにならずに舞台として成り立たせるかを考えました。



辻さんは今の建築が失いがちになっているものづくりの大切さが華道の世界にはあるのではないかと考え華道家の竹中麗湖さん（草月流）に師事し、建築だけではなく華道の世界でも活躍しています。

『JAPAN ART FESTIVAL IN 沼津 2009』
竹中麗湖
竹のインスタレーションアートとして特設舞台製作
2009年10月1日～11月17日
期間中イベント多数
NPO法人沼津観光協会
http://www.numazu-mirai.com

第9回 韓国・日本建築材料施工ジョイントシンポジウム 発表論文賞受賞

修士2年 古川 雄太

平成20年8月7日～8日に韓国忠南大学校の主催により韓国大田市で開催された同シンポジウムにおいて，古川君は発表論文賞を受賞しました（発表件数73件）。この賞は，修士部門と博士部門で韓国・日本それぞれ1名ずつ計4名が受賞する極めて狭き門であるにもかかわらず，「細骨材の形状評価とペースト膜圧理論を応用したモルタルの流動性予測 (Evaluation of the Shape of Fine Aggregate and Estimation of Fluidity of Mortar by Applying the Paste Thickness Theory) と題する論文を発表し，修士部門で受賞することになったものである。

受賞の様子

細骨材

古川 雄太
建築学専攻 阿部道彦研究室
2004年 都立日野高校3月卒業
2008年 工学部建築学科3月卒業
2010年 工学院大学大学院修士課程3月修了見込

NICHE Topics 11

2009年7月28日

工学院大学の"輝かしき先輩達"講演会

講師：浅羽 英男・蔡 龍保

浅羽 英男先生　　蔡 龍保先生

午後6時、新宿校舎28階第一会議室にて、「知られてなかった歴史が今、初めて明らかになる、工学院大学の輝かしき先輩達」主催：建築系学科・同窓会。広い会議室は既に満席。先ず「皇室建築と工手学校」浅羽英男（皇室建築史家）。工手学校創設時に内匠寮技師が教官として在籍したために、造家学科第1回生から昭和前期まで卒業生が宮内省に入省し、皇室建築造営に参加。設楽貞夫（第1回卒）、小林福太郎（第20回卒）、市石英三郎（第46回卒）らの活躍を報告。引き続き、「戦前期工手学校卒業生の海外活動 ―台湾を例として」蔡龍保先生（国立台北大学歴史学系助理教授）が報告。1893（明治26）年、工手学校土木科第9期卒の飯田豊二は97年に台湾総督府に着任。当時日本一長いと言われた下淡水渓鉄道の建設に従事しましたが、堤防が決壊しマラリアが蔓延。工事期間中に16名が死亡。この鉄橋に全力を尽くしていた飯田豊二も、1913年台南病院で息を引き取り、盛大な葬儀と記念碑が建立されました。講演後、8階ファカルティクラブに会場を移して、和やかな雰囲気の中で工手学校の話題に花が咲きました。

（取材/NICHE編集部）

NICHE Topics 12

建築系学科同窓会総会

新宿キャンパス20階に同窓生が集まり午前10時半に開会、まず田野邉幸裕同窓会会長の挨拶に引き続き議題が審議されました。議案1、第43期（2008年度）事業結果の報告（決算額673万円）、NICHEの発刊、H.Pの充実、交流・支援事業、125周年事業募金などについて各担当者から報告がありました。議案2、第44期（2009年度）事業計画（653万円/案）の報告。

前期と同様の活動内容の報告がありました。谷口先生から資格・支援の報告があり、同窓会では、1～2級建築士、宅建講座のサポートを長年実施してきました。

後日、同年12月18日発表の1級建築士合格者は工学院大学102名、昨年より20名増えて大学別では全国の上位5番目です。柴田卓次会計担当委員から財政面について「従来、入学時に入金になっていた会費収入が、卒業時の入金に変更になりました。その為、再来年まで会費が延期になり財政的に厳しいです。」と報告があり意見交換が行われました。総会の最後に議案及び同窓会役員新規人事について、全員の拍手をもって承認されました。

（取材/NICHE編集部）

同窓会会長　田野邉幸裕

2009年5月31日（日曜日）10：30新宿校舎20階、第6会議室 出席者46名

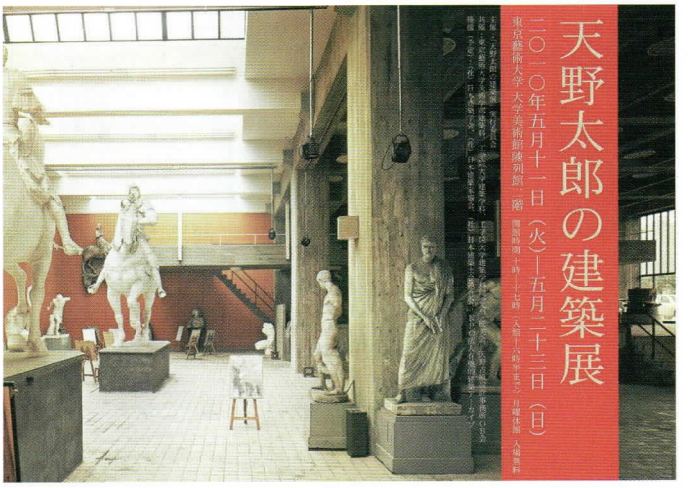
NICHE Topics 13

天野太郎の建築展

天野 太郎

天野太郎は、20世紀を代表する建築家フランク・ロイド・ライト(1867-1959)の根拠地タリアセンのアプレンティスとして、1952年4月から1年間、建築のデザイン哲学を鍛え、帰国後、開設したばかりの工学院大学建築学科の助教授として10年間、多くの教え子達に、建築の面白さを伝えた。1964年東京藝大に転じた後も絶えず工学院大学を訪れて天衣無縫、持ち前の大きな声で建築論を戦わせていたものである。1990年他界。

(情報提供/工学院大学名誉教授 南迫哲也)



1952年タリアセン、ヒルサイドの火災の再建工事で、ライトの後ろに立つ天野太郎。

於:東京藝術大学美術館陳列館
2階
入場無料
2010年5月11日(火)~23日(日)
開館時間 10~17時
(入館16時30分迄)、
月曜日休館

NICHE Topics 14

卒業生(校友会会員)の求職・転職をサポートします!

工学院大学OB生登録者数350名、採用実績70名! 多くの方々にご利用いただき、スキルを活かした転職に成功しています。

校友会では2007年から求職・転職を希望している卒業生に対してサポートする事業を開始し、建築士資格取得教育で40年以上の実績を持つ日建学院が母体の、建設・土木・不動産系に特化した実績ある職業紹介専門会社『ニッケン・キャリア・ステーション』と提携しました。

活動ネットワークを広げるチャンスです。是非、この制度をご利用下さい!

■ 登録希望者は本人が直接「ニッケン・キャリア・ステーション」にお申し込み下さい。

「ニッケン・キャリア・ステーション」への求職登録は電話もしくはメールで直接連絡して下さい。窓口の担当者から今後の流れをご説明致します。東京・大阪の拠点にて登録して頂きますが、その他の方法についても相談できます。

＊ **登録から仕事の紹介まで全て無料です。**

＊ **個人情報などは厳守されます。**

■ お仕事紹介システム

工学院大学 校友会会員 求職登録申込 → 電話若しくはメールでお申込み → ニッケンキャリアステーション 求職登録完了

ニッケンキャリアステーション → 求人企業紹介 → 工学院大学 校友会会員

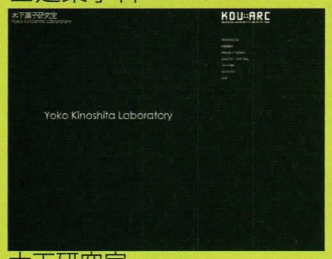
【求職登録申込連絡先】 詳細はホームページまで… http://nikkencs.co.jp

フリーダイヤル 0120-810-298 TEL 03-3980-5181

Mail info@nikkencs.co.jp

工学院大学建築系学科ホームページの紹介

■建築学科



木下研究室
http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1039/

長澤研究室
http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1044/

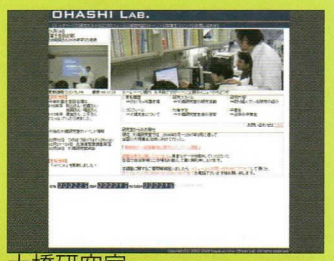
宮澤研究室
http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1041/

中島（智）研究室
http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt13029/

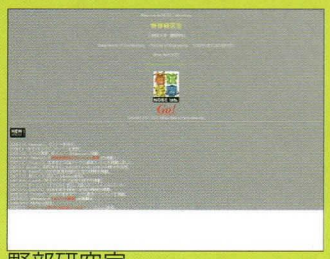
東研究室
http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1030/

宇田川研究室
http://ees.arch.kogakuin.ac.jp/

遠藤研究室
http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1018/



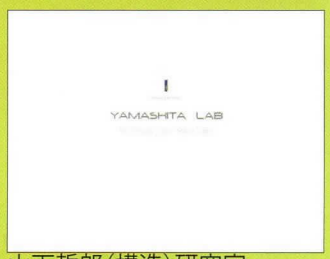
大橋研究室
http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt72069/



野部研究室
http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt13006/

久田研究室
http://kouzou.cc.kogakuin.ac.jp/

藤木研究室
http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1034/



山下哲郎(構造)研究室
http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1046/

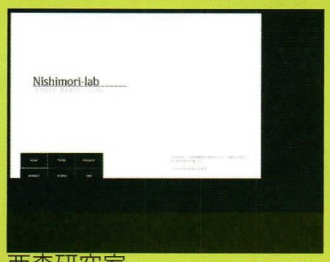
■建築都市デザイン学科

倉田研究室
http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1031/

後藤研究室
http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwa1023/

澤岡研究室
http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1021/

谷口研究室
http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1022/



西森研究室
http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1048/

野澤研究室
http://giants.cc.kogakuin.ac.jp/nozawa_lab/

小野里研究室
http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1026/

中島（裕）研究室
http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt13052/

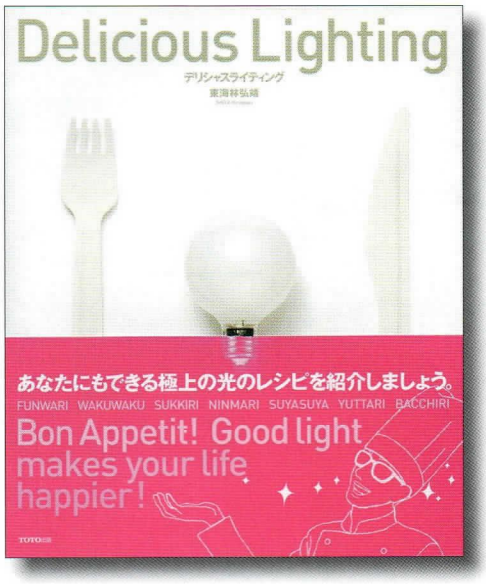
新刊書紹介

BOOK 9

同窓生や建築学科の教員など関係者が
執筆しました新刊書をご紹介致します。

1 Delicious Lighting

東海林 弘 靖
(SHOJI HIROYASU)



東海林 弘 靖　LIGHTDESIGN INC.

ライティングデザイナー / LIGHTDESIGN INC. 代表
国際照明デザイナー協会 (IALD) プロフェッショナル会員

1958 年生まれ。
工学院大学・大学院修士課程建築学専攻修了。
光と建築空間との関係に興味をもち建築デザインから照明デザインの道に入る。1990 年より地球上の感動的な光と出会うために世界中を探索調査、アラスカのオーロラからサハラ砂漠の月夜など自然の美しい光を取材。美術館、図書館、コンサートホールから商業施設、住宅まで人間の生活にかかわる全ての空間の照明デザインを行っている。
主なプロジェクトに、「象の鼻パーク」(2009)、「座・高円寺」(2009)、「パークハイアット北京」(2008)、「瞑想の森市営斎場」(2006)、「富弘美術館」(2005)、「まつもと市民芸術館」(2004) など。

受賞■北米照明学会 デザインアワード受賞「シンクロン本社ビル」(2009) ■国際照明デザイナー協会 (IALD) デザインアワード受賞「NTT ドコモ大阪第ニビルタワー」(2005) ■財団法人日本産業デザイン振興会 グッドデザイン賞「秋葉原 UDX」(2007) 他多数

TOTO 出版／営業電話 03-3402-7138
216 ページ／ 2,200 円 + 税
2009 年 2 月 20 日　初版第 2 刷発行
サイズ 23cm × 19cm

この本は、生活を楽しくするあかりのレシピ集です。照明は、ファッションや音楽、グルメ、旅行、スポーツなどと同じように人生の時間を楽しく豊かにしてくれるもののひとつです。そんな光の演出方法を料理のレシピにたとえ、電球や蛍光灯の光からロウソクや太陽の光まで、あらゆる光の楽しみ方の極意を教えてくれます。私たち日本人も、そろそろ身近に心地よい光を置いて、デリシャスなときを楽しんでみませんか。

2 それでも「木密」に住み続けたい！
—路地裏で安全に暮らすための防災まちづくりの極意—

後藤　治・村上 正浩・他

後藤 治　工学院大学教授
村上正浩　工学院大学准教授
他

株式会社 彰国社
03-3359-3231
256 ページ
2200 円 + 税
2009 年 10 月 10 日
B6 版

「木密」に特効薬はありません！。その危険性から早急な改善が叫ばれている木造密集市街地。いわゆる「木密」。しかし、「木密」ならではの懐かしい風情、親しい近所づき合いは、失いたくないものです。では、その危険な「木密」で安全に暮らすにはどうしたらよいのでしょうか。自分たちのまちは自分たちで守る！、全国の密集市街地から集めた「木密」への処方箋。

「帯封」より

3 工学院大学 コーキシン研究室
25 のコーキシンの扉がひらく

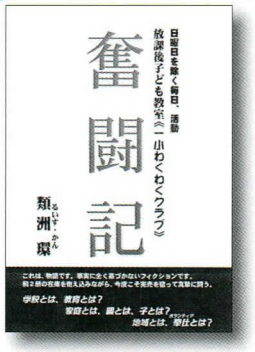
工学院大学 コーキシン研究室
編集委員会

ダイヤモンド・ビジネス企画
03-5778-7240
240 ページ
1429 円 + 税
2009 年 11 月 12 日
A5 版

で、大学の研究室って、何やっているの ???。ボクは進路を決めかねている。おかんは口を開ければ「勉強しなさい」「大学に行きなさい」って。子供の成績、知らないんだろうか。(中略) 正直、高校 2 年生の夏休み、皆が塾に行っているとき、取材に同行したのは、工学院大学という工科系大学を見学し、なんか自分の気持ちにケリをつけたいからかも。

(「プロローグ」より)

4 《一小わくわくクラブ》奮闘記
日曜日を除く毎日、活動

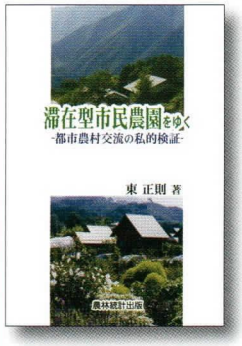


類洲　環
建築ジャーナリスト

環編集室
042-529-8919
96 ページ
500 円（税込）
2009 年 1 月
A6 版

これは地域ボランティアのルポルタージュである。文部科学省が提唱する放課後子ども教室。地域力を活用して小学校の放課後を子どもたちの安全で安心な居場所にすることを目的としている。地元の小学校の同事業の運営委員長となった著者が、毎日、子どもたちと接しながら感じた、子ども、親、学校、先生、地域、そしてボランティアへの想いを綴った波乱万丈の物語。

5 滞在型市民農園をゆく
—都市農村交流の私的検証—



東　正則
工学院大学工学部
建築都市デザイン学科 教授

農林統計出版株式会社
03-3511-0058
222 ページ
1900 円 + 税
2009 年 9 月 25 日
B6 版

農村の活性化のために、都市農村交流がさけばれ、グリーンツーリズム、エコミュージアムなどの多くの提案がなされてきた。各地の農村で、多くの都市農村交流事業が実施されてきた。市民農園も、この流れに沿う代表事例のひとつである。

「はしがき」より

6 日本建築学会　建築工事標準仕様書・同解説 JASS 5「鉄筋コンクリート工事」

阿部　道彦他
工学院大学教授

日本建築学会
03-3456-2051
900 ページ
9030 円 (税込)
2009 年 2 月 2 0 日
B5 版

JASS 5「鉄筋コンクリート工事」は，2003 年の部分改定を経て，1997 年以来となる 12 年ぶりの大改定版が完成し，2009 年 2 月に刊行されました。近年社会問題ともなった耐震強度偽装に対する品質保証をはじめ，ひび割れやかぶり厚さ不足へのハード・ソフト面での対応，地球環境問題への配慮、建築物の長寿命化などの社会的情勢の変化や要求に対応するとともに，高強度コンクリートの普及、非破壊検査技術の向上などの技術的な進歩を反映したものです (日本建築学会ホームページより)。
本書は，今後 10 年の鉄筋コンクリート工事の目標・基本となるように定められており，法令を補完する実質的な施工基準という位置づけであることから，鉄筋コンクリート造建築の設計・施工の実務に携わる方に必携書としておすすめいたします。

7 世界台所博物館

宮崎　玲子
工学院大学建築学科 1962 卒業
(十代田研)
一級建築士
日本民俗建築学会評議員
宮崎建築設計事務所
TEL　03-3260-3653

柏書房
03-3947-8251
216 ページ
￥5,040 (税込)
2009 年 2 月 25 日
B5 版

30 年間にわたり世界 50 ヵ国余の台所、食空間の調査を行ってきた。鍋、釜、包丁から見える各国の様子。こんなにも違う各国のキッチン、物にもレイアウトにも歴史がある。台所の始まり、自然環境と台所、南北の国の火、南北の国の水、台所の呼称、食物の保存と保存庫、主食と調理　欧米、アジアからアフリカまで、女性の視点で追い求めた世界の台所など。

8 日本建築学会　鉄筋コンクリート造建築物の環境配慮施工指針（案）・同解説

田村　雅紀他
工学院大学准教授

日本建築学会
03-3456-2051
133 ページ
3300 円 (税込)
2008 年 9 月 2 0 日
B5 版

我が国の総物質投入量の約 25% がコンクリートであり，CO2 総排出量の 10% 弱をコンクリート関連産業が排出しているということを踏まえると，コンクリートは地球温暖化問題および資源循環問題の解決のために重要な役割を担うといえるとされています。
　本書は，鉄筋コンクリート造建築物の設計・材料選定から施工に至るまでの各段階における，環境への配慮を具体化する方法をとりまとめた実務書となります。

9 マテリアル・デザイン 2009-2010

田村　雅紀他
工学院大学建築都市
デザイン学科准教授

彰国社
03-3359-3231
228 ページ
3,200 円（本体 3,048 円）
2009 年 9 月 25 日
A4 変形

本書は，建築の素材について知り，学び，使いこなそうとする建築家にはバイブルのごとく，建築を一から学ぶ学生にとっては科学・美学・社会学・環境学などの知識がほどよく調和・融合したテキストブックのごとく振る舞ってくれるでしょう。未来永劫に渡り唯一無二である建築物をつくるには，建築材料の源である素材こそが重要なのです（説明文より）素材から建築へ，デザインのこだわりを実現するための素材・材料読本の扉を，是非開いてみてください。

学校法人　工学院大学創立 125 周年　特別企画

建築コンペと工手学校

浅羽　英男

軍人会館（現九段会館）設計競技 1 等　小野武雄

はじめに

工学院大学が明治 21（1888）年 2 月、前身の工手学校のとして創立以来、平成の今日まで、建築界が数々の競技設計（コンペ）を行ってきた中に工手学校卒業生では、ＮＩＣＨＥ 2004 VoI.28 で紹介しました小林正紹（こばやしまさつぐ）の明治神宮外苑「明治聖徳記念絵画館」の 1 等当選が最も有名ですが、ほかにも数多くの卒業生が受賞していますので紹介します。

1. コンペ概歴

国内におけるコンペは建物、博覧会計画、記念碑、銅像、表紙デザインから戦後の外国都市計画等、あらゆる分野で行われてきました。国内最初のコンペは、明治 22（1889）年に造家学会（後の建築学会）主催の「宮城正門内鉄橋際櫓台上に設置せらるべき巨大なる銅器」のデザイン競技で宗兵蔵（そう　ひょうぞう）の「噴水瓶之図」が 1 等に当選しましたが実現には至りませんでした。

その後、明治神宮宝物殿（コンペ大正 4（1915）年、大森喜一）、明治聖徳記念絵画館（同 7（1918）年、小林正紹）、国会議事堂（同 8（1919）年、渡辺福三）、東京帝室博物館（昭和 6（1931）年、渡辺仁）など多数あります。同 10（1935）年頃を境に、時局から戦時高揚の祈念塔のようなコンペが目立つようになりました。

戦後復興まもなくして東京都庁舎（コンペ昭和 27（1952）年、丹下健三）、国立京都国際会館（同 38（1963）年、大谷幸夫）、国立劇場（同年、岩本博行）などが話題になり、その後、最高裁判所（同 43（1968）年、岡田新一）、などが続きました。東京都現庁舎（同 61（1986）年、丹下健三）、新国立劇場（同年、柳沢孝彦）の頃を契機に大規模公共建築のコンペは少なくなり今日に至っています。

2. 主なコンペ入賞作品と受賞者

①　明治神宮宝物殿競技設計

明治神宮の宝物を収蔵と展示する建物として、明治神宮御造営局により大正 4(1915) 年 5 月募集、同年 10 月 15 日

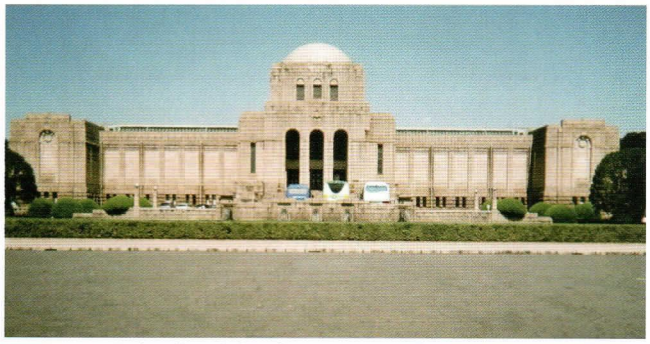
当選発表があり、1 等は宮内省内匠寮（たくみりょう）技手の大森喜一（東京帝国大学卒）案が当選、2 等上席に小林福太郎（工手学校第 20 回卒：ＮＩＣＨＥ 2009 Vol.32 に紹介）案、佳作に竹田米吉（同第 35 回卒）案と鈴木富蔵（同第 41 回卒）案が選ばれました。実施設計は、募集時と条件が変り御造営局技師の大江新太郎が担当しました。

竣工　大正 10（1921）年 10 月　施工　大林組

②　大阪市役所庁舎設計競技

明治 45 年 3 月募集　大正元（1912）年 8 月 9 日締切り、同年 9 月 27 日発表。1 等に小川陽吉（工手学校卒）案が当選。

明治神宮宝物殿競技設計２等上席　小林福太郎
明治神宮叢書　第二十巻　図録編



明治聖徳記念絵画館設計競技　１等　小林政紹

実施設計は、大正６（1917）年４月に大阪市庁舎臨時建築部が設けられ片岡安の下で牛村喜勇＋今林彦太郎ほかが担当しました。

大正７（1918）年６月着手　同10（1921）年竣工。施工は鴻池組＋錢高組　現庁舎建設のため、昭和57（1982）年６月解体撤去されました。

小川陽吉　建築学会会員

台湾総督府技手時代にコンペに応募。台湾総督府庁舎に良く似た外観です。退官後に大阪市堂島に建築事務所を開設しています。

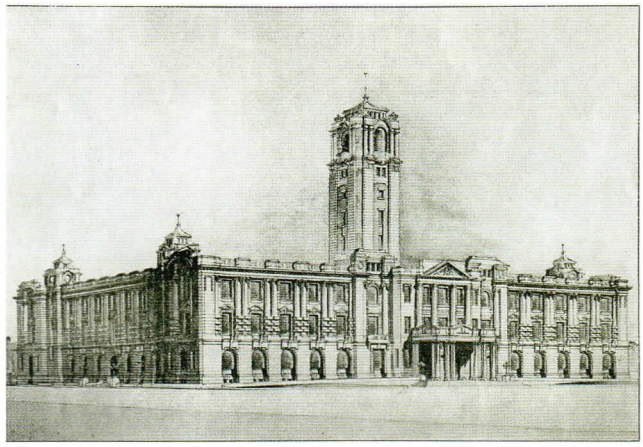
③　明治聖徳記念絵画館及び葬場殿趾記念建造物設計競技

絵画館は明治天皇の御聖徳を記念して大正15（1926）年３月竣工した建物。大正７（1718）年６月募集　同年９月16日締切り。１等に小林正紹（第39回卒）案が当選しました。実施設計は明治神宮御造営局。同局現場監督の一人に難波辰雄（同第46回卒・後に宮内省内匠寮技手）がいます。施工は清水組（現清水建設）小林正紹：ＮＩＣＨＥ 2004 Vol.28に紹介

④　大阪府庁舎・府会議堂設計競技

大正11（1922）年６月募集　同年10月30日締切り。

１等及び佳作１席に平林金吾（現名古屋市庁舎コンペ１等）と岡本馨（工手学校卒）の共同作品が当選しました。２等に笹倉梅太郎（同）が入選しています。１等案により大正15（1926）年10月竣工。大阪府庁舎は現存。建築世界第十七巻第一号によれば、１等案の選評は「官庁用並に事務用として最も優秀のもので而も近代建築の趨勢にも順応しその上大阪城を対照とせる大阪市の環境にも適して居るものと云う審査の目標に合したもの」と記しています。



大阪市役所庁舎設計競技１等　小川陽吉
大正元年11月建築雑誌第三百十一号　附図

大阪府庁舎設計競技１等　岡本　馨
建築と社会　第９巻第12号　大正15年12月

施工は清水組＋大林組

岡本　馨　建築学会員

第57回卒（大正７（1918）年２月10日）

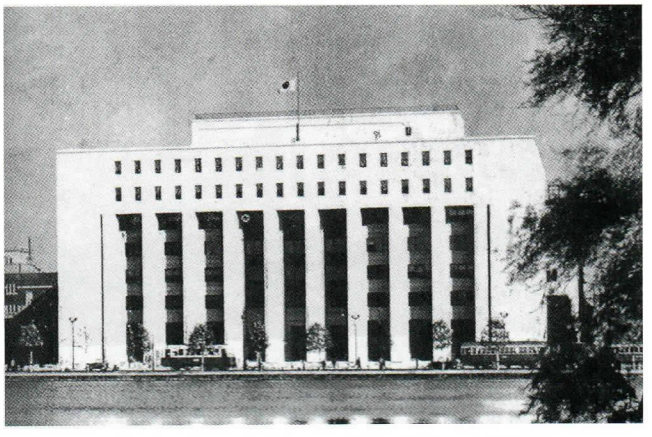
コンペは、大阪府庁舎（現庁舎）１等の外、大正11年に建築学会の入る第１回「株式会社建築会館」で平林金吾と共同で１等及び３等を得ましたが、関東大震災に遭遇し実現に至りませんでした。前年の大正10（1921）年に大阪市立美術館で２等、同12（1923）年の神戸市公会堂で佳作一席も得ています。同14（1939）年の忠霊塔（支那大陸に建設するもの）で笹倉梅太郎とともに選外佳作。大正11年には曾禰中條事務所に勤務していました。

笹倉梅太郎　建築学会会員

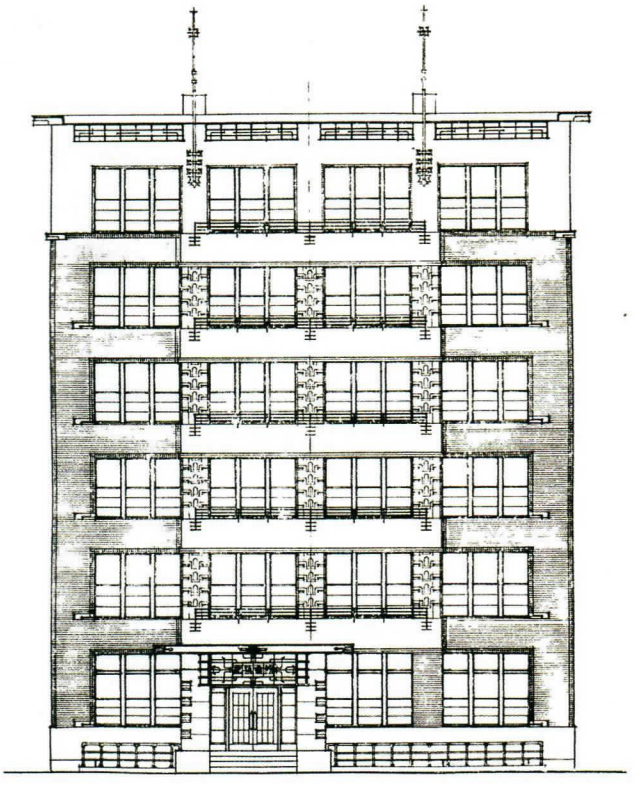
第54回卒（大正５（1916）年７月９日）

工手学校卒業後の大正８（1919）年に東京中央工学校建築高等科第17回も卒業しています。同９（1920）年から昭和13（1938）年まで大蔵省営繕管財局に技手として勤務しました。旧首相官邸は下元連（後に工学院大学教授）が基本計画及び基本設計を行い、笹倉梅太郎を中心に実施設計を行いました。同14（1939）年から同18（1943）年

軍人会館（現九段会館）設計競技１等　小野武雄



第一生命保険総合会社本館実施設計　松本與作



建築会館設計競技当選　森田政之助
建築雑誌第 512 号　昭和３年８月

まで満州奉天の満鉄鉄道局建築課に勤務しています。戦後の同 24（1949）年、住所が豊島区になっていますが以後不詳です。コンペは、大正 11（1922）年に大阪府庁舎で２等の外、昭和 14（1939）年の忠霊塔（支那大陸に建設するもの）で選外佳作を得ています。

⑤　軍人会館（現九段会館）設計競技

昭和５（1930）年９月募集　同年 12 月 15 日締切り。

１等に**小野武雄**（工手学校卒）案が当選。２等１席に吉永京蔵（工手学校卒）＋黒川仁三案が入選。実施設計及び工事監督は１等案をベースに技術顧問伊東忠太と技術長川元良一がまとめています。

昭和７（1932）年２月起工、同９（1934）年３月竣工。

主体工事は清水組。

小野武雄　建築学会会員

第 27 回卒（明治 35（1902）年７月 12 日）

工手学校を卒業後、明治 37（1904）年、茨城県の土浦中学校新築工事現場を経た同 39（1906）年～同 41（1908）年までは、住所が京都市丸山公園村井別邸内とある外は不詳。同 41 年 11 月に建築を学ぶため米国へ渡ります。以後ニューヨークの設計事務所に勤務。

この間にコロンビア大学を卒業、また雑誌「建築世界」通信員の委嘱を受け同雑誌に毎号、米国主にニューヨークの建築事情を絵葉書等で紹介しました。当時の米国建築事情を伝える貴重な資料です。

大正６（1917）年帰国し大連の満州鉄道技術部建築課技師、昭和３（1928）大蔵省営繕管財局技師を経て、杉並区の自宅に設計事務所を開設、戦後は在日米空軍司令部建築課顧問など歴任しました。コンペは軍人会館１等の外、同６（1931）年の「尾張徳川美術館」で２等当選、同 10（1935）年９月の「教育塔」で佳作五席に入選しています。なお、満州鉄道技術部建築課勤務時に平澤儀平（第 23 回卒）と和田喜蔵（第 33 回卒 39 年２月 10 日）も同課に勤務をしていました。

友人に小野武雄の米国行を横浜港で見送った津田鑿：第 23 回卒（明治 33 年７月 12 日）がいます。

吉永京蔵　建築学会会員

第 40 回卒（明治 42（1909）年７月 11 日）

工手学校を卒業後の明治 43（1910）年から大正元（1912）年まで海軍省経理局及び臨時海軍建築部に勤務、同３（1914）年から同 10（1921）年まで三菱合資会社地所部（現三菱地所）勤務。翌 11（1922）年から昭和 18（1943）年まで自宅に設計監督事務所を開設していました。コンペは「軍人会館」の外、大正７（1932）年の「第一生命相互会社」で入選しています。

⑥　第一生命保険総合会社本館設計競技

昭和７（1932）年８月８日募集、同年 10 月 31 日締切り。同年 11 月 30 日入選者 10 人が決定。其の中に**吉永京蔵**（第 40 回卒）岡本馨（第 57 回卒）が選ばれた外、佳作に辻廉

三（第50回卒）が入賞しました。実施設計は当選者の一人の渡部光雄（京都大学卒）所属の渡辺仁建築工務所長の渡辺仁と第一生命の技師**松本與作**が担当しました。昭和13（1938）年11月3日竣工。

施工は清水組

松本與作　建築学会会員

第36回卒（明治40（1907）年7月14日）

松本與作はコンペ作品の受賞は見当たりませんが、コンペ作品の昭和7（1932）年「第一生命相互会社」の実施設計を渡辺仁とともに行っています。工手学校を卒業後、しばらくは不詳ですが、大正4（1915）年から同5（1916）年に辰野葛西事務所に勤務しました。同4年から同9（1920）年まで木子幸三郎宅に下宿していますので辰野葛西事務所に勤務したのは木子幸三郎の仲介と思われます。同10（1921）年に第一生命保険相互株式会社に勤務。以来、昭和18（1943）年までの勤務記録があります。その間の昭和2（1927）年から同13（1938）年まで同社の営繕課長。戦後の同24（1949）年には、同社建物にＧＨＱと呼ばれた連合国軍最高司令官総司令部が置かれ、松本與作は同建物の管理事務所長をしました。松本が辰野葛西事務所に勤務した時期、古河善次（第28回卒・明治36年2月8日）も同事務所に勤務していました。また、松本が第一生命保険相互株式会社の営繕課長時に松本と同じ京都出身の種田源太郎（第38回卒・明治41年7月12日）が同課に勤務していました。

⑦　建築会館設計競技

建築学会の会館として建てられた建物。第一回のコンペは大正11（1922）年6月募集、同年9月30日締切り。1等及び3等一席には平林金吾と岡本馨（第57回卒）の作品が当選しましたが関東大震災により中止になりました。

昭和3（1928）年に再度コンペが行われ、最優秀はなく7人が当選し、其の中に**森田政之助**（工手学校卒）がいます。実施設計は、当選者の1人である矢部金太郎と矢部の勤務する復興建設助成株式会社により行われ昭和5（1930）年竣工。施工は大林組

森田案の選評は「中央部と左右とに全く異色の材料を用い、其の他に他と変った手法を施した処のあるのが此の案の長所であるが同時にデイテールにも又各種材料の取合わせにも今一息と思う点が各所に見受けられる。」でした。なお、現建築会館は、昭和55（1980）年のコンペで秋元和雄案が当選、同57（1982）年竣工しました。

森田政之助　建築学会会員

第48回卒（大正2（1913）年7月13日）

工手学校を卒業後の大正5（1916）年、学習院女学部建築部（ママ）に勤務。学習院女学部は辰野金吾が基本設計を行い、下條禎一郎（第1回卒 明治22年7月7日）が現場主任を勤めました。森田は大正10（1921）年から同13（1924）年まで高砂信託株式会社、同14（1925）年から昭和2年（1927）に大蔵省営繕管財局に勤務しています。

結び

コンペで、卒業生の入賞作品が多いことから推察して卒業生の応募件数は、相当数であったと思われます。当時のコンペの入賞者を見ますと個人又は数人の仲間です。

このことは、応募者が会社や設計事務所の勤務を終えた時間外に集中して取り組んだ旺盛な設計意欲があったからと思います。コンペは他の応募作品と比較して選抜されますので、品格ある個性と斬新なアイデアが盛り込まれた図面が必要です。卒業生の入賞作品を見ますと、実に見事な図面で工手学校での日本最高レベルの講師陣の指導による基本がしっかりしていた証左と思います。

近年来、図面表現が当時の製図道具使用の手書きからパソコン操作の手法へと様替わりしましたが、大学で学ぶ基本が源泉であることは不変です。現在、各地に多く存在し社会に貢献している先輩作品がコンペをめざす在校生と卒業生皆さんの指標になることを願ってやみません。

参考文献

宮内省職員録

二十五年記念　工手学校一覧

日本建築学会会員住所姓名録

日本建築学会機関誌　建築雑誌

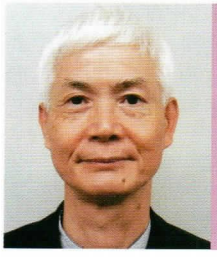
雑誌　建築世界・建築の知識・建築と社会

同　　新建築 1981年12月　臨時増刊

同　　建築設計競技　コンペティションの系譜と展望

同　　近代日本建築学発展史　復刻版　日本建築学会編

写真・パンフレット提供　九段会館



HIDEO ASABA

浅羽英男

工学院大学客員研究員

Mail:yfd30922@nifty.com

Profile

現在、工学院大学客員研究員　皇室建築史を研究。

昭和43年名城大学第二理工学部建築科卒業、建設省中部及び関東地方建設局勤務を経て同60年宮内庁管理部に出向、平成18年退官。

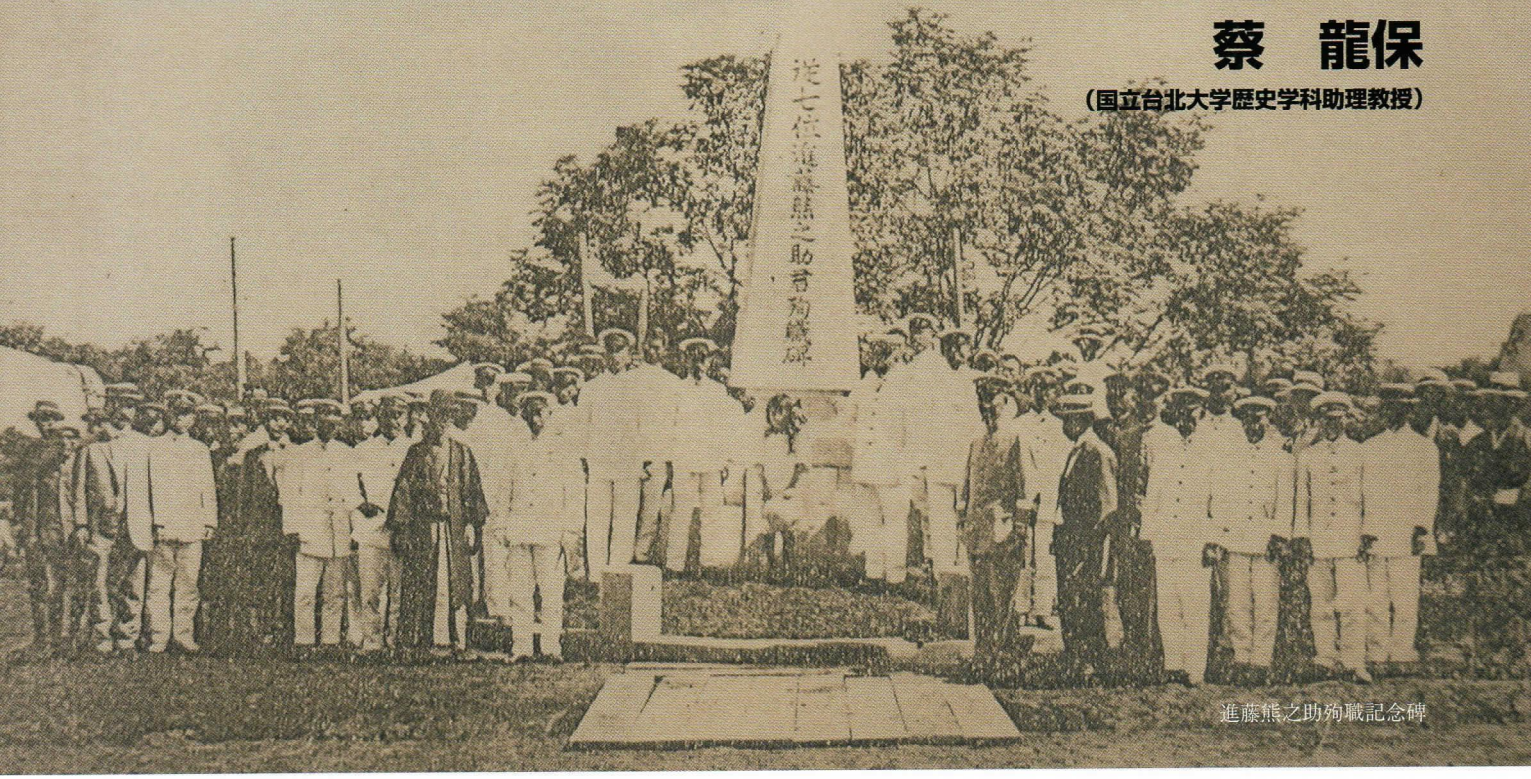
同14年「旧日光田母澤御用邸修復」に業績により日本建築学会賞を共同受賞。

ＮＨＫで平成21年秋から放映が始まったスペシャルドラマ「坂の上の雲」の第二部（平成22年12月放映予定）の宮中建物セット考証を担当。

学校法人　工学院大学創立 125 周年　特別企画

進藤熊之助と日本統治時代初期の台湾鉄道

蔡　龍保
（国立台北大学歴史学科助理教授）


進藤熊之助殉職記念碑

台湾の著名な観光地である阿里山郷香林村の二万坪にもなる駅の傍には、小高い丘がある。ここに高さ 15 尺の記念碑が立っていたが、1999 年の台湾中部大地震で倒壊してしまった。この記念碑こそ、阿里山鉄道建設で殉職した進藤熊之助を記念したもので、日治時代初期の台湾鉄道発展史を物語るものであった。進藤熊之助は 1874 年 7 月 12 日、茨城県古河で古河藩士の子として生まれた。1894 年 7 月、工手学校（工学院大学の前身）土木科を卒業し、同年 11 月 9 日、傭員として日本鉄道株式会社建築課での職に就いた。当時の月俸は 10 円だった。1899 年 5 月 31 日台湾へ赴き、臨時台湾総督府鉄道敷設部技手となり、台湾における鉄道建設人生をスタートさせた。本論文は、工手学校の卒業生である進藤熊之助（土木、11 期）が日治時代の台湾鉄道史で果たした役割と、この記念碑の背後にある忘れられようとしている歴史的意義について紹介したい。

図 1: 二万坪に倒れた進藤熊之助殉職記念碑

進藤熊之助と縦貫鉄道

①路線の測量

1895 年 8 月、初代台湾総督・樺山資紀は国防と統治の両面を考慮し、日本政府に対し縦貫鉄道の建設が一大急務であると訴え、また参謀本部も陸軍省に対して同じことを主張した。そこで日本政府は 1896 年 3 月、7 万 7000 円余りをかけて台湾総督府に縦貫線の調査を命じ、逓信省の鉄道技師である増田礼作工学博士にこれを依頼した。しかし、増田は軍事上の需要に重きを置き、山に接近した所に路線が多いという、経済的な面からかけ離れた計画を出した。1899 年 4 月、長谷川謹介は鉄道部技師長として民政長官後藤新平に招聘され、台湾の鉄道事業にあたった。長谷川は鉄道本来の使命に基づき、経済的な角度から再検討をすることに決め、細かい測量を再度行なった。こうして縦貫鉄道の調査が新たに開始された。1899 年 4 月 13 日から 1901 年 7 月 31 日まで、厖大な数の技術官僚を動員し、いくつもの調査チームに分かれ、北部改良線、北部新線、南部線、中部支線、宜蘭線等の調査･測量が次々と完了した。

中でも北部は清朝の劉銘伝時代に作った基隆・新竹間、基隆・台北間、台北・桃仔園（今の桃園）間、桃仔園・新車間、新車・新竹間の四区に分かれ、1899 年 4 月 13 日から幾班かの測量員が路線調査にあたった。そして 1900 年 5 月、北部改良線の全ての測量が完了した。進藤熊之助は北部改良線の測量調査中、基隆付近の改良線である太湖口･新車付近の測量作業に従事した。南部線と中部線の測量は、打狗（今の高雄）・台南間、台南・嘉義間、嘉義・台中間の三区に分かれ、1899 年 5 月 22 日に打狗・台南間から始まった。1901 年 7 月 31 日の測量完了までに進藤が参与したのは、台南・嘉義間だった。

②建設工程

測量作業以外に鉄道建設の過程で進藤が活躍したのは、

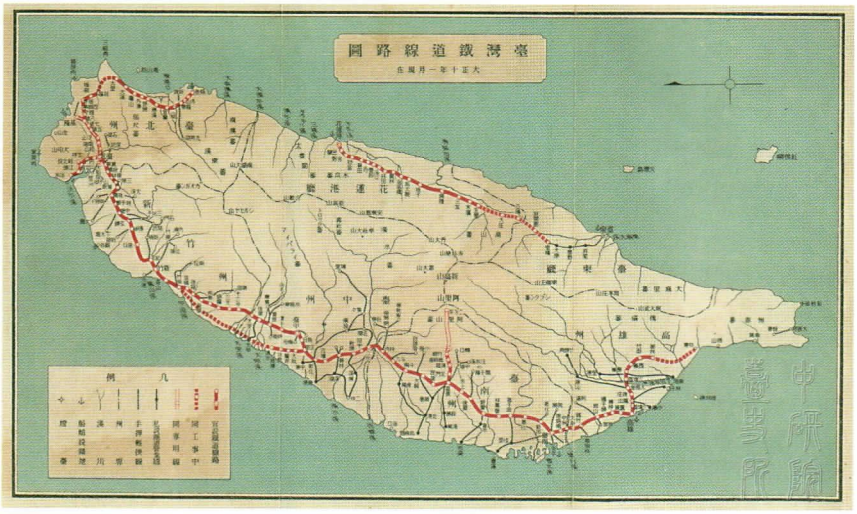


図 2:1921 年代の台灣鐵道

図 3: 琴山河合博士旌功碑

各作業区の監督と検査作業であった。台北改良線には、枋橋、茶山庄、中壢、太湖口の4つに派出所を置き、各区の工程を管轄した。その中の中壢派出所は1900年5月28日に開設され、桃仔園・崩坡間の2つの工区を管轄することになった。そこでの主任が進藤で、この区間の工事を請け負う吉田組の施工状況の監督検査を担ったのである。

1904年4月1日、中部線の工程の中でも大きなものだった大肚溪及び烏日溪橋梁工事の利便を考慮し、彰化出張所ができ、三叉河建設事務所所長の稲垣兵太郎が出張所の所長を兼任した。進藤もまた、1904年4月5日から1905年11月30日の期間、彰化派出所の主任になり、員林・茄苳脚間（二工区—佐藤組が施工）、茄苳脚・大肚間（三工区—吉田組が施工）の監督と検査という重責を担った。また、1904年9月22日から1905年11月4日までは大肚溪派出所の主任となり、大肚溪・烏日間（一工区—鹿島組が施工）の工事状況を監督・検査した。そして、鉄道線路の再調査により、新しい路線を選定した。「軍用鉄道」を「植民地の開拓鉄道」へ変え、縦貫鉄道開通後、台湾西部を躍進的な発展へと導いた。

進藤熊之助と阿里山鉄道

①阿里山森林の開発

1896年、林圮埔撫墾署長の斉藤音作と林学博士の本多静六らは玉山に分け入り、東埔社で東に進む途中、針葉樹林を発見した。斉藤署長はこの発見を、当時の台湾総督であった乃木希典に報告し、開発の方案を起草した。そして1897年12月、森全体の状況と蕃族の状況の二次調査を行なった。

1899年、台南県技手小池三九郎は台湾南部の森林の探査を命じられ、林圮埔から清水溪へ遡り、阿里山地域に入ったところで、まだ開発されていない広大なヒノキ林を発見した。その位置、地形、林の状況や樹の種類等を詳しく報告したが、それこそ阿里山森林を経営する上での端緒となった。時まさに鉄道部が縦貫線を敷設し、台湾本島で必要な木材が採れず、日本から大量輸入しなければならないという問題を抱えていた最中で、鉄道部技師長の長谷川謹介はこの知らせを受け、阿里山の木材に期待をかけ、技手飯田豊二（土木、9期）をさっそく派遣し、木材搬出の難易を調査させた。飯田のこのたびの調査は、阿里山森林の運搬ルートを探り、後に大倉土木組の岸本順吉らが更に進んだ調査をするための足がかりとなった。

1902年5月、林学博士の河合鈰太郎が阿里山の調査作業を引き継いだ。この調査では林相の品質と蓄積量を中心に調べられ、1903年長谷川謹介に阿里山の林の美しさや永続的に経営するべきことが報告・提案された。更に、アメリカ西部の高山森林鉄道が材木運送のために使われ、阿里山もそのように開発すべきだとも強く推された。民政長官の後藤新平は報告を受けた後、阿里山開発が台湾の財政と経済利益に有利であると考え、開発計画を検討するよう命じた。阿里山森林の材木運輸は、決して最初から森林鉄道を建設しようとしたわけでなく、多方面の試みと下調べの結果、日本国内の林業運輸技術を有効的に運用できない（例えば「管流」、「木馬」）とわかったため、森林鉄道と機械で林木運送することに決めたのである。

1906年、台湾総督府と藤田組は契約を交わし、藤田組が即日からその年の5月まで嘉義に進駐し出張所を設立し、藤田組副社長の藤田平太郎が嘉義出張所所長を兼任することになった。しかし藤田組が実際に開発に着手してから、台湾総督府が阿里山森林開発を甘く見ていたことがわかった。森林鉄道の建設のコストは予想を遥かに超える上に、阿里山の森林蓄積量も総督府の見通しほど楽観的なものではなかったのだ。

②阿里山森林鉄道の測量と建設

阿里山森林鉄道の測量

1906年、藤田組は川津秀五郎による過去の調査をもとに、森林鉄道の区域を嘉義・竹頭崎間、竹頭崎・樟脳寮間、樟脳寮・梨園寮間、梨園寮・十字路間、十字路・阿里山間という5つに分けて測量した。その中で進藤が測量を担当したのは、竹頭崎・樟脳寮間と樟脳寮・梨園寮間だった。ここで特筆しておきたいのは、この樟脳寮・梨園寮間こそ、全ての路線の中で最も測量が困難とされた所であった点である。1895年7月21日、川津秀五郎を測量主任とし実測に着手し、予測線のごとく左回螺旋状に進行し、8月22日、紅南坑に達した。しかし該所は螺旋三回一躍して700余尺にのぼる重要な地点であっただけでなく、隧道10余か所に及ぶその他困難な工事多大で、図面と実地とにより、最も慎重な調査を遂げ右回して良好な線路を得べき予想を以て、11月30日、進藤熊之助を測量主任とし再び実測を開始し、右回り二旋左回り一旋の螺旋状をもって測量精査した。これを原線に比較するに隧道延長は増加するも高さ70尺の橋梁と50尺の築堤と斷崖の中腹を貫通する隧道等の至難工事を避け、經費を大幅に節約できるため、右回線に變更確定し、成功に線路の修正を遂げた。

阿里山森林鉄道の建設

藤田組が経営していた期間、阿里山鉄道は嘉義・竹崎間、竹崎・樟脳寮間、樟脳寮・紅南坑間、紅南坑・梨園寮間、梨園寮・風吹石区間、風吹石区・奮起湖間、奮起湖・阿里

山間の7つに分けられた。しかし実際に完成したのは、嘉義から梨園寮までの区間であった。1906年7月4日、進藤熊之助は台湾総督府に休職願いを出し、藤田組に移り、阿里山森林鉄道建設にますます情熱を傾けた。そして進藤が竹崎・樟脳寮間の工事監督・検査を担当し、施工は大倉組と吉田組が請け負った。こうして1906年11月1日に着工し、翌年12月20日に完工した。

1908年1月14日、藤田組が阿里山の経営を放棄すると宣告した。1910年2月に第26回帝国会議を通過し、台湾総督府が官営方式で阿里山経営に乗り出すことになった。同年4月16日、勅令206号で「阿里山作業所官制」が公布された。阿里山作業所とは庶務課、鉄道課、林業課から成る。この他、嘉義出張所を別に設け、この下に庶務係、工務係、林務係があり、工務係は樟脳寮、交力坪、奮起湖、多羅焉、阿里山等各地に派出所を設けた。進藤は1907年5月30日に休職期間を終え、翌年3月9日に鉄道部に工務課技手として復職した。阿里山作業所ができてから、阿里山鉄道建設の支援に派遣される前か後には、樟脳寮派出所の主任、工務係長等の職に就かされた。

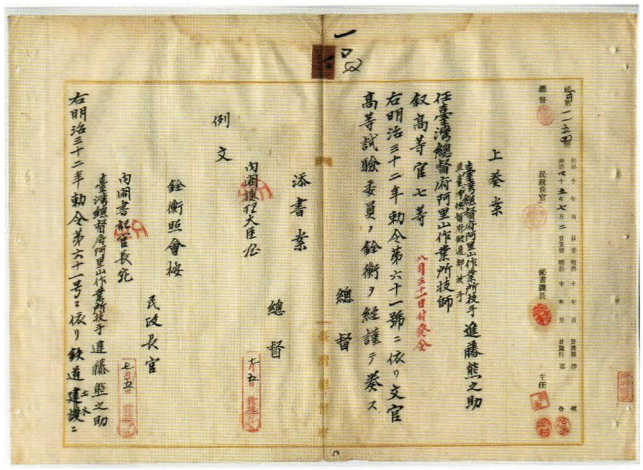
1911年6月、阿里山作業所所長の新元鹿之助は、進藤が鉄道建設の事業に何年も関わり、熟練した技能を持つ他、優秀な成績を収めていることを認め、佐久間左馬太総督に阿里山作業所の技師に昇格するよう願い出た。1912年7月台湾総督府が内閣に上奏した際、文官高等試験委員がその完璧な履歴に目を通した後、その資格を認め、翌月進藤を技師に昇格させた。

しかし天災、事故、疾病が絶え間なく阿里山作業所を

図4: 阿里山鉄道－奮起湖驛

図5: 阿里山森林鐵道

襲い、多くの技術者や作業員が命を落とした。その中の最大の犠牲こそ、進藤の殉職であろう。1914年2月11日進藤は奮起湖、阿里山間の鉄道修復工事を終え試運転を行なっていた。そこで材木運搬車が脱線し、重傷を負った。嘉義病院に



上奏案

臺灣總督府阿里山作業所技手進藤熊之助

任臺灣總督府阿里山作業所技師

叙高等官七等

右明治三十二年勅令第六十一號ニ依リ文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經謹テ奏ス

總督

添書案

總督

例文

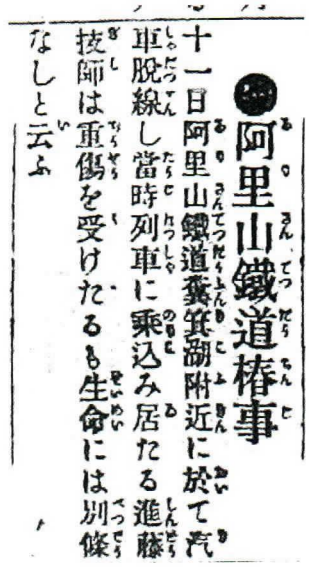
銓衡照會按

民政長官

右明治三十二年勅令第六十一號ニ依リ鉄道建設ニ

図6: 鉄道部技師昇格の文書

運ばれ治療を受けるもそのかいなく、24日にこの世を去った。彼の死は阿里山作業所の士気を全て奪い去り、全ての鉄道建設作業と試運転作業は停頓した。作業や試運転を継続する気力を持つ者は誰もいず、こうして阿里山経営はほぼ中断状態となった。1914年3月、永田正吉が阿里山作業所所長の職を引き継ぎ、アメリカのLima会社の技師とWestinghouse会社の技師の支援を仰いだ。こうしてやっと阿里山鉄道は順調に動き始め、森林鉄道としての大きな役割を果たしていったのだった。



●阿里山鐵道椿事

十一日阿里山鐵道糞箕湖附近に於て汽車脱線し當時列車に乗込み居たる進藤技師は重傷を受けたるも生命には別條なしと云ふ

図7: 阿里山鉄道椿事「台湾日日新報」

進藤熊之助殉職の記念碑の建立

①建立のきっかけ

進藤の同僚、上司、部下たちは彼の技術力、人柄を高く評価していた。単に技術が優れているだけでなく、誠実で勤勉な技術者であり、且つ立派な人格の人物であると皆が考え、上司は彼を尊重し、同僚は彼を敬い、部下は彼に信服していたのだ。進藤が阿里山鉄道のこの困難極まる工程に携わったのは、足掛け6年だった。そして能力を存分に発揮し、常に傑出した成績を上げていた。1915年6月15日、阿里山作業所嘉義出張所所長の綱島政吉は、進藤の殉職記念碑を建てるよう、当時の総督であった安東貞美に請願した。請願文は以下のとおりである。

故阿里山作業所技師進藤熊之助君ハ本島縦貫鐵道及ヒ阿里山森林鐵道建設ニ勤労スルコト前後十有六年或ハ設計ノ要職ニ參シ或ハ董督ノ重任ニ当リ精励忍苦克ク其職ヲ全フセリ其任ヤ洵ニ永ク其貢獻ヤ甚大ナリ方今我臺灣鐵道カ本島統治ノ上ニ重要ノ地位ヲ占ムルモノ蓋シ君ノ功与テ大ニ力アリト云フ然ルニ阿里山森林鐵道建設ノ功成リ大正三年弐月十一日列車試運転ニ際シ壮烈ナル最後ヲ遂ケ鐵道経営者ノ龜鑑トシテ範ヲ後人ニ遺ス是ニ於テ同志相謀リ其功績ヲ勒シテ之レヲ不朽ニ傳フル為メ記念碑建設ヲ企図シ地ヲ嘉義公園内ニトシ同公園管理者ノ承認ヲ得テ別紙図面ノ位置ニ記念碑建設致度候条御許可相成度關係図書相添ヘ此段請願候也

綱島は総督に請願する前にまず、6月9日嘉義庁長且つ嘉義公園の管理者である津田毅一に公園に碑を建てる申請を出し、津田はこれを翌日すぐに裁可した。こうして総督にいきさつを説明する書状が出され、許可を請うた。

②工程の概要と除幕式典

進藤の記念碑を建て、その功績を永遠に伝えていこうと立ち上がった有志たちは、友人知人たちに寄付を募り、それに350人もの人が応え、11172円もの寄付金が集まった。これは、進藤の私利私情を捨てた働きが多くの人の心を打ち、彼の人望の厚かったことを証明している。専門家に委託し3種類の記念碑が設計され、その中の一番優秀な物が発起人たちによって選ばれた。高さは地面から15尺、基盤にはコンクリートと煉瓦が用いられ、台石の上には三角形の碑石が載せられた。台石と碑石は最も重要な部分で、日本国内でも有名な徳山産の御影石が使われた。周りを囲む縁石には台湾士林で取れた石材が充てられた。豪華で壮観な物とは言えずとも、高潔な故人の人柄をしのぶ出来上がりとなった。

記念碑の様式が決まった後、新元鹿之助技師は故人のために碑文を選定した。阿里山作業所の元事務官・神谷由道が筆を揮い、永淵清介が施工を担った。永淵は故人の恩義に報いるために、全く報酬を求めず、職工の手間賃しか受け取らなかった。880円で仕上げるよう望んだという。本来の計画では徳山から粗材を仕入れ、台湾で加工すれば1100円ほどかかるはずであった。しかし後に永淵が方策を変え、石工を派遣して山の中で良材を探し出し、技術に熟練し且つ安価な職工を雇い、石の表面を磨くといった細部の仕事まで産地で行ない、最後は重量が比較的軽い物だけ日本から運送することで、大幅に工事費を安くあげた。幸い、加工、運搬、建設の際に毀損に遭うことはなく、1915年8月22日に竣工した。

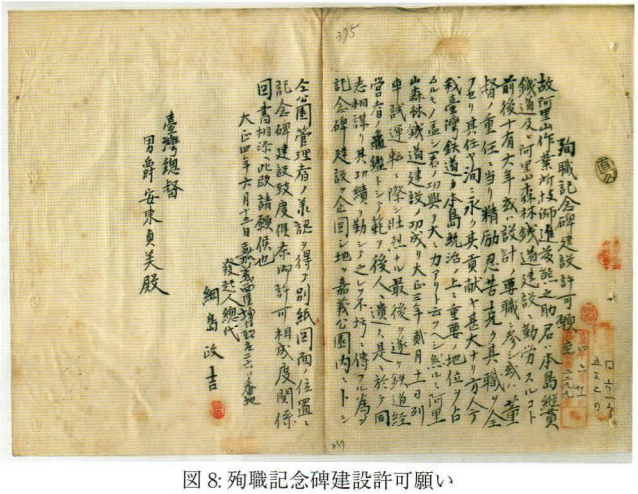


図8: 殉職記念碑建設許可願い

9月5日午前9時、嘉義公園内に設置された記念碑の除幕式典が行なわれた。菅野忠五郎技師が工程と会計についての報告をし、営林局技師・高山節繁の次女勝子（11歳）が除幕した。次に新元技師、綱島技師が順に祝詞を読み上げ、式典終了後、参加者たちが記念碑を取り囲み、休憩所ではお茶やお菓子が振舞われた。新元技師、津田庁長以下70-80人が進藤技師を偲び、10時半にようやく解散となった。この記念碑の碑文は漢文で書かれており、以下のような内容となっている。

図9: 殉職記念碑碑文

君諱熊之助姓進藤氏茨城縣古河人也。實性温良，修工學東都。明治三十二年任臺灣總督府鐵道部技手，後轉阿里山作業所昇任技師，專督鐵道事，人稱其適任。大正三年二月十一日自欲試汽車制動力，下阿里山至平遮那，偶會線路障礙，君為負大傷，不癒而歿，年四十一。聞者莫不悼惜嗚呼。君服職務冒危險不顧身，遂至殞命，其雄壯之氣永足為斯業者龜鑑。茲友人醵金樹碑傳之不朽。

大正四年八月

臺灣總督府鐵道部技師從四位勳三等新元鹿之助撰

原任阿里山作業所事務員正七位勳六等神谷由道書

引用文献

『臺灣鐵道史：中卷』（臺灣總督府鐵道部／近藤商店活版部／1911年）

『阿里山鐵道』（新元鹿之助「阿里山作業所技手進藤熊之助（任阿里山作業所技師）」『臺灣總督府公文類纂：第7卷・第2057冊・第10號』（臺灣總督府／1912年8月1日）／臺灣日日新報社／1913年）

「阿里山作業所技師進藤熊之助（昇等、昇級、賞與ノ件）」『臺灣總督府公文類纂：第1卷・第2295冊・第28號』（臺灣總督府／1915年2月1日）

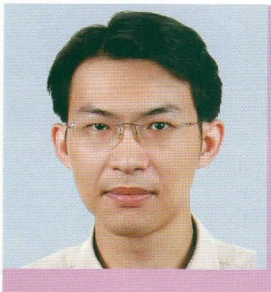
「故阿里山作業所技師進藤熊之助殉識記念碑建設認可」『臺灣總督府公文類纂：第30卷・第2370冊・第16號』（臺灣總督府／1915年6月1日）

「故進藤技師紀念碑除幕式」『臺灣鐵道：第40號』（臺灣鐵道會／1915年）

「阿里山森林鉄道經營之研究(1896-1916)」(吳仁傑／国立中正大学歴史研究所碩士論文／1999年)。

『阿里山森林鐵道機關群之研究』（蔡榮順、蔡旺洲／財團法人金龍文教基金會／2003年）

「長谷川謹介と日本統治時代台湾の鉄道発展」『現代台湾研究』（蔡龍保／台湾史研究会／2009年）



Tsai Lung-pao

蔡 龍保

國立臺北大學歷史學系

助理教授

Mail:henrytsai@hotmail.com

Profile

学歴

1998年 国立台湾師範大学歴史学系学士

2001年 国立台湾師範大学歴史学系修士

2006年 国立台湾師範大学歴史学系博士

略歴

『台湾歴史辞典』執筆

『台湾総督府文書目録』編纂

2003.7-2003.9 財団法人交流協会日台交流センター歴史研究者招聘

2004.7-2005.6 中央研究院台湾史研究所訪問学員

2005.7-2006.6 中央研究院人文社会学博士候選人培育計

2006.6 中華民國斐陶斐榮譽學會員

2008.7-2008.9 財団法人交流協会日台交流センター専門家長期招聘

2008.7-2008.9 東京大学文学部外国人研究員

2008.12-2009-11 工学院大学客員研究員

専門 植民地時代の台湾交通史、土木史

学校法人　工学院大学創立 125 周年　特別企画

製鉄から建築技術者へ　木下益治郎

二村　悟

JAPANESE ARCHITECT, SUPPER SCHLESINGER N.Y.　DEC. 8. 1920

はじめに

木下益治郎［写真 1］（以下、本書では「益治郎」という。）という建築家をご存じだろうか。本学出身の建築技術者である。後世に広く名を知られることはなかったが、現在も神戸をはじめ、幾つかの建物が現存する。

筆者は、近年、日本建築学会に研究報告を行っているので、資料を入手した 2004 年よりは情報が収集しやすいはずである。現在、約 3000 点を超える図面史料は、筆者の友人である松山哲則氏が所蔵している。史料は、基本的に非公開である。

この史料は、本学の図書館で今和次郎とともに並んでいても不思議ではない。事務所を継承する人物がいなかったため、後世に名を残すことはなかったが、当時の建築界では知られた建築家であった。

史料は、松山氏が散逸を防ぎたい一心で入手したもので、当初より筆者は協力者として史料を整理し、2007 年には目録を作成した。

経歴・作品歴の調査は難航したが、文献資料に加えて、親類縁者や施主のご子息と話す機会もあり、ある程度把握することができた。実現しなかったが、2006 年には自費出版の予定で本を書き、内容の一部を日本建築学会で 4 編発表している。

それでは、なぜ膨大な数の史料を松山氏が入手することになったのか。その経緯を紹介しよう。

略歴

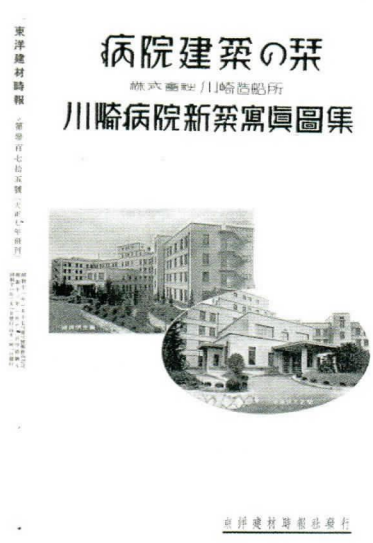
益治郎は、明治 7 年 4 月 24 日に鳥取県に生まれ、本学の前身である工手学校造家学科第 9 回生として、明治 26 年 7 月 9 日に卒業する。卒業後、臨時陸軍建築部、逓信省、東京海上火災保険株式会社など経て、1932 年頃に本格的に設計事務所を開設する。最初に勤務する長崎県大村臨時陸軍建築部時代のポートレートが［写真 2］である。また、同地には当時手がけた建物も現存する。

［写真 1］大正 9 年の渡米時の写真と推測される益治郎（広浜満智子氏蔵）

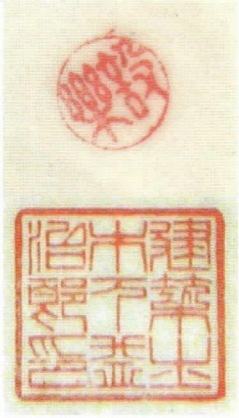
1924 年には、日本建築士会（現・社団法人日本建築家協会）の会長、副会長に次ぐ理事・会計の要職に就く。1926 年からは、建築学会（現・社団法人日本建築学会）の各委員会の委員を歴任し、1931 年には常

［写真 2］大村臨時陸軍建築部時代の益治郎（広浜満智子氏蔵）

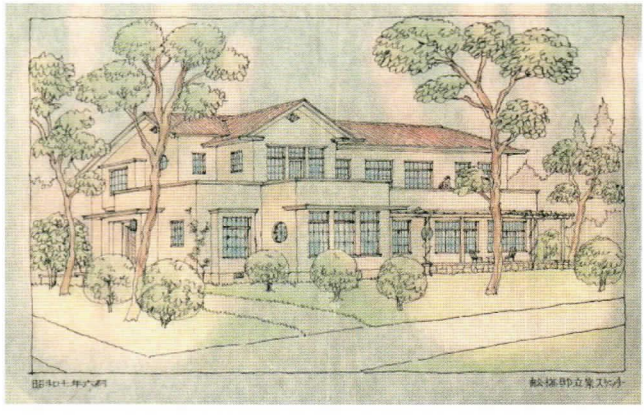
［写真 3］馬車道大津ビル（旧東京海上火災保険株式会社横浜出張所ビル



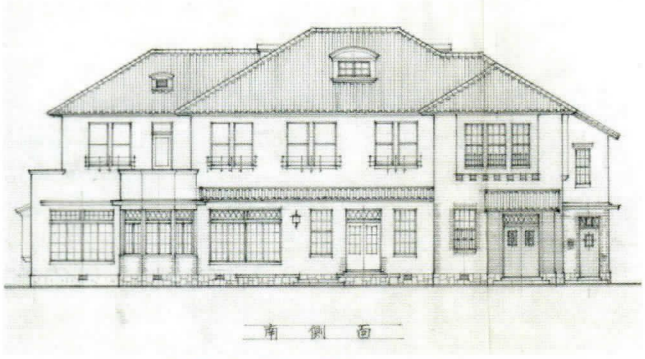
［写真 4］すべては、この一冊から始まった。



［写真 7］設楽貞雄と「建築家木下益治郎」の捺印



［写真 5］船橋栄吉邸　パース



［写真 6］澤田節蔵邸　南側立面図

議員兼主計となる。本校出身者では、要職についた早期の例であろう。

現存する主な作品は、1995 年の阪神大震災にも耐えた神戸市の甲南病院、川崎病院、神港ビル、横浜市の旧東京海上火災保険株式会社横浜出張所ビル［写真 3］（現在の馬車道大津ビル）、中国の旧新京東京海上ビル（現在の長春市中心医院）などである。

建築家・木下益治郎との出会い

出会いは、2004 年 6 月頃のことである。医療福祉施設の設計を専門とする松山氏は、インターネットの古書店サイトで、500 円で販売されていた『病院建築の栞・川崎病院　新築写真図集』（1936 年）［写真 4］を入手する。これが、益治郎との出会いである。

一度目の資料発見　港や書店

益治郎のことを知ろうと、図書館、古書目録、インターネットを使って調査したが、ほとんど情報はなく、時間だけが過ぎて行った。写真集を購入してから一年半を経た 2005 年 3 月のことである。港や書店の古書目録を見ていた筆者は、そこに木下益治郎の図面資料が、段ボール一箱で売りに出されていることを知る。すぐに、松山氏にメールを入れたが、夜中であったため連絡が取れず、筆者の判断で注文する。

入手した一箱は、貴重な史料の山で、手掛かりとなる情報が詰まっていた。主な史料は、東京音楽学校（現・東京芸術大学）教授の船橋栄吉邸［写真 5］、外交官の澤田節蔵邸［写真 6］、鳥取県初の外交官・大田為吉邸、東京海上社長・三菱信託銀行監査役などを歴任した鈴木祥枝邸など、住宅関連の設計図であった。そこには、本学の一期生・設楽貞雄［写真 7］も登場する。史料の多くは、A2 版ほどの和紙に鉛筆描きされた原図である。

この他、各務鎌吉・孝平、堀内泰吉、澤田退蔵、谷井一作、平生釟三郎などの名が見られた。実は購入直後には、これら図面の建築主が、近代史上に名を残す人々であるとは予想もしていなかった。

二度目の資料発見　三茶書房

2005年10月、神田古本まつり（10/28～11/3）の古書目録が筆者に送られてきた。内容を見ると、三茶書房の一面に新京東京海上ビルの設計図書が掲載されていた。そこには、設計者として、益治郎の名が記されていた。この件を松山氏に伝え、相談するも、高額なことと、国外の建物であるということから一旦は購入を見合わせた。

その後、しばらくして松山氏の恩師である日本大学名誉教授の山口廣先生より、同じ三茶書房の目録のコピーが送られてきた。山口先生は、三茶書房とは懇意な間柄で、実は新京東京海上ビル以外に川崎病院などの図面もあることを知らされる。山口先生が川崎病院を記憶していたのは、著書『自由様式への道 建築家安井武雄伝』（南洋堂出版、1984.9）の中で、安井が大正期に川崎病院の新築計画をしていたことを記憶していたからである。

そのうえで、松山氏が資料を見たいというのであれば、紹介状を書いてもいいという連絡が来る。しばらくして、名刺の裏面に記載された紹介状が届く。

筆者等は、数日後、三茶書房を訪れた。店主の幡野氏が、史料を見やすいよう並べていた。史料には、「川崎病院」、「神港ビルディング」など、益治郎の設計図書が高さ約30cm、距離約4mに渡り並べられている。それをミカン箱大の段ボール箱に納めると6箱となった。

店主は、物件ごと売ることを考えていたが、現在は一括して松山氏が所有している。松山氏は、結果として史料の散逸を防いだのだ。

ここには、明治火災保険会社、銀座ホテル、三菱信託会社、株式会社後楽社、明治大学、日本鑿泉探鑛株式会社などが見られ、英文の史料、仕様書、見積書、請求書なども含まれていた。

経歴の探索　親族や関係者との出会い

史料を入手してからは、松山氏が親族を探し、筆者が経歴、作品歴の調査を始めた。また、経歴の一部は、元文化庁の堀勇良博士よりご教示いただいた。

松山氏は、資料に昭和15年の「木下邸」の図面があることを確認する。住所は、現在の文京区である。図面に添付された案内図を、現在の住宅地図に重ねてみたところ、「木下正文」（木下益治郎の長男）とある。すぐに現地を訪ねたが、アパートの建設中であった。

そこで松山氏は、転居しても郵便は一定期間なら転送されることに気付く。届け先が無ければ返送されてくるので、送付して戻ってこなければ親族に届くというわけだ。そこで、わずかな望みをかけ、一通の手紙を投函する。何の音沙汰もなく7カ月を経たある日の午後、松山氏の事務所に一本の電話がかかってきた。その第一声は、女性の声で「木下益治郎の孫です。」という一言であった。

電話の主は、木下益治郎の長男・正文の末娘、広浜満智子氏であった。電話では、益治郎の出生地を尋ね、現在の鳥取県日野郡日南町阿毘縁であることが判明した。これを画期として、研究がようやく始まる。

その後は、広浜氏を軸に様々な方々と会う機会を得た。特に、施主の方々を2度集めていただき、聞き取り調査から史料に関して大きな成果を得ることができた［写真8］。

［写真8］広浜満智子氏と益治郎設計の施主のご子息
左から、ショージ・サダオ（バックミンスター・フラー、イサム・ノグチと協働したアメリカ人建築家）、広浜満智子氏、鈴木祥枝の長女・俊氏、筆者、松山哲則氏、東京海上社長・三菱財閥の要職を務めた各務鎌吉の孫・貞尾恒子氏、澤田節蔵の五男・澤田寿夫氏

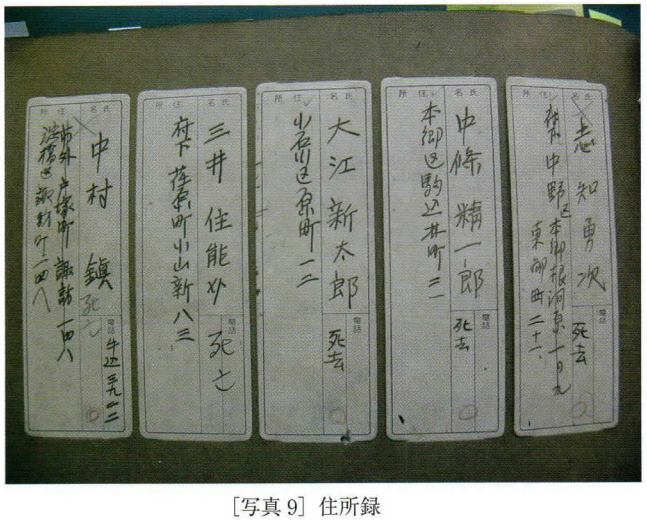
また、故郷の阿毘縁では、解脱寺の生田君江氏との出会いが大きな成果を生んだ。生田氏とは、どこに建つのか不明であった一枚の図面の塔が、解脱寺の宝塔であることを確認したのが最初の出会いである。また、阿毘縁小学校の建設に携わったこと、益治郎の生家の一部が移築され現存することもご教示いただいた。タイトルに「製鉄」としたのは、たたら製鉄業を営む家に生まれ、建築の鉄製の金物には特にこだわっていたことを知ったためである。確かに彼の史料には、こうしたディテールを記した図面が多い。

収集した史料

段ボール7箱、3000点を超す史料を物件ごとに整理する中で色々と確認することができた。

例えば、住所録［写真9］には、曽根達蔵、中條精一郎、佐野利器、大江新太郎、内田祥三、内藤多仲の他、本学出身の設楽貞雄、千賀正人、瀬戸強三郎、嶋浩、佐野源次郎、内田有一、植羅渓三郎、難波停吉、難波辰雄、多喜義雄、吉島保、小川猪作、小澤熊次郎の名が見られる。名簿には、本学出身の浅香富三、堀崎秋夫、長島正三、鈴木正雄、山田清之助の名が見られる。

一方で、新たな史料も収集できた。多くは、最初に連絡をいただいた広浜満智子氏によるものである。



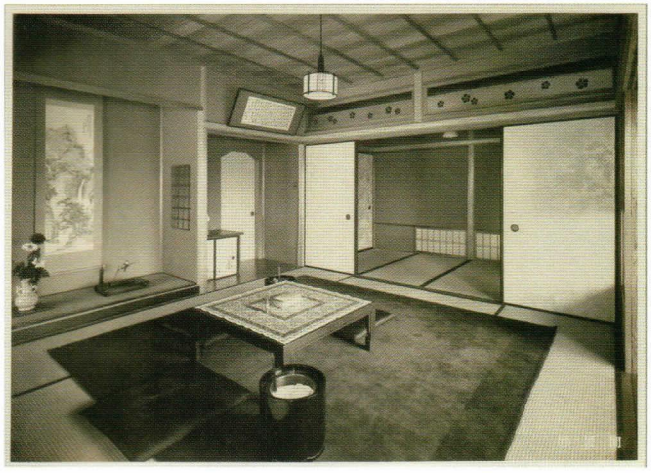
［写真9］住所録

［写真 10］益治郎の名刺（広浜満智子氏旧蔵）

中でも目を引いたのは、益治郎が大正 9 年に渡米した際に撮影した集合写真である。写真には、「JAPANESE ARCHITECT, SUPPER SCHLESINGER N.Y. DEC. 8. 1920」［表紙写真］と書かれている。山口廣先生と人物の特定を試みたが、若い頃の写真のため断定はできていない。少なくとも、片岡安（明治 30 年東大卒）、大江新太郎（明治 37 年東大卒）、高松政雄（明治 43 年東大卒）と見られる顔は推定できた。この時期、竹中藤右衛門、高橋貞太郎（大正 5 年東大卒）、波江悌夫（明治 43 年東大卒）、大林義雄（大林組）、松本禹象（同）、高橋誠一（同）、本田登（同）、妻沼岩彦、島本四郎（竹中工務店）、寺田勇一（明治 45 年東大卒）、大澤一郎（大正 3 年早大卒）など多くが渡米している。その中で、12 月 8 日の晩餐会に何人出席できたかは明らかではない。

また、益治郎が当時使用していた名刺［写真 10］が箱とともに残っている。さらに、『茅屋寫眞』（昭和 15 年 12 月新築、木下益治郎）という、自邸の写真帖［写真 11］もお借りすることができた。

一方で、入手した史料から設計者が判明した例もある。横浜市の認定歴史的建造物・馬車道大津ビル［写真 3］は、史料に工事仕様書などがあることが判明し、設計者であることが明らかとなった。これをもとに、本学でも卒業論文 2 名を始めとして数名が研究に携わった。



［写真 11］木下益治郎邸の居間　欄間の原図も残っている

まとめ

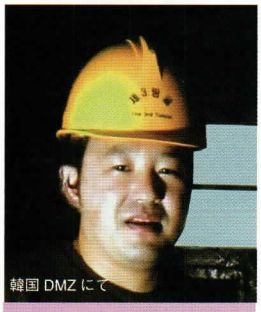
益治郎は、時代の波に翻弄された建築家といえる。東京帝国大学出身の建築家が時代をリードし、華々しく活躍する。その影に甘んじ、人生の過半数を過ごす。益治郎が活躍を始めるのは、60 歳からのわずか十数年である。彼は、この短期間で大輪の花を咲かせる。

第二次世界大戦の戦況が激しくなる昭和 19 年、彼はその波乱に満ちた生涯を御殿場の別荘で終えている。この別荘は現存し、多磨霊園には益治郎が設計した墓となる祠堂も現存する。

現在、経歴は年月日で追うことができるほど、詳細な調べが進んでいる。作品歴は、いまだ不明な点が多い。経歴、作品歴は、機会があればいずれ紹介したい。筆者はこれまで多くの建築家の経歴・作品歴を調べる機会を得てきたので、その際には建築家を調べる方法の一例を、卒業論文を書く学生のために紹介できればと思う。

参考文献

病院建築の栞　株式会社川崎造船所　川崎病院新築写真図集，東洋建材時報第 375 号，東洋建材時報社，1936.2.1
山口廣：自由様式への道 建築家安井武雄伝，南洋堂出版，1984.9
神田古書店目録 31 号，2005
工手学校一覧，工手学校，1894.2.20
日本建築協会 80 年史 1917 - 1996, 日本建築協会，1999.7
公文雑纂第 18 巻，陸軍省，1898、同 10 巻，枢密院・外務省，1901、同 42 巻，在軍籍者招集免除 3,1906、以上は国立公文書館蔵



NIMURA SATORU
二村 悟
工学院大学客員研究員
Mail:goto2672@yahoo.co.jp

Profile

学歴
1997.3　東海大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程前期　修了
2000.7 - 2003.3　工学院大学建築都市デザイン学科（後藤治助教授）　研究生
2004.10　東京大学　博士（工学）　取得（主査・藤森照信教授）

職歴
1997.4 ― 2000.3　設計事務所にて実施設計に従事
2000.11 ― 2002.12、2005.4 ― 2006.7　サイン（屋外広告物）のデザイン・設計に従事
2001.1 ― 2005.3　静岡県の博物館で学芸員（扱）として従事
2004.4 ―星槎大学発展科目環境科目群　非常勤講師
2004.7 ―工学院大学建築都市デザイン学科（後藤治教授）　客員研究員
2008.4 ― 2010.3 静岡県立大学　客員准教授
2008.4 ―専門学校 ICS カレッジオブアーツ インテリアデザイン科　非常勤講師

主な共著
『しらべる戦争遺跡の事典』(2002, 柏書房)
『愛媛温故紀行　明治・大正・昭和の建造物』(2003, アトラス出版)
『図説　日本の近代化遺産』(2007, 河出書房新社)
『図説　台湾都市物語』(2010, 河出書房新社)

専門　近代化遺産（農業土木・仮設物含む）、サイン（屋外広告物）、近代建築史

史料所有者　松山哲則：株式会社医院企画プロジェクト　所長

初代・通天閣は新しい時代のランドマークであった

設楽 貞雄【しだら・さだお】

*

七五メートルは大阪一でなく日本一だった。しかしオープンの時にはエレベーターも間に合わなかった。展望台の内装が済んで、荷物用のエレベーターを改造して人を乗せるようになったのは二年後だ。音楽堂の後ろにネオンで染めた七色の滝があり、滝の向こうに高さ四五メートルの白い塔を建て、四人乗りのロープ・ウェイを通天閣まで渡らせた。ルナ・パークの上を赤い箱が、笑顔で見下ろす人を乗せ、ゆらゆらと行ったり来たりしたという（二鬼薫子『通天閣物語』／鳥影社／1997年）

*

初代・通天閣は新しい時代のランドマークであった

設楽 貞雄【しだら・さだお】

❶皇室建築と工手学校

この欄の目的は、建築史上に燦然と輝く足跡を残した工手学校時代の先輩を紹介することである。すでに10名を終えた。一区切りがついた、というところである。さて11人目、心機一転……という折も折の2009年7月28日（火）、「工学院大学の“輝かしき先輩達”を紹介」という講演会が、工学院大学・新宿校舎28階・第一会議室を会場にして開催された。講師は、浅羽英男氏と蔡龍保氏。

この講演会の詳細については、本号でも伝えられているが、浅羽英男氏の「皇室建築と工手学校」の最初に出てきた名前が「設楽貞雄」であった。

京都帝国博物館（国重文）＝設計：片山東熊・宗兵蔵、監督：足立鳩吉・原忠治・濱野牛児、場所付雇：設楽貞雄。

設楽貞雄――明治・大正期に大阪で活躍した建築家で、何と初代の通天閣が彼の設計であった。

❷山口半六と、どんな話をしていたのだろう

設楽貞雄は、1864年（元治1年）7月3日、福島県安達郡本宮町（現本宮市）に、二本松藩士・設楽弥兵衛の次男として生まれた。1888年（明治21年）、創立したばかりの工手学校造家学科に入学する。そして翌年、第一回生として卒業する。それにしても、いくら「短期間で現場に役立つ知識と技術をみにつけさせる」ことを設立趣旨に謳うからって、よく1年間で育てあげたものである。相当に激烈な指導だったに違いないし、社会に巣立った先輩たちが充分にキャリア組に仕える“工手”として期待に応えているところをみると、みんな真面目に真剣に勉強していたのだろう（在校生の皆さんも、頑張ってネ）。

貞雄は日本土木会社に入社した後の1891年（明治25年）、宮内省内匠寮に出仕する。ここで、前出の京都帝国博物館の現場を担当する。

ルネッサンスを基調とし、随所にバロック的手法を見せる。京都という歴史的な地に建てられた本格的な様式建築は、当時大いに物議をかもし、大ペディメント内の東洋風彫刻も波紋を呼んだ。いち早く天窓採光を採用した博物館建築としても重要であるが、世間を騒がせたという意味でも、先駆的な建築。

（ギャラリー・間『建築MAP京都』／TOTO出版／1998年）

1896年（明治29年）、貞雄は桑原政工業事務所に招かれる。事務所は本邦初の建築コンサルタント会社だが、ここに上司としていたのが山口半六である。山口は貞雄より6歳上で、国立パリ中央工芸学校の出身である。明治建築の主流がイギリスだったなかで、敢えてフランスに学んだことからも異端の匂いが芬々とする。桑原政工業事務所で3年間仕えた後の1899年（明治32年）、山口が自らの事務所を開設する。そして貞雄も、山口半六事務所の支配人兼所長代理として迎えられる。当時の建築界をリードする巨匠たちに仕えて、貞雄、順風満帆な建築人生のように思えた矢先、山口半六事務所は1年で主を失うことになる。42歳の若さで、山口は世を去った。

貞雄は、山陽鉄道の建築係長に就任するが、1907年（明治40年）、自らの事務所「神戸建築事務所（後に設楽建築工務所と改称）」を開設する。そして、1912年（明治45年）、あの通天閣を設計するのである。

❸通天閣は日本のポストモダンの第一号である

大阪は浪速区恵美須東、天王寺動物園の西側に広がる一帯を「新世界」という。この新世界のシンボルとして建てられたのが「通天閣」だ。1912年（明治45年）7月3日。冒頭に引用した『通天閣物語』では高さ75mとあるが、基壇部分50尺、鉄塔部200尺、合計250尺の塔を見て、さしもの浪速っ子も度胆を抜かれた。

「新世界」に先立つ1903年（明治36年）、天王寺公園一帯を会場にして「第5回内国勧業博覧会」が開催された。会期153日間で来場者数435万人を数えたという。「新世界」は、その跡地と周辺の開発を目的に計画された。「始め本園の建設先立ち、市当局にありては、市民の健康上天王寺公園の施設に順次力を注ぐと同時に、その柵外地三萬余坪も開放してこの地に一大娯楽場を設備し、公園の美観とあいまって市民娯楽趣味の向上を図り、かつひいて付近一円の発展を促進すべく該土地を賃貸するの義を決せり」（『大阪新名所新世界写真帖の巻頭言』）。

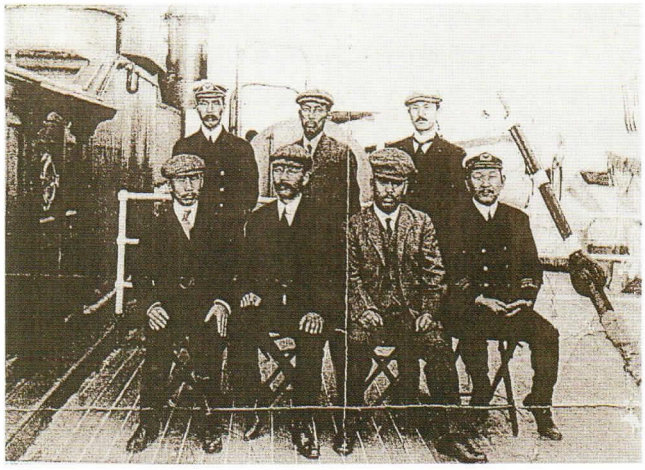
初代・通天閣は新しい時代のランドマークであった

設楽 貞雄【しだら・さだお】

*

歴史様式の引用あるいは融合を“ポストモダン”の一つの手法というなら、凱旋門とエッフェル塔を混成させた「通天閣」は、日本のポストモダンの第一号といえる。

その技術が誇る高さといい、その存在が都市に与えるインパクトといい、「通天閣」は文字通り新しい時代を告げるランドマークとなった。作者に、よほどの基本知識が兼ね備わり、人生を楽しむ技に長けていないとできない芸当である。こんな素晴らしい先輩を第一回生として送りだした母校は、もっともっと誇りを持っていい。



■船上にて（後列中央が貞雄）

*

通天閣が竣工してすぐの1912年（大正元年）10月19日、貞雄は海外に旅立つ。生まれて初めての渡航である。神戸～横浜～ホノルル～サンフランシスコ～ロサンジェルス～

初代・通天閣は新しい時代のランドマークであった

設楽 貞雄【しだら・さだお】

■長瀬産業ビル（1928年／大阪市新町）

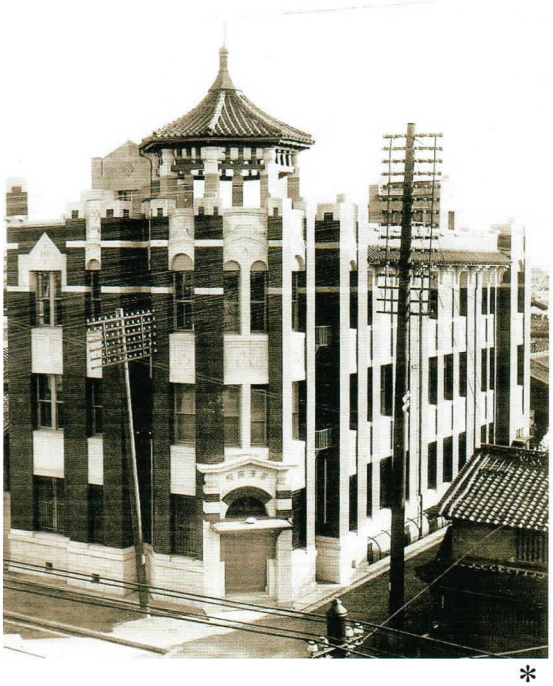
ソルトレーク～シカゴ～ニューヨーク～ワシントン～ロンドン～パリ～ベルリン～ウイーン～ベネチア～ローマ～ナポリ～ミラノ～マルセイユ～神戸という、約半年の旅であった。

貞雄は旅行中、克明に日記をつけていて、後年『設楽貞雄外遊日記』として紹介されるのだが、これがとにかく面白い。小田実の『何でも見てやろう』の好奇心と、妹尾河童の『河童が覗いた○×○』の緻密さで、見聞が綴られている。建築家だから、その土地の建築を語る時は、面積から階数から構造から建築費にまで及んでいる。

「アメリカの土を踏んで漸く一日。何の感想もある筈はないが、如何にも物事が大げさで○丈夫で色も毒々敷程に濃厚でごつごつして物を一つ持つにも余程力の入る様なふっくリした処のない余裕の少ない。詞でも何でもどぎつくて骨迄透れと怒鳴る様に聞へる。優美な趣は少しもない」（大正元年11月4日）。

「電車を乗廻してサンスイパーク、ルナパークの二カ所を見る。共に見るべきものなし。夫れよりシカゴポストオヒスを見る。其此建築の壮大にして美麗なる驚く斗り」（大正元年11月27日）

「午前十時、エッフェルタワーに登る。エレバーターに乗れば第二の斗床にて乗換えて頂上に達するなり。直立一千尺、鉄骨構造にして迚も通天閣等は足元にも寄れず。頂上よりパリ市内を見卸せば寸馬豆人処の騒ぎにあらず。人間共が蟻の如くうようよして居る有様叉なく憐れなり」（大正2年1月17日）。



*

■有澤病院（1914年／大阪市北浜／現存せず）――
初代・通天閣を代表作としてそのエンターテイメント性ばかりを強調してきたが、この作品を見る限り、貞雄は本格的な様式主義の建築家でもあった。“修業”を確実に自分の手法の糧とした証拠である。とはいえ、エントランスの上部や塔屋の六角形のデザインに貞雄独特の洒脱さがあふれている。

設楽貞雄は、その後、日本建築協会の副会長をつとめ、関西建築界の発展に尽力した。そして、1943年（昭和18年）、神戸・須磨の自邸で逝去した。享年79歳であった。

◆今回の取材に対して、設楽貞雄のお孫さんである設楽貞樹さん（安井建築設計事務所・常務取締役）より貴重な助言と資料をいただきました（＊印の写真は貞樹さんの提供）。誌面を借りてお礼を申し上げます。

また、引用した『設楽貞雄外遊日記』は、社団法人日本建築協会の機関誌『建築と社会』の創刊1000号記念企画の一環で、2005年7月号から1年間の特集記事として、石田潤一郎（京都工芸繊維大学教授）の解説付きで連載されたものである。

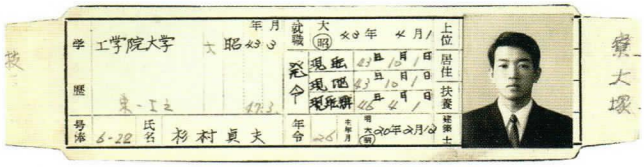
なお、設楽貞樹さんによれば、『日本の建築【明治大正昭和】5商都のデザイン』（著：坂本勝比古／1980年／三省堂）が設楽貞雄研究では一級の資料ということです。

レポート：類洲　環

杉村貞夫さん（昭和43年卒業）

株式会社ジェイアール東日本建築設計事務所社長に就任

写真1　建築学科設備工学コースのメンバー　最前列右から3人目



国鉄入社　大塚独身寮へ

■学生時代

田野邉　社長就任おめでとうございます。どのような経緯で工学院大学の建築学科を選ばれ、学生時代はどのような生活を送られていたのか、お聞かせ下さい。

杉　村　高校当時、父が建築出身であり、また兄も大学の建築科に在籍していたので、図面を覗き込んだりまた飛行機が好きで航空雑誌を見たりして、図面に興味を持っていたこともあり、工学院の建築科を選びました。一年だけ八王子校舎に通い、二年目以降は新宿校舎に通いました。当時は、周囲にはまだ淀橋浄水場が残っていて、今のような超高層ビルはなかったですね。

部活動は卓球部に所属し、研究室は建築施工の吉田研究室でした。先生には、数々現場に連れて行ってもらったり、夏休みにゼネコンの現場でバイトをさせてもらったり、当時としては珍しかったのですが、ドリームランドとかに第三京浜を使って先生や皆でドライブに出掛けたりしました。楽しかったし、心の原点があったように思います。

■入社時代・社員時代

田野邉　入社後どのような部署に配属され、どのようなお仕事をされていらっしゃったんですか？

杉　村　最初は皆、現場に配属されるのですが、私も5年間現場におりました。はじめに北局上野建築工事区に配属され、本局の設計部が発注する工事の現場監理を担当していました。主に駅の改良や現業事務所の新築等の現場でしたが、いい勉強になったと思います。最初に設計したのは機関区の機関車庫の大きな扉の改良でした。その様な細かい設計はずいぶんしました。現場ですので本格的設計ではないのですが、駅や現業機関で実際に使う人の立場に立って色々な工夫をし、設計図で説明しながら要望をひとつひとつ盛り込み造り込んでいくことは楽しかったです。

写真2　現場監督の頃－土木メンバーと

■役員時代

田野邉　国鉄からＪＲに変わっていく時の葛藤とかはおありでしたか？

杉　村　勿論ありました。国鉄を何社に分割するのか、民営化とは、資産は、組織は、規程は、資本費と修繕費はどう違うのかといった勉強を急激に始めました。そして、民営化にあたって、お客様とは何か、といった視点から見直しが行われ、まず社員全員でトイレを掃除しました。取締役から部員まで全員で行ったんです。「トイレをきれいにしよう！」ということも、お客様の目から見れば当たり前のことですが、お客様の喜ぶものは何でもしてみようとそれぞれの部門ごとに取組んでいました。

このように業務の流れが大きく変化し、建築分野でもクライアントのニーズが見えやすくなり設計のスタンスにも

写真3　杉村貞夫さん

写真4　鉄道博物館　外観

変化が生まれました。JR本社で鉄道の効率化が求められ、外注が進み、国鉄以来の駅を中心とした設計技術を維持していくには、建築設計事務所として独立させたほうが良いと考えられたのが当社設立のきっかけでした。このとき設立趣旨としては、高い建築の設計力を維持するとともに鉄道建築のノウハウを持ちながらJR東日本の事業に貢献し、将来は世の中のトップレベルの事務所になれ、という事でしたね。今年でこの会社は創立20周年を迎えたのですが、私は最初の10年間はJRの中にあって、後の10年はこの会社の一員として関わってきました。私にとって国鉄からJRの変化は刺激的で明るい方へ歩む実感を持てて、ささやかですが自分なりに何か貢献出来たかなと感じられて、良い思い出として残っています。

田野邉　今まで携わられた建物で思い出に残る作品はありますか？

杉　村　どれも思い出深いのですが、しいて言えば、埼京線の10駅の基本計画ですね。今まで経験のない高さを持つ高架下駅でしたが、10の新駅を同時に開業させるというプロジェクトは建築担当者にとって稀有なことであり、昂ぶりました。鉄道と街の関わり、駅の役割、持つべき機能、土木高架橋との整合、そして様々な方々との連携等々多くの事を学びました。明治、大正以来の旧い構造物を復活させた上野駅でのステーションルネッサンス、或いは当社に来てから、当社として初めての超高層となった八重洲のサピアタワー、JR東日本挙げての取組んだ鉄道博物館（写真4）等ですね。現在、東京駅丸の内駅舎（設計辰野金吾）の復原保存の設計（写真5）を会社としてさせていただいていますが、このテーマに関われることは鉄道に就職した建築の人間として幸せだと感じています。

田野邉　今、ＪＲ中央線も立川まで連続立体高架の工事がされており駅舎等も建て替えが進んでいますが、工事的にどこまでが建築でどこからが土木といった分解点が無いように思えるのですがいかがでしょうか？

杉　村　土木は列車を安全に走らせる構造物として設計しますが建築的に使うということになると建築物として考え

写真5　東京駅丸の内駅舎（旧中央停車場）保存復原　完成予想パース※東日本旅客鉄道㈱提供

明治41年3月起工、大正3年12月14日竣工。
設計は工手学校造家学科を設立した辰野金吾である。
実際の設計監理は辰野葛西建築事務所所員小笠原鈅（工手学校第19回首席卒業）がその任にあたった。
現在その後輩である杉村氏が保存復原に関わることは、永い歴史の流れを感じさせる。（NICHE編集部）

写真6　グラントウキョウ サウスタワー

ます。安全を確認する意味で土木構造物を建築の手法で再検証します。確認申請でもそれを求められます。駅前広場を介しての町との関わり、駅のレイアウト、また安全への配慮が必要な線路間で、建築構造物が土木構造物に与える影響の確認等など土木と一緒になって作業する事が多いですね。駅は街の顔であり、お客様にとって便利で快適であるものとして、分野を超え、世の中の優れた力もお借りして、力を合わせて、良い物を造っていかなくてはならないと思っています。

■最高責任者

田野邉　そのやり甲斐のある仕事の責任者として引っ張って行かれる決意を頂けませんか？

杉　村　地球温暖化をはじめとして世界全体が変化を求められている状況であり、加えて国内では少子高齢化が今日の現実になってきています。鉄道の駅をはじめとして公共性の高い建築の設計を業務としている当社は、世の中の大きなニーズを認識しながら、しっかり貢献出来るようでありたいと思います。具体的には日々の業務の中でクライアントのニーズを的確に捉え長期的な評価に耐えうる優れたアウトプットを実現していくことです。そのために幅広い理解力と実現できる技術、デザイン或いはプロデュースする力が必要です。それには何と言っても人材ですよね。優れた人材が集まり育つような、明るい風通しの良い風土が大切ですね。そんな会社を目指したいですね。

田野邉　鳩山首相が国連等で25%のＣＯ２削減を示されていますが、ＪＲとして取り組まれておられることはありますか？

杉　村　ＪＲとしては公共性の高い企業としての自覚のもとにグループ挙げてエコロジーに取組んでいます。ジーゼルのハイブリット化、電気化をはじめ、ＬＥＤ照明、屋上緑化、戦略的なエネルギーの低炭素化等精力的に進めています。我々に関しては、駅をはじめとした建物設計の中で実現していく事が使命です。八重洲のサピアタワーが今年ＣＡＳＢＥＥの2008年度基準のＳクラスを取得しました。設計は5年前頃進めたものですから環境の課題に早くから取組んでいた成果だと思います。エコという視点においては、鉄道は優れたものだと思います。鉄道は公共交通機関の中でも特にエネルギー効率が高く、環境問題に対する位置付けは非常に大きいと思います。

写真7　グランスタ（東京駅地下１階店舗）

田野邉　最後に現役学生に対して学生時代をどのように過ごしたら良いのかアドバイス頂けたら幸いです。

杉　村　若いと言うことは体力があり瑞々しい感性を持ち、何よりも失敗を将来の糧に出来るだけの時間を持っているということです。その恵まれた今しかないその時の意味を理解して、何をするにしても事の本質に迫る、人と心の触れ合う、感動の伴う経験を多く積んで欲しいですね。退屈だとか、つまらない世の中だとか感じる時は、自分のセンサーの感度が悪いと思って間違いありません。それから自分の後悔でもありますが語学だけはモノにしておくべきですね。仕事の上でもそうでなくとも、これほど海外が身近になるとは思ってもいませんでした。当然ですが見るべきものは海外にも沢山ありますからね。

若いうちですから、勇気を持って怖がらずに遠慮なくやって欲しいですね。

田野辺同窓会長・杉村社長・昨年入社の O.G 川崎香織さん

国鉄最後の頃テニスを楽しむ

JR.マラソン部にて

Sadao　Sugimura
杉村 貞夫

プロフィール

出身地　福島県
生年月日　1945年2月12日
出身高校　都立北高等学校
工学院大学 1968年卒業
建築学科吉田辰夫（施工）研究室
1968年4月　国鉄入社
2000年3月　（株）JRE 設計入社
2000年6月　常務取締役
2009年6月　代表取締役社長

森林と砂漠の思考形式
－集まって住む空間と暮らし－

畑　聰一
芝浦工業大学名誉教授
工学博士

氾濫原に立地するオーイ族の舟形の高床式住居

2009年10月14日、大学院講義科目「建築デザイン特論」に畑先生をお招きした。
先生は35年以上にわたって、国内外の膨大な集落調査・研究の実績があり、見事なフィールドサーベイと考察をおこなっておられる。これらの内容は現代社会に生活する我々に、多くの学ぶべき示唆を含んでいた。この日、デザイン・計画系院生に加え学部生、一般人を含め約60名以上の受講者がいた。「今回だけで終わるのは惜しい・・・」との声があり、限られた誌面ではあるが、あらためて原稿を依頼することとした。
（NICHE編集部）

畑　聰一……はた　そういち
1962年　石川県立小松高等学校　卒業
1966年　芝浦工業大学工学部建築学科卒業
メールアドレス　sxata@jcom.home.ne.jp

1966～1967年　連合設計社 みねぎしやすお事務所勤務
1973年　早稲田大学理工学研究科博士課程満期退学
1976～2009年　芝浦工業大学工学部建築工学科 教員

現在 芝浦工業大学名誉教授　工学博士

昨年の10月、大学院科目の『建築デザイン特論』にて、わたしが長年続けてきた内外の集落調査についてお話しする機会がありました。谷口宗彦先生の授業科目のなかでのお誘いでしたが、そのあと谷口先生経由で履修学生からの講義感想文を受け取りました。いずれも的をえた優れた記述で、久しぶりに教師冥利に尽きる熱い気持ちにさせられました。そのようなやりとりをしているうちに、自然に原稿を書くことになりました。一方、講義やその後の院生とのやりとりをここに再現することは、物理的にかないませんので、当日の講演要旨を中心に書かせていただきます。

わたしは芝浦工大の教員として、1975年から卒論や修論の作成をめざす学生たちとともにフィールドワークを行ってきました。平均して1年に3ヶ所ほど、日本の伊勢湾離島漁村から始めて、都市の低層集合住宅地や下町地区、85年以降は韓国や台湾の集落、ギリシア・キクラデス諸島などに足を伸ばし、90年代からはさらに勢いづいて東南アジアや南アジアのみならず、日本の南西諸島や遠くチュニジアにまで出かけました。内外を問わず、同じ集落に時間をおいて出かける追跡調査も数多く行っています。

対立する森林と砂漠の思考形式

地理学の鈴木秀夫さんは、人が生活する自然環境の違いが思考形式を別けるとして、森林の思考と砂漠の思考を対比させています。欧米人の考え方は砂漠的な思考に基づくもので、森のなかで育まれたアジアの人たちの考え方とは対立すると言っています(図1参照)。砂漠化が始まる時期と砂漠的思考の核心である一神教が成立する時期とは重なり、5000年ほど前のことだそうです。砂漠の思考は、砂漠化の勢いを得て拡大し、昨今のグローバリゼーションでさらに拍車がかかったと言えます。

一神教が生まれる以前は、多神教や精霊、祖霊信仰の世界が地球を覆っていたと思われます。そのような信仰世界は今日の東南アジアから南アジアにかけて広くみることができます。多神教の世界というのは、自分と他者の考えかたが違う、あるいは違うかもしれないという認識が前提で成り立つ社会です。文化人類学の前田成文さんは、低平部から島嶼にかけての東南アジアの組織原理として、間柄を重視してものごとを判断する対人主義を特徴としてあげて

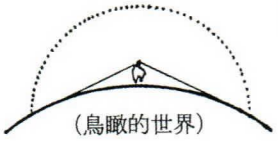
砂漠的思考	森林的思考
見通しのよさ	見通しの悪さ
	
(鳥瞰的世界)	(蟻瞰的世界)
決断/総合家的態度	慎重/専門家的態度
有限世界/直線的世界観	無限世界/円環的世界観
天地創造—終末/自力	万物流転—永遠/他力
ユダヤ教・キリスト教など	多神教(バラモン教・仏教など)

図1　砂漠的思考と森林的思考
(鈴木秀夫「森林の思考・砂漠の思考」NHK ブックスより抽出、作成)

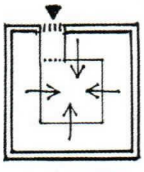
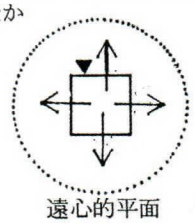
中庭型住居	外庭型住居
砂漠の淵	森のなか
	
求心的平面	遠心的平面
防御的・閉鎖的な空間構成	融和的・開放的な空間構成
住生活は中庭に依存	住生活は近傍に依存
壁で決まる空間秩序	床で決まる空間秩序
自己中心的世界観	外界依存的世界観
強い父系重視の社会	父方と母方が同等の双系社会

図2　中庭型住居と外庭型住居（筆者作成）

います。

正解があるとしてものごとを突きつめる砂漠の思考に対して、森林の思考では、もとより正解などはなく、向き合う二者の相対的な関係が重視されてきました。

森林と砂漠の住まいのかたち

このような思考形式の違いは住居の型の違いを生みだすことになります。自然環境の違いが人間の思考形式や環境への適応形式の違いを生んできたので、住居形式に差異が生ずるのは当然のことといってよいでしょう。見通しのよい砂漠の淵には閉じた求心的な平面が、見通しの悪い森のなかでは、外に開いた遠心的な平面が求められました。前者の背景には、熱風や砂嵐などから身を守りながら限られた物資を求めて争わなければならない厳しい砂漠での生存条件があり、後者の背景には、温暖で暮らしやすい気候と肥沃で争う必要のない恵まれた居住条件があります。こうした住居形式の違いに生活や空間の特徴を加えて対比させたものが図2です。

2つの図式は、互いに住居と庭の位置を入れ替えることで成り立ち、地と図の関係が反転しています。周囲を厚い壁で閉ざし、中庭を生活動線の要にして成り立つ中庭型住居の図式からは、視線も意識も中庭に集中する空間構成のしくみが容易に読みとれます。

一方、まわりを開放して生活を近傍に依存する外庭型住

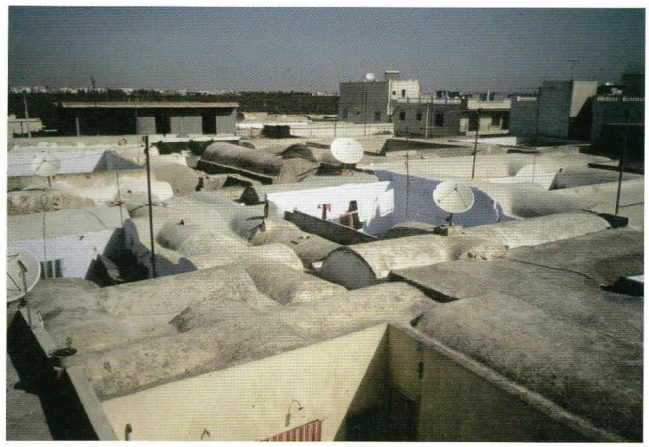
床下での日中の生活—南ラオス・ノンブァヤイ村

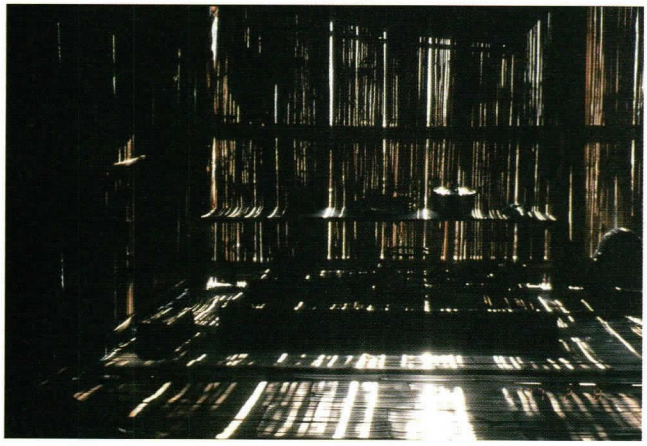
床下での生活—南ラオス・ノンラムチャン村

室内から露台越しにみた天水田の風景

仕切りのない舟形の住居.

屋敷が囲い込まれた北タイの高床式住居


ダーラ・アラビーが残るのトゥルキーの古い街区


囲炉裏端―ラフ族の住まい

日陰を求めて朝のうちに行う中庭での家事作業

居の図式のほうは、概念として理解ができても、具体的な事例と結びつきにくいかもしれません。しかし四周の壁面を割竹でアジロに編みあげた簡便な東南アジアの住まいはその典型です。なかに入ると、隙間から外の光が漏れ入り、ちょうど簾越しの木漏れ日を見ているような状態です。割竹を組んだ壁面は軽い半透明の状態になり、何よりも外部からの視線を遮っています。住居には視覚を迷わすフィルターがかかっていますが、音も匂いも外部空間とひとつながりであり、無防備な点においても外庭型住居としての特徴を備えているのです。

アラブ＝チュニジアの中庭と住まいかた

アラブ＝チュニジアの伝統的な中庭型住居はダーラアラビー (dar' la arabi) と言います。アラブ様式の家という意味です。中庭はウォッスタダール (wust el dar) と呼称されますが、これは「家の中心」という意味です。アラブの中庭は外部空間でありながら、住居のなかで最初に計画される空間であり、一年を通じ生活空間の要として重要な役割を担う場所です。夏の日中は炎暑でとても使えませんが、それでも中庭の床が陰るのを待って床に大量の水を撒き、床を冷やし、室内からテレビやソファなどを持ち出して夜半まで家族のだんらんや接客の拠点として使います。

図3はトゥルキーの中庭をめぐる夏の一日の生活を示しています。最高気温が43℃にもなる午後2時前後の時間

中庭に面する屋根つきの豊かな半屋外空間

帯は、家のなかで静かに午睡を取っています。夜中のうちに冷気を取り込んで壁も空気も冷やしておいた室内は快適です。そして、中庭にはさらに儀礼空間としての象徴的な意味も込められています。たとえば結婚式の人寄せに中庭を使わなければ、花嫁は一族のなかに新しく名を連ねるこ

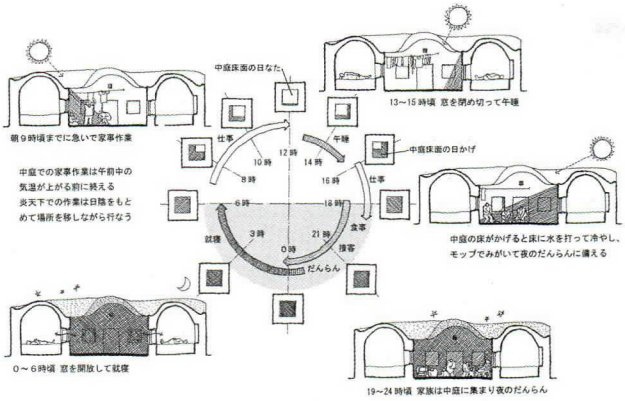


図3　炎暑を避ける中庭空間の使い方

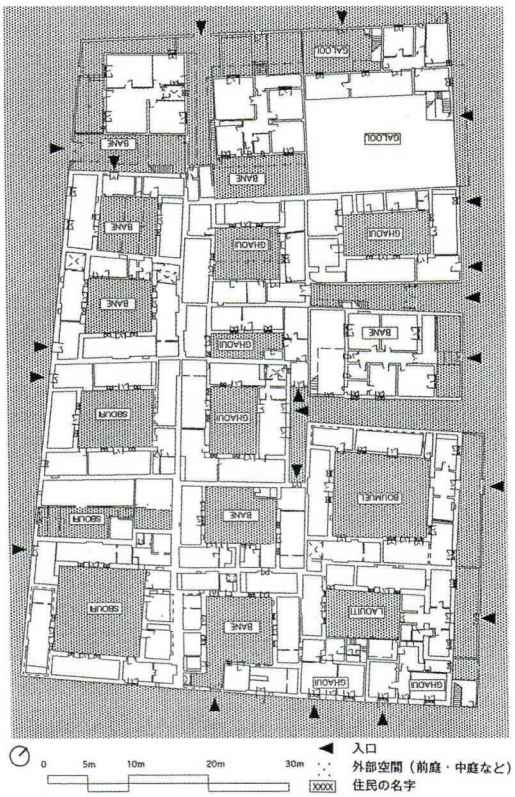


図4　テゥルキーのダーラ・アラビーが集合する街区

とができません。しかも結婚式の直後から、日ごろ世帯主夫婦が拠点としているメッカの方角を向いた家長部屋を空けてもらい、2週間ほど生活しなければなりません。このような中庭をめぐる儀式には、一族への入会式の意味が込められているのです。

ほかの地域の中庭型住居を概観してみると、アラブ＝チュニジアの中庭だけが特異であったとは考えにくいと思います。地域や文化の違いによって中庭の使いかたや中庭に込めた意味は違うでしょうが、中庭型住居の中庭には、それぞれに特有の求心的で象徴的な住まいかたが備わっていたといえます。

ロングハウスが紡ぐ熱帯雨林の桃源郷

東南アジアには徹底して男、女の違いや血筋にこだわらない社会が存在します。マレーシア、サラワク州の内陸部、熱帯雨林の河川沿いに住んで、ボートで移動しながら焼畑農業をいとなむイバンという民族集団です。彼らはロングハウス（長屋）を建て、これを共同生活の拠点にしますが、そこに住まう人たちは独特の規範と慣習にしたがって自由に暮らしています。驚くべきは長屋の建て方です。近年は後方にダポールと呼ぶ大きなプライベートな空間を付属させますが、最近までビレックという主室とルアイという幅の広い共用の通廊だけが切妻屋根の下にすっぽりと納められ、面積のほぼ半分を共用の空間で占めていました。これほど強い共同性を志向した家屋の例はほかにみたことがありません。

1949～51年の2年間、イバンのロングハウスに入ってフィールドワークをおこなった人類学者のJ.D.フリーマンは、ロングハウスの社会構造を次のように説明しています。同居する世帯は従来の家族の概念では捉えられないとして、これをビレック・ファミリーと呼びました。ビレックという言葉は、世帯が寝起きする居室をさすとともに、世帯の集団をもさしています。婚姻後の居住は夫方でも妻方でもどちらでもよいのですが、どちらか一方を選択しなければなりません。結婚によってビレックを離れると相続権を失いますが居住先での相続権が生まれ、離婚や死別を機に元のビレックに戻ればそこでの相続権が復活します。つまり、常に居住するビレックの相続権だけが与えられているのです。

フリーマンの調査によれば、夫方居住と妻方居住の比率

エンチェルミン川からロングハウスへのアプローチ歩路

セリオンのロングハウスの露台

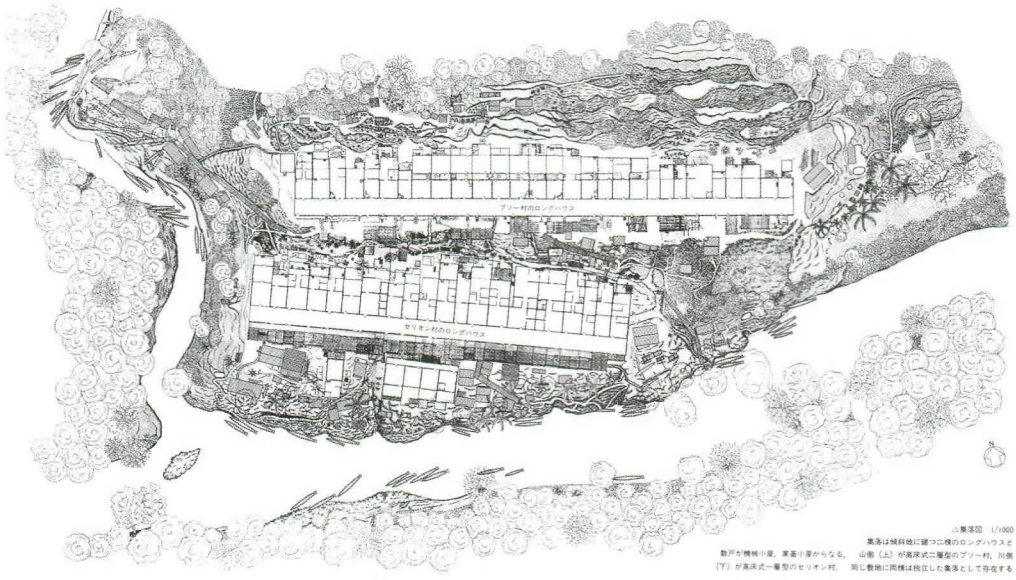
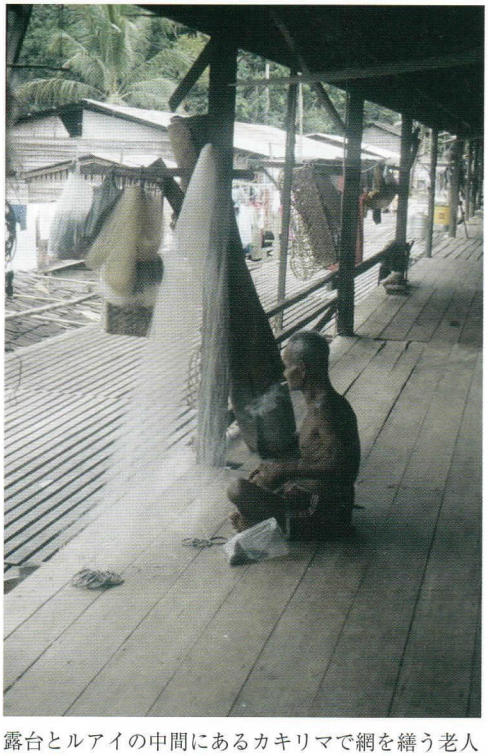


図5　エンチェルミン川に沿って立地するイバンのロングハウス

ガワイ祭りにルアイで行われたミリンの儀礼



露台とルアイの中間にあるカキリマで網を繕う老人

が半々であり、子どもの帰属についても夫方と妻方が半々です。また52人の未亡人のうち、とどまる者と生家に戻る者の比率も半々です。ビレックの継承者の54%が女性であり、46%が男性です。ロングハウスでは、建設後も端部に新婚カップルのビレックが建て増されていきますが、34の分立(独立)事例のうち、男性と女性の系譜をひく分立もまた半々であです。一方、イバンは養子縁組を頻繁に行い、養子に対しても実子と同等の権利と義務を与えています。23ビレックのうち15ビレックで養子縁組が生じています。今日、マレーシア政府の地域開発や施設整備もあって、ロングハウスの民族性は大きく揺らいでいますが、フリーマンが指摘した特異な社会構造を現地にて確認することはいまも可能です。

離婚や再婚は住民の意思と棟長の裁定でおこなわれ、離婚後は一方が生家に戻り、子どもたちも個々の判断で父方と母方のビレックの一方を選びます。数回の結婚と離婚を経験する者も少なくないので、ロングハウスのなかには血縁者が入り乱れて居住することになります。イバンの社会は、父方と母方のいずれに偏ることなく人間関係を構築し、男女がビレックを拠点にしながら開かれた同等性を有することに特徴があります。ロングハウスが変化しても、ビレックだけは聖なる米と聖なる石とともに後継者に受け継がれていきます。

このような共同体は残念ながら急速に失われています。もともと東南アジアには共同性を特化させた豊かな共同体が多様に存在していました。これまで私たちはそれらを単に遅れたものとしか認識していませんでした。しかし、わたしたちは自分の足元をきちんと見つめ直してみる必要があります。個別志向のイデオロギーが行きついた感のある現代都市では、皮肉にも、縁も所縁もない人とのグループハウジングやシェアーハウスのありかたが模索されているのです。

■主な著書

「エーゲ海・キクラデスの光と影—ミコノス・サントリーニの住まいと暮らし」 建築資料研究社　1990年
「コンパクト建築設計資料＜住居＞」 日本建築学会編集・丸善 1991年
「建築設計資料集成＜住居＞」 日本建築学会編集・丸善 2001年
「The Life and House of the Tariang People」 The institute for cultural research LAO PDR　2003年
「北ラオスのアカーその暮らしと住まい」 芝浦工業大学畑研究室・ラオス人民民主共和国文科省文化研究所 2005年
「カドゥの住まいと集落—南ラオス・サラワンのログハウス」 芝浦工業大学畑研究室・ラオス人民民主共和国文科省文化研究所 2005年
「フィールドで考える：畑研究室　住居・集落研究35年の記録」①・② 芝浦工業大学畑研究室通史編集委員会 2009年

桃　源　郷

—東洋のアルカディア(桃源郷)—

「循環する風土をつくる」

1967年　山形県立米沢工業高等学校建築科卒業
1972年　工学院大学建築学科（山下研究室）卒業
1975年　東京芸術大学大学院建築科修士課程修了
略歴
1975～1982　吉村順三設計事務所
1982～現在　二宮設計事務所主宰
日本建築家協会会員
1993年　「やませ蔵美術館」で日本建築学会東北建築賞受賞

にのみや　しょういち
二宮　正一

E-mail:ninomiyasho@tuba.ocn.ne.jp

はじめに

私が仕事と研究のフィールドとしている山形県長井市は、昨年「天地人」のドラマで脚光を浴びた米沢平野の西北、朝日連峰の麓にあります。直江兼継や上杉鷹山の藩政時代、最上川舟運の物流拠点として繁栄しました。鷹山の「なせばなる、なさぬは人のなさぬなりけり」の格言や藩財政再建の精神は今も受け継がれています。この自然豊かな散居集落が広がる地域を明治十七年イギリス人旅行家イザベラ・バードが訪れ、「米沢平野は南に繁栄する米沢の町があり、・・・まったくエデンの園である。(鋤(すき)で耕したというより鉛筆で描いたように）美しい・・・実り豊かに微笑する大地であり、アジアのアルカディア(桃源郷)である。」と「日本奥地紀行」で讃辞しました。

こうした風土で生まれ育った私は、東京で建築設計の修業を終えるとUターンし、「風土を大切にした環境づくり」、昨今の言葉でいえば「循環型社会の構築」を目指して活動してきました。今振り返ると多感な学生時代に教えて頂いた先生方の影響が大きいように思います。

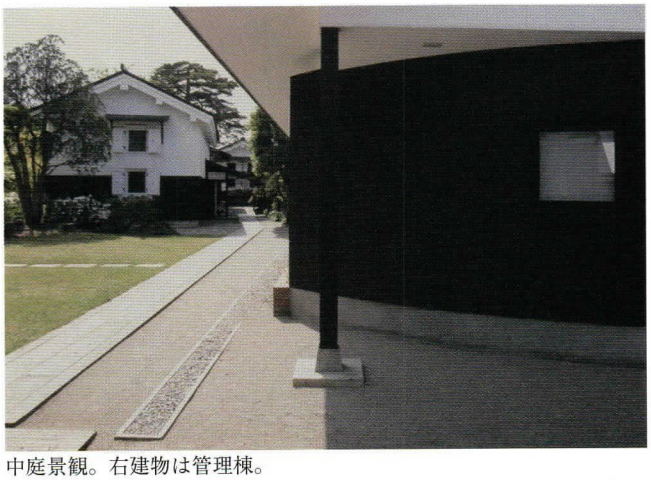
長井市全景。最上川舟運拠点として栄えた。

周辺に広がる散居集落

散居集落を西よりみる

「やませ蔵美術館」—屋敷の循環—

本来の機能を失った屋敷。その屋敷内に眠っている地域資源を堀起こし、再生させることを目指しました。創業三百年の最上川舟運豪商山(やま)清(せい)の屋敷内に残存する蔵のなかには、江戸時代からの古文書、生活物品が当時の状態で保存されていました。何のエネルギーも使わず自然の力で保存する蔵は「循環型建築」の原型です。崩れかかった蔵や屋敷内に散在していた木や石、紬柄など、屋敷全体が美術館として現代に蘇りました。



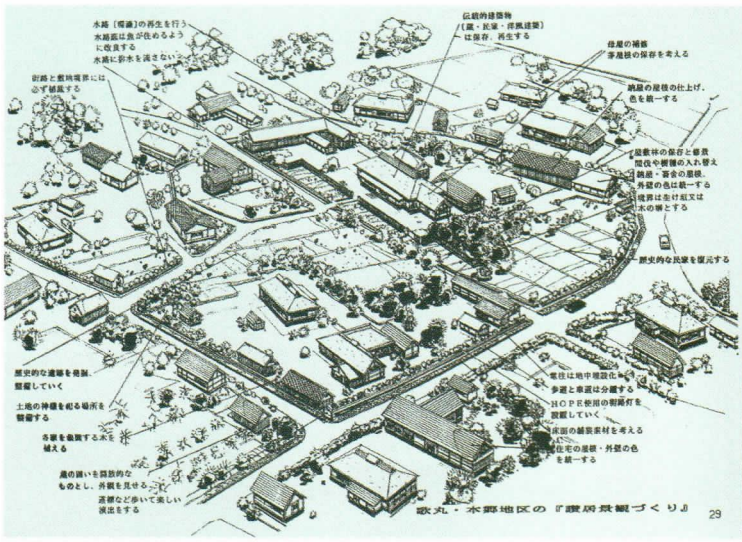
中庭景観。右建物は管理棟。

管理棟応接室。昔の紬柄が床に再現。

蔵にあった生活物品を展示。

管理棟南面。蔵の景観にあわせて設計された。

歌丸環濠集落—集落の循環



環濠集落再生の提案。

明治８年の地籍図と変わらない。

蔵の調査をして偶然出会ったのが、中世から続くと思われる環濠集落です。日本の原風景ともいえる集落景観がそっくり残っていました。そこであまり近代化されていない集落全体を、最先端の現代技術で蘇らせようという提案をしました。歴史的な景観を修景しながら、集落基盤は最先端技術でつくる。それによって伝統的な日本の集落の循環を試みようとしました。

桑島記念館—地域文化の循環

町の大通りの洋館が取り壊されると聞き、友人たちと保存運動を行い、百二十メートル曳き移転、再生しました。これは単に昭和初期・医院建築の貴重な遺構保存というだけではなく、当時建設に携わった人々の思考や技術を受け継ぎ、修復し、現代においても活用し、さらに次代へ継承していく、という「循環」の精神にあるように思います。例えば明治期よりの擬洋風建築の流れに位置付ければ、木骨洗い出し石壁造りで壁の厚さは五センチあり、現代の工法との比較変遷を知ることができ、また幼少の頃この医院で診てもらった人は町の記憶として生涯心に留めます。地域の歴史的建造物の保存は、「地域文化の循環」でもあるように思います。

移転後は毎年イベント開催。

「丸大扇屋」—自然素材の循環

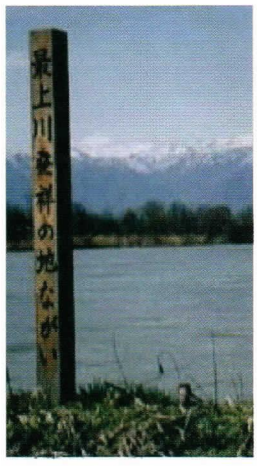
昨今では当たり前のように自然素材の大切さが語られますが、忘れられた「茅」をもう一度見直そうという取り組みを行ってきました。おそらく日本人は一万年以上も茅屋根の下で暮らしていますが、戦後六十年ほどでほぼ消滅しました。西欧では現在も茅葺きの建築が建てられ、茅屋根の家に住むことがひとつのステータスになると言われています。茅(かや)や木、和紙などの自然素材を巧みに活かした日本伝統の建築構法を学び、現代の「循環型の建築」を考えていきたいと思っています。

茅葺屋根の明治商家を再生。

茅葺を考える会議を開催。

自然素材のみでつくった現代の住宅。

水のまちづくりー水の循環

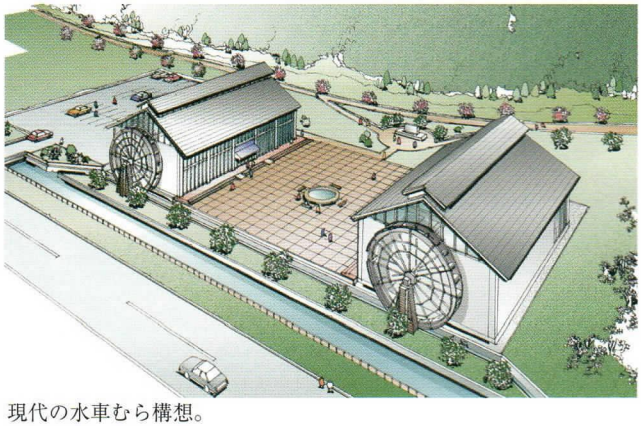


米沢平野は、朝日、飯豊の山々から清流が流れる水の豊かな地域ですが、現代のさまざまな問題があります。そこで、都市下水道の普及していない周辺地区に公共設置型合併浄化槽の敷設を全国に先駆けて実践しました。

また雪のエネルギーで農作物を保存する、「雪室(ゆきむろ)」や水車の再活用など、新しい時代の水の利活用を実践、提案しています。

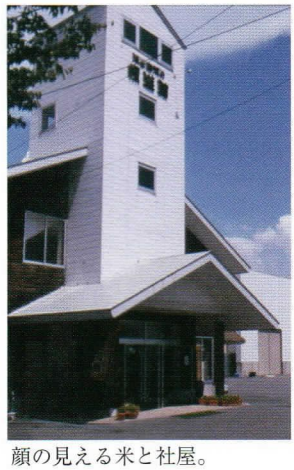
雪室全景。

ロータリーで雪を内部に入れる。



現代の水車むら構想。

米と自然の探遊館—生業(なりわい)の循環



顔の見える米と社屋。

江戸時代から続く米問屋の改築を機に、新しい時代の自然や農業について施主とともに考え「生産者の顔の見える米」を企画、販売しました。今では全国で当たり前のように売られている「生産者の顔の見える米」は平成元年この地域から発信しました。社名も「米と自然の探遊館(たんゆうかん)」に変え、顔が見えることによって生産者は農業に誇りと責任を持ち、消費者は安全と安心を得られるのです。当時、家族経営の会社は五十数人の雇用を生みだすまで成長し、生産者(農家)販売者(米問屋)とも生業(なりわい)は循環されました。

レインボープランー土の循環

これは、私の友人たちが提案、実践している事業で、長井市中心部五千世帯の台所の生ゴミを集め堆肥にして地域の農地に還元、再び有機野菜として台所に還す「地域循環農業」です。生ゴミに不純物が交じらず集まり、市民のモラルの高さが事業を支えています。平成九年より続くこの取り組みは国内外で高い評価を受けています。環境と共に子供たちの教育に貢献しています。農業従事のリーダー層が行政と一体になって市民を引っ張っており、脆弱になった地域の「土」を活き活きとしたものに蘇らせたいという強い思いがあります。「土の循環」も今後重要な課題のひとつです。

生ゴミを集積所に持ち寄る市民。

台所の生ゴミ専用バケツ。

レインボープランの野菜を手にとる子供たち。

おわりに

「循環する風土をつくる」などと大袈裟な題名のもとに、地域での取り組みの一端を紹介させて頂きました。戦後すぐの世代に生まれ、古い日本、新しい日本もわかる最後の世代と割り切りながら、現代の課題である「循環型社会」の実現へ向けて今後もこの地域で活動を続けていきたいと思っています。

特別企画

医療法人社団高邦会 福岡山王病院

Fukuoka Sanno Hospital

渡邊　誠

海側（北側）正面外観

渡邊　誠……わたなべ　まこと

1971年　東京都に生まれる
1990年　工学院大学高等学校　卒業
（現：工学院大学付属高校）
1994年　工学院大学建築学科
【谷口研究室】　卒業
1994年　㈱教育施設研究所　入社
2003年　㈱医療福祉建築機構　入社
2009年　㈱梓設計　入社
Mail:watanabe1148@azusasekkei.co.jp

■はじめに

3年半、福岡に転勤し、このプロジェクトの準備本部の一員として建築責任者となり、開発行為や総合設計、地域住民への説明会や会議への参加など様々な経験をさせてもらいました。設計に対する考え方や設計士として自分のすべき役割などを考えさせられ、新たな人生を歩む決心をさせたプロジェクトの一つを紹介します。

■建築概要■

本病院は23,116㎡の敷地に、グループが培ってきた様々なノウハウを具現化する医療・教育・福祉の三位一体の地域医療の拠点作りを目指し、199床全室個室の福岡山王病院、医療系専門学校の福岡国際医療福祉学院、そして福祉施設の総合ケアセンターももちの3つの機能を擁する計画の一つである。総合設計申請により、敷地の約54%を公開空地として整備し、容積率の割増を行い、建物周辺には塀のない広々とした空間を創り出し、『海』をテーマにしたオブジェを配した街をつくり、福岡市の新たな“ランドマーク”を誕生させた。

街並みにとけこんだ外観（右建物は学校福祉施設）

「撮影：エスエス九州」

最新機能とアメニティーを重視した病院

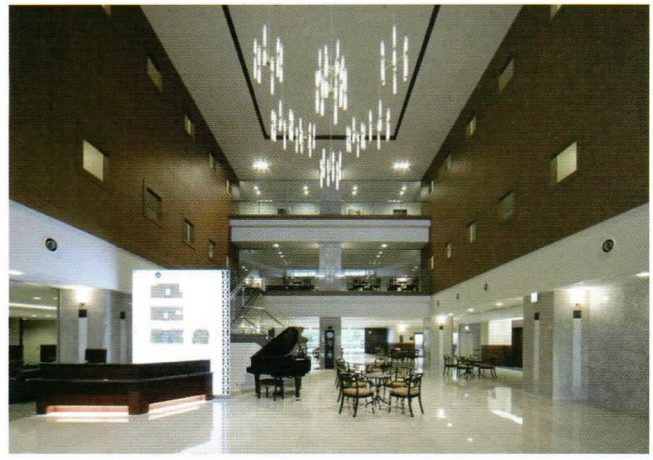
本病院は、「福岡はもちろんアジアを代表する病院を目指し、高度医療機能の充実と患者へのアメニティーの充実」をコンセプトに計画された。外来診察を中心とした低層階部分は、シャンデリアのある3層吹抜けのエントランスホールを中心に、本磨き御影石の床にぬくもりのある木調の腰壁、高級感のあるブラケット照明、随所に絵画を展示し、病院とは思えない雰囲気をかもしだした癒しの空間を演出している。

外来診察部門は、70室の診察室、11室の手術室、最新の放射線機器を備え、高度な医療サービスを提供する病院として、その機能を十分に確保した建築物となっている。

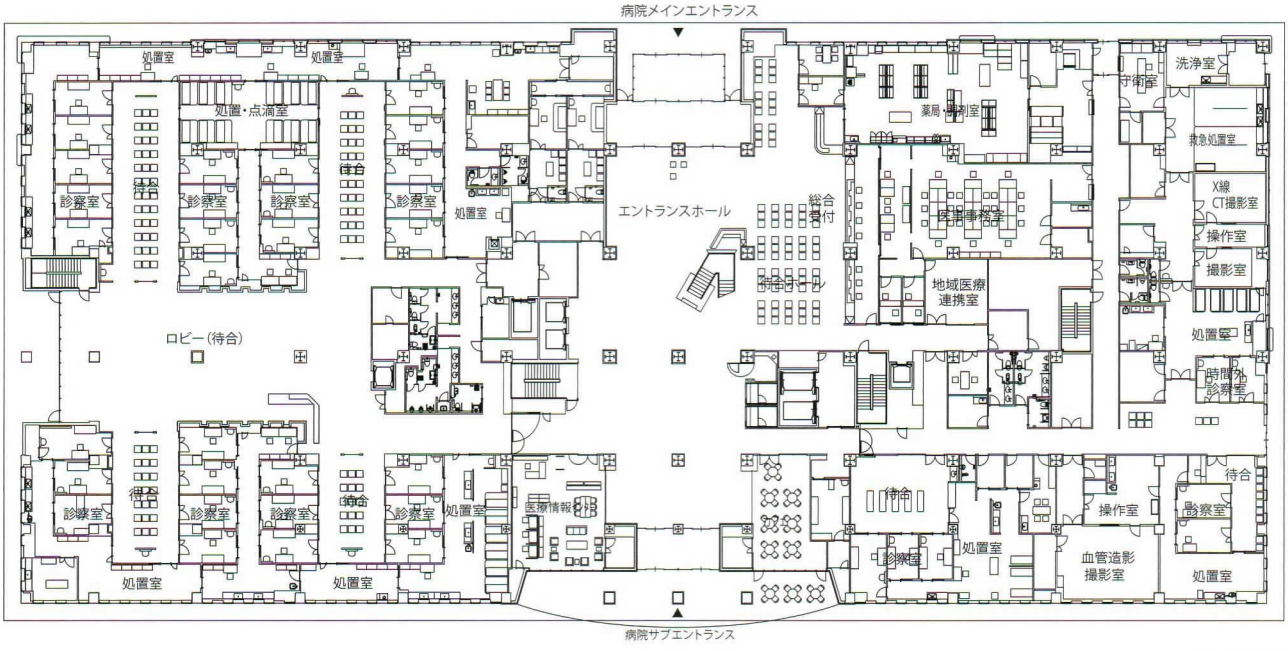
付随施設として5階には、屋内プールやトレーニングルーム、風呂やサウナ、岩盤浴など健康増進施設を擁するとともに、一流シェフの手がけるレストランもあり、海を眺めながら食事ができる。

予防医学である人間ドックは、外来診察部門フロアと完全に分け、1フロアで健診から放射線、内視鏡検査まで全ての検査を受診できるとともに、女性専用エリアを設けるなど、女性への配慮もかかせない計画となっている。

高層棟部分は、199床全室個室の病室40床を基準とした1看護単位の5フロアに分け、看護サポートの行き届いた病棟を計画した。



ピアノの演奏で患者を迎え入れるエントランスホール



1階平面図

ホテルのロビーを思わせる受付会計待合ホール

アジアン家具を配した落ち着きのある外来待合ホール

「撮影：エスエス九州」

最上階にある広々とした特別病室

窓越しに海の望める一般病室

プライバシーの保てる快適な個室

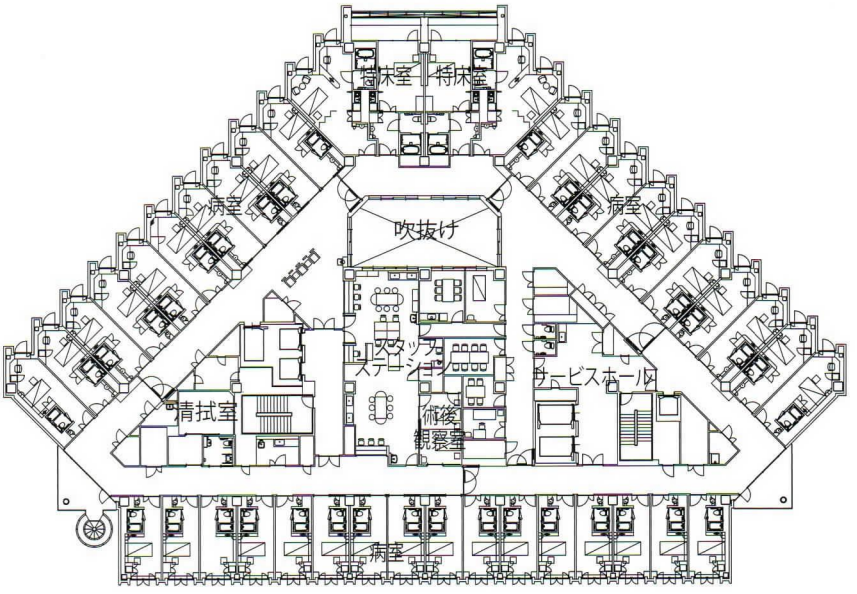
199床全室個室の総合病院は、福岡はもちろん全国でも例は少なく、個室にすることで、患者のプライバシーを保ち、安心した療養環境で治療を受けることができる。

ベッドサイドの酸素や吸引のコネクター部分はヘッドボード家具に収納し、必要時に使用するように造りこみ、常時コネクターが見えるという病室イメージを変えている。照明スイッチもすべて、枕元で切り替えが出来るように配置し快適な療養空間を作った。

また、各病室内には「ナースコーナー」を設け、手洗いとマスクやエプロンといった診療材料を取出せる家具を造作し、廊下に置かれる消毒液などを排除し、これまでの病院のイメージを払拭した。

安全に配慮した工法とPC版デザイン

構造は、ＳＲＣ造一部ＲＣ一部Ｓ造と複合構造を採用するとともに基礎免震構造を採用し、安全面にも考慮するなど災害時でも病院機能が発揮できるようにした。高層部分北面は、タイルとアルミサッシを打ち込んだ等圧工法によるＰＣ版の連なりで構成し、３角病棟を縦に分節した彫りの深い端正なデザインとするとともに、耐久性、メンテナンス性の向上を図った。また、南面はＰＣマリオンの間に等圧工法によるアルミユニットサッシで構成し、リズミカルで都会的な表情を形成した。



病棟平面形状と周辺地域への配慮

上層階の病棟の平面形状は、北面を頂点とした多角形状としている。これは百道地区での風向の年間95％以上が北風のため、北風を壁面で受けない形状とするとともに、北側の海を望める病室を多く確保するためのものである。また、周辺へのビル風による影響も最小限に抑えることを可能とした。

アジアを意識した家具

待合ホールやＥＶホールやレストランなど院内の家具は、“アジアの玄関口としての福岡市”である事を意識し、タイで製作したアジアンテイストの家具を配置した。家具に合わせた内装は、上質な素材感を持ち、ゆったりとした家具により、患者さまに安心とやすらぎを感じていただけることと思われる。

『伝統工芸品』を取入れたデザイン

外壁仕上げは、周辺建物との調和を考慮しアースカラーを中心に石やタイルを選択し、病院と学校・福祉施設の外壁仕上げをすべて同じ材料を使用し、一体感のある計画とした。また『福岡らしさ』の表現の一つとして福岡伝統工芸品である博多織のデザインを取り入れ、外壁部分や内部サインに用い、デザインの統一を図った。

博多織をデザインした外壁タイル

「撮影：エスエス九州」

緑地による環境対策と省エネ

温暖化対策として公開空地に多くの緑地帯を確保し、屋上緑化をするなど室内の輻射熱対策に考慮した。建物内や外部の照明は、小電力による省エネや長寿命による廃棄物削減を特長とするＬＥＤを多く用いる配慮も行った。

海をイメージした公開空地

街にとけ込んだ外構照明計画

世界的に活躍し、国内での建築プロジェクトに多数関わっておられる照明デザイナーの松下美紀氏（松下美紀照明設計事務所）に参画していただき、外構の『海』をイメージした青い夜間照明は、単調になりがちな入院生活を過ごす患者さまの癒しとなり、ももちの街の先進的な雰囲気に馴染んだ計画としてる。

建物と外構を一体としたライトアップ

エコに配慮しオゾン効果を取り入れた空調

ヒートポンプ（ＥＨＰ・ＧＨＰ）を主に系統・ゾーニングの細分化により病院全体の一括停止のない様考慮するとともに将来の更新も簡易に行えるよう計画した。
燃焼によるＣｏ２の削減を考慮し、熱源と水配管の劣化による漏水等の事故を避け全館電気式ＥＨＰマルチ空調を行い、各室の冷暖房の要望や患者の体調状態に応じた空調を行えるよう、冷暖フリーシステムを導入した。下層階部門には免震層を通して給気を行っており、給気温度を自然エネルギーにより緩和するとともに、オゾン発生装置を設置し組み込む事で、殺菌、防臭機能による、省エネとクリーンな空気の供給を行っている。最上階にはコジェネレーション装置導入により排熱回収を行い、給湯バックアップに利用している。

機械室の二極化による効率性

本病院機能やクオリティを保つため、設備の管理･維持･メンテナンスを考慮し、設備や電気の情報を中央監視室に集約することにより、問題などに素早く対応できる計画とした。また、機械室や電気室を地下１階と５階の二極化を行い、メンテナンススペースの確保、各径路の最短化を行い効率化を図った。

停電のない受電方式

地震などの災害に対しても、電力供給が停止せず病院機能の役割を果たせるよう、受電方式には、特別高圧22ｋｖ３回線スポットネットワーク受電を採用し、建物内では低層階、高層階を高圧分岐として供給する計画とした。
また、省エネ機器を採用するとともに、使用電球の種類を少なくし購入しやすい計画とし、ランニングコストの低減やメンテナンスを考慮した。

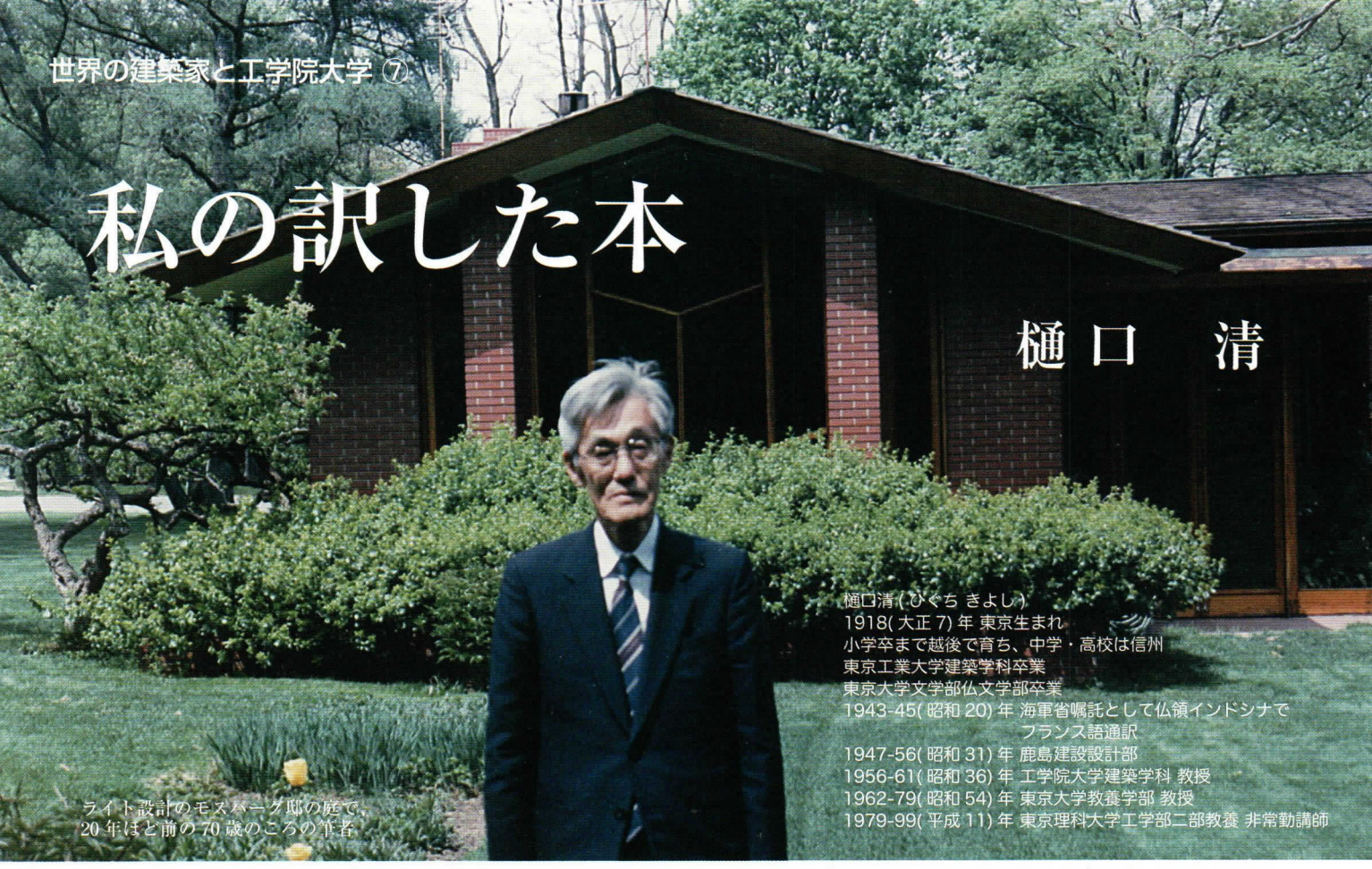
アジア風の内装とアジアン家具を配したレストラン

健康増進施設内の会員制屋内プール

「撮影：エスエス九州」

私の訳した本

樋口　清



樋口清（ひぐち きよし）
1918（大正 7）年 東京生まれ
小学卒まで越後で育ち、中学・高校は信州
東京工業大学建築学科卒業
東京大学文学部仏文学部卒業
1943-45（昭和 20）年 海軍省嘱託として仏領インドシナで
フランス語通訳
1947-56（昭和 31）年 鹿島建設設計部
1956-61（昭和 36）年 工学院大学建築学科 教授
1962-79（昭和 54）年 東京大学教養学部 教授
1979-99（平成 11）年 東京理科大学工学部二部教養 非常勤講師

ライト設計のモスバーグ邸の庭で、
20 年ほど前の 70 歳のころの筆者

背景

戦後 2 年、私は鹿島建設の建築設計部に入った。そこで天野太郎さんと出合い、よく東光堂に外国の建築書や雑誌を見に行った。やがて「国際建築」誌で外国雑誌の記事の翻訳を手伝うこととなり、イームズなどの新しいデザインとともに晩年のグロピウスやライトの仕事も知った。

当時、吉田鉄郎さんが顧問として見えていた。吉田さんは、合理的な中央郵便局の設計者として知られていたが、私たちには、アスプルンドの青空への憧れやストックホルム市庁舎の水辺の建物の配置や高窓から入れる光の美しさなど感性的な面について語られた。

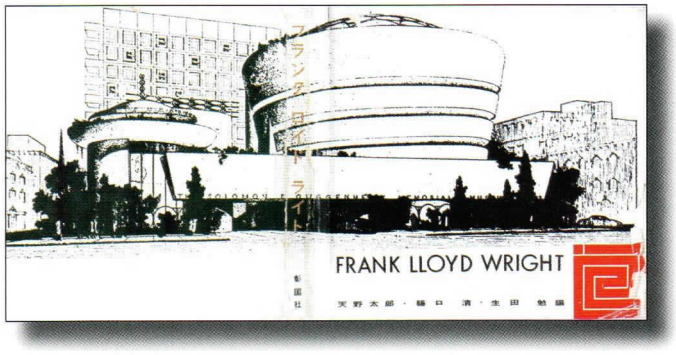
また遠藤新さんの教会堂の設計の図面書きに、天野さんを誘って行ったことがある。遠藤さんは、旧帝国ホテルの建設でライトの助手をされた人で、学校や住宅などの修理の時にも私たちを連れて行かれ、建築の考え方や作り方をそれらの建物に即して熱心に教えられた。

そして天野さんは師と頼む遠藤新さんが亡くなられたので、その師のライトの所に留学し、私は、ルコルビュジェに学ばれた前川国男さんに紹介されて「ユルバニスム」を訳すこととなり、そこで生田勉さんにお会いして、仕事を手伝う機会を得た。

鹿島建設に 10 年ほどいて、天野さんは工学院大学に移り、私もそこに入れてもらうことができた。

教授は堀越さん、下元さん、60 歳を越えて元気に仕事を続けられ、助教授は若く正木さん、十代田さん、助手の難波さん、小川さんには日本女子大生が訪れて華やかであった。校舎は体育室、講堂を中にして、外を教室その他が取り巻く北欧型の堅密なプランで、立面は柱梁の構造に四角い窓をあけただけ合理に徹した造りであったが、その姿になにか風格があった。晩秋から初冬にかけて、夜学生が集まるころ、屋上から淀橋浄水場の向こうに望む丹沢の山並みと夕焼けは荘厳であった。

5 年ほどして天野さんは東京芸術大学に招かれ、私は、東大教養学部に行った。

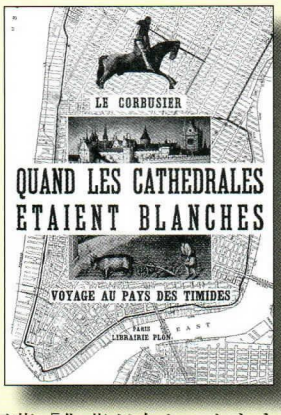


ライト設計、グッケンハイム美術館のスケッチ

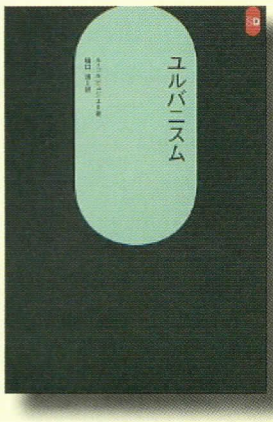
「フランク・ロイド・ライト」生田勉、天野太郎、樋口清編 1954 年

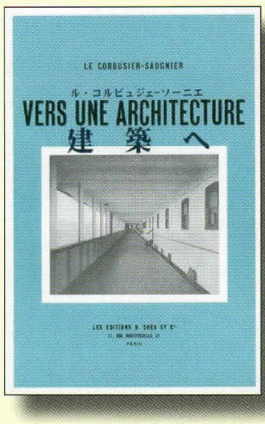
生田さんは早くからル・コルビュジェとミースを紹介されていたが、ルイス・マンフォードに招かれて渡米され、アメリカの学生の間にミースとライトの人気が半々であることを知って驚かれ、「フォーラム」誌 1948 年のライト特集号を持ち帰られ、ライトの作品集をつくることとなった。当時建築界では一般にライトは古いとされていた時代である。

1948 年の特集号と「落水荘」の発表された 1938 年のライト特集号をもとにして、1950 年前後の「フォーラム」誌に発表された新しいものを加え、写真を取り寄せて「作品集」とした。いま見ても、ライト晩年の絶頂期の作品を集めた美しい記録であり、天野さんに書いてもらった文と写真も、ライトの生き方と仕事が知られる貴重な資料である。しかし絶版にされた。



原著「伽藍が白かったとき」





オットー・ワグナー「近代建築」樋口清・佐久間訳 1985年

オットー・ワグナーは、オーギュスト・ペレとともに、近代建築史では古いと言って片付けられているが、現地で見るとどの建物も今日の建築として生きて使われ、時代を越えて美しい。

産業革命の結果、都市に人口が集中し、新しい市民層の合理的、経済的な考え方が19世紀末の建築家に及んで、ワグナーの建築論－目的をつかみ、経済的な構造を求め、得やすい材料を使って、われわれの時代の様式とする－となったのである。本書はその講義をまとめたものであり、駅や集合住宅など仕事の経験が豊かで、都市問題を重視し広場と美術館の設計に情熱を傾けた人の言葉は、初学者が建築を考え始める手引きになると思い、翻訳した。

ル・コルビュジェ「伽藍が白かったとき」生田勉、樋口清訳 1957年

近代都市の過密による生活環境の悪化の問題は、19世紀末のイギリスに始まり、イベニザー・ハワードは田園都市を設けて人口を分散する提案し建設した。

ル・コルビュジェは、20世紀の始め、都市を集中化し、高層化して建物と建物の間を広くあけ、緑地とすることを提案した。1935年にニューヨーク近代技術館に招かれたときは、摩天楼の国ならその提案が実現できることを期待して説いて廻った。本書はそのときのことを記したもので彼らしいアメリカ文明批判となっている。

ライトは当時、摩天楼を、機械と資本制の犠牲にされた人間の墓石であると言い、都市の分散化を提案していたがニューヨーク近代美術館には理解されなかった。

ル・コルビュジェ「ユルバニスム」樋口清訳

1920年代初めに提案された近代都市である。

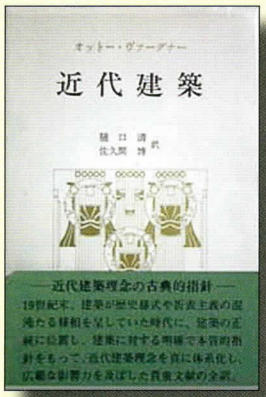
西欧の都市は中世に始まり、道路は人と馬車のもので狭く曲がっていた。19世紀に人口が集中し始め、20世紀には自動車が現れて、過密化し、交通が渋滞した。

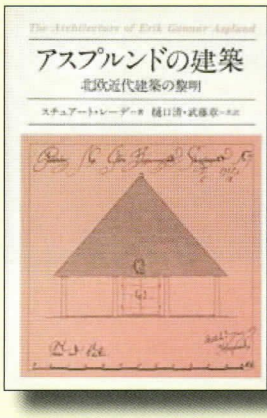
その解決として、ル・コルビュジェは建物を塔状に高く積み上げ、建物と建物の間を広くあけて緑地とし、そこに自動車道路を高架にして縦横真っ直ぐ通し、建物をガラス張りとした「輝く都市」に、失われた緑地と日光と空気を回復する。そして一日を仕事、休息、余暇の8時間ずつとして、通勤時間の短縮によって増した余暇の時間を体育や芸術活動など身心の修練に当てる。スポーツは自分でするものと、水泳プールやテニスコートを住居のそばに設ける。－といった構想を多くの図版によって説いている。

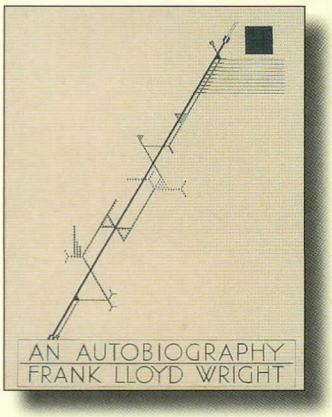
ル・コルビュジェ「建築へ」樋口清訳 2003年

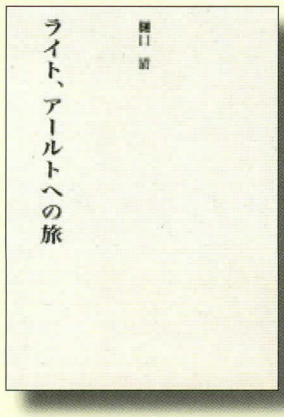
本書は、それまで建築の主題であった様式と装飾を振り捨てるために、まず「原点の幾何学に帰る」ことを求め、「建築とは光のもとの立体の操作である」と規定し、その立面を「規整線」で秩序だてると主張する。つぎに、計算と経済によって美しい形をつくる技術者の製品に目を向けさせ、商船には構造だけの単純な形とすることを、飛行機には浮力と揚力に分けて問題を解決したように機能に分析することを、自動車には選択に選択をして標準化することを学ぶと説く。そして「家は住むための機械」と言う。

しかし、建築は機能と構造を越えたところにあるとして、歴史的な建物によって、建築の美しさを成立させるものについて語る。外観の美しい比例構成を求める点で、ローマのヴィトリヴィウスやルネサンスのアルベルティと同じ精神にあり、本書は20世紀を代表する建築書の一つであろう。

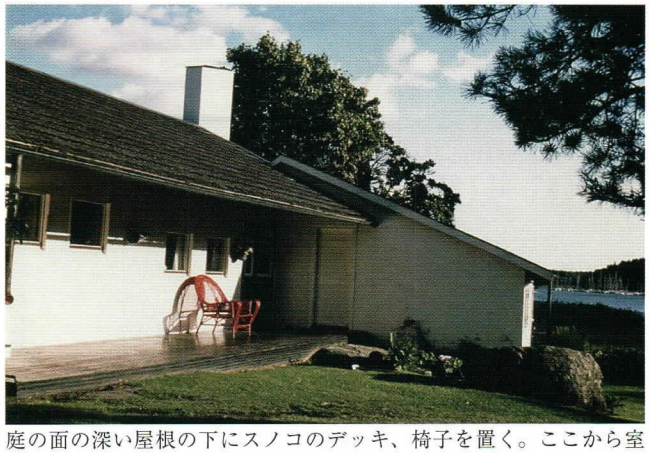








岩山の突端から見下ろす。岩と家が芝の庭を囲う。あたりに家は何も見えない。



庭の面の深い屋根の下にスノコのデッキ、椅子を置く。ここから室内に出入りする。飛び石が見える。

アスプルンドの名作「休日の家」に泊まる

樋口 清（建築家）

戦後、まだ今日のように簡単に外国に行けなかったころ、わずかに手に入る海外の雑誌や本で知るかぎりにおいて、アスプルンドの「休日の家」は、自然の中の生活から発想する北欧らしい近代住宅として、私の好きな家の一つであった。その魅力は、風をよけた軒下の日だまりのテラスを中心に、庭を囲む自由なプラン、大きな口を開けた農家風な暖炉と、海の見える大きな窓を前にしたシャレた形の椅子のある室内などであった。

この家に持ち主のご厚意と建築写真家の吉村行雄さんのお世話で一泊できる旅があるという、願ってもない機会にめぐらせていると、アスプルンド・ファンの友人に「ぜひ」と促され、参加することにした。

この家は、敷地のへり口では、緩い斜面に隠れて見えない。少し登ると、向こうの高みに前庭を抱える正面が見えた。左端の岩山に連なって、緩い斜面に沿って右端の棟を低く落とし、変化ある地形に収まっていた。20世紀初めの新建築を特色づける白い壁が、北欧の低い光を受けて緑の中に美しかった。

近づいて見れば、白い壁は幅の狭い厚板を横に張って白く塗ったもので繊細であり、前庭の土留めの低い石積みに沿って「ヴェランダ」に行く道のそこに埋めた飛び石と、低く下げた棟の壁の裾（すそ）にめぐらせたさまざまな草花の寄せ植えは、ともにドイツの庭造りのあなどに見るもので、親しみを感じさせた。そして前庭の中央に緑陰樹として残された松は、頭を切られて横に枝を張り、椅子や机を置いて、快い屋外の居場所を創り出していた。

地図で見れば、北に低い岩山が突き出し、南に海が狭く入り込んだ敷地であり、アスプルンドが、この岩山と入り海を結んだ線上に道を通して、「森の舞台場」のように、道によって景観と建物を秩序立てたことがわかる。

草道は、前庭の石積みのそばから、右の雑木林に沿ってゆるく下って、左に子供たちの休日の家と船小屋を配し、水上にまっすぐ伸びて長い桟橋となってボートを繋ぎ、5対に10対ほどの緑台で終わる。対岸に白いマストが何本か立ってたコット・ハーバーが望まれ、左に陸地が切れて遠く外海が見える。振り返れば、左の雑木林に対して右に草地が開け、手前に伝統的な赤褐色に塗った船小屋と子供たちの家。その先に少し右に上がって白い家が深緑の低い雑木山を背景として見える。その赤褐色と白の対比は、秋の黄葉や冬の枯れ木と雪の中でも美しかろう。

アスプルンドの建築にはいつも何か工夫があり、この家でも、大きなガラス窓を引き上げて壁の中の戸袋に収め、網戸を引きろず仕組みに感心したが、興味を引いたのは、屋根の木端ぶきや壁の板張りに在来の工法を使い、台所の外の囲いや外便所に農家の家畜よけの木柵や肥料溜（だめ）の便所を写し、ヴェランダの屋根の内側を伝統的な赤褐色に塗ったことなどであり、バルトークやコダーイが民謡を集め、それを翼分として近代音楽を創り出したことを思い出させた。

アスプルンドの後に住んだ人が使ったものであろうが、船小屋の外壁に釣り竿（さお）や大鎌が掛かり、桟橋に網を干す木枠が立ち、また裏庭には、何本かの桜ん坊など果樹の若木が家をつけ、ブルーベリーなどの苗木が堆肥（たいひ）で植えてあった。

朝食は朝日のよく入る台所の窓の前の小さな食卓で交代で済ませたが、外の緑を見ながらの人数で語り合う快い場所であった。室内はどこも低めの尺度に抑えられ、戸棚なども細めのすっきりとまとめられて、簡素で親しみやすく、それぞれの空間に優美でシャレたデザインの椅子が魅力を添えていた。

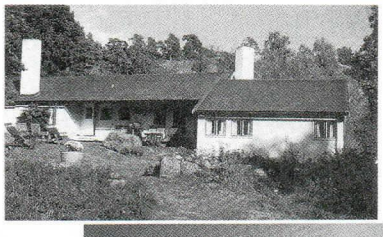
一行は北欧専攻の建築史家やアスプルンド・ファンの建築家を交えて10人ばかり、昼食と夕食は前庭の松の下や水上の緑台に運んで、歓談した。予報では雨であったが晴れたのが幸いして、誰も、朝早くから北欧の遅い夕暮れまで、何をするでもなく屋外にいて、夜は満天の星を眺めに出た。火星が意外に低かった。

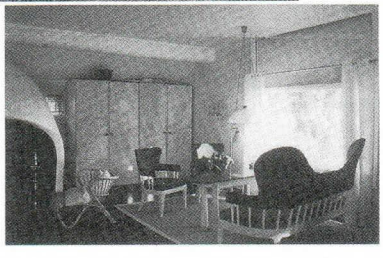
「アスプルンドの休日の家を経験する」旅であったが、その「家」ばかりか、「スウェーデンの休日」をも経験することとなった。

数十年前、スウェーデン語の教本で、同国の都市の住民が、週末には便利な明生活から脱出して「古き良き時代」の自然と原始の生活の中でゆっくり時を過ごし、また忙しい都市生活に戻る、ということを読んだことがある。

前にこの家に二日がかりで撮影に来られた吉村さんの話では、昼は木陰で数時間も読書などをするという。日本人なら退屈しそうな時の過ごし方であったという。

その後わが国でも、機械化、都市化が進んで、大地から離れて住む人が多くなった今日、たまには機械文明を忘れて自然の中で無為に過ごし、星空の夜を取り戻すことが、心の健康のため必要となっているのではなかろうか。





［休日の家］

2003年12月19日（金）

ルイス・マンフォード「機械の神話」樋口清訳 1971年

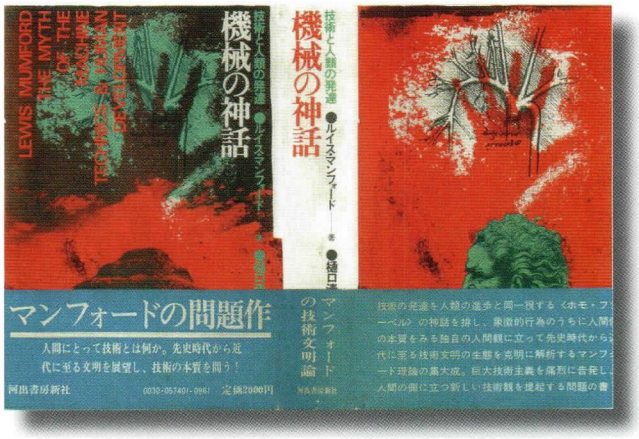
副題に「技術と人類の発展」とあるが、本書は、技術が人間の生命活動を促進した面と阻害した面を歴史的に述べ、現代の工学技術の反生命的な性格が、石器時代から技術に根源的なものとしてあったことを明らかにする。

マンフォードは、産業革命前の機械として古代エジプトがピラミッドを建設するために10万の人間を連動部品として編成した「単技術」の「巨大機械」をあげる。そして現代の宇宙ロケットは恵まれた少数者を天国に送る装置として、まさに動くピラミッドであり、高度に機械化された技術の過剰な生産力を処理して経済体制の均衡を保つ手段である。これらの絶対的な権力体制を維持する「単技術」の「巨大機械」は人間の自由な活動を抑圧すると言う。

それに対して、水車や風車による木製の機械など伝統的な「多技術」の「小機械」を使っていた中世の都市や農村には技術と生活のあいだに統一や調和があり、レオナルド・ダ・ビンチは「多技術」の典型であった、と言う。

そしてマンフォードの特色として、「機械体系」の中に、籠や器などの道具、煉瓦炉や染料桶などの装置、濠や納屋などの施設を含めて、それら静的なものの優越性を指摘し、また、道具を作るホモ・ファーベルより、表象をつくり、言葉を話すホモ・サピエンスが先であったとし、夢や空想の役割、踊りや遊びの意味について考察している。

（「機械の神話」の第2部「権力のペンタゴン」生田勉、木原武一訳は、ルネサンスから現代までを扱い、原子爆弾を論じている。）



庭の反対側の果樹園から見る。子供たちの棟の東南の角に居室があり、窓から遠く海が見える。

浅い海に突き出た桟橋の先のデッキに食べ物や飲み物を運んで歓談、北欧の夏の夜はいつまでも明るい。

アスプルンドの居室、アトリエ、大きな農家の暖炉と海の見える窓、アスプルンド設計の魅力的な長椅子。

スチュアート・レーデ「アスプルンドの建築」樋口清・武藤章訳 1982年

アスプルンドは、近代建築史では「ストックホルム博覧会」で北欧に機能主義を導入したが、その後は新古典様式に戻ったと批判される。しかしその建築は、在来の小さな窓をあけただけの住宅でも不思議な魅力を持っている。

アールトは、アスプルンドの建築は自然と人間、心理と感情から出発すると言ったが、この本は「森の葬儀場」は死を旅立ちと見て駅のように造られ、「ステックホルム博覧会」には広場や袋小路やテラスなど人の触れ合いの場があったと、当時のアメリカのポストモダンの建築観で説明する。モダニズムに古いと見えた建物も、ポストモダンの目には新鮮に映るのであろう。アスプルンドを見直すこの本は、アスプルンド・ファンの私には嬉しい本であった。

フランク・ロイド・ライト「自伝」樋口清訳 1958年

ライトの「自然を学ぶ」という考え方がどのように生まれ、育ったかを知りたいと思い、この本を読み始めた。

ライトの祖父は自由を求めてアメリカに渡り、中西部の開拓者となった。少年ライトは毎夏、叔父の農場に送られ、牛を飼い、土を耕して作物を育て「疲れに疲れを重ねて」働いて、自然とともにあることの意味を悟った。

青年ライトはシカゴに建築の修行に出た。そこに住み、働いて、機械産業が人間を高層建築に積み上げて生活から自然を奪い、個人を組織の部品として、その自由と創造力を失わせることを体験した。

ライトが開拓した住宅は、都市を離れた平原に、空間の自由と自然との結びつきを求めて、壁を減らし、庭に開き、団欒の中心に暖炉を設け、生活を守る屋根を深く低く架けた「平原住宅」で、「土地固有」のものであった。

1910年、40歳を過ぎて私生活が破綻し、20年ほど創作活動の機会を失うが、日本に来て帝国ホテルを建て、自ら住宅・仕事場・建築塾「タリアセン」を中西部とアリゾナの自然の中に建設している。1929年の大不況が好況に転じ、創作活動の機会が訪れ始めて「自伝」の記述は終わる。

読み終わって、本書がアメリカの広大な自然と民主制と近代の機械産業から生まれた人間学の書であることを知る。後に農業と結びつけた都市の分散化の提案となる講演の「消えゆく都市」が本書と同じ年に発表されている。

フランク・ロイド・ライト「遺書（テスタメント）」樋口清訳 2010年

最晩年の著。ライト自身の建築原理の成り立ちと特性を語り、それら原理の表現として建てられた建物と計画案を写真と図面によって示した20世紀を代表する建築書。

ル・コルビュジェが、地中海精神による普遍人として、幾何学的抽象の建築美学を構築したとすれば、ライトは、アメリカの風土と民主制による有機的－幾何学の捨てた土地、生活、材料、構造に基づく－建築を開拓した。

「ライト・アールトへの旅」樋口清訳 1997年

工学院大学と東京理科大学で近代建築史を任されたとき、それぞれの建築家の言葉とプランをプリントして渡し、私の撮ったスライドを映して、建築の考え方やつくり方を説明した。後に雑誌に「建築を楽しく」と題してライトとアールトの建物の写真を載せ、学校のプリントで話した。

本書はそれをまとめたもので、美しく楽しい絵本となった。

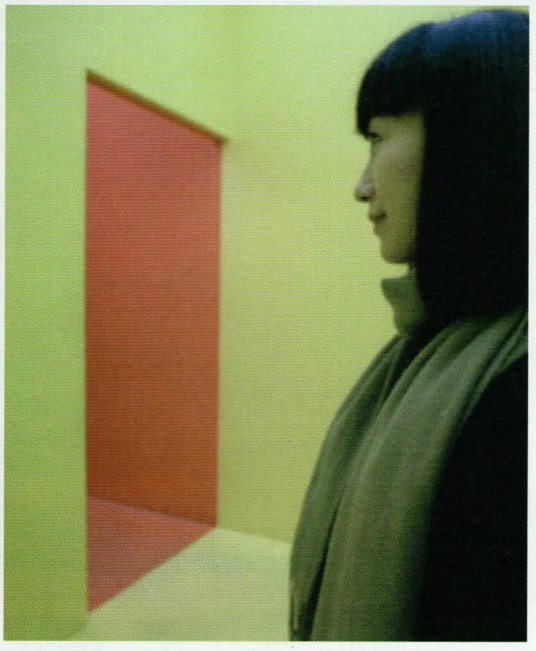
パリの仕事について

――ドミニク・ペロー事務所

大阪富国生命ビル（日本、大阪）外観イメージ（コンペ時、イメージ）

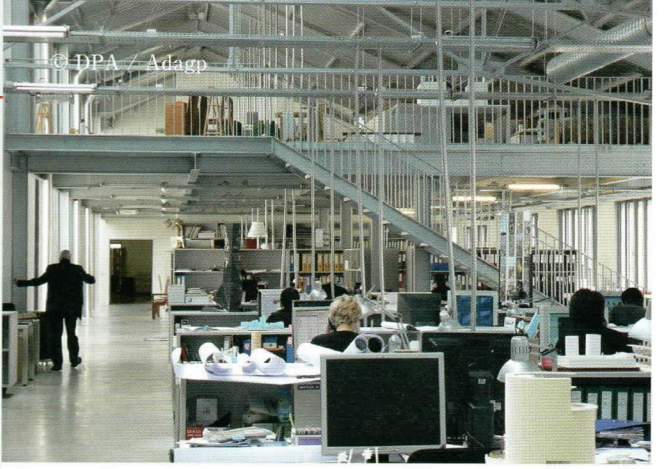
大阪富国生命ビル（日本、大阪）エントランス内観イメージ（コンペ時、イメージ

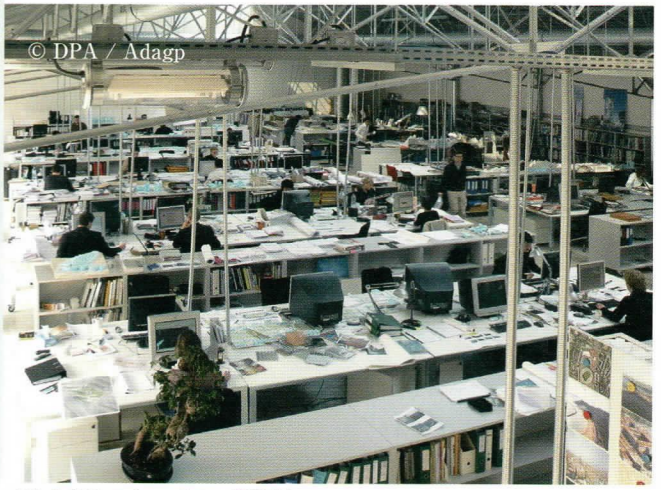
大阪富国生命ビル（日本、大阪）エントランス内観イメージ（コンペ時、イメージ



石塚　菜々子 Nanako Ishizuka

東京都　桐朋女子高等学校卒業
工学院大学工学部建築学科　澤岡研究室
工学院大学大学院建築学専攻　澤岡研究室





パリのドミニク・ペロー事務所

■留学のきっかけ

ドミニク・ペロー事務所に勤務している石塚菜々子です。工学院では澤岡研究室に所属していました。留学から現在の仕事状況までを紹介いたします。

学生時代は澤岡先生、倉田先生に大変お世話になりました。海外で勉強をし、実際に働いていらした、という先生方の体験談に刺激を受け、かすかな夢としての海外を意識するようになりました。倉田先生にチャンスを頂いて参加したアメリカでのワークショップに始まり、澤岡先生より留学への後押しを頂いたことに勇気付けられ、興味を持っていたデンマークのヤン・ゲール先生のもとで勉強するべく、コペンハーゲン、ロイヤルアカデミーの建築学校へ留学しました。

■現地での就職

2年間の研究生活の後、コペンハーゲンの若手建築家が主宰するPLOT（現BIGとJDS architects）に就職しました。当時は所員も少なく、コンペの締め切り前にはボスも一緒に徹夜して作り上げるという、手作り感の多い事務所でした。入所した夏にベネチアビエンナーレで受賞したことにより、注目してくれるメディアも増え、事務所は急激に大きくなりました。徹夜ばかりして、事務所と家の往復の日々でしたが、若い事務所が大きく変化する瞬間に携われたことはとても幸運でした。1年間の勤務を経てドミニク・ペロー事務所の面接を受け、実務も経験したいという想いを伝えました。

■ペロー事務所

ドミニク・ペロー事務所は、60人ほどの様々な国籍のスタッフが働いており、パリ事務所のほかに建設中のプロジェクトのある、スペインやルクセンブルグにも分室があります。現在進行しているプロジェクトはフランス、イタリア、スペイン、日本、韓国などで、各プロジェクトのチーフはその国出身のスタッフが就くことが多いようです。

事務所内の業務はとても細分化されています。基本的に、プロジェクトごとにチームが組まれますが、そのほかに、ディテールを詰めるチーム、環境設計に特化したチーム、イメージを作るチーム、コンペのための書類を製作するチーム、出版講演関係を企画するチームなどに分かれます。ペロー事務所に限らず、さらに細分化された事務所もあるようです。

所長のペローは、全てのプロジェクトをチェックします。誰よりも事務所に長くいて仕事をしており、週末はスタッフが提案した仕事をゆっくり落ち着いて検討することが多いようです。したがって、金曜日になると私たちスタッフは一週間の仕事内容を机の上にずらりと並べて帰宅します。勤め始めて最初の週末に、印象深い出来事がありました。ペロー自身が自分の身長より大きい模型を前にして、ファサードを貼り付け、ああでもないこうでもないと検討している姿を目の当たりにしたのです。その瞬間、一緒にものをつくっている、という実感がわき上がりました。日々仕事をしていくうえで、所長の仕事に対するスタンスは心強く、事務所全体の原動力となっています。3Dイメージでスタディをすることの多くなったヨーロッパの建築界において、模型で検討することは、実際に手に取って見ることのできる方法として堅実な進め方である印象を受けます。

私たちスタッフには『どれだけの知識とスキルを持っているか』『いかに貢献できるか』ということが求められます。個々の能力の違いについて責められることはありませんが、自分が客観的にどのような状況に置かれているのかを正確

大阪富国生命ビル（日本、大阪）外観夜景イメージ

大阪富国生命ビル（日本、大阪）ファサード

に把握していないと、次第にできる範囲のみの仕事量に限られてきてしまい、自身のスキルが上がらない、ということになりかねません。常に努力する必要を感じています。

事務所における私の仕事はたくさんのスタディをし、検討材料を提案することです。コンペに限らず、プロジェクトの様々な段階で、多様な可能性を検討することが求められるからです。先に述べたように、細分化された仕事分担の中で、さほど大きくはありませんがヒエラルキーがあります。私自身の業務内容は純粋にアイディアを出すという意味においては自由で、大変やりがいを感じています。

続いて、今まで担当した主な仕事を紹介します。入所後すぐの仕事が2010年に完成する大阪の富国生命ビルのコンペでした。ペローの最初のコンセプトは、詩的な美しい表現を使っており、言葉を大事にするフランス人らしいと思ったことを覚えています。プロポーザル提案はそれを反映してコンセプチュアルでアーティスティックな作り方なのかと思いましたが、実際には現実的な面を細かくチェックしており、取り組む姿勢がとても真摯だったことに驚きを覚えました。その後、日本の建設会社の方々とのコラボレーションも勉強になりました。最終的に使わなくなってしまいましたが、メインロビーのインテリアの提案をさせてもらったこともあり、思い入れのある作品です。

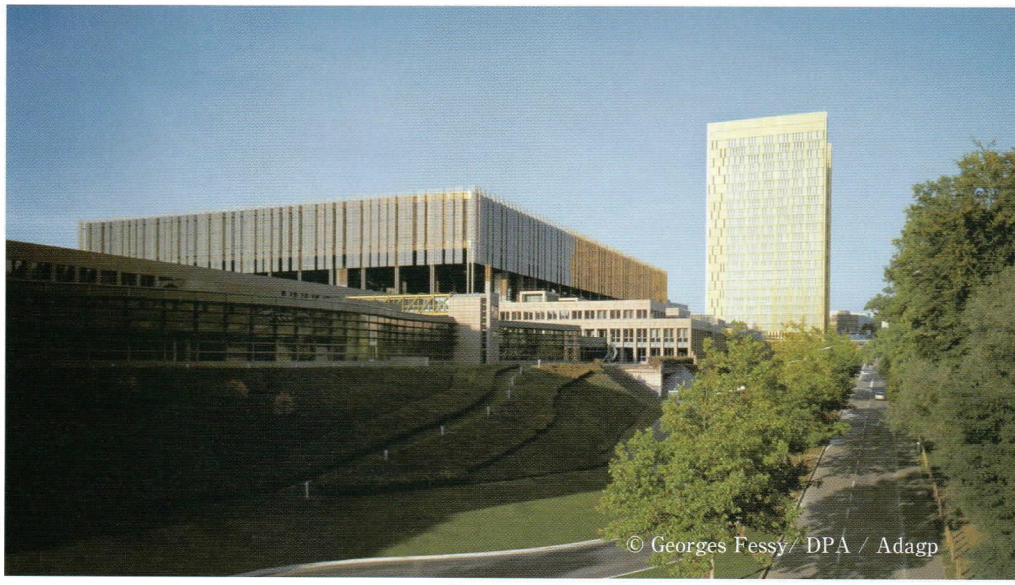
2008年夏から秋にかけてポンピドーセンターにてドミニク・ペロー展を開催しました。完成した模型の美しさはも

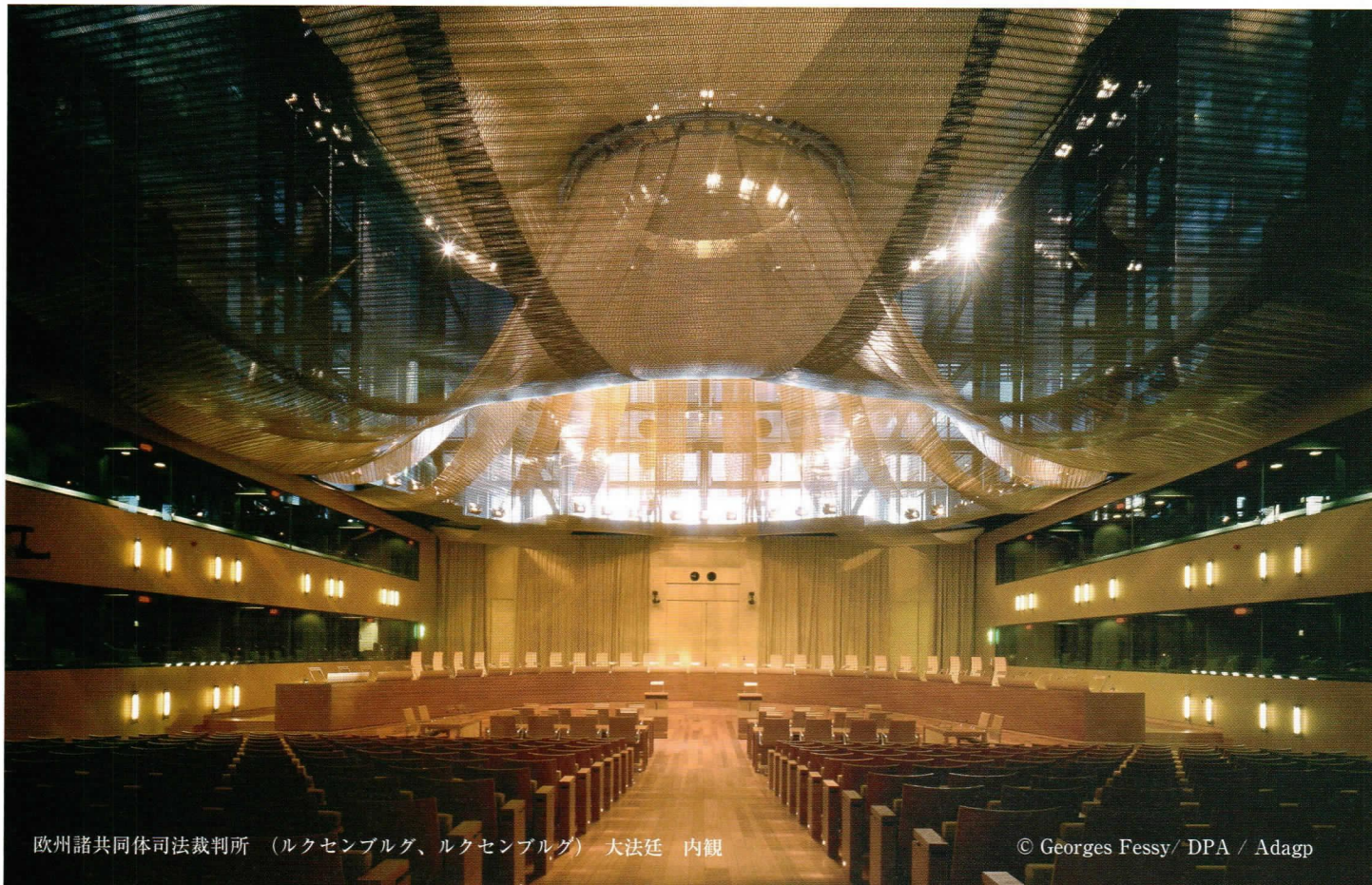
ちろんのこと、コンセプト模型も思考の始まりが感じられ興味深いものでした。最近の作品では、ペロー自ら作ったコンセプト模型もあります。この展覧会は2010年10月から初台オペラシティアートギャラリーにて巡回展をする予定です。

2008年12月にルクセンブルグの欧州諸共同体司法裁判所が10年以上の歳月をかけて竣工し、事務所からのクリスマスプレゼントとして、お披露目会にスタッフ全員が招待されました。地面がほのかに白く見えるほどの凍てつく寒さの中、グレー一色のルクセンブルグの景色から、ふわりと金色に輝くタワーが現れ、その美しさに息をのみました。初期から担当していたアソシエイトの人たちがとてもうれしそうだったのが印象的でした。この作品の中では、階段の照明デザインを一部担当しました。巨大な裁判所の中で、些細な部分ではありますが、私にとって実現した初めての作品なので、愛着があります。

現在は、イタリアのサン・ペッレグリーノ市のスパ施設を担当しています。宝石の原石をごろりと転がしたような形、軽石のようなスポンジ状の肌理のファサード（コンペ時）など、今までのペロー事務所の作品

欧州諸共同体司法裁判所　（ルクセンブルグ、ルクセンブルグ）　外観




欧州諸共同体司法裁判所　（ルクセンブルグ、ルクセンブルグ）　大法廷　内観

© Georges Fessy/ DPA / Adagp

サン・ペッレグリーノ　スパ・ホテル（イタリア、サン・ペッレグリーノ）　外観イメージ

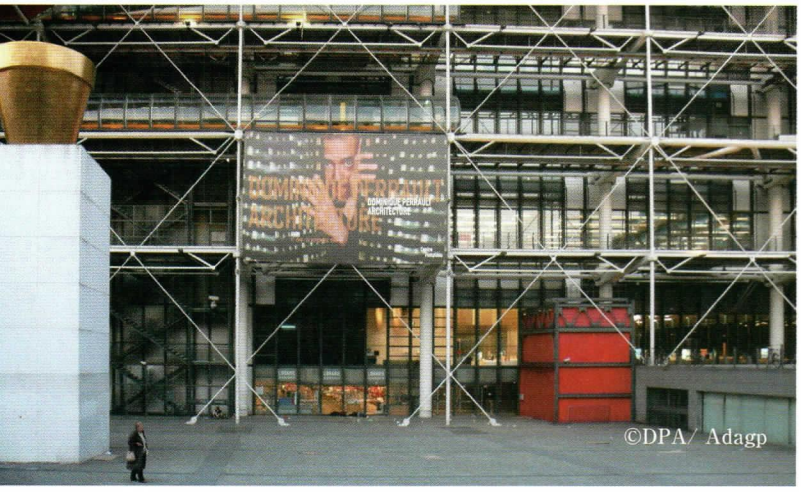
© DPA / Adagp

サン・ペッレグリーノ　スパ・ホテル（イタリア、サン・ペッレグリーノ）　外観夜景イメージ

© DPA / Adagp

グランドシアター（フランス、アルビ）外観夜景イメージ

ポンピドゥ - センター展覧会



とは雰囲気が違うため、新しい方向性の作品になりそうです。一般的にヨーロッパの建築はコンペに勝っても、建てるまでにとても時間がかかります。予測できない事柄が発生することもあり、竣工しお披露目できるということが、いかに貴重であるか、と実感しています。

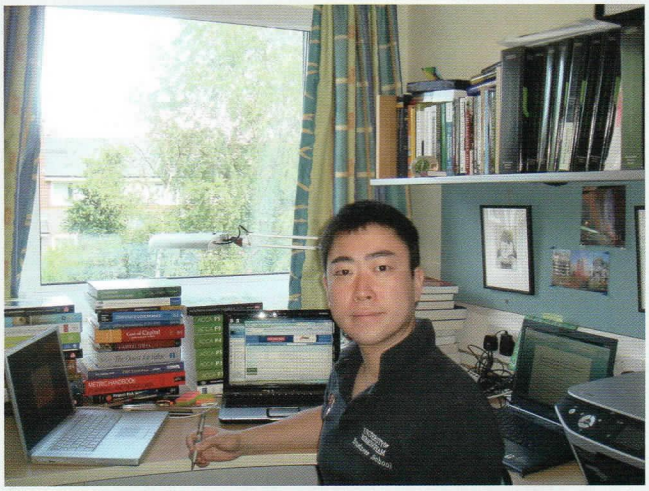
また最近ではフランスの劇場のコンペに勝ち、そのチームの一員として仕事ができ有意義でした。

2010年の予定として、ベネチアビエンナーレにおけるフランスパビリオンのキュレーターをペローが務めることとなりました。今から楽しみにしています。

入所当時のコミュニケーションツールは英語のみで、フランス語ができなかったため苦労しましたが、ひたすら自分のできることを駆使して、模型を作り、ドローイングを用意し、と考えを伝える努力をしてきました。現在では、フランス語のみの会話でもついていくことができるようになり、ここからがスタート地点だと思っています。

ヨーロッパの人たちは独立心が強く、スタッフの入れ替わりも激しいと感じます。仲良くしていたイタリア人女性の同僚が、最近自分で仕事を始めました。彼女とは同時期に入所し、同じ年でもあることから、とてもいい刺激になっています。今後も真摯な気持ちを忘れずに仕事に向き合い、一歩ずつ前進できるよう努力していきたいです。

建築から経営学へ そして、アジアへ



バーミンガム大学の学生寮の自室にて

佐藤 弘規 Hiroki Sato

1992年　埼玉県私立自由の森学園高等学校卒業
1999年　工学院大学建築学科都市建築デザインコース卒業
2001年　工学院大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了
2002年　工学院大学大学院研究生修了　谷口研究室
2002年　株式会社石本建築事務所入社
2009年　英国バーミンガム大学経営大学院ＭＢＡ修了
現在　㈱石本建築事務所本社プロジェクト推進室 総合計画 主任
E-mail: satoh@ishimoto.co.jp

■ＭＢＡとは？

校友の皆様は、MBAという学位をご存知でしょうか？MBAはMaster of Business Administrationの略で、経営学修士という学位になります。建築系学科にはあまり馴染みのない学位と思います。私は、2007年8月から2009年1月末迄の18ヶ月間、石本建築事務所を休職させていただき、英国バーミンガム大学経営大学院にMBA留学致しました。専攻は経営学修士国際経営専攻（MBA International Business）となります。MBAは全世界的に経営のジェネラリストを養成する社会人用の学位として認知されており、世界中の大学にコースがあります。ほとんどのコースが、職務経験3～5年以上で、各コースの出身国の割合もある程度決められており、30カ国程度の25～40＋歳の学生が集まります。

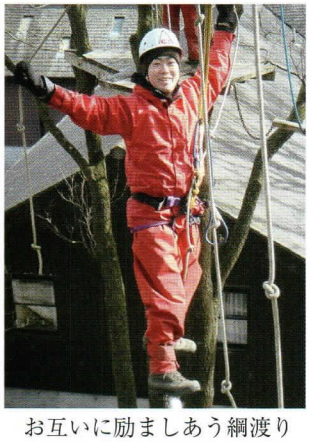
ビジネススクールのサマーボールにて同級生と

本来のMBAは、企業において、徒弟制度のごとく入社から各部署を経験し、企業の用意したオン・ザ・ジョブ・トレーニング（OJT）の元、徐々にステップアップして、もしかしたらいずれは経営チームの一員や重役となるという日本の伝統的な会社組織の考え方ではなく、米国の経営学教育の影響により、各部署の基本知識を財務・会計・人事・マーケティング・生産管理・経営戦略といった講義で学習するとともに、それぞれOJTのかわりとなるケーススタディとディベートで仮体験を重ね、経営の知識を体系化して習得するという修士課程です。

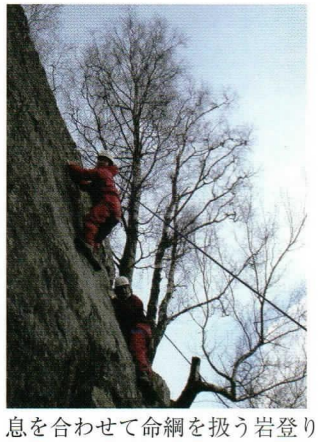
現在のMBAは、本来のジェネラリスト養成からマーケティング、ファイナンス、医療、スポーツマネジメントといった分野に特化したコースもつくられてきておりますが、私が専攻したMBA International Businessは国際経営に重点を置いたジェネラリストコースでした。これは、外資系企業に代表される多国籍企業の経営ばかりを意味するのではなく、海外のプロジェクトをもつ日本企業の経営にもあてはまります。企業が国際進出を果たした瞬間に、その企業は国際経営を考える必要に迫られます。例えば海外業務の報酬を海外の通貨で受領したとたんに為替差益（差損）のリスクが発生します。受領形態によってはその報酬をいつ円に変換するのか、報酬分を銀行から前借りして社内で運用したほうがいいかなど、財務運用を考えなくてはなりません。同様に、海外出張者を抱えている場合は国際人事の概念が必要になってきます。海外から戻った社員をどういった業務、ポジションにつかせることが企業の価値を高める

湖水地方でのチームビルディングセミナー

Oxford のホテルでのビジネスシミュレーションセミナー



お互いに励ましあう綱渡り



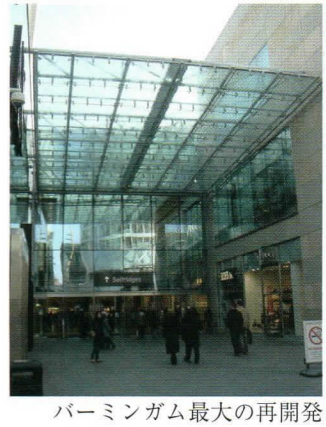
息を合わせて命綱を扱う岩登り

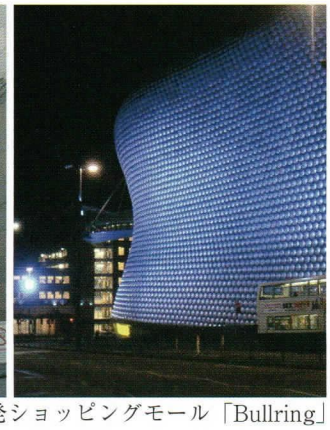
ドラム缶ボートを議論しながらその場で設計し組立て移動

ためにはいいのかという問題も扱わなくてはなりません。Finance（財務）、Accounting（会計）、Human Resource Management（人事管理）、Marketing（マーケティング）の4科目以外は、Strategic Analysis of Business（企業戦略分析）、Operations Management（生産管理）、Project Management（プロジェクトマネジメント）、Innovation Management（イノベーションマネジメント）という4科目が国際経営的視点を含んで講義されるのに加え、より国際経営に重点をおいたInternational Human Resource Management（国際人事管理）、International Business Finance（国際経営財務）の2科目の計10科目をそれぞれ毎週3時間の講義に加え、チームによるケーススタディのディベートをし続けるという課程を1年間で履修しました。その他、プレゼンテーション手法、コンサルティング手法といったセミナーに加え、3日間ホテルに缶詰になってチーム毎に競い合うビジネスシミュレーションや、湖水地方でチーム毎に綱渡り、トレッキング、ロッククライミングやドラム缶ボート作りなどを行うチームビルディング手法のセミナーも必修科目として含まれており、経営者の立場で問題を考え、解決手法を考え、よりよい解決策を得るためにチームで議論し合い、相手に理解されやすいように説明する能力を訓練してきました。

MBA Projectといわれる修士論文では、自ら自由に課題を決められるのですが、私は某企業の本社の移転考察という課題を、担当教授と協議し、「Maximising Potential to Create Value by the Relocation of a Company's Head Office（本社移転による企業価値創出の可能性の増大）」という論文にまとめました。これは、MBAを履修したことにより学んだすべての知識を利用して、ある企業に関する業界分析から企業分析を含め、本社移転の可能性を一考察する内容となっています。

バーミンガムの台所「Indoor Market」





バーミンガム最大の再開発ショッピングモール「Bullring」

再開発モール「Bullring」の内部

高級ショッピングモールと BBC Birmingham の入る「The Mailbox」

バーミンガム（Birmingham）はロンドンに次ぐイギリス第２の都市です。広さは 267.77 km²、人口は約 1,016,800 人（2005 年推定）、古くは産業革命の中心地として有名でしたが、現在は多国籍都市で白人が約３分の２を占める一方、British Asian といわれる、インド、パキスタン、スリランカ、バングラディッシュ出身者が約２割を占め、アフリカ系が 6%、中国系が１％ちょっとで、日本人ともなると学生以外ほとんど見たことがありません。
バーミンガムの中心駅である New Street 駅周辺は 110,000㎡の再開発がなされ、いまも継続中です。Debenhams と Selfridges という２つのデパートを双翼に配置し、140 のショップ、カフェ、レストランを集積した「Bullring Birmingham」はこの地域の大型再開発ショッピングモールとして有名で、週末には周辺の都市からの来場者であふれかえります。Selfridges は Future Systems の設計です。また、駅側から運河に伸びる高級ショッピングモールの「The Mailbox」は、BBC Birmingham もあり朝のニュースを見ると後部の運河を望む風景が映し出されますが、その運河沿いにはカフェ、レストランや Pub が集まり、独特の雰囲気です。駅の裏側には中華街があり、「Birmingham Hippodrome Theatre」もその中にあり、「Birmingham Town Hall」とあわせてこの地域の文化発信の拠点ともいえます。しかしながら、第２の都市としては、日本人には少々スケールが小さく感じます。

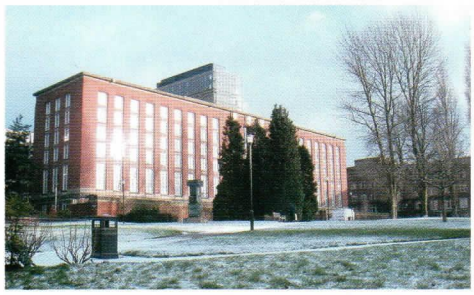
文化発信の拠点「Hippodrome Theatre」

■なぜＭＢＡだったか？

そもそも今回の留学は、以前携わったある多国籍企業の本社移転業務で、インテリア設計のプロジェクトマネジメントの業務に携わったことが契機となっています。日本にある子会社約 20 社の CEO、CFO、また各部門のマネージャーの方々とお会いし、自分にはオフィスのインテリア設計だけでなく、もう少し踏み込んだ企業の方向性にも関わるコンサルタントの立場としての意見が求められていると感じました。たとえば、各部署のオフィスにおける拡張性は、その企業の将来性を理解し、どの部署にフレキシビリティを持たせるかといったアドバイスを的確にしなくてはなりません。それは、ただデザインを重視して見かけの良い設計では認められない範疇となります。顧客と同じ言語を話し、顧客の悩みをより的確に理解し、コンサルタントとして信頼されるためには、企業経営に関する知識を学ぶ必要があるのではないかと思いました。

私は元々アルバイトから石本に入り、契約社員を経て正社員になっています。就職の厳しい時代だったため、どうにか認めてもらえるように頑張りました。契約社員にしていただいたときも、英語が得意でしたので、海外コンペのプロジェクトに携わることができました。正社員になって、庁舎、商業施設、寺院等の設計に携わり、PFI や JV 業務を経験したり、色々経験しました。そして、オフィス移転のプロジェクトマネジメントという建築事務所の石本としてはメインではない分野の担当になり、このプロジェクト以降、オフィス移転に関して顧客の窓口になりました。しかし、様々な外資系企業の顧客とお会いするにつれ、より自分の能力を高め、より顧客の視点に立った信頼されるコンサルタントになりたいと思い、英国では最短１年間で取得ができるＭＢＡなら、いま自分に必要な経営に関する知識を短期間で網羅できると考え、挑戦することにしました。懐の深い会社で、給料のかわりに時間を与えると言って頂き、取締役

The Business School



大学の中央図書館である Main Library

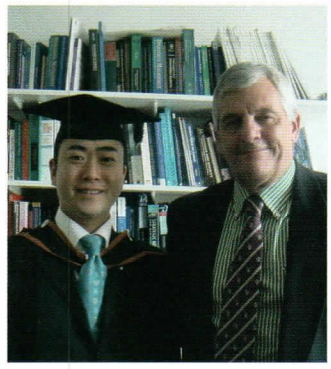
バーミンガム大学キャンパス

会で長期の休職が承認されました。

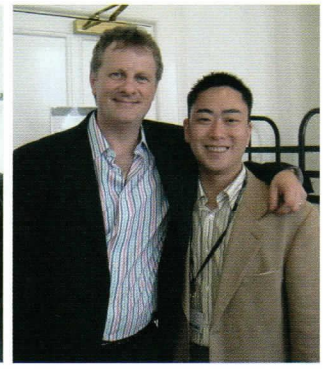
■MBAを取得して

英国から帰国し最初の配属先はコンストラクションマネジメント室でした。私の渡英後、オフィス移転業務は縮小し、リーマンショックの影響もあって、オフィスを拡大する外資系企業もありませんでしたので、新しいマーケットの開拓が必要でした。元々プロジェクトマネジメント業務に従事していたのと、MBAでもプロジェクトマネジメントをより重視して学び、Personal Tutor（個人指導教授）の Prof. Jim Slater は企業戦略と生産管理を、Dissertation Tutor（論文指導教授）の Dr Paul Forrester は生産管理とプロジェクトマネジメントの教鞭をとっている教授陣だったので、たしかに CM 関連業務でも知識が生かせると思いましたが、できれば国内のプロジェクトよりも、海外で、とりわけアジアでのプロジェクトに関わりたいと思っていました。そこで、本年４月から総合計画という部署に異動し、海外プロジェクトをメインにしたプロジェクトをつくりだす業務に従事しています。アジアで様々な経営者の方々と会い、石本で設計させていただけるプロジェクトをつくりだすのが仕事です。平たく言うと海外営業担当です。海外で学ぶということは、世界でのネットワーク構築にも役立つことです。志の高い約 90 名の同級生は 30 カ国以上の国から集まっており、いずれはどこかの企業を代表するリーダーとなる可能性をもっております。このネットワークも何れは役に立つのではないかと思います。

１年半の休職期間を、これほど勉強したことはいまだかつてないといえるほど、ひたすら走りぬき、初志が貫徹できましたので、今後は留学で得た知識と語学力とネットワークを生かして、拡大するアジアのマーケットで石本の一員として業務に励み、いずれは石本を代表するリーダーの一人となれるようにがんばりたいと考えております。チャンスをくれた石本と、推薦状を書いてくださった谷口先生に感謝しています。



Prof. Jim Slater と



Dr Paul Forrester と

MBA の修了証書を受領して

2009年財団法人交流協会
若手研究者交流事業　研究交流会　成果報告書

台湾の都市計画区域内農業地域と日本の生産緑地地区の環境・防災的視点からの比較研究

政治大学の教授と大学院生 前列右から2人目、工学院大学 東　正則 教授

政治大学正門生

政治大学女子寮生

■交流参加の経緯

財団法人交流協会の行っている技術交流事業のひとつに、「若手研究者交流事業」がある。これは、日台双方の研究開発の推進と人材の養成を目的とした事業で、日台双方から研究者の受入・派遣を行うものである。今回私たちは、環境・防災分野としてこの事業のグループ短期プログラム (Summer Visiting Program) に応募し、採用された。

今回は、6泊7日の日程で訪台した。主要な日程は以下である。

9月28日（月）　中国地政研究所、行政院経済建設委員会訪問
9月29日（火）　台北市政府訪問、農業区の視察
9月30日（水）　国立政治大学で研究交流会、農業区の視察
10月1日（木）　南投県埔里鎮視察（921地震の被災跡地）
10月2日（金）　台北市内視察

■交流事業の目的

日本では都市計画の中で農地の存在を原則として認められていない。生産緑地は、残り少ない都市農地を計画的に保全するために定められている。一

佐々木　慶太　　小松　春奈　　宮﨑　貴徳
台湾へ嫁いだ日本人女性（中左）と一緒に

小松　春奈
Haruna　Komatsu
1985年　横浜生まれ
埼玉県立本庄高等学校
2004年卒業
工学院大学大学院工学研究科
建築学専攻　東研究室在籍
2010年3月終了見込

佐々木　慶太
Keita　Sasaki
1985年　東京生まれ
東京都立小岩高等学校
2004年卒業
工学院大学大学院工学研究科
建築学専攻　東研究室在籍
2010年3月終了見込

宮﨑　貴徳
Takanori　Miyazaki
1982年　広島生まれ
神戸学院大学人文学部人間
文化学科　2005年卒業
工学院大学大学院工学研究科
建築学専攻　東研究室在籍
2010年3月終了見込

方台湾では、都市計画区域の用途地域として農業区を設けている。

現在日本では環境問題や防災の視点から、都市農地の持つ多面的機能が評価されている。本交流は、台湾の都市農地を視察し現地の専門家や学生と討論することで、農地を取り入れた都市計画論への転換を図ることが論点である。

■農業区の視察

中国地政研究所、行政院経済建設委員会、台北市政府地政所を訪問し現状についての説明を受け、農業区の視察をすることで、台湾の都市計画における農業の位置付けを確認することができた。

農業区は、日本植民地時代から既存市街地の周辺部にグリーンベルト的に設定されており、多くは商業、工業、住宅地として不適切な場所、県境付近にあり、洪水時の緩衝、避難用地、都市の発展予備地として位置付けられている。

台北市の都市農地の現状としては、都市開発の影響を受け、違法工場等の建設、残土建設資材置場、重機置き場となっているものもある。

台北市の農業は、農家の高齢化等により活性化が困難になりつつあり、農業振興の方向として、レジャー農業の発展、安全な農産物の販売の促進等の方向が示されている。

その中で、白石湖地区のレジャー農園は、生態系の保護と有機栽培の計画に3年を費やし、ビオトープや花畑を用いたランドスケープを形成し、現在も整備中であった。週末には多くの観光客が足を運ぶという。

彰化県田尾郷打簾社区では、地区全体が大規模な観光農園となっている。各農家が農園内にレストラン等を併設しており、休日には多くの人が訪れ花を買っていく。生産と観光の両面から経営を成立させており、その経営システムは見習うべき点が数多く見られる。

このように台湾では、都市住民のレジャー農園への関心が高い。このような文化が根付いていることが、レジャー農園という経営モデルを確立させていると感じられた。同時に、シンガポールや香港等の農業風景のない周辺の国から観光客が訪れるという点も強みである。

そして、まちづくりを行政と農家が一体となり、地域計画から地域活性化のためのイベントまで開催し、ハードとソフトの両面から継続的な地域活性化を促しているということが素晴らしかった。(宮崎)

■国立政治大学における研究交流

国立政治大学は台北市文山区に位置する大学である。

台北市政府地政所にて説明を受けている様子

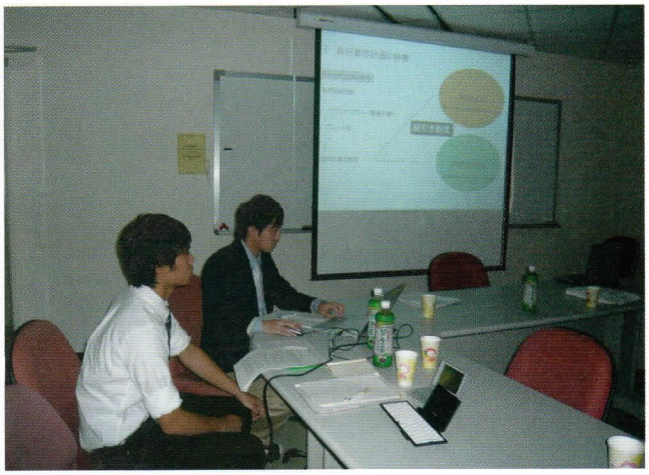
都市開発の影響を受けている農地

白石湖地区　レジャー農園内のビオトープ

彰化県田尾郷打簾社区　農園内のレストラン内部

政治大学　校舎

政治大学教授より紹介をされている様子


プレゼンテーションの様子

政治大学大学院生

1927年の開校以来、中国の上級公務員養成の役割を担ってきている。現在は9学部、33学科、14研究所を備え、幼稚園から博士課程までを擁する台湾を代表する国立大学である。

商店や飲食店が並ぶ表通りから正門をくぐると並木道が続いており、その脇には歴史ある建物や色鮮やかな建物が建っている。広大なキャンパスは山一つ抱えるほどの大きさがあり周囲は緑に覆われ、近くには茶園も点在していた。

今回の研究交流会には、国立政治大学の教授数名と中国地政研究所長の林英彦氏、大学院生が30名ほど出席した。私たちが日本の都市や農業の現状と課題を述べた後に、台湾の大学院生との意見交換を行った。以下は3名の報告の概要である。

宮崎は日本の都市計画区域における農業の位置付けとして、現行都市計画法の特徴や都市農地を取り巻く環境について説明し、農地の多面的機能を発揮する都市計画の必要性を述べた。

佐々木は都市におけて貴重な資源である都市農地が、相続を契機に減少していることを農地面積の変動をもとに分析し、その現状と更なる保全の方策を示した。

小松は都市災害の危険が強まる日本において、都市農地の防災的機能が重要であることを述べて、「防災協定農地」を中心とした災害に強い都市形成の計画を提案した。

報告が日本の都市計画や農業に関わる制度に偏っていた為、台湾の大学院生には分かりにくかったようだ。政治大学側からは台湾における農業の現状を踏まえた上で、生産緑地指定の方法や農地を宅地化する場合の基盤整備の必要性、また農業の多面的機能に関する質問等がされた。

近年日本では農業の多面的機能が評価されるようになり、環境や防災資源が限られている都市部において、その代替的な役割を果たす農地の存在が重要視され始めている。研究交流会を通じて、台湾においても農業が必要とされている事を実感した。

しかし、そのあり方は日本と台湾では違う事も確認できた。今回の交流は農業の環境・防災機能に視点が置かれている。日本では高密度化する都市部において災害に強い都市形成のために農地の防災機能が注目されているが、台湾ではレジャーや生態系といった環境機能に重点が置かれている。都市構造の違いは大きな要因であるが、日本とは異なる文化や慣習の違いも反映されているように感じた。都市計画や農業を通じて台湾の学生や教授と意見を交換する中で、互いの文化や価値観も知る事が出来た。（佐々木）

■震災被災地への来訪と都市農地の防災機能

今回視察した地域の中で一番印象的だった場所は、1999年の台湾9.21大震災の復興地である。私は災害対策の視点から都市農地の活用方法を研究しているため、過去に起きた災害の事例を調べることも多い。しかし、実際に海外の被災地を訪れたのは初めてであった。訪れた台湾中部地方の南投県では、災害復興記念館があり、解説員の方とともに見学することができた。

災害復興は地域復興の契機となった。それまでの農業を中心とした第一次産業から、観光を中心とした第三次産業への転換により、都会に出ていた若者も地元へと戻り職を得て、地域の経済も向上した。一方で、その弊害に懸念される観光による環境汚染についても、立ち入り人数を制限することで対応している。利益第一の計画ではなく、あくまでもより良い故郷を取り戻すための復興計画であると評価できる。

また、1995年の阪神大震災の時につくられ、その後この地域に移築された『紙の教会』を見学できたことも印象に残った。建築学を学ぶ者として、建物の意匠や構造に対してはもちろん、移築に至った経緯や今も講演会が催され見学者が絶えない様子に、感動を覚えたほどである。こうした復興事業の成功事例を体感できたことは、都市災害をテーマに研究している自身にとってひとつの希望にもなった。

都市農地の防災機能については、台湾では洪水対策のために農地の保水機能が重視されていることなど、今後自身の研究の参考になりそうな新たな視点を学ぶことができた。台北市の副市長や水土保持局の方々にも、「日本における都市農地の位置づけを知り、今後台湾でも都市農地について見直しをするきっかけとなった」という感想をいただき、台湾と日本の双方にとって、今回の交流事業が意味のあるものになったと確信している。(小松)

■おわりに

今回このような交流事業に参加できたことで、台湾の都市計画と農業振興施策について学ぶことができた。実際台湾の農地を視察することでより理解が深まり、大変貴重な経験となった。中国地政研究所、行政院経済建設委員会、行政院農業委員会、台北市政府には深く感謝したい。また、発表の機会を下さった国立政治大学にも感謝を申し上げる。この交流事業を通して得た経験を、今後の研究活動に活かしたいと思う。

震災の被害を受けた家屋

現地ガイドに説明を受けている様子

生態系保全を図っている湿地帯

坂　茂設計　「紙の教会」

台湾市民レジャーの新潮流
～多様なレジャー農業の展開～

Yuri　Nakayama
中山 友里
2005年　東京都私立田園調布学園高等部卒業
2009年　工学院大学建築学科環境建築コース卒業　東研究室
2011年　工学院大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程卒業予定　東研究室

■はじめに

2009年11月19日～26日という日程で、台湾国内の農場やレジャー農業施設の視察を行いました。台北・台中・花蓮の3箇所を訪れました。

見学を行った飛牛牧場は、台湾中部の人気レジャースポットのひとつであり、観光客の様々なニーズに応えることのできる機能を持った牧場です。日本では、千葉県にあるマザー牧場や岩手県にある小岩井牧場のような施設となっています。ここでは、生産・生活・生態を3本の柱として、牧場内では様々なDIY(= Do It Yourself) イベントの企画が行われています。

1970年代、牛乳は一部の富裕層の方しか飲めませんでした。牛乳をもっと普及させること・農業にも力を入れたいという方針から、1975年に台湾政府の指導によってアメリカとニュージーランドへ酪農訓練のために青年達を送りました。その酪農訓練から帰国した青年層が現在の飛牛牧場の社長です。

牧場内には、コテージとホテルの宿泊施設もあり、宿泊も可能となっています。1995年のオープン時には、サービス性はなく設備も十分に整っているとは言えなかったとのことですが、現在は沢山の施設などがあり、とても内容が充実した牧場であると感じました。牧場内には、観光客が入れないゾーンがあり、そこでは実際に乳牛を飼育して生産も行っています。牛乳を加工する工場もあり、バックヤードもしっかりとしているという印象を受けました。

■教育の場として

大木塊休閒農場は、市民農園がある多様な農業体験をできる施設です。主に行っている活動としては、DIY活動・舞台活動・郷土料理体験・

■飛牛牧場内

（上写真）牧場内のコテージ（下写真）牧場内のホテル

■大木塊休閒農場内にある DIY 活動を行う場

■農場内にある農園

■ご案内いただいた経営者のご夫婦

生活体験・生産体験です。この農場を利用する人達は、家族連れ、小学生、幼稚園生がメインとなっているようです。活動費用は、一人当たり250元（日本円で約750円）となっています。

このようなレジャー農場の存在意義は何かと言う質問をしたところ、教育のためと農家の収入源（経営）のための両方とのことでした。この農場を訪れて田植え体験などを行ったことによって、子ども達にとって農業がより身近なものとなりますし、このようなレジャー農場が農業の振興と学校教育の2つに役立っていると感じました。またこの農場を経営している夫婦の二人はとても若く、施設をより良くしていきたいという意志を感じました。

■まとめ

台湾のレジャー農場の中でも今回は2つの農場を取り上げましたが、台湾のレジャー農場を経営している方達は、設備投資をすることに積極的であると感じました。施設の中身をより充実させていくために、長い年月をかけて計画を行い、徐所に設備や施設の内容を増やして、より良くしていくための工夫を考えている姿勢には学ぶべき点が沢山ありました。

今回の視察を通して、飛牛牧場では余暇を楽しむためのレジャー施設としてのサービス面の良さと、将来に対する経営目標もしっかり行われているのでさらなる可能性を感じました。

大木塊休閒農場では、レジャー農場が単なる農家の収入源だけではなく、補助的に教育の場として社会に役立っていることと、農業の魅力に気づかせてくれる場としてのさらなる発展の可能性を感じることができました。

■台湾農業経営管理学会での発表

11月22日には、台湾農業経営管理学会での発表を行いました。

私は、日本の都市農業の保全の多様な試みについて30分間の発表を行いました。発表内容は、東京の都市農業における事例や、特色ある多面的な機能を引き出しながら、農業・農地をまちづくりに活かして農地を保全していくための事例などで、その後に30分間の討論会があり、台湾の農家の方々やレジャー農場を経営している方達と意見交換を行いました。

■台湾農業ビルでの発表風景

■発表風景

美術館建築と光を巡る旅

わたなべ　ゆういち
渡辺　裕一

出身高校　東京都立白鷗高等学校 2004 年卒業
大学　工学院大学建築都市デザイン学科 2009 年卒業
大学院　工学院大学大学院修士課程　倉田研究室在籍
Mail　dm09070@ns.kogakuin.ac.jp

はじめて教わった言葉から

「建築は光の芸術であり時間の芸術である。」１年生の一番初めの授業で教わった事だった。光の芸術の例で示された事例は２つとも美術館で、美術から光を奪う事は不可能なだけに、美術を展示する際は光の扱いに繊細にならなければいけないという事なのだと思った。時間もそうだが、光は実際に行ってみないと分からない。そこで例に出された２つの美術館があるアメリカに行く事に決めた。

まずはニューヨークに行ってみる

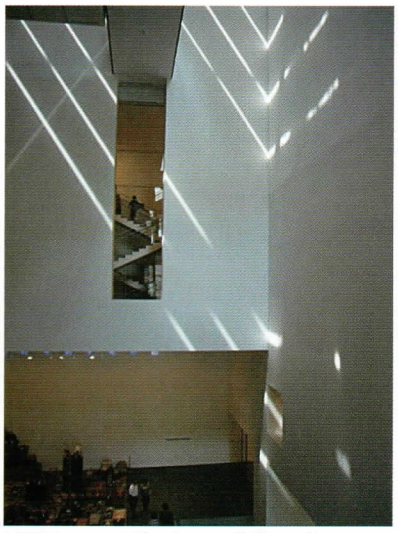
有名ギャラリーが集まり、現代美術の最先端を走るニューヨークは美術館の数も多い。メトロポリタンのような古典から、ニューミュージアムのような現代美術まで、多様な芸術が並んでいる。数ある美術館の中でも一番心惹かれたのはMOMAである。谷口の繊細で豊かな空間は近代から現代に至るほぼ全ての芸術を包括するに相応しかった。エントランスから６層分上のトップライトまでの吹き抜けとそれに呼応するようにある中庭（スカルプチュアガーデン）は合理性だけを追ったのでは実現不可能な空間があった。本来、芸術とか美術はそうなのかもしれない。合理性だけでは説明できない余の部分、不合理さがいつも芸術や文化を創り出す事を改めて感じさせられた。

ブルックリン橋から見たマンハッタンの夜景

MOMA：スカルプチュアガーデン

MOMA：エントランス

destination : JAPAN → USA
name : Yuichi WATANABE
no. : 01
Category : NICHE PASSPORT



MOMA：コンテポラリーアートギャラリー
上部吹き抜け

MOMA：コンテポラリーアートギャラリー

フォートワース現代美術館：内観

フォートワースの光

フォートワースはアメリカ中央の南側、テキサス州にある。紫外線が強く天気予報に注意が標されるほどだ。ここにあるのが、キンベル美術館とフォートワース現代美術館だ。キンベル美術館は先生が光の芸術の例に挙げた1つで、この旅のきっかけになった美術館だ。そこには巧みに操作したテキサスの強い光と、光を反射させる壁面の石の質感が見事に交わり、体験した事の無い優しい光に満ちあふれていた。一方、現代美術館は石の光とは違うガラスの光だった。現代美術を扱うに相応しい大空間と、カーン同様巧み操作した天井光、水盤も利用した光を、コンクリートの壁に反射させて包まれる冷静な空間は、現代美術と対話するには十分だった。

MOMA：5階から1階を覗く

フォートワース現代美術館：外観

キンベル美術館：内観

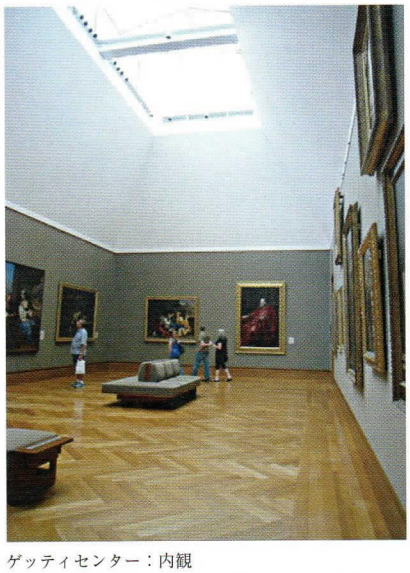
JAPAN → USA
destination :

Yuichi WATANABE
name :

01
no. :

NICHE PASSPORT
Category :

ゲッティセンター：外観



ゲッティセンター：内観

ゲッティセンター：外観

カゴシアンギャラリー：内観

カゴシアンギャラリー：内観

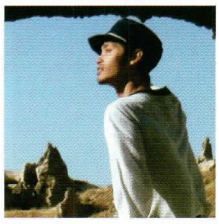
ロサンゼルスは閉じていた

世界最大の美術研究所兼展示施設であるゲッティセンターはロサンゼルスの郊外にある。R・マイヤーらしい白亜の宮殿とも思える建物は、カリフォルニアの青い空に映え、その日射しを十分に巡らせている展示室は照明をいっさい使ってないのを感じさせないほど光に満ちていた。展示量が多いためか、その光の空間はカーンや安藤とは違い詩的ではなく、どこか大味に感じた。マイヤーの作品なら市内にあるカゴシアンギャラリーのほうが真っ白なギャラリー空間に浮かぶオフィスの木質感のバランスなど光の扱いは巧いと思う。市内にある磯崎新の現代美術館は展示作品への配慮か全ての天井採光を閉じていた。群馬同様、光をテーマにした作品だけあって楽しみだっただけに残念だった。それにしてもロサンゼルスはNYと違い、そこに暮らす人は陽気だ。迷っているそぶりを見せればお困りですか？と話しかけてくる。拙い英語にも付き合ってくれる。帰りの飛行機は席が非常口前だった。座る条件に乗務員と英語での意思疎通が出来る方と書いてあった。そこに座って帰る事にした。なにか平気な気がしたのだった。

この海外視察には、工学院大学建築系学科学生・大学院生海外渡航奨励金が支援されています。詳しくは NICHE HP http://kogakuin.or.jp/kenchiku/ をご覧下さい

destination : JAPAN → USA
name : Yuichi WATANABE
no. : 01
Category : NICHE PASSPORT

シナンという建築家とイスタンブールと僕



加納（かのう） 学（まなぶ）

出身高校　神奈川県立公立生田東高校 2000 年卒業
大学　Institute of Design and Construction Brooklyn 2007 年卒業
工学院大学建築学科　木下研究室在籍
Mail　manamana9542@hotmail.com

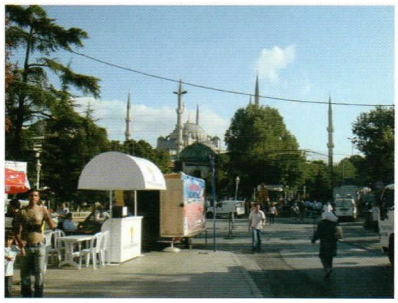
イスタンブールへ

何事にもルーツがある。ロックのルーツがビートルズであれば、もう少し掘り下げてチャックベリー。そのような感覚で建築家とゆうルーツを探しているときに見つけた名前が「ミマール・シナン」だった。地球の歩き方で世界は歩けるとゆう自負と、夢枕獏の「シナン（上・下）」の三冊を未読のまま手に持ち、イスタンブールに13時間のフライトの後に着いたのは8月末のことだった。

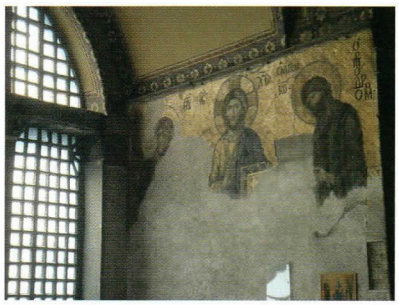
トルコはイスラム教の国である。僕が訪れた時期はラマザン（断食）で、この時期は観光客が多く、尋常に街が騒がしい。そのなかでもとりわけなのがスルタン・アフメットにあるアヤ・ソフィア（聖なる知恵）である。

アヤソフィア（ブルーモスク）

駅から木の高さが程よい公園を歩くと、一際高い球体と線が青い空に貫けている。別名ブルーモスクは英名である。イスラム教は偶像を崇拝しない。内部には幾何学的な模様や植物、コーランを用いた言葉が描かれている。周りの外廊には剥がれかけたキリストの絵がある。アヤソフィアは古くはキリスト教であるローマが300年代に建設したものをオスマン（トルコ）が奪った物であった。オスマンは天井や壁の絵やモザイク画の上に漆喰をぬりかためイスラムに改変させた。そうゆう経緯からシナンはオスマンとしても自身としてもこれを超える建築物をイスラムとして生涯をかけて模索した建築家なのである。



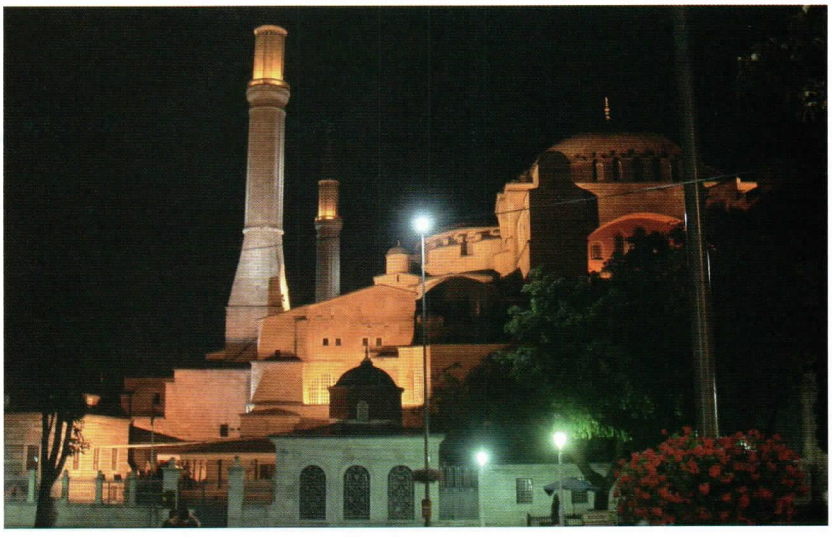
アヤソフィアを外から眺める



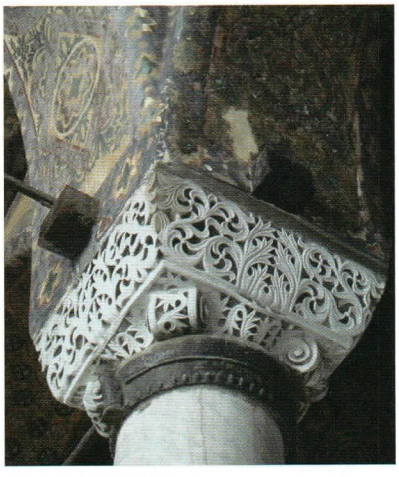
街廊フラスコ画

アヤソフィア装飾

アヤソフィア街廊


ライトアップされたアヤソフィア

アヤソフィアコーラン


アヤソフィア柱ディテール

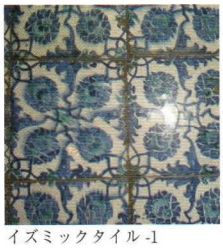
アヤソフィア天井

リュステム・パシャ・ジャーミィ

彼の足跡はジャーミィ（モスク）として残っている。リュステム・パシャ・ジャーミィは複合建築のシステムをとっている。ジャーミィを中心に学校、病院などが建ち並び、有機的に配置してゆく。イスラム教とゆう思想を中心とした小さなコミュニティ形成でもある。

このジャーミィにたどり着くのに僕は二時間近隣を歩き回った。見えるけど行けないたどり着けない。その理由はこのジャーミィが二階から建てられていることである。一階の店舗は賃貸であり、その家賃収入がジャーミィの管理費・運営費にあてられ、また商店らはジャーミィのセキュリティとしても機能する。これは確信的な建築である。

リュステム・パシャ・ジャーミィ


イズミックタイル -1

イズミックタイル -2

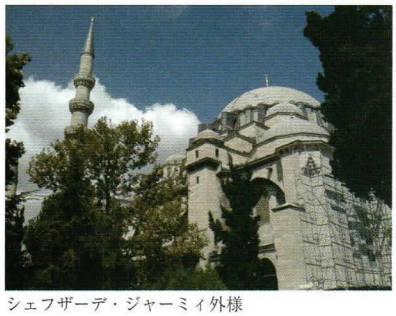
リュステム・パシャ・ジャーミィ周囲

JAPAN → TURKEY
destination :

Manabu KANO
name :

02
no. :

NICHE PASSPORT
Category :


シェフザーデ・ジャーミィ外様

シェフザーデ・ジャーミィ

トラム（路面電車）路線からやや離れたところにシェフザーデ・ジャーミィがある。印象的なのはその外観バランスである。大ドームを四つの半ドームで支え、幾何学の定理に順ずる設計がされている。そのシンメトリーは雑多になってしまう周辺の街でさえ包容し、相対的に感じてしまう。

シナンのジャーミィで効果的に使われているのがイズニックタイルである。アヤソフィアのインテリアはイスラムのそれでも過剰に装飾されたものであるが、シナンがてがけたジャーミィたちは素朴さのなかに厳かさと、壮言さが含まれている。その演出に一役かっているのがこのタイルである。

建築と建築家

シナンの特技を全て兼ね備え、アヤソフィアを超える建築がスレイマニエ・ジャーミィである。

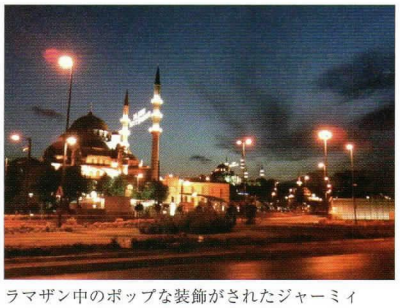
旧市街地の丘に位置するこの都市で、彫刻であり、集大成な建築はトルコ人の時間を止めている。452年がたつ今、近代的なトラムや海中トンネルが出来ても今もなおトルコ人のアイデンティティはここにあると訴えかけるものであると思う。

これがある限りトルコ人はトルコ人であり続けることが出来るのだろう。イスラムの習慣が減衰しているとはいえ、その思想と思いを建築はそこにあることで表現し続けていける。それこそが建築家としての所以であり、シナンの偉業こそが建築なのではないかとこの旅を振り返る飛行機で思った。

シェフザーデ・ジャーミィ

シェフザーデ・ジャーミィ内様

スルタン・アメフットジャーミィをマルマラ海から眺める


ラマザン中のポップな装飾がされたジャーミィ

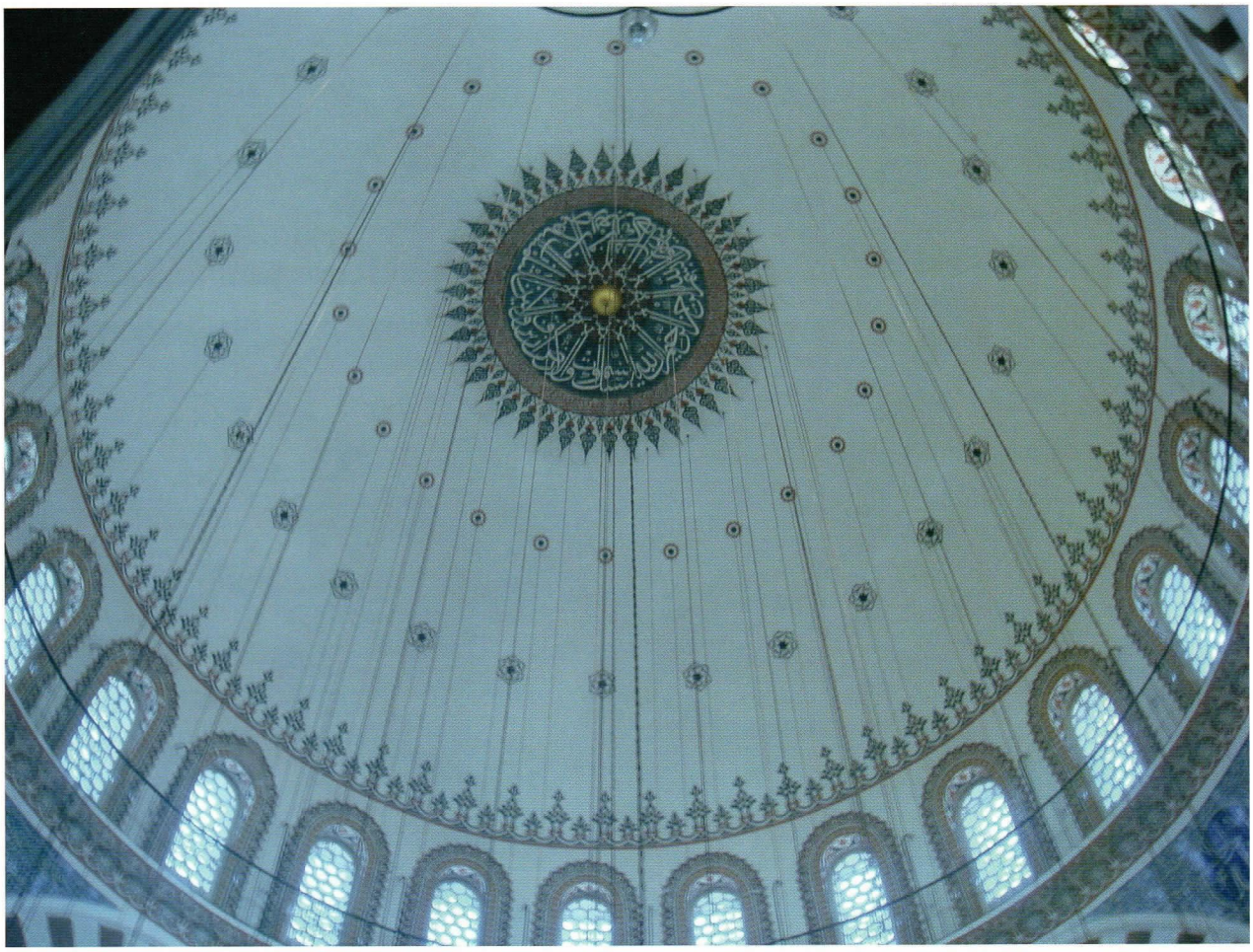
この海外視察には、工学院大学建築系学科学生・大学院生海外渡航奨励金が支援されています。詳しくはNICHE HP http://kogakuin.or.jp/kenchiku/ をご覧下さい

トルコの都市と自然の遺産を巡る

江口 拓（えぐち たく）

出身高校　栃木県白鴎大学足利高等学校 2004 年卒業
大学　工学院大学建築学科 木下研究室在籍
Mail　three_turntable@yahoo.co.jp

JAPAN → TURKEY
destination :
Taku EGUCHI
name :
03
no. :
NICHE PASSPORT
Category :



建築家スィナン設計　ユスフパシャ・ジャーミィ

スルタンアフメット・ジャーミィ　通称ブルーモスク

スィルケジ駅

はじめに

渡航経験のない私はある恩師の「はじめて海外にいくならトルコにしなさい」との言葉が決め手になり、急遽トルコ行きが決定しました。ちょうど私はル・コルビュジェの「東方への旅」を読んだばかりでした。若き日にヨーロッパの各国を旅したコルビュジェは、旅の終着地であったイスタンブルでのモスクや人々の暮らしに感銘を受けており、自分も実際に現地に行き、トルコの文化に生で触れることが第一の目的でした。

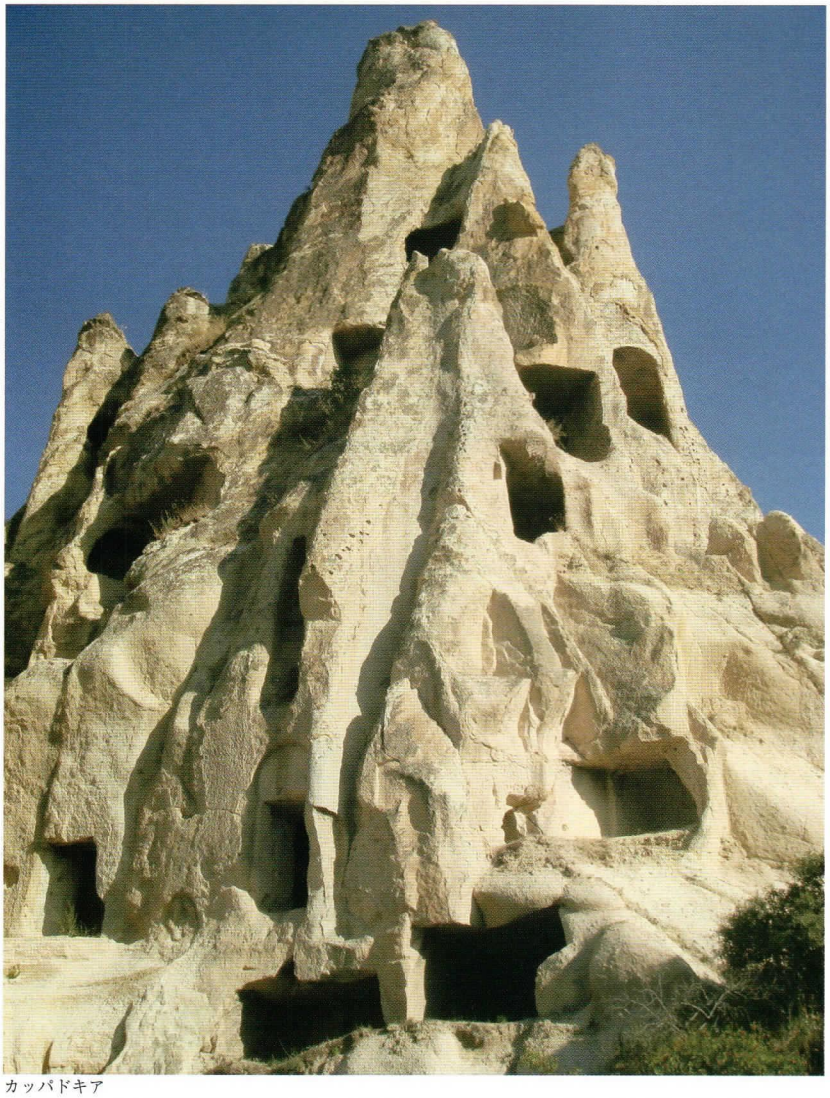
イスタンブル

イスタンブルはボスポラス海峡を境に旧市街地と新市街、またアジアとヨーロッパを分け隔てています。旧市街地はブルーモスクやアヤソフィヤなど、多くの宗教的遺産が密集しており、イスラムのアジア的な雰囲気が漂っています。トプカプ宮殿や点在するモスクの内観は、巨大な抜けた空間に細かな装飾模様が全体に施され、神聖な空間を創り出しています。一方新市街地はタクシィム広場を中心にして整備された通りに商店が並び、ヨーロッパの雰囲気を感じることができます。

ギョレメ野外博物館

カッパドキア

トルコは変化に富んだ地形と気候が生み出した自然遺産もよく知られています。そのひとつであるカッパドキアは岩山がキノコ型に風化した地形のことで、その内部は洞窟状になっています。かつてそこにはイスラム教徒から逃れた隠れキリシタンが住んでいたと言われ、生活の痕跡やキリストの壁画などが残っています。その広大な美しい自然とそれを利用して人が自然と一体化して生活していた姿が想像でき、その歴史を感じることができます。


カッパドキア

ネヴシェヒルの朝日

ユルギュップの町並

カッパドキア内部　イエス・キリストの壁画

トルコと日本の関係

トルコ人は日本人にとても興味を示しています。その理由を現地の人に聞いたところ、そのひとつには日本とトルコの過去の国交関係に関わりがあるようです。1983年(明治23年)にトルコが日本に派遣した船が遭難したとき、日本の漁師がその船員の救助と介護を行ったことがトルコの歴史の教科書に載っているらしいのです。だから年齢問わず多くの人がその事実を知っており、日本に好意を抱いている人が多いようです。

また現在イスタンブルのアジアとヨーロッパを結ぶボスポラス海峡の地下工事は日本の建設会社が行っています。他にもイスタンブルの都市の交通網発展を日本の会社が行っており、それに対しても感謝しているとの話を聞くことができました。

これらの関係について日本人にはあまり知られていないと思いますが、この素晴らしい関係性とトルコ人の人情に感銘を受けました。

この海外視察には、工学院大学建築系学科学生・大学院生海外渡航奨励金が支援されています。詳しくは NICHE HP http://kogakuin.or.jp/kenchiku/ をご覧下さい

フランス・旅の記録

長塚（ながつか） 幸助（こうすけ）

出身高校　東京都立豊多摩高等学校 2007 年卒業
大学　工学院大学建築学科建築学コース　西森研究室在籍
Mail　d107137@ns.kogakuin.ac.jp

モン・サン・ミッシェルから見た海

はじめに

2009 年 3 月大学 2 年の春休み、生まれて初めて飛行機に乗り日本の外に出ました。一番の目的は建築を見に行くと言うよりは日本の外に出てとにかく世界が見たかった。渡航国はフランス。フランスでの 7 日間の出来事、感じたこと、帰ってきてから思ったことをいくつか書いていこうと思います。

楽しい街

フランスの街の道路は不均質で様々な性格があり、歩いているだけで楽しくなれました。更にフランス人だけではなく外国の人は街の使い方が非常にうまいなと思います。お店やカフェは歩道にまで席が出て賑わっていて、ただ流れるだけの街にはなっていないのです。夜もカフェやレストランなどでパーティをやっていて、何人かの人は外に出て店の前でお酒を飲んで談笑していたりする。街中の道路には足を止めたくなる様々な要素が滲み出しているのです。そして一番いいなと思ったのがメトロのホームや車内で音楽を演奏している人がいることです。ただの移動時間も彼らの演奏ひとつでとっても楽しく過ごせる。ホームや車内は雰囲気がけっこう怖くてはじめはビクビクしながら乗っていたが、一度見たら楽しくなってしまって演奏してくれる人が乗ってこないかと期

宿泊したホテルの近くの街並み

待しながらメトロに乗っていました。そしていい演奏だとみんなチップをあげる。ぜひ日本でもやってほしいと思います。

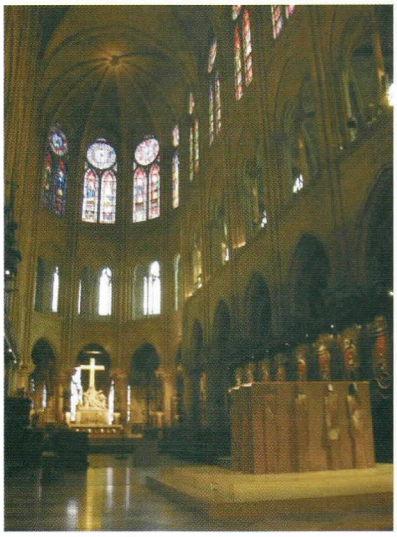
自己判断

いいことか悪いことかはさておき、フランスでは横断歩道で信号を守るひとは一人もいませんでした。安全だと思えばわたるし、危険だと思ったら止まる。目の前にいる警察官も怒りません。先ほどのチップの話もそうです。楽しませてもらったり、サービスをしてもらったらちゃんと感謝の気持ちでチップをあげる。このようにフランスでの日常生活は様々な自己判断をするシーンがありました。そして日本に帰って今思うことは日常生活で自己判断をすることがあまりに少ないなと感じました。日本では自分の中で良いと思ったことならするし、悪いと思えばやらない。そういったことを頭で考える前にルールや一般常識が先行して考えることをやめる人がとても多いと思います。それはきっととても勿体ない事で、そういったルールとか常識とかのせいで暮らす楽しさが奪われている気がします。

終わりに

旅に出る前は不安でいっぱいでしたが帰る頃には楽しい気持ちでいっぱいになりました。行った先で人と仲良くなったり、友達も何人かできました。今まで当たり前の事だと思っていたものが覆されたり、考え方も日本を離れることで大きく変わりました。建築系学科の生徒であるので建築を見るのが当然と言えば当然なのですがこれから初めて海外に出る人は建築だけじゃなくてそこで生活している人や街、使われているもの、食べられているものも見てみてください。意外とそういうことのほうが発見があったり、わくわくすることがあったりすると思います。そして今回このような素晴らしい機会を与えてくださった建築学科同窓会の皆様には心から感謝しています。本当にありがとうございました。

ケ・ブランリー美術館



ノートルダム大聖堂内部

ラ・トゥーレット修道院

アメリカン・センター

エッフェル塔から見たパリの夜景

この海外視察には、工学院大学建築系学科学生・大学院生海外渡航奨励金が支援されています。詳しくは NICHE HP http://kogakuin.or.jp/kenchiku/ をご覧下さい

アジアとヨーロッパをつなぐ～ボスポラス海峡工事見学～

鍋内（なべうち） 翔太（しょうた）

出身高校　神奈川県立百合丘高等学校 2006 年卒業
大学　工学院大学建築学科 田村研究室在籍
Mail　nnfmh216@yahoo.co.jp

はじめに

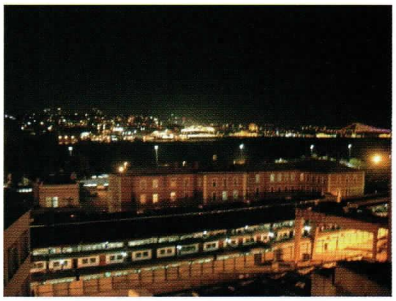
12時間かけてイスタンブールに到着。2009年8月下旬のことだ。思い返してみれば、初海外はトルコと決めていた。そのキッカケは、2年時に材料の杉本先生がおっしゃっていた「イスタンブールに行けば、建築が好きになる」という言葉だ。私は4年生になるまで頑固に虎視眈々と計画していたのである。

イスタンブールの特徴

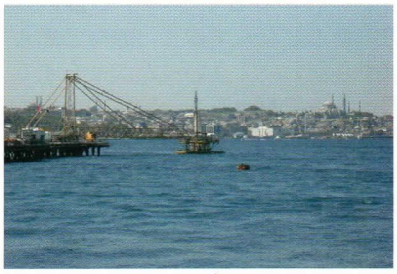
まず、私が泊まったホテルはシルケジ駅の近くで、金角湾とボスポラス海峡の夜景が見れる絶好の場所だった。その金角湾を挟み、旧市街と新市街とに分かれているのがイスタンブールの特徴だ。新市街へ行くにもガラタ橋を中心に3本橋がかかっている他に、電車やフェリー、ケーブルカーなど交通の便で不便さは感じられなかった。一方で、イスタンブールはボスポラス海峡を挟んでヨーロッパ側とアジア側にも分かれている。そして、その両方を繋ぐものは今のところ第1ボスポラス橋と第2ボスポラス橋だけであり、市民は車かフェリーで移動する状況で、都市の近代化に伴い交通の便が悪く改善が迫られているのである。

ボスポラス海峡工事

今回、大成建設さんが行っているボスポラス海峡工事を見学できることとなった。この工事は、ヨーロッパ側とアジア側を繋ぐ意味で大変重要な国家プロジェクトとして位置づけられている。たまたま、私のホテ



ホテルから　手前：シルケジ駅　ボスポラス海峡を挟んで奥：新市街　右奥：第1ボスポラス橋



真ん中：ボスポラス海峡工事現場入り口

工事途中で発見された遺跡

destination : JAPAN → TURKEY
name : Syota NABEUCHI
no. : 05
Category : NICHE PASSPORT

現地の日本人学校の子供たちに説明をする法花さん

ルがシルケジ駅近くだったのでアジア側とヨーロッパ側の両方の現場を見学できることとなった。
ヨーロッパ側では、スルケジ駅中心に見学をした。

スルケジ駅に限らず、トルコ人の習性として壊した建築を埋めて新たに建築するという性格らしく、どこを掘っても遺跡が出てくる状況。これが、もう契約工期が過ぎている最大の原因であり、未だに工期の目処が立っていないのには、驚かされる。

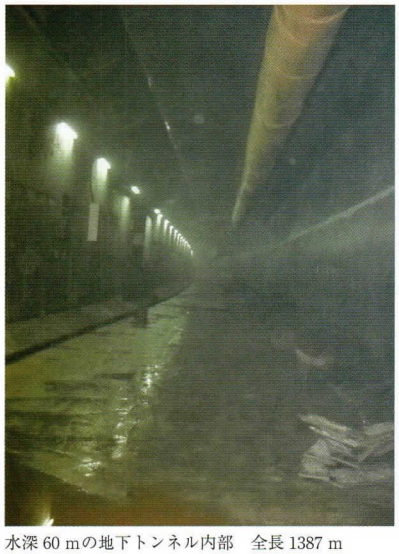
次に、フェリーで移動してアジア側の現場を見学した。こちらは、ある程度遺跡の問題は解決した様子で大規模な建設現場を目の当たりにした。特に、ボスポラス海峡工事の水深 60m まで徒歩で下っていき内部を歩いたのは正直生きた心地がしなかった。

今回、見学会を通して海外工事の難しさを実感できた。話で聞いている以上に、問題を解決しながら工事を進めていることが分かり、将来現場に出る者として、身が引き締まる思いになった。

おわりに

イスタンブールは非常に居心地がよく、人やまちが好きになります。

今回、このような貴重な機会を与えて下さった同窓会の方々、指導教員の田村先生、大成建設の方々に厚く御礼申し上げます。



水深 60 mの地下トンネル内部　全長 1387 m

工事で使われる道具のビフォーアフター

この海外視察には、工学院大学建築系学科学生・大学院生海外渡航奨励金が支援されています。詳しくは NICHE HP http://kogakuin.or.jp/kenchiku/ をご覧下さい

■ 同窓生を訪ねて

関谷 真一

第 11 回長崎県木造住宅コンクール最優秀賞

長崎・雪浦の家

ウッドデッキと大屋根の外観

西側の雄大な景観

棚田の石垣

棚田跡に建つ大屋根の西側外観

施主に送られたプレート

畑・池・物置兼鳥小屋と OM ソーラコレクターの乗った大屋根

敷地内の畑で獲れたジャガイモ

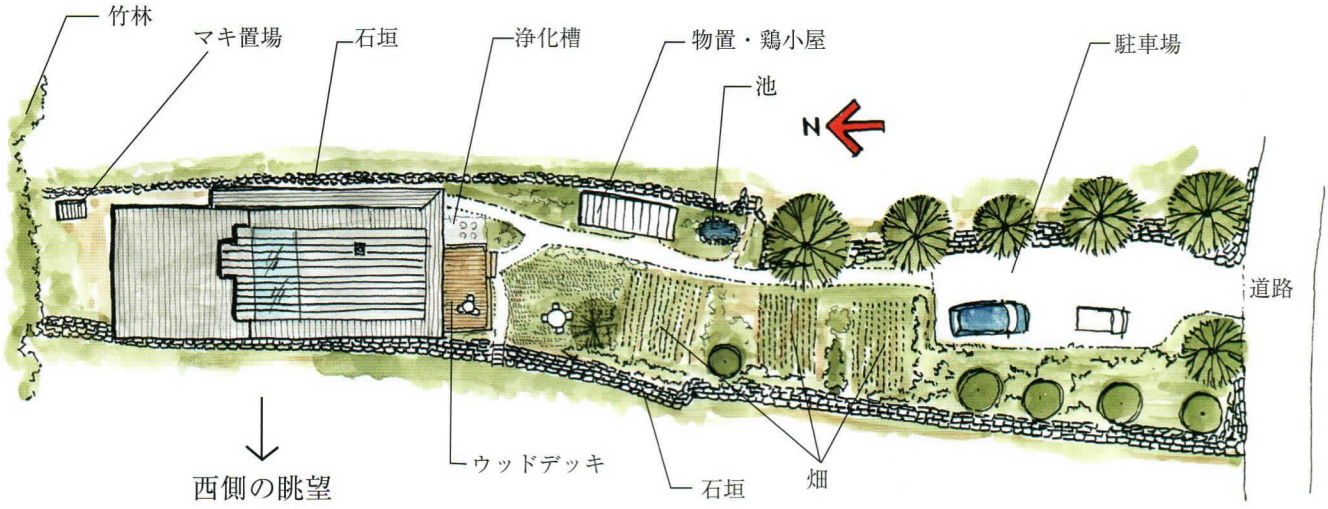
関谷真一

1957 年　八王子市生まれ
1975 年　東京都立三鷹高校卒業
1981 年　工学院大学工学研究科建築学専攻修士課程修了（山下研究室）
1981 年　株式会社　番匠設計入社
1995 年　結設計室設立
1995 年～　工学院大学非常勤講師
2008 年～　町田福祉専門学校非常勤講師

現在　八王子市まちづくり審議会委員
NPO 法人らいふ舎理事長
NPO 法人八王子市民活動協議会理事
自然×住宅の会理事

受賞　1979 年日本建築学会設計競技関東支部入選
1982 年建築士会連合会懸賞設計競技銅賞
1993 年多摩川夢づくり大賞専門家部門グランプリ
1997 年農村環境整備デザインコンペ佳作
2002 年第 3 回大地に還る住宅設計競技優秀賞

著書　「基本の家づくり百科」（永岡書店）
11 版 5 万部のロングセラー
「いい家はローコストで建てる」（永岡書店）
「強い家の建て方とメンテナンス」（永岡書店）
「世界で一番やさしい木造住宅」（建築知識）



長崎県の北西部に位置する西海市雪浦は、西の玄海灘に面するとても豊かな自然環境。玄海灘にそそぐ雪浦川には、天然ウナギや白鳥もすみ、夏は川をせき止めて天然のプールとなるほどの清流。川の両岸に水田が広がり、三方が山に囲まれている。

小高い丘の上の棚田跡の細長い敷地。西側の景観を活かすことが大きなポイントであった。北側の隣地の竹林の景観も魅力的だった。

東の道路から敷地の奥に、OMソーラーのコレクターを乗せた大屋根が見える。東側の石垣と住宅の間を進むと玄関になるが、ご近所の方は、ウッドデッキから直接居間に立ち寄ることが多い。

この住宅は、2007年第11回長崎県木造住宅コンクールの最優秀賞を受賞。審査は、書類審査の後、入選候補の住宅を審査委員が見学して各賞が決まった。

審査委員長の伴丈正志氏（長崎総合科学大学教授）からは、「恵まれた自然環境を満喫し、開けた眺望を楽しめ、杉、漆喰、竹紙などの自然素材と、OMソーラーシステム、廃熱利用、雨水・生活排水の浄化システムなどの科学的な装置が無理なく調和し、現代の田舎暮らしにふさわしい民家。」との評価をいただいた。

■環境に配慮した住まいを

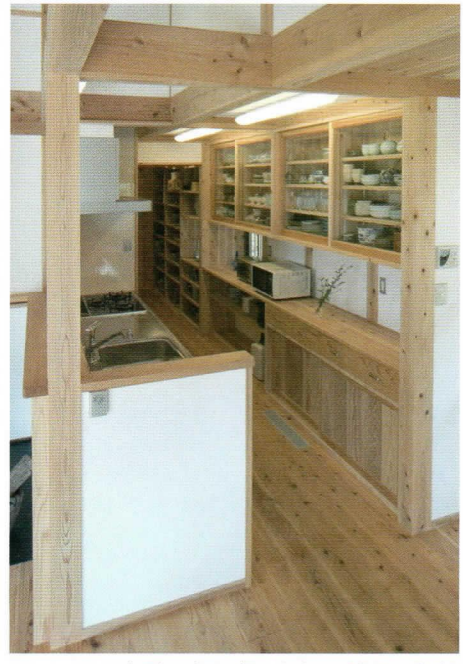
施主は、エントロピー学会でお付き合いさせていただいき、物理学者で環境問題の専門家でもある元大学教員。三浦市にあった住まいから移り住む退職後のすまいである。ご夫婦の生活空間と大きな書斎及び書庫をつくることが主な要望であった。環境に配慮した木の住まいとOMソーラーシステムを希望されていた。

地域の木材や漆喰や和紙などの土にかえる、自然素材を使用と冬の日照や夏の通風に対する配慮を重視した。2階の寝室には、竹の繊維で漉いた竹紙を貼っている。この竹紙は、八王子市の竹を原料とし、八王子市の障害者作業所で漉いたものである。

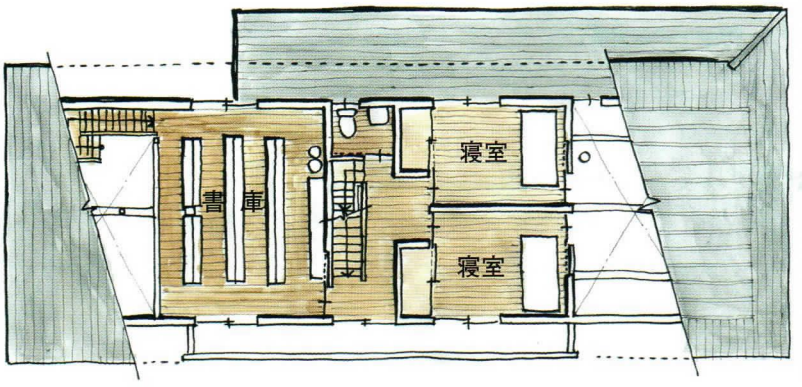
木材が成長する年月以上の、できれば100年以上長持ちする家にすることで、建築廃材を減らし、再生可能な木材資源としたい。

排水処理は、施主自ら設置とメンテナンスをする高性能な浄化層を使い、生活用水に使えるほどの浄化性能を発揮している。屋根に降った雨水も利用している。

和室・居間・食堂　杉材と漆喰壁の仕上

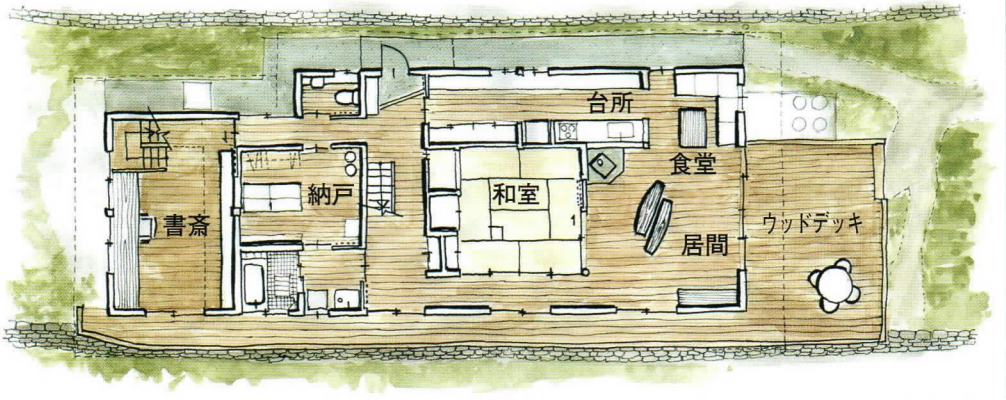


台所と食品庫　棚板、建具も杉材



2階平面図

世界を旅した思い出の品々



1階平面図

浴室からの景観

■田の字プラン

雪浦の家は、幅がないため典型的な田の字にはなっていないが、私のプランニングの基本の一つとして、古民家の「田の字プラン」を意識している。シンプルな構造をまず決め、中央に太めの大黒柱を置く。なるべく、2間スパンで納めることで4mの既製品の構造材を使う。柱があり、スパンが小さくて、大きな梁が必要ないスパンでも、2階梁であれば主要部分の梁成240㎜、小屋梁も梁成180mmの梁を入れることで、構造補強と将来の間仕切りの変更にも対応しやすい。

また、フレキシブルに使えるよう、引き戸を使用。水平、立体的にも回れる動線を確保するようにしている。

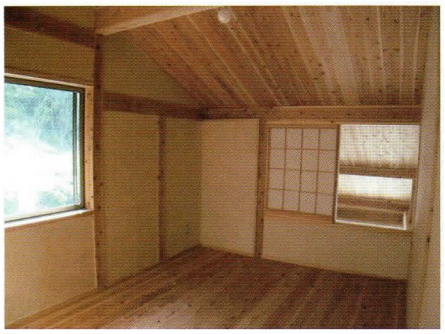
南側のゾーンに居間、食道、台所、和室を配置し、北側のゾーンに書斎と書庫を配置した。中央部は玄関、階段室、納戸と水周りとした。2階に寝室、屋根裏はOMソーラーの機械室兼納戸になっている。

玄関から入ると廊下の延長に西の景観が広がり、広縁を回り込みながら居間と食堂に向かう。居間と続き間の和室は、西側の景観を楽しめるとともに、茶室としても利用できる。東側の台所と玄関との間には、大きな食品庫を設けた。

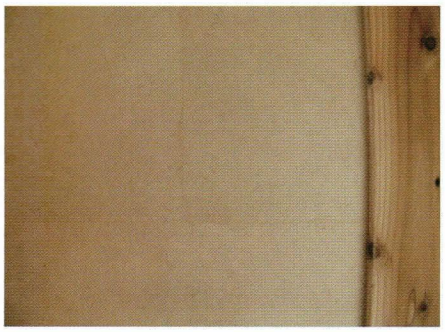
北側の書斎は、一枚板の大きな机が置かれ、2階の書庫と階段のある吹抜でつながり、北側の竹林を景観として楽しめるようにしている。

居間の吹抜

和室から居間を見る



竹紙を貼った２階寝室



竹紙の落ち着いた質感

書斎　２階書庫への直通階段

■OMソーラーシステムと屋根裏の排熱

OM ソーラーシステムのコレクターを南面に設置するため、東と西を妻とする大屋根とした。OMソーラーシステムは屋根のコレクターで温められた外気を床下に送り込んで床暖房をするもので、夏場の余った熱を利用してお湯を作ることもできる。

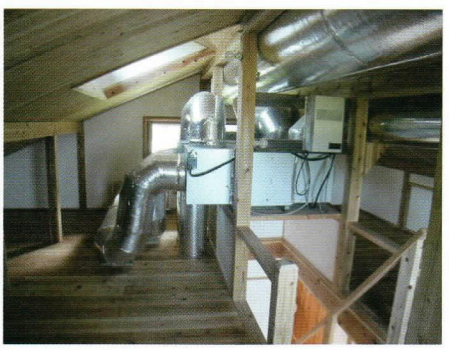
私の設計する住宅の屋根には、屋根面の下に通気層を積極的に設置しているが、OMソーラーシステムの難点でもある夏の集熱面下の熱の処理のために、コレクターの下に通気層を設け、屋根面下の排熱をしている。

外張り断熱として、屋根面と外壁の通気層を作ることもあるが、夏場の排熱のために、予算的に厳しい場合でも屋根面の通気層を作っている。また、大きめの棟換気口を設置しないと、通気層の排熱は十分でない。片流れであれば、熱気も抜けやすく、防水上の納まりもシンプルになる。

さらに、吹抜や各部屋の開口部の配置により、熱気を上方に換気するためのルートも確保している。熱くなった空気は上に上がるので、上方への排熱のための換気ルートの確保は効果的である。

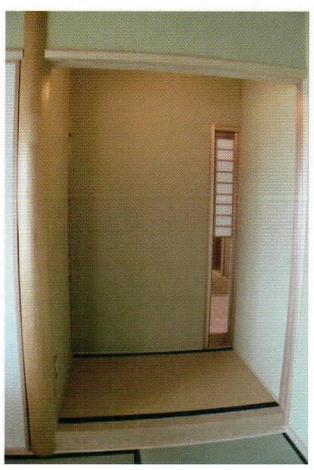
補助暖房として、床下にファンコイルユニットを設置しているが、居間の薪ストーブが、十分な温かさを提供してくれる。

居間・２階寝室・屋根裏を通る上への排熱シート

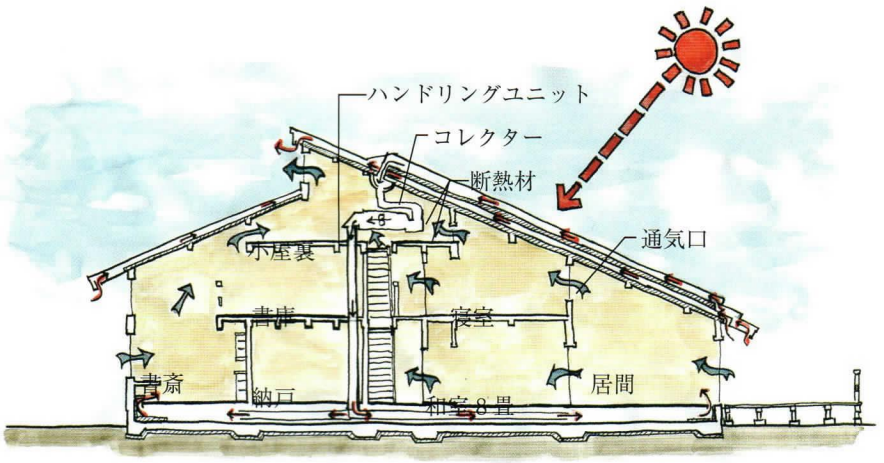


屋根裏の OM ソーラー・ハンドリングユニット

高性能な浄化槽に汚泥を入れている



和室床の間の通気用障子



OM ソーラーシステム、屋根裏通気、室内空気の流れ

■ 同窓生を訪ねて

細村 研一

象徴としてのアルミパンチングメタル

遊 茶

中国皇帝を象徴する五爪の龍が穿たれたアルミパンチングメタル

窓際に吊られた中国の象徴としの龍をかたどったアルミパンチングパネル

■象徴としてのアルミパンチングパネル

2006年の冬、イルミネーションが8年ぶりに復活した表参道沿いの建物に、9年前にオープンした中国茶専家「遊茶」。このビルの2階に新設されたカフェ「茶意館」である。

計画に際してまず、与えられた条件の中で可能なかぎり空間の分節を行わないことに心がけた。これにより険しい表情を見せる中国の雄大さを表現したいと考えた。床は既存モルタルをそのまま表し荒々しい大地に見立て、壁と天井は既存コンクリート躯体にそのまま塗装して一つの大きな空間にまとめた。中央に配置したテーブルも延々と雄大に続くシルクロードをイメージして、できるだけ分節することなく大きく長いデザインとした。そのスケール感を強調するために、テーブル上部には40灯のペンダント照明を3列に吊っている。そうすることで奥のガラス面にあたかも蜃気楼のような揺らいだ映り込みが生じ、空間にいっそうの奥行き感を与えている。

改めて表参道を見渡すと、どの建物も歩道から2階の天井が良く見える。このカフェも表参道沿いの2階に位置するので、歩道から見上げた時の印象がとても重要だと感じ、窓際の梁型を内照式のアルミパンチングパネルで包み込んだ。中国の龍をパンチングの穴で表現したもので、通りからも人の目を楽しませる仕掛けとしている。

バーカウンター脇の中国の象徴である龍をかたどったアルミパンチングパネル

■様相としてのアルミパンチングパネル

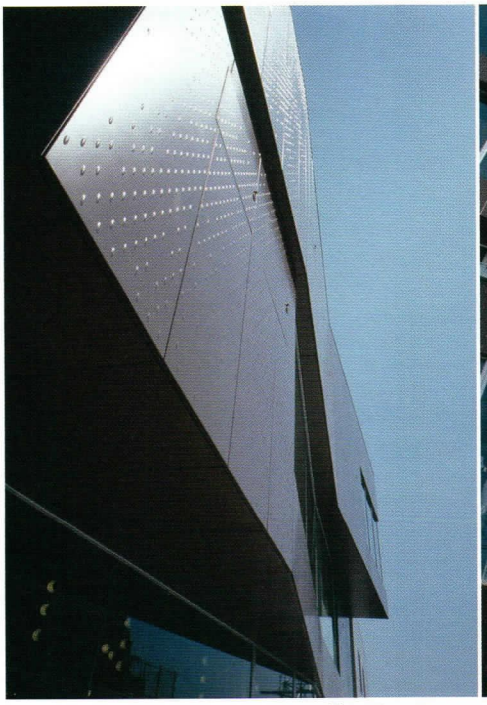
下北沢の大きな特徴は中心街の道路の狭さにある。この狭い道路のお陰で車がほとんど入ることがなく、歩行者にとってとても心地の良い路地空間を生み出している。

この建物が接する道路も幅員6mと狭く歩行者のための路地空間となっている。しかし、付近の建物と比較すると、そのボリュームがかなり大きなものとなっている。したがって前面の道路空間に与える影響も大きく、如何にこの心地の良い路地空間に威圧感を与えることのない建築とするかが最も重要なテーマとなった。そこでまず道路に面する外壁が単純な大きな面にならないように計画を行った。

具体的には、「地区計画」で誘導された壁面後退を最大限に活用しながら外壁を折り曲げ複雑な形態とし、その表面をパンチングで楕円のエンボス処理を施したアルミパネルとすることで更に複雑な印象を与えるようにした。

折り曲げられた外壁面は南と西に面しているので、時間軸（一日の中での太陽方位）の変化に伴いその表面にできる陰影も大きく変化する。そしてその表面に施されたエンボスの輝きが時々刻々起こす変化を増幅する。このアルミパネルは押出成型セメント板の上に取り付けているが、目地をシールで埋めない工法を採用した。これにより押出成型セメント板とアルミパネルの間に出来た空気層は、雨水は入りにくいのだが緩やかに呼吸をすることで、室内側の押出成型セメント板の熱負荷を軽減している。また、エンボスを縦長の楕円にすることで埃などの汚れも付着しにくいように工夫している。

見る位置や時間で変化する不規則なエンボス模様をつけた外壁


エンボスディテール

外壁ディテール

■時間を通した体験をデザインする

近代に入っての都市計画は、街並みを揃えることに執着しすぎた結果、画一的な街並みを作りすぎてきたように思う。かっては、地域ごとに特徴のある環境や建築材料に影響されながら造られた建物が、自然発生的に集まり、時間をかけて統一されることで魅力ある街並みが生まれてきた。そう考えるとこれからの都市計画は、街並みを揃えることを急ぎすぎず、ゆっくりと自然な流れの中で統一感のある街並みが生まれるような都市計画を模索する必要がある。当然、建築家に求められるものも、そういった時間や環境に敏感で適切な提案であろう。

mosia は、複雑な地形とその地形に沿って造られた狭い路や、そこから生まれた多様（形態も機能も）な建築が時間をかけて造り出してきた街並みが魅力となっている下北沢に計画された。遊茶「茶意館」は、明治神宮の参道として造られた 6 車線の車道と幅員 5m の歩道の間に 9m 間隔で植えられたケヤキ並木が特徴の表参道に面した建物の 2 階に計画された。また、mosia は建築の設計であり、遊茶「茶意館」はインテリアの設計である。

私は、建築のデザインをするときでもインテリアのデザインをするときでも、空間を時間を通した体験としてデザインするように心がけている。今回はその時間を顕著なものとして表現をする手段として、パンチングで穴を開けたパネルと人工照明との組み合わせと、パンチングでエンボスを施したパネルと太陽光との組み合わせで提案をした。

朝日を受けて浮き彫りとなったエンボス模様

■クオリアを求めて

私が３０歳になろうとする年に隈研吾さんが独立し、その最初のスタッフとして声を掛けていただいた。当時の私は、建築をプログラムに沿って形態から計画するものと考えていた。しかし隈研吾さんの下で働きながら、次第に建築をクオリアと言う視点でとらえることを意識するようになった。人は一回性の出来事として空間を主観的に体験する。一回性の出来事とは大きく時間に依存していることを意味している。その時間性を建築に取り入れ揺らぎのような建築の計画を行う過程を経験できたことが、今の私の考えに繋がっていると思う。これからも建築の中にダイナミック（＝時間）な感性を表現したいと考えている。

細村研一

studio h+
一級建築士事務所

e-mail info@studiohplus.com
HP www.studiohplus.com

1956 年　埼玉県生まれ
1975 年　埼玉県立不動岡高校卒業
1979 年　工学院大学建築学科卒業（波多江研究室）
職歴
1979 年　天野建築設計事務所
1987 年　隈研吾建築都市設計事務所（取締役）
2004 年　studio h+ 設立

下崎　信

人と暮らす樹木、匠で活躍

■家具への想い

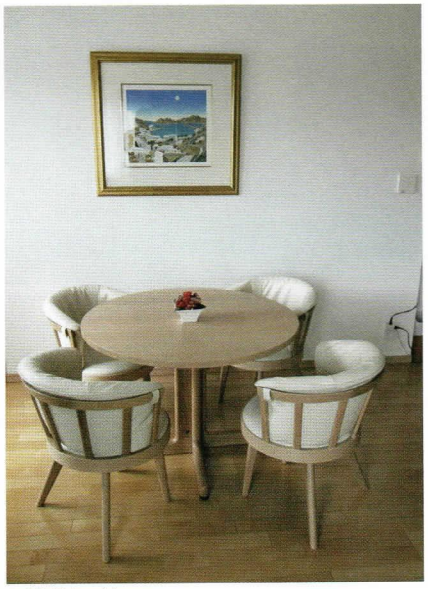
「椅子は、そこに座ったときに初めて完成します」

この名言を残したのはデンマークの巨匠 ハンス・J・ウェグナーの言葉の通り、家具は全て人がいるからこそ成り立つモノであると考えています。

建築も同様に人とのつながりで初めて完成します。建築も人とのつながりが無ければ一つのオブジェにしかならないと言うことです。そして移住空間の家具はその人の個性を生かすだけでなくライフスタイルを自ら作り出す事の出来る唯一のアイテムと言えます。

家具の面白さは、建物や空間の広さに依存する事無くそれぞれの個性を出すことが出来る唯一のモノと思いま

店舗外観

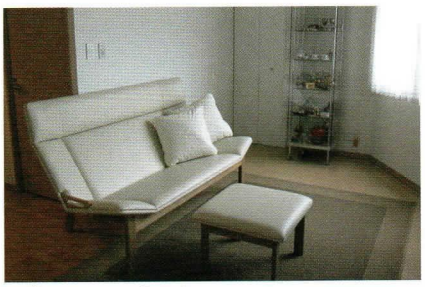

F 邸ﾀﾞｲﾆﾝｸﾞ

店舗内観

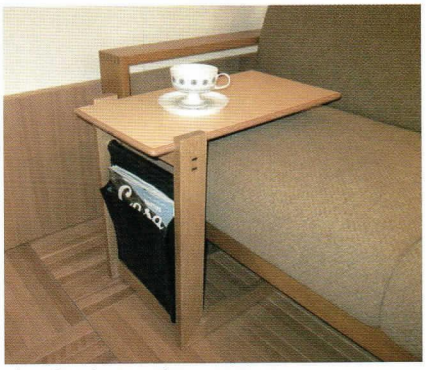
店舗内観

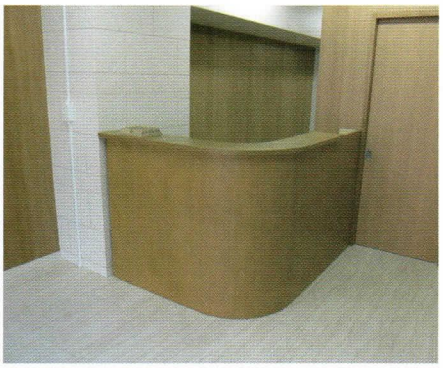
F 邸ﾘﾋﾞﾝｸﾞ

店舗玄関模型

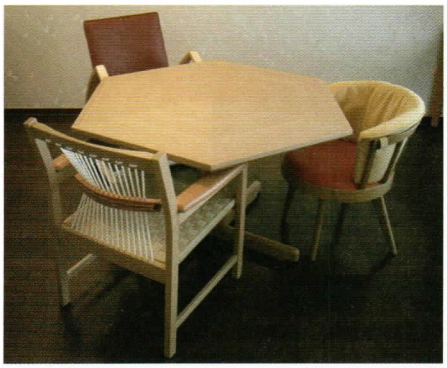

F 邸ソファ＆オットマン

TV ボード 3m


インサートテーブル

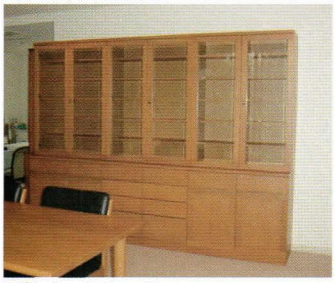

特注カウンター1

特注カウンター2


特注6角形テーブル

S邸仏壇

S邸仏壇


I邸ブックケース

S邸テーブル

S邸テーブル

す。そしてそれには正解が無く何十通りもあり、部屋の雰囲気をレイアウトで変えることが容易に出来ることが魅力のひとつです。そのひとつの家具をこだわり持ってご提案するのが自分の仕事です。

家具はほとんどのケースが既製品を購入しサイズに合わせてユーザーが場所を選ぶことが大半であり、言わばメーカーの商品に依存しています。その為、満足出来ない家具を使用している人は少なくありません。満足出来ない家具は処分され新たな家具を求める。

西洋では、家具を子・孫へと受け継ぐ文化がありますが現代日本ではこの考えは非常に少ないです。おそらく思い入れが家具に対して少ないからでは無いでしょうか。

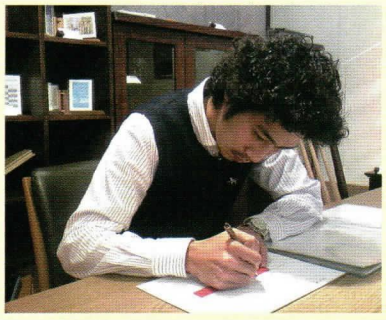
現代はエコと言う言葉が大きく言われていますが、今だからこそ一生付き合える家具を提案し使って頂きたいと私は考え、これからも新しいチャレンジをしていきたいと考えています。

■大切な資源の有効活用

私の扱っているモノは、自然の恵みから生まれた木で家具を作ります。日本は、古来より木の文化であり非常に長い付合いを今でもしています。しかし一方では国産の材料はほとんど無く、外材に頼っているのが事実です。森林を取り戻そうと努力しておりますが、その材料を使えるのは100年以上先の話となります。枯渇している資源を今こそ有効活用しなければなりません。

近年では、使い捨ての家具も多く一時的な使用目的で購入する事が普遍的無意識となっています。頻繁に買い換えることで新しく部屋のコーディネートをすることで生活を豊かになる事は、非常に良いことだと思います。しかし、ちょっと立ち止まり使い続けた家具を組み入れたコーディネートが出来ないかと考えてみて頂けないかといつも考えさせられます。

私の一番大切にしている事は、全ての家具を新しく切り替えるのではなく既存の家具を如何に活用して新しい家具を組み入れられるかです。大変難しい作業とはなりますが、ひとつひとつを大切にする気持ちが、作り手側として家具を大切にする気持ちを少しでも伝われればと思い日々努力をしています。



下崎　信
Shin Shimozaki

Profile

1994年　駒込高等学校 卒業
2001年　工学院大学建築系学科（建築学科建築学コース）大学卒業　宇田川研究室
2001年　川本工業株式会社　入社　設備設計・施工現場代理人
2003年　株式会社ロイズ入社
店頭にてアンティーク家具の販売　営業
2008年　柿ノ木坂匠　目黒通り店　設立

メールアドレス（shimozaki@takumi-kagu.com）

加藤 浩司

地域に学ぶ研究室「有明高専カト研」の活動

■八女福島なくしてカト研なし

加藤研究室。通称「カト研」は，福岡県八女市福島地区（以下，八女福島）をメインフィールドとして，都市計画・まちづくりの研究・実践に取り組む高専の研究室です。“八女福島なくしてカト研なし”。カト研は，私が有明高専建築学科へ赴任した2003年にできた研究室ですが，その当初から八女福島の皆さんにはお世話になっているのです。

■フィールド　八女福島

八女福島は，江戸期の初めに造営された城下町を礎とし，その後は久留米藩最大級の商家町として栄えた歴史的市街地。福岡市中心部から南に約45km，本校から北に約30kmのところに位置しています。塗屋造の町家が連なる重厚な容姿と，それに彩りを添える人々の暮らしや生業の景。こうした豊かな町並みを有する八女福島は，2002年にその一部が重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。また，長年にわたり，住民と行政によるパートナーシップ型まちづくりが進められているところとしても有名です。

■八女福島との出会いとカト研の活動

それまで九州に縁もゆかりもなかった私が，研究フィールドを探し回っていた2003年4月。八女福島でシンポジウムが開催された折り，同地区まちづくりのキーパーソンである中島孝行さん（建築士）に協力をお願いし，暖かく受け入れていただいたことが，活動の出発点です。その後は，まちづくり団体「八女ふるさと塾」と交流を重ねる中で，少しずつ八女福島でのネットワークを広げながら活動を行っています。

■カト研の活動拠点

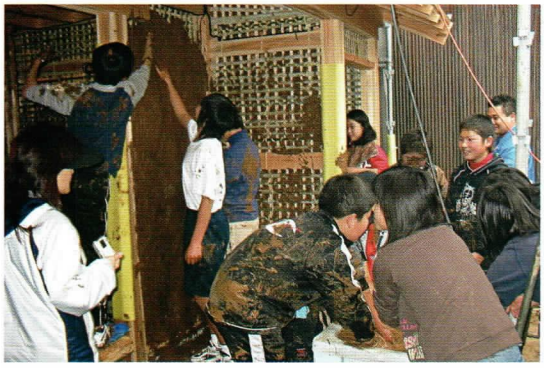
約3年間の活動を通じ，八女福島の魅力に強く惹かれるようになった私は，2006年5月に同地区の町家に転居。自宅の一方，ここをカト研のサテライトとして使うことにしました。また，合宿をするときは学生の寝床，お祭りのときにはイベントスペースとして開放することもあります。

時を遡れば，この町家は，3年ほど空き家になっており倒壊の危機に面していました。しかし，有志の方々が力を合わせてその危機を回避。そして，八女福島の町並みを構成する，後世にその魅力を伝える大切なピースの一つとして再生されることになりました。その過程では，地元小学生が土壁塗り，私の研究室の学生が土間三和土の叩き締めを手伝ってくれました。つまり，カト研サテライトとして使っているこの町家は，八女福島を愛する人たちが知恵を絞り・財をつぎ込み・汗を流し，改めて“命”を吹き込んでくれた町家なのです。

■大切にしていること

カト研では，こうした活動に際し徹底していることがあります。それは，ことある毎に“自分たちは教えていただく立場である”を確認すること。つまり，フィールドへの入り方は，地域貢献でなく，地域に学ぶ。これが，私も含めカト研の根底にある考え方です。

カト研では，年度末に，八女福島で研究発表会を行っています。もちろん，これも学ぶ活動の中に位置付けられるものですが，学生たちは“八女福島の皆さまに御礼をする”という意識を強く持ち，“ありがとうございます”の気持ちを込めて研究成果の発表をしています。そして，こうした発表会の後は，大変ありがたいことに，八女ふるさと塾の皆さまに卒業を祝っていただいています。



■むすび

八女福島での活動も7年目に入りました。八女福島で学んだ卒業生たちは，今でも八女福島や活動拠点であった私の自宅を訪れてくれます。

特別派手なことはできませんが，これからも地域に学ぶ姿勢を忘れず，学生一人ひとりの胸に，地域の魅力や学ぶことの面白さが刻まれるような活動を続けていきたいと考えています。

参考文献

1. 加藤，地域との関わりを重視した建築学科都市計画研究室の活動，平成21年度高専教育講演論文集，独立行政法人国立高等専門学校機構，pp.353-356，2009.8

2. 加藤研究室，先生が住む「町家」は私たちの活動拠点－町並みに想いを詰め込む高専生の活動－，建築雑誌2009年4月号，日本建築学会，pp.28-29，2009.4

3. 加藤，インターンシップ制度の積極的活用－研究活動と一体的に実施した場合の教育効果と課題－，高専教育第32号，pp.489-194，独立行政法人国立高等専門学校機構，2009.3

4. 加藤，八女福島伝建地区における「管理委託方式」による空き家修理・活用の試み，日本建築学会技術報告集第29号，日本建築学会，pp.281-284，2009.2

5. 加藤，小学生を対象とした伝統工法体験の実施とその評価－建築士が企画・運営する住まい・まち学習に関する研究－都市計画論文集，pp.193-198，日本都市計画学会，2007.2

加藤 浩司
Koji Kato

Profile

1992年　東京大学教育学部附属高等学校 卒業
1996年　工学院大学建築系学科（建築学科建築学コース）大学卒業（渡邊）研究室
1998年　工学院大学大学院（工学研究科建築学専攻）大学院修了（渡邊）研究室
1998年4月　千葉大学大学院自然科学研究科博士後期課程（北原研究室）
2002年3月　千葉大学大学院修了　博士（工学）取得
2003年4月　有明工業高等専門学校建築学科　講師
2004年4月　熊本県立大学研究員（～2006年3月）
2005年4月　有明工業高等専門学校建築学科 助教授
2007年4月　有明工業高等専門学校建築学科准教授（～現在）
2008年6月　大牟田市まちづくり基金事業審査委員会委員長（～現在）

メールアドレス（kkoji@ariake-nct.ac.jp）

建築と都市の歴史からみた 増上寺境内と芝公園の研究

伊坂 道子

Michiko Isaka
伊坂 道子

株式会社　伊坂デザイン工房共同代表、
一級建築士、インテリアプランナー、
博士（工学）

略歴

東京生まれ
1976年　武蔵野美術大学　造形学部　建築学科卒業
1983年　伊坂重春とともに伊坂デザイン工房設立、現在に至る
1994～97年　東京大学工学部研究生
2008年～　武蔵野美術大学非常勤講師
2009年　工学院大学大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程修了

受賞

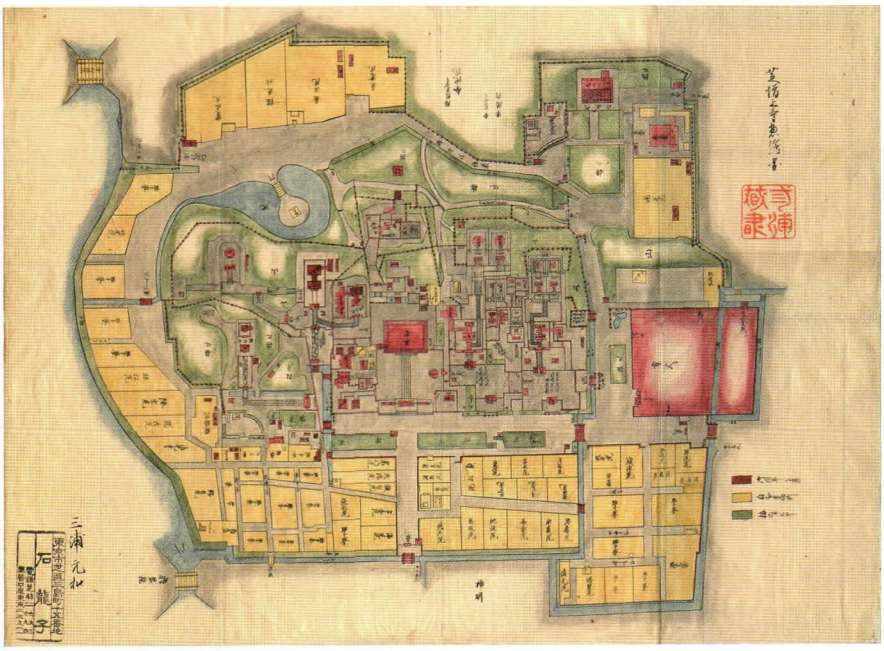
1989年　NSGショップアンドディスプレイコンテスト最優秀賞
1991年　札幌市都市景観賞
1999年　東京建築士会住宅建築賞優秀賞
他

本研究は、江戸を代表する寺院であるにもかかわらず、これまで建築と都市の歴史学分野からの研究がおこなわれてこなかった増上寺をテーマとする。江戸三大寺院の一つである芝増上寺旧境内全域を対象とし、市街化した現地で看過されている江戸期の旧跡発見を通じて、旧山内寺院、将軍霊廟旧地をはじめとする場所の近世本来の成り立ちや都市的構造を分析し、近代におけるその変容過程を解明することで、その歴史的景観理解と伝承に寄与しようとするものである。

芝増上寺は徳川家菩提寺として江戸期を通じて発展し、幕末の境内領域は現在の10倍以上、約57haの広さがあった。伽藍と将軍霊廟を取り巻くように建立された山内寺院（子院）の数は最盛期には５０を超え、山内に多数おかれた学寮とを合わせ約三千人が生活し、境内は都市的な様相をみせていた。本研究は、こうした旧境内全体を一つの社会的地域として捉え、近世から近代への変遷を連続的に解明し、現況との対照に努めている。

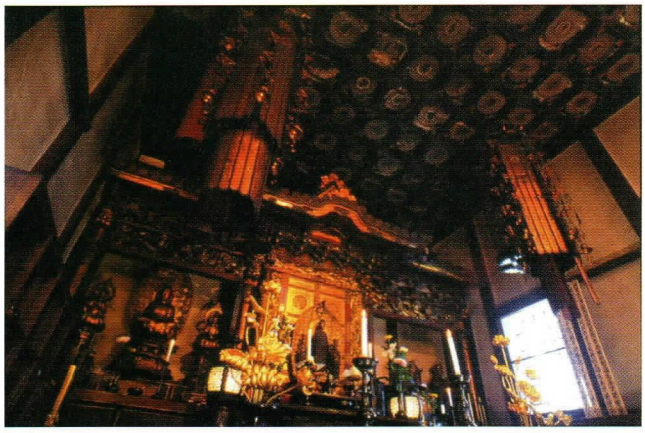
江戸期において隆盛をきわめた増上寺は、明治初頭には神仏分離や寺領上地、芝公園への指定など、境内地解体に見舞われた。しかしながら、それ以後も旧境内では、僧や神官の生活拠点として、その社会や都市的構造を存続させていた。戦災焼失以降は、増上寺旧境内地区は市街化が顕著であり、江戸期の構造は見えにくくなったものの、その骨子は今日でも現地に遺されており、こうした稀少、かつ東京を代表できる歴史的景観は継承されなくてはならない。

本研究はこうした観点から、江戸期における増上寺境内の都市的全貌を明らかにするために、増上寺所蔵古記録や旧幕府引継書、古写真などの史料を発掘・分析し、境内を機能させていた山内寺院（子院）の成立と建造物の実体解明にも努めた。江戸以来、旧境内にて現在まで継承された旧山内寺院は、26件であるが、このうち、江戸期の建造物を一部伝承している寺院が4か所あることも、本研究にて特定できた。



1. 推定1854～1859の境内　『芝増上寺惣絵図』妙定院所蔵　（右が北）
境内中央に本堂、その左は二代将軍と正室の南廟領域。右は六代・七代将軍の北廟。さらにその右が本坊。将軍家縁者の墓所も山内に多数営まれた。霊廟の別当や別院・坊中などの山内寺院と、学寮がとり囲む。東に大門、北に御成門。松原と御成道に沿い、伽藍と霊廟建造物群が東面する。

2. 増上寺三解脱門（重要文化財、元和 8 年／ 1622 建立、撮影・明治期／江戸東京博物館所蔵）旧境内の中心に現存する。



3. 常照院本堂内陣（本研究により国登録文化財、推定明和 6 年／ 1769 建立）
性高院（徳川家康四男／松平忠吉）位牌堂の部材が転用されたと伝わる建物。
土蔵造りの内部は小規模ながら装飾性が高く厳かである。

4.. 心光院表門（本研究により国登録文化財、寛保 3 年／ 1743 建立、文化元年／ 1804 修補）

5. 廣度院表門と練塀（本研究により国登録文化財、推定 18 世紀後期～建立）廣度院は増上寺最古の子院。御成道と大門通り双方に面し往時の街路景観を伝える。

本論は序章、第 1 章から第 7 章、および終章で構成されている。

序章「増上寺旧境内地区における歴史的景観の特質　江戸三大寺院の視点から」では、旧浅草寺、旧寛永寺寺域の現況との比較において、子院の残存位置が、旧境内の骨格を示しているのは増上寺寺域のみであることなど、増上寺旧境内の歴史的景観の特徴を指摘した。

第 1 章「境内の移りかわり　山内図が伝える変遷」では、増上寺境内において、坊中、別当、三蓮社、別院という四つの職掌に分かれる山内寺院の発生状況を年代ごとに分析し、境内の発展過程を示した。主要伽藍や霊廟の焼失を免れて連続的に境内が開発されたことから、一貫した山内寺院増殖の過程を構造的に留めていたことがその特徴であることを示した。

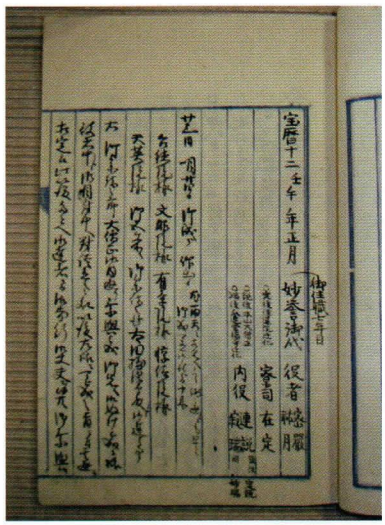
第 2 章「山内寺院の職掌分化と建造物形式　徳川家菩提寺における子院建造物の規範と景観」では、幕末における山内寺院の建造物群の実態を解明した。同じ将軍家菩提寺であった寛永寺の作事記録は存在しない、稀少な史料として『諸宗作事図帳』増上寺部分を採用し、増上寺山内寺院すべての平面図を分析している。職掌や成立要因により建造物形式が異なり、特徴がみられることを明らかにした。

第 3 章「旧山内寺院建造物調査　市街地に残る江戸の記憶」は、増上寺旧境内地区で現在も継承されている旧山内寺院のうち、戦災を免れた近世の建造物の現存を特定できた、常照院、心光院、廣度院について、来歴の聞き取りおよび建造物の実測調査、関連事項の古記録解明等を行った報告である。これらの建造物は本調査により、国の登録有形文化財となっている。

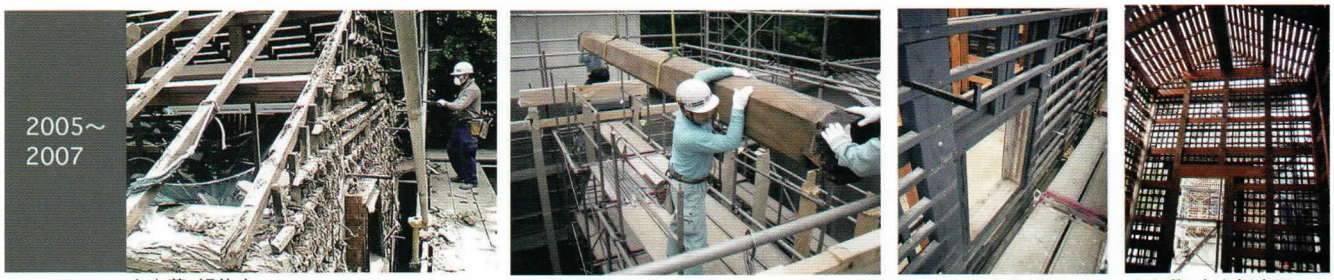
第 4 章「妙定院の創立経緯と堂舎の変遷　大僧正の動向と別院の営み」は、前章同様に、旧山内寺院の妙定院において、近世に建立された熊野堂と上土蔵の現存を特定し、国登録有形文化財となった建造物と来歴についての調査報告である。平成十七年には、著者が設計監理を担当した、これら土蔵保存修理工事の着工時に熊野堂内部から古記録が複数発見され、定月大僧正在任中の動向、妙定院の創立経緯や堂舎の履歴等について、知ることができた。これにより、増上寺別院草創期における別院と学寮・境内の様相や、別院構成の特徴を示す妙定院の堂舎等に

6. 妙定院熊野堂（本研究により国登録文化財、寛政 8 年／ 1796 建立）

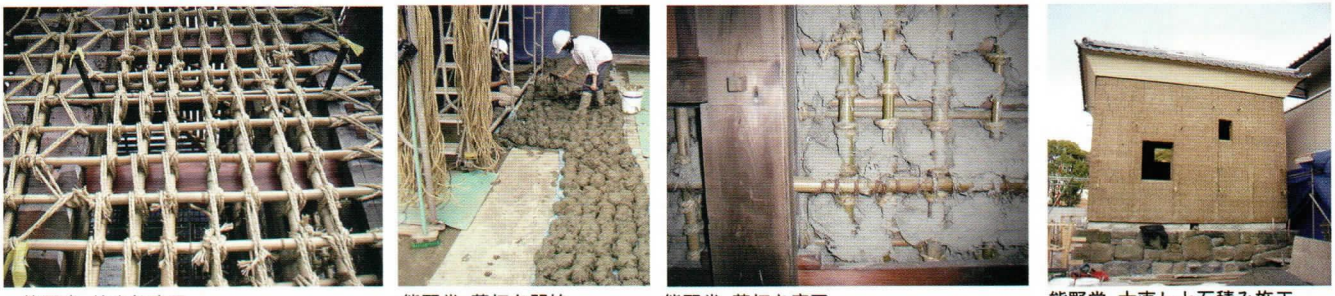
7. 妙定院上土蔵（本研究により国登録文化財、文化 8 年／ 1811 建立）



8. 妙定院蔵『日史』妙定院は増上寺第四十六世妙誉定月大僧正を開山とする。

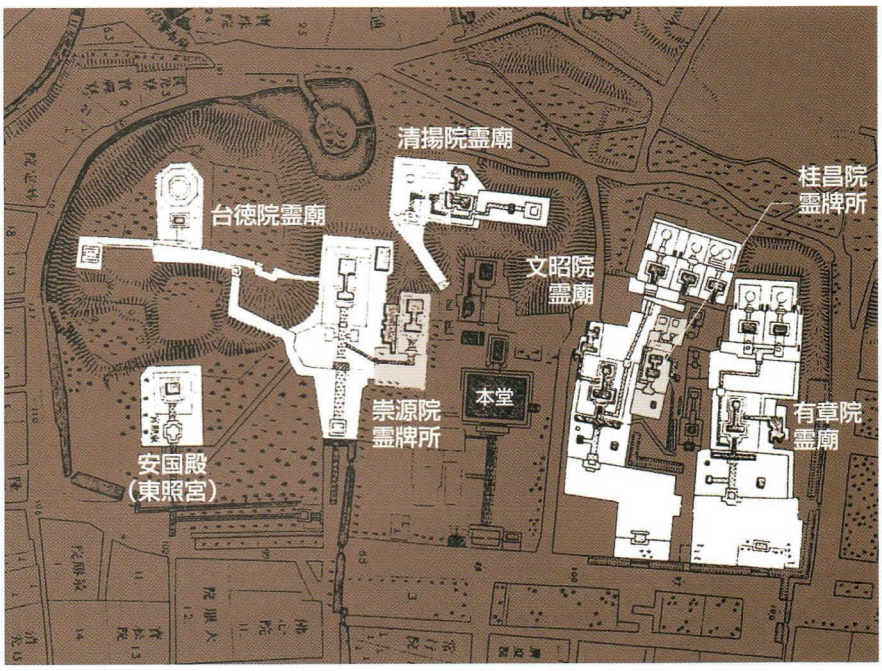


上土蔵 解体中　上土蔵 上棟　上土蔵 墨渋塗　上土蔵 木小舞完了



熊野堂 竹小舞完了　熊野堂 荒打ち開始　熊野堂 荒打ち完了　熊野堂 大直しと石積み施工

9. 妙定院熊野堂・上土蔵保存修理工事。建造物の保存は、近代工法では再現できない技術を伝承することでもある。



10. 芝・増上寺霊廟の配置
明治十九年地図に記名 (右が北) 本堂の左右と後方に将軍の霊廟建築が配された。

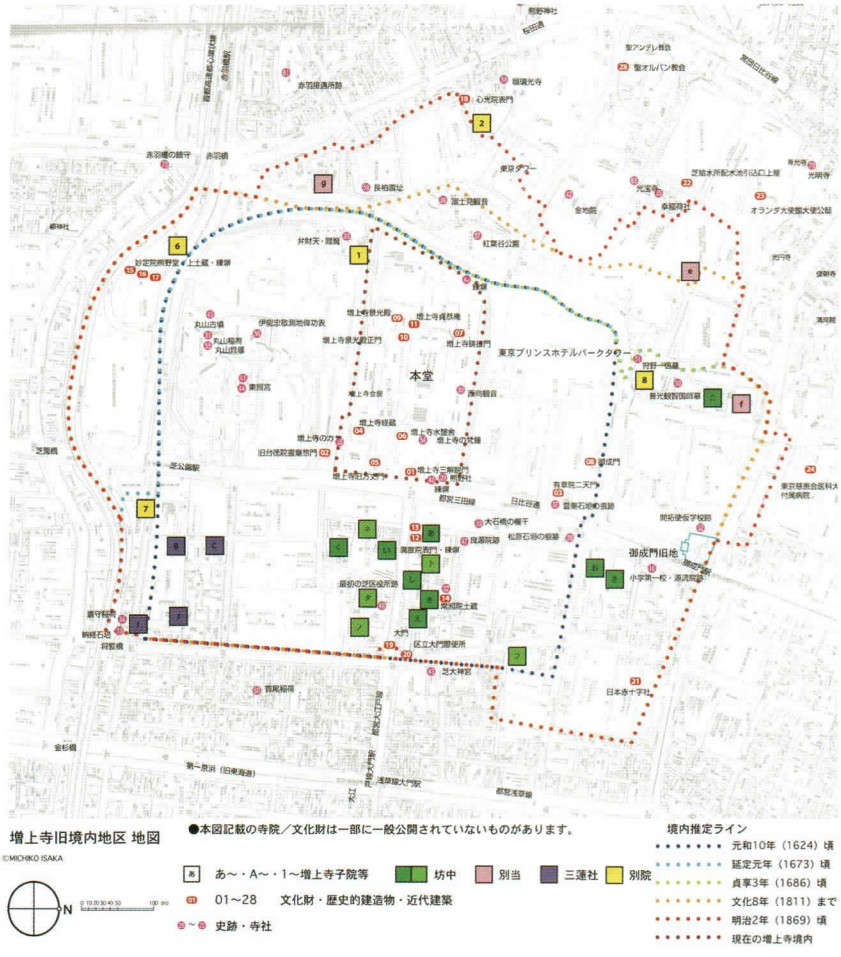
ついて分析を行った。

第 5 章「将軍参詣と法会　御成道と有章院霊廟二天門前の風景」では、旧境内での将軍参詣路であった御成道に面して現存する有章院霊廟二天門について、周辺の往時の景観と、将軍参詣という都市の祝祭行事の際に境内と山内組織はどのように機能したかを、古記録類から考察をした。今日の日比谷通りに現存する旧跡が御成道と霊廟の遺構を伝える貴重な景観要素であることを示している。

第 6 章「霊廟の修復と儀式　旧台徳院修復儀式についての考察と惣門屋根の仕様変更」では、日光東照宮に先行し同じ作事方によって造営

11. 有章院霊廟二天門（重要文化財、享保２年／ 1717）七代将軍徳川家継霊廟の門。旧御成道に現存する。

12. 旧台徳院霊廟惣門（重要文化財、寛永９年／ 1632）二代将軍徳川秀忠霊廟の門。日光東照宮に先行する時代の代表的霊廟建築の遺構。芝霊廟は大半が戦災焼失し、 増上寺南廟跡地に残る貴重な存在。



13. 歴史的建造物と旧山内寺院、史跡等の分布。境内の発生から現代に至るまでの領域の変遷。江戸三大寺院である浅草寺、増上寺、寛永寺のなかで、旧寺域の歴史的骨格が顕著に残る増上寺。

された二代将軍御霊屋の壮大な建造物群の遺構である台徳院霊廟を題材とした。古記録から、文政十二年（1829）の修復により、現存する旧台徳院霊廟惣門は、瓦から銅板へと屋根材変更があったことも明らかにしている。

第７章「明治期の増上寺旧境内

山内寺院の動態にみる芝公園の変容」では、明治期における境内と山内寺院組織や建造物等の変化と社会背景を考察し、東京の近代化がどのように旧境内の景観変化に影響したかを解明している。増上寺旧山内寺院の現在の残存率は過半数となったが、その分布は、大門通りに残るものが圧倒的で、御成門が移転し、変貌した旧御成道には僅かな残存となった。こうした状況は、戦災焼失以前の、明治初頭から後期に至るまでにほぼ決定していたことを示した。

終章「御成道と大門通りの今

江戸から東京に伝わったもの」では、増上寺旧境内における歴史的景観の独自性について総括した。文化財建造物が連続して接道し、松原や霊廟敷地の痕跡がのこる旧御成道や、旧境内領域の広がりと江戸の記憶を伝承する子院建造物などに象徴される、通過交通や新旧混在のなかに厳然と残る歴史的景観は、非常に個性的で東京の景観を代表できるものであり、今後の継承が望まれるものであることを提示し、本論文の結びとした。

謝辞

本論文のご審査およびご指導をいただいた、主査・初田亨先生、副査・谷口宗彦先生、後藤治先生、中島智章先生（以上工学院大学）、光井渉先生（東京藝術大学）、また研究生時代にご指導をいただいた鈴木博之先生（東京大学）に心より御礼を申し上げます。

免震レトロフィットに関する研究

鱒沢　曜

You　Masuzawa
鱒沢　曜

学歴

東京都私立國學院高等学校、1989 年卒業
工学院大学工学部第二部建築学科
大学卒業　1995 年　望月洵研究室
工学院大学大学院工学研究科建築学専攻
大学院修了　1997 年　望月洵研究室
メールアドレス　masuzawa@ers-co.jp

略歴

1997 年～ 2006 年	株式会社横河建築設計事務所
2006 年～	株式会社イー・アール・エス　現在，リスクマネジメント部副部長
2009 年～	工学院大学工学部建築学科久田研究室客員研究員

■はじめに

本学教授　久田嘉章先生のご指導の下，2004 年 4 月より社会人ドクターとして免震レトロフィットに関する研究を行い，2009 年 9 月，「免震レトロフィット仮受け工法の開発と実施工への適用」と題して博士論文を執筆いたしました。ここでは，論文の概要をご紹介いたします。

■論文概要

本論文は，以下に示す 5 つの章で構成されている。

第 1 章では，本研究の背景と目的について述べている。

自然災害リスクが世界でも極めて高いといわれる日本では，**表 1** に示すように大きな被害地震の歴史とともに耐震基準の制定と改正がなされてきたため，過去の耐震基準には基づいているが現行基準を満足していない，いわゆる既存不適格建築物が多く存在するといった問題を抱えている。特に昭和 56 年の法改正前に建てられた建物は 1995 年の兵庫県南部地震において多く被災しており，今もなお多数存在するこれらの建物の耐震改修を促進することが地震被害の軽減と早期復旧を図る上で大変重要である。

耐震改修方法には様々なものがあり，それぞれの特徴に応じて**図 1** のように分類することができる。本研究で扱う免震レトロフィットは応答制御型或いは入力低減型の改修法として位置付けられ，**図 2** に示すように既存建物に積層ゴムアイソレータなどの免震部材を設置して建物を免震化する改修方法であり，免震部材を設置する位置によって基礎免震と中間階免震に大別される。免震レトロフィットは他の改修方法に比べ工事費や施工期間においては劣るが，機能性も含めた耐震安全性が最も高く改修工事中や改修後の使用性にも優れているため，**図 3** に示すように庁舎に最も多く適用されているほか寺社などの歴史的建造物などに適用され，国内において約 80 棟の建物で実施されており，その約 6 割は建

表 1　関東大震災以降の主な被害地震の歴史と耐震基準の変遷

関東大震災(M7.9)	大正 12 年(1923)	
	大正 13 年(1924)	市街地建築物法改正（耐震設計の規定化）
福井地震(M7.1)	昭和 23 年(1948)	
	昭和 25 年(1950)	建築基準法制定（全国の建物に対する耐震設計の規定化）
十勝沖地震(M7.9)	昭和 43 年(1968)	
	昭和 46 年(1971)	建築基準法改正（RC 造柱のせん断強度の向上）
宮城県沖地震(M7.4)	昭和 56 年(1981)	建築基準法改正（新耐震設計法の導入）
兵庫県南部地震(M7.3)	平成 7 年(1995)	耐震改修促進法制定（既存不適格建築物の耐震化の推進）
	平成 12 年(2000)	建築基準法改正（従来の仕様規定に加え性能規定の導入）
新潟県中越地震(M6.8)	平成 16 年(2004)	
	平成 18 年(2006)	耐震改修促進法改正（促進計画・指導強化・支援措置の拡充）
	平成 19 年(2007)	建築基準法改正（建築確認・検査の厳格化等）

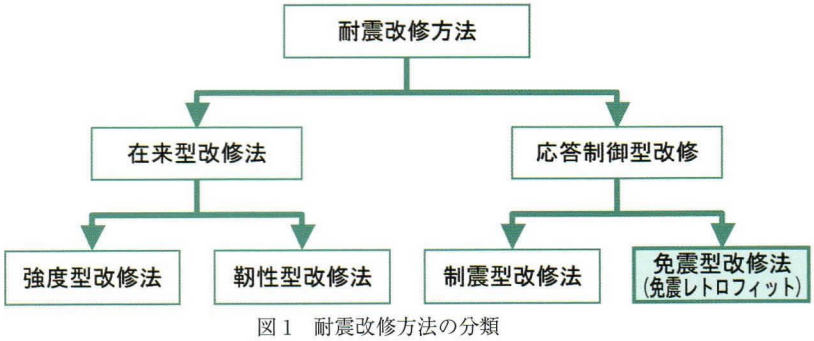


図 1　耐震改修方法の分類

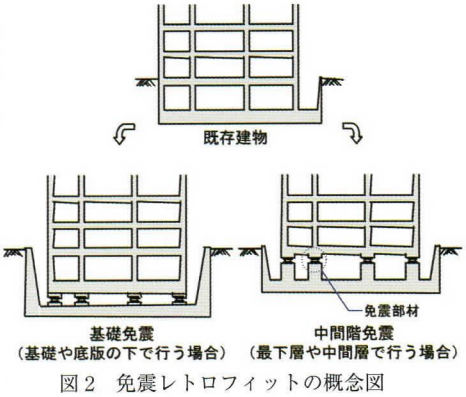


図 2　免震レトロフィットの概念図

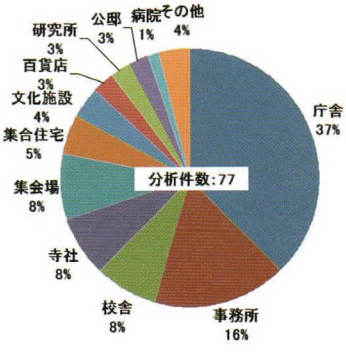


図 3　免震レトロフィット実施確認件数および用途比率（本研究において 2009 年 8 月末までに免震工事完了を確認した物件）

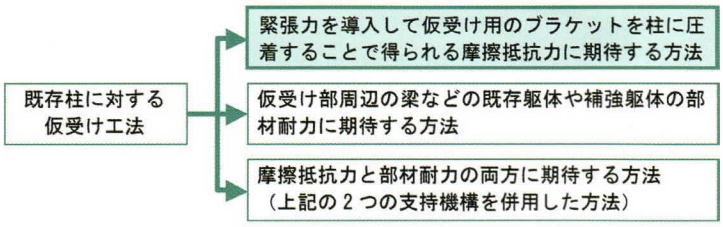


図４　既存柱に対する仮受け工法の分類

図５　摩擦抵抗力を利用した主な既往の仮受け工法

物直下の地盤を生かしながら改修工事を行うことができる中間階免震を採用している。

免震レトロフィットを行う場合，一般的には免震部材を設置するまでの間に建物上部の重量を支えるための「仮受け」を行う必要があり，工事中の安全性を確保するために重要な役割を果たす。近年，対象構造物の大型化や居付き工事（建物を使いながらの工事）が求められることから，大きな鉛直荷重を安全に支持することができる信頼性の高い仮受け工法の使用は必須であり，実験などによりその鉛直荷重支持性能を評価することが重要となるが，既往の研究において重量構造物を想定した検討例は少なく，さらに実大実験によって破壊モードや終局強度などの検討を行った研究は見当らない。

こうした背景から，本研究では，中間階免震レトロフィットに適用可能な既存柱の仮受け工法を対象に，その適用範囲を広げるために，高軸力を受ける柱の仮受けに適した工法の提案，仮受け部の鉛直荷重支持性能の実大実験による評価，実験結果に基づく終局強度算定式の提案，仮受け部の設計法の提案および実施工における適用性の検証を研究目的としている。

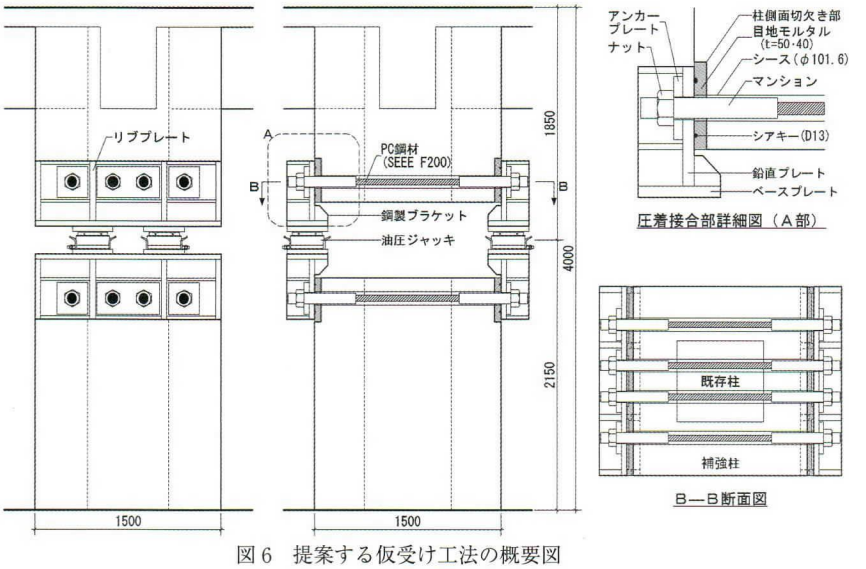


図６　提案する仮受け工法の概要図

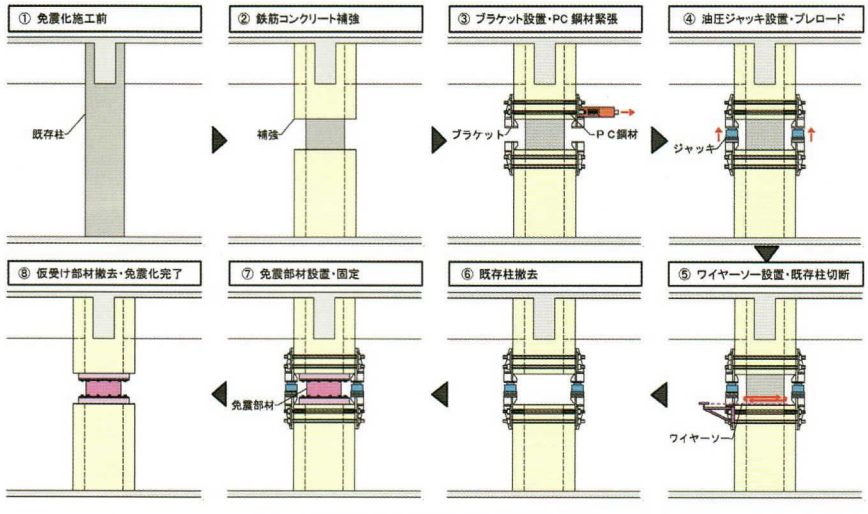


図７　提案する仮受け工法の施工過程

第２章では，高軸力を受ける柱の仮受けに適した工法を提案し，その特徴について述べている。

既存柱の仮受け工法は，**図４**に示すように主に３種類に分類することができ，本研究において提案する仮受け工法は，緊張力を導入して仮受け用のブラケットを柱などの躯体に圧着することで得られる摩擦抵抗力に期待する方法のひとつに位置づけることができる。同種の既往の工法には，**図５**に示すように柱を箍で周囲から締め付けるように緊張力を導入する方法が多く，PC鋼材が柱の外側に位置するので，柱を貫通することなくブラケットを柱に圧着接合することができる利点を持つ一方，ブラケットには緊張力導入時や仮受け時の偏心荷重が作用するため，高軸力を受ける柱に適用するためにはブラケットを軸力に応じた強度と剛性の高い構造にする必要があり不経済な面がある。これに対し本工法では，**図６**に示すように柱に直接PC鋼材を挿通してブラケットを圧着することにより，コンパクトな鋼製ブラケットを用いながら大きな緊張力を直接圧着接合面に導入することができ，なおかつ圧着接合面におけるシアキー付鋼板とグラウトモルタル間の摩擦抵抗と支圧抵抗によるせん断力伝達機構を有することで，大きな柱軸力を効率的にブラケットで支持することができるといった特徴がある。本工法の施工過程を**図７**に示す。

第３章では，実大試験体を用いた漸増載荷実験および荷重保持実験を行い，提案工法の鉛直荷重支持性能を実験により評価している。また，既往の実験式を拡張し，本工法における鉛直荷重支持性能の評価においても適用可能な圧着接合部の終局せん断強度式を提案し，さらに，本工法を実施工へ適用する上での仮受け部の設計法を提案している。

表2　試験体諸元

試験体	既存柱断面 (mm)	補強柱断面 (mm)	高さ (mm)	圧着面形状 W×H×D (mm)	モルタル強度 (N/mm²)	PC鋼材本数	設計緊張力 (kN)	設計軸力 (kN)	載荷軸力 (kN)	荷重倍率 (%)
No.1	700×700	1500×1500	1550	1500×330×50	55.5	4	5276.8	3269	5913	181
No.2	700×700	1500×1500	1550	1500×330×50	55.5	4	5276.8	3269	9846	301
No.3	700×700	1500×1500	1550	1500×480×50	55.5	6	7915.2	4950	9835	199
No.4	700×700	1500×1500	1550	1500×480×50	55.5	6	7915.2	4950	9829	199
No.5	750×700	1550×1550	1225	1550×600×40	45.0	2	2638.4	1933	5803	300
No.6	1100×1100	1640×1700	1225	1700×600×40	45.0	4	5276.8	4455	12127	272
No.7	1100×1000	1640×1600	1225	1600×600×40	46.1	4	5276.8	4434	12530	283
No.8	1000×1000	1600×1600	1225	1600×600×40	49.4	6	7915.2	6036	17602	292

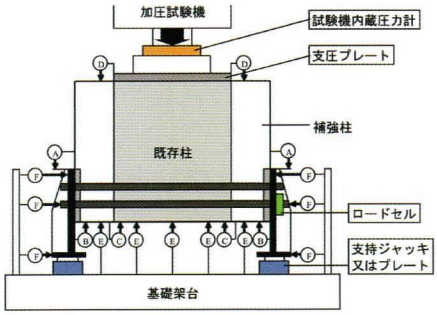
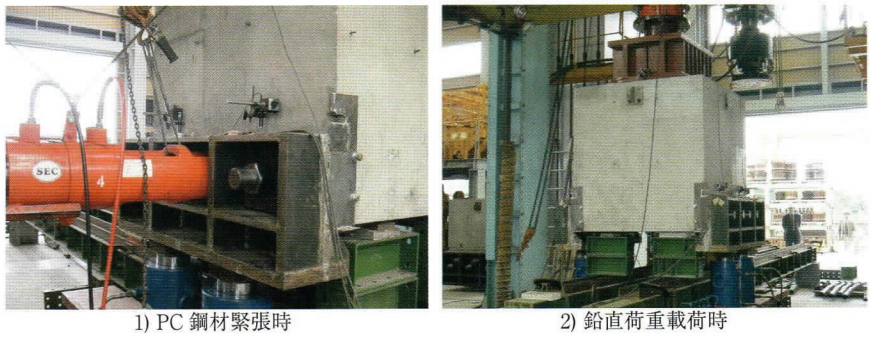


図8　載荷方法および計測器の配置（A～Fは変位計を示す）



1) PC 鋼材緊張時　　2) 鉛直荷重載荷時

図9　載荷実験時の状況（試験体 No.1, No.2）

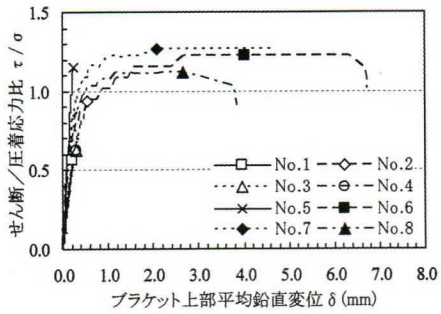


図10　漸増載荷実験結果におけるせん断／圧着応力比—変位関係

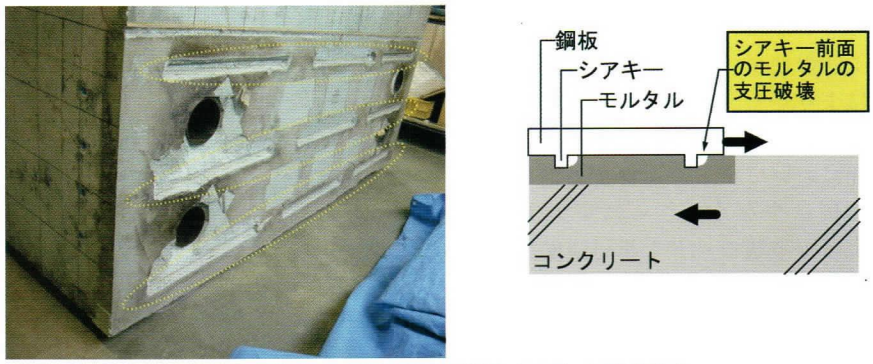


図11　試験後の圧着接合面の状況（No.7）と破壊形式

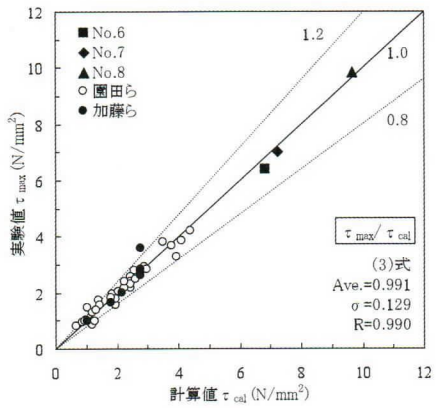


図12　終局せん断強度の実験値と計算値の比較

表2に示す8体の実大試験体を用いた漸増載荷実験および荷重保持実験を行い，得られた仮受け部の破壊形式，圧着接合部のせん断伝達特性および計測値の経時変化などを示すとともに，既往の研究における同種の圧着接合部に関する要素実験結果や，設計および施工条件から期待される仮受け部の性能との比較を行った。載荷方法および計測器の配置を**図8**，載荷実験時の状況を**図9**に示す。

漸増載荷実験における圧着接合部のせん断／圧着応力比（τ / σ）とブラケット上部（**図8**における変位計A）で測定した鉛直変位（δ）の関係を**図10**に示す。No.6～No.8の試験体で**図11**に示すようなシアキー前面のモルタルの支圧破壊による終局状態を確認することができた。

実験結果に基づき，既往の研究において提案されているシアキー付鋼板とコンクリートの接合面におけるせん断強度算定式を拡張し，本研究で扱う圧着強度の範囲にまで適用可能な終局せん断強度式として下式（論文中における(3)式）を提案した。

$$\frac{\sigma}{F_c} \leq 0.03 \text{ のとき}, \frac{\tau_{cal}}{F_c} = m \times \left(0.355 + 42.3\frac{\sigma}{F_c}\right) + 0.6\frac{\sigma}{F_c}$$

$$\frac{\sigma}{F_c} > 0.03 \text{ のとき}, \frac{\tau_{cal}}{F_c} = m \times 1.63 + 0.6\frac{\sigma}{F_c}; \quad \frac{\sigma}{F_c} \leq 0.18$$

ここで，τ_{cal}：圧着接合面における終局せん断強度 (N/mm²)
F_c：モルタルまたはコンクリート強度 (N/mm²)
σ：圧着応力 (N/mm²)
m：支圧面積比(支圧面積／圧着接合面積)

提案式による終局せん断強度の計算値は，**図12**に示すように既往の実験結果を含め実験値を精度良く捉えることが確認できる。

本章では，さらに提案式において定義した圧着接合面における支圧強度について考察を加えている。また，本工法を実施工へ適用するための仮受け部の設計法の提案を行い，実験結果における支圧強度のばらつきを考慮し下限に近い値を捉えることができる終局せん断強度式（論文中における（4）式）を設計式として提案している。ここでは，提案する仮受け部の設計フローを**図13**に示し，詳細については紙面の都合により割愛する。

第4章では，本工法を用いた免震レトロフィット実施例のうち，県庁舎および病院における実施例を示し，実施工における適用性の検証を行っている。

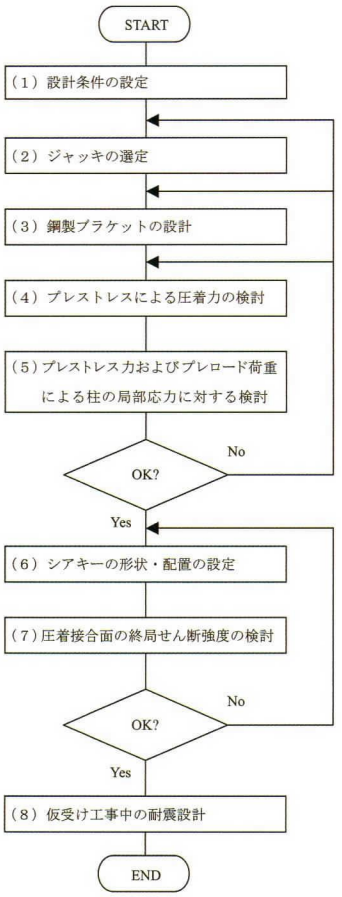


図 13　仮受け部の設計フロー

図 14　山梨県庁舎本館

図 15　県西部浜松医療センター

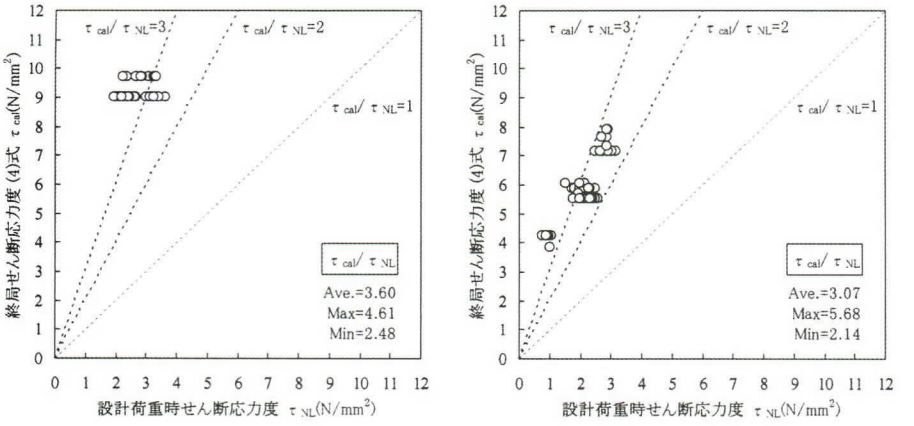


図 16　終局せん断強度の設計荷重に対する安全率（τ_{cal} ／ τ_{NL}）
（左図：山梨県庁舎本館，右図：県西部浜松医療センター）

一つ目の事例は，日本で最初の県庁舎への適用例として，山梨県庁舎本館（**図 14**）における実施例を示した。本事例は，免震レトロフィット工事を効率的に行うとともに，仮受け部材の撤去により改修後の免震層に十分な建築空間を確保するために，本工法を開発し適用した最初の実施例である。地上 8 階，地下 1 階の鉄筋コンクリート造建物の地下 1 階における中間階免震工事において，計 40 箇所の柱の仮受けに本工法を適用している。

二つ目の事例は，日本で最初の病院への適用例として，静岡県西部地域における災害拠点病院に位置付けられている県西部浜松医療センター（**図 15**）における実施例を示した。本事例は，近接して建つ 2 棟の建物に対し，使いながら効率的に耐震改修を行い，さらに地震災害時における病院機能の維持を図るために，2 棟の建物を一体化して免震レトロフィットを行い，中間階免震部に本工法を適用した実施例である。地上 9 階，地下 1 階の鉄骨鉄筋コンクリート造建物の地下 1 階における中間階免震と一部の基礎免震を併用した計 89 箇所の免震部材設置箇所うち，本工法を 71 箇所の中間階免震部の仮受け工事に適用している。

第 3 章で提案した設計式により求めた終局せん断強度を τ_{cal}，設計荷重時せん断応力を τ_{NL} とし，仮受け工事に本工法を採用した全ての柱について算定した安全率（τ_{cal} ／ τ_{NL}）を **図 16** に示す。安全率は全て 2.0 を上回っており，設計において期待された安全性を確認することができた。

第 5 章では，各章における結論を整理している。

第 1 章では，旧耐震基準に基づき建てられた既存不適格建築物に対する耐震改修の重要性，免震レトロフィットの特徴と調査した実施物件に見られる傾向，安全で高性能な仮受け工法の必要性など，本研究の背景と目的について述べた。第 2 章では，高軸力を受ける柱の仮受けに適した工法の提案を行い，その特徴を示した。第 3 章では，仮受け部の鉛直荷重支持性能の実大実験による評価，実験結果に基づく終局強度算定式の提案，仮受け部の設計法および設計式の提案など，本論文において核となる部分について論じた。第 4 章では，本工法の適用例における庁舎および病院の免震レトロフィット実施例に基づき実施工における適用性を検証し，その有効性を示した。

以上が論文概要である。本論文が，多少なりとも免震レトロフィットの普及および発展に貢献し，ひいては既存建物の耐震改修の促進に資するものとなれば幸いである。

■おわりに

社会人ドクターではこれまで設計や監理を通じて経験してきたことを一歩進めて，研究として取組んで参りましたが，スタートしてからの 5 年半の間には，久田先生をはじめ大変多くの方々に支えられてきました。本学教授　宮澤健二先生，吉田倬郎先生，東京大学教授　中埜良昭先生，福岡大学教授　高山峯夫先生には，論文審査の過程で大変貴重なご示唆やご指摘をいただきました。また、本学名誉教授望月洵先生には、学生時代に研究の基礎となる構造力学や耐震工学を懇切にご指導いただきました。この場を借りて，心より御礼申し上げます。

建物運用時の廃棄物資源回収と環境性能評価に関する研究

西川 豊宏

Toyohiro Nishikawa
西川 豊宏

学歴

1990年　山梨県立甲府西高等学校卒業
1994年　工学院大学工学部建築学科卒業
1996年　工学院大学大学院修士課程修了
2009年　工学院大学大学院博士課程修了
　　課程博士

略歴

1996年に本学大学院修士課程を修了後、三井住友建設㈱において設備設計業務に従事する。2004年より㈱ノエルにおいて住宅の商品企画業務に従事するかたわら、本学建築学科非常勤講師となる。2006年に本学大学院博士課程に入学。現在は㈱日本設計において設備設計業務に従事している。

資格

一級建築士、建築設備士
一級管工事施工管理技士
空気調和衛生工学会設備士

1. はじめに

建築物から排出される廃棄物は、そこで消費されるエネルギーや水のように消費と同時に消散もしくは処理されるものではなく、消費から処分までに様々な過程が存在し、その処理には手作業による人的労力や個人判断といった明確な判断基準がない過程も多く含まれている。とりわけ一般廃棄物の資源回収は、運用段階で建物から排出される廃棄物の品目別発生割合や発生密度が建物用途や立地条件により異なること、回収された廃棄物を再資源化した場合の取引市場における需給バランスが恒久的環境に成熟していないこと、廃棄物資源回収によって期待される環境性能の評価が十分でないことから、具体的回収手法を確立することが難しい。また、一般廃棄物は、産業廃棄物に比べて排出量は少ないものの（図1）、取り扱うべき品目が多様で単一品目当たりの発生密度は薄く、人間の生活活動から排出される、いわゆる排泄物的廃棄物であるため、統計データーは整備されているが建物単体での実績値や一般廃棄物そのものの特性については不明な点が多い。このような背景の下、当研究は、実態調査に基づき一般廃棄物の回収、保管、処理に関する現状と課題点を明確にし、廃棄物資源回収による環境性能を評価したものである。

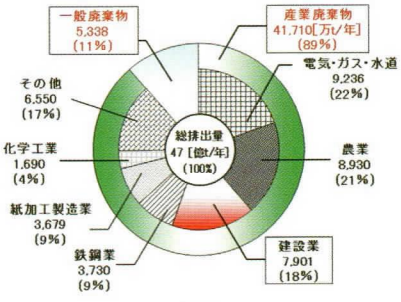


図1

2. 資源循環と廃棄物処理責任

我が国の循環型社会形成に向けての取り組みにおいては環境基本法及び循環型社会形成推進基本法が制定され、廃棄物の処理及び清掃に関する法律や資源有効利用促進法により、廃棄物の適正処理および資源回収への取り組みが推進されている（図2）。廃棄物は処理責任所在の違いから産業廃棄物と一般廃棄物に分類される。前者は排出当事者にとって不要物であるため処理費用の削減や効率化が推進されているが、後者は処理責任者と分別や資源回収に取り組む当事者とが必ずしも一致してなく、このことが資源回収を推進する上での課題の一つになっている。

3. 自治体基準に見る一般廃棄物処理の現状

国内で推進されている一般廃棄物の資源回収ついて自治体の行政指導を実態調査した（図3）ところ、事業施設から排出される廃棄物は処理責任が事業者側にあるため住居施設に比べると条例等による規定が自治体毎に様々であった。他方、環境保全の視点から自治体は、資源回収の推進に向けて住居施設のみならず事業施設からの廃棄物に関しても指導

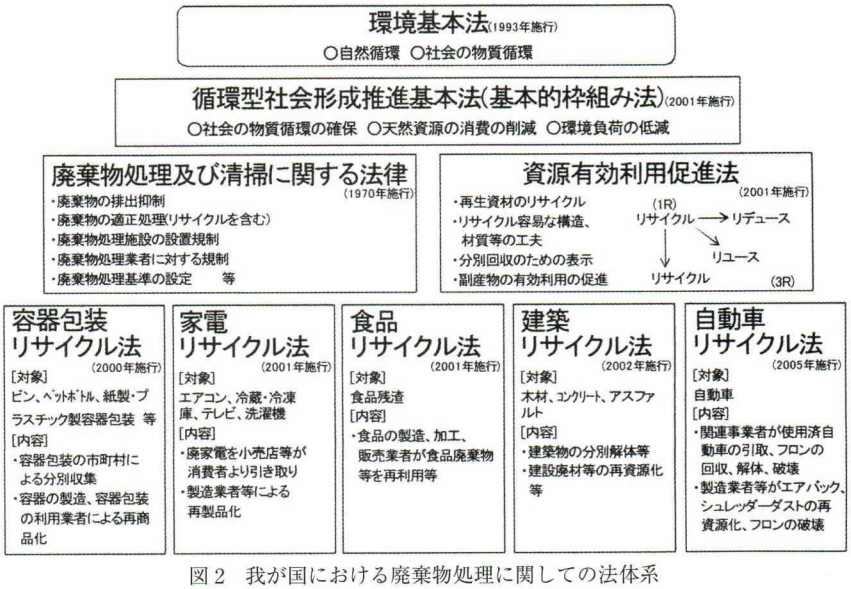
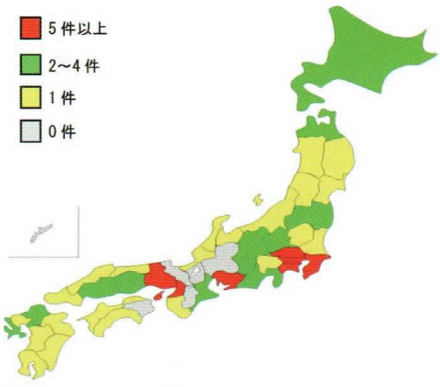


図2　我が国における廃棄物処理に関しての法体系



【調査・回答自治体の人口】(総務省 2006 年度当時)

全国総人口	:	127,805,594 人
アンケート回答自治体総人口	:	47,916,974 人 (37.5%)
アンケート対象自治体数	:	100 件
アンケート回答自治体数	:	92 件

図 3　自治体へ行った廃棄物処理に関するアンケートに対する回答件数

写真　廃棄物の品目特性値を測定する調査風景

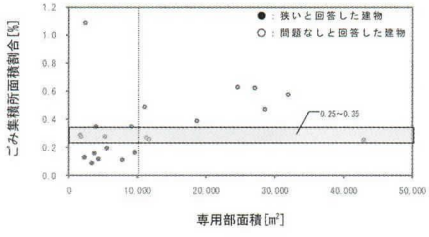


図 4　専用面積とごみ集積所面積の割合との関係

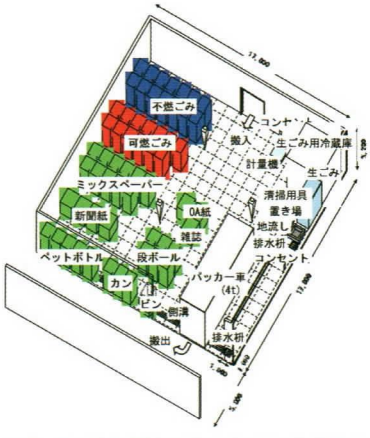


図 5　資源回収を支援するごみ集積所の空間計画例

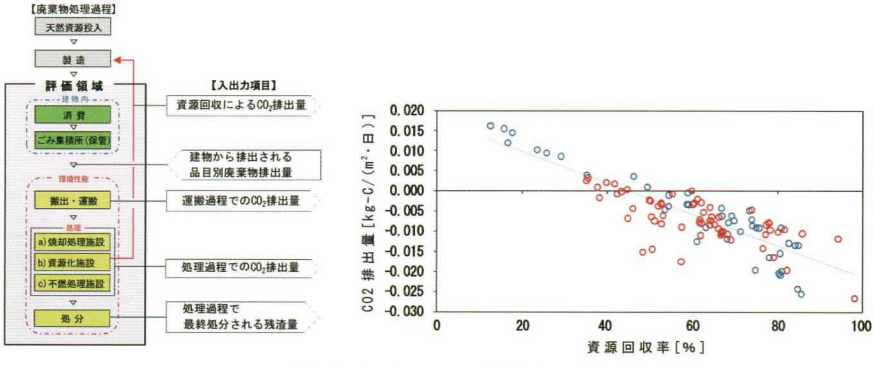


図 6　廃棄物資源回収による環境性能評価結果の一例

的役割を担う姿勢も調査からうかがい知る事が出来た。しかしながら、運用建物からのごみ収集に関しての行政基準は自治体により差異が見られ、その規定根拠が曖昧な例も散見された。

4. 運用建物での廃棄物処理の現状

東京都 23 区を主とした運用中の建物 55 件において建物内の廃棄物回収と保管に関する独自の調査を行い、廃棄物の資源化を行うために必要な事項について考察した。それによると、ごみ集積所面積が専有面積に対し 0.35% 以上確保された建物では、概ね「広さ」に関して問題は無いとの回答であった（図 4）が、廃棄物の分別を行なう作業スペースが不足しているとのヒアリング結果も多くあり、資源回収を適切に行う上での課題とも言えた。また、調査建物における分別品目数は、建物特有の分別品目を除くと概ね 11 品目であり、紙類及びビン・カンの分別は各建物とも確立されていたが、プラスチック類においては取り扱いに差異が見られた。現地調査から、建物内で発生する廃棄物の回収品目によっては重量で管理されるが、計画段階では容積による検討が必要である。建物内での回収、収集段階におけるごみかさの特性値として、分別品目毎の見かけの比容積を建物用途別に実測し（写真）、重量から容積換算に適用可能になるよう、ﾐｯｸｽﾍﾟｰﾊﾟｰやﾍﾟｯﾄﾎﾞﾄﾙを新たに加えた諸数値を整備した。

5. 廃棄物の資源回収を支援するごみ集積所計画手法の提案

運用建物における廃棄物処理の基礎的情報を整理し、資源回収を支援する為のごみ集積所計画手法の提案を行い、建物内で発生する廃棄物の資源回収を支援する建築計画を標準的に実施するための基礎資料を作成した。自治体が定める計画手法と本提案手法を両者の比較により評価したところ、資源物保管スペースを算出する際は、品目ごとのスペースが確保できるよう、可燃・不燃物と同様に、資源物に関しても排出量に基づき面積算定することが肝要であることを定量的に例示した (図 5)。

6. 廃棄物資源回収による環境性能評価

建物から排出される一般廃棄物の資源回収がその実施要領に伴いどの様に環境に影響するか言及した。調査建物における廃棄物排出量と資源回収量の実態値を求め、資源回収率と定義しまとめたところ、資源として回収している品目の違いから建物毎にバラツキがあるが平均では約 60% であった。また、建物で拠点回収された廃棄物が運搬、処理される過程で排出される C02 排出量と廃棄物資源回収により期待される CO2 排出削減量を総和し、資源回収率との関係を求めたところ、資源回収率が 40 ～ 60% 付近で運搬、処理過程において発生する CO2 排出量と同等の資源回収による CO2 排出削減効果があると予想された（図 6）。

7. おわりに

本研究では一連の実態調査に基づき建物用途毎の廃棄物排出割合や見かけの比容積から必要とされる施設計画のあり方を提示し、建物運用時における廃棄物の資源回収による環境性能について評価した。しかしながら、資源回収された廃棄物のマテリアル・サーマルリサイクルによる環境寄与度や経済性の評価には至ってなく、評価領域の設定についても課題を残した。廃棄物の適正処理を支援するための社会インフラとして建築物がその役割を果たすためにも、これらの評価に資する研究推進と研究蓄積が期待されるところである。

WIDE VIEW HOUSE

丘を臨む家

吉田 立
RDA RITSU DESIGN ARCHITECTS
リツデザイン建築設計事務所

West Elevation

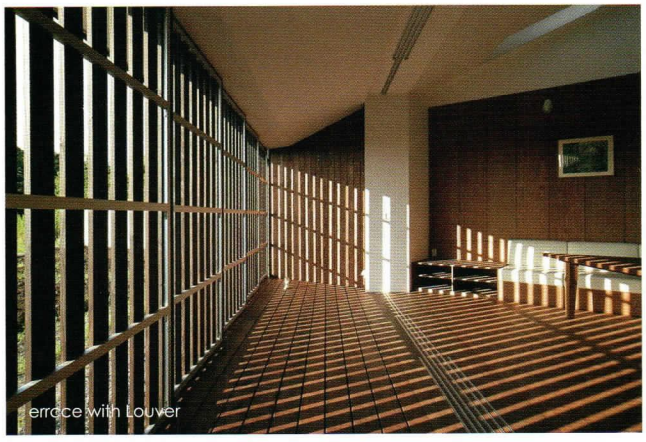

errace with Louver

Photo : Katsuhiko Murata

Studio-Terrace

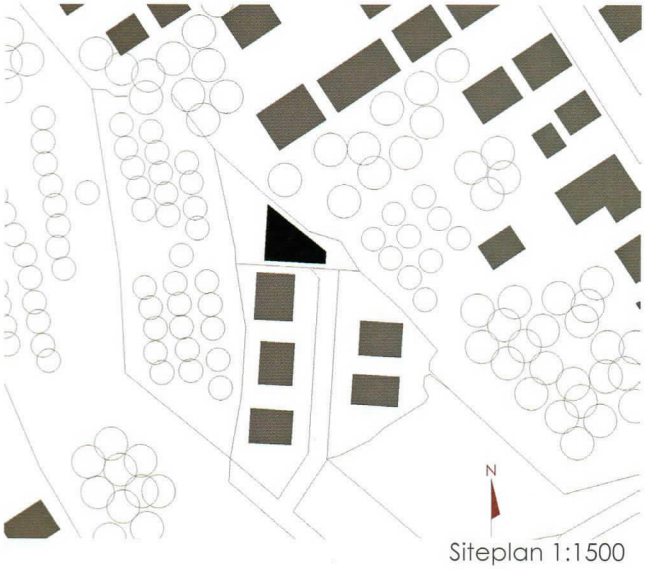
East Elevation/Entrance

◆西の丘にむかって

東京湾の内房・岩井海岸近くの三角地に建つ、これからリタイヤを迎える夫婦のための建築。夫は海釣りを、妻はこの庭でガーデニングを楽しむ。現在は週末を過ごすための住宅であるが、リタイヤ後はここに移住する予定である。

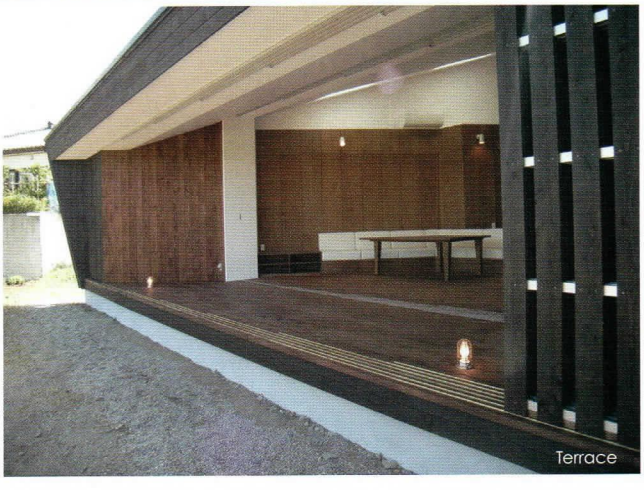
海岸近くの西が丘や、東京湾を挟んで臨む富士山などの素晴らしい眺望は、敷地から真西の方向に位置しており、施主も真西に向かうことを要望していた。また、たくさんの草花を育てるために、建物を極力コンパクトに計画することが求められた。

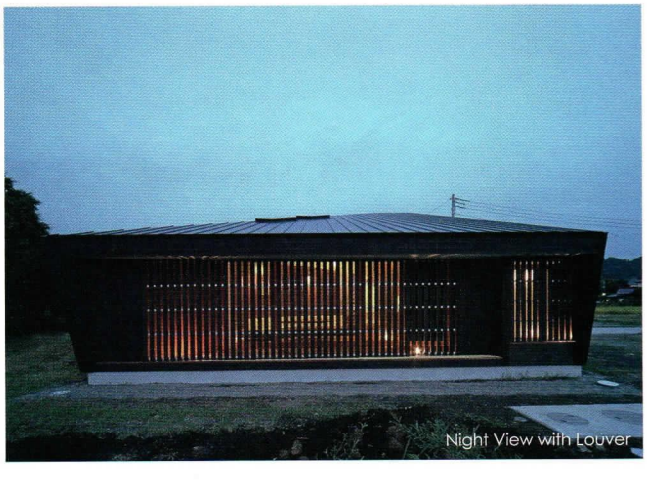
遮るもののない強い西日と、海からの強風に注意しながら三角形の敷地を立体的に検討し、この素晴らしい眺望を一枚の大画として切り取った。



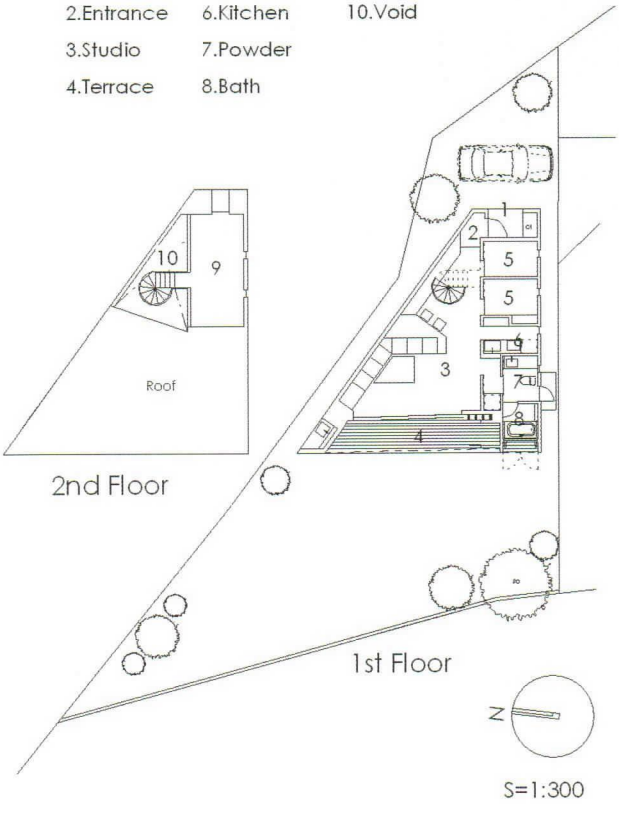
Siteplan 1:1500

Studio room


Terrace


Night View with Louver

1.Porch
2.Entrance
3.Studio
4.Terrace
5.Bedroom
6.Kitchen
7.Powder
8.Bath
9.Loft
10.Void



◆風景を切り取る大開口

近年、南房総は、その穏やかな気候により草花を楽しむ観光客に大変人気である。敷地は南房総の入口・岩井海岸にほど近い、目前に田園風景と海岸脇の『西が丘』を臨む場所にある。

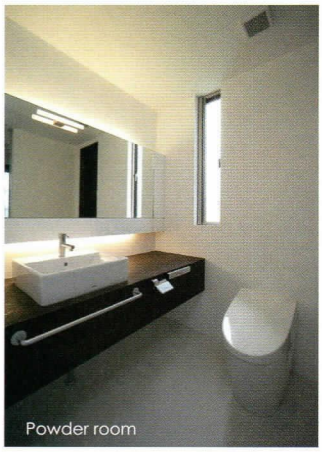
最初に現地を訪れたとき、この丘を臨むおだやかな風景を時と共にゆっくりと楽しめる居場所をつくりたいと思った。それは切り取られた一瞬の風景ではなく、太陽の移動や天候の変化、季節の移ろいという時間的要素をゆったりと味わうことができる特別な予約席のようなイメージであった。この「予約席」には多少ドラマティックな演出が必要だと思った。

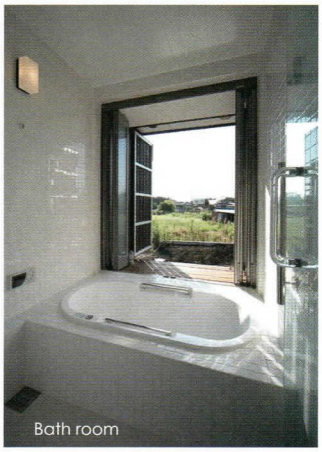
まず、エントランスは三角形の平面の頂点にあり、最も天井の高い場所である（CH=6000）。そこから全ての床・壁・天井の面が幅7.5ｍｘ高さ2.2ｍの開口部へ向けて拡がってゆく。先のつぶれたメガホンのようなイメージである。

この開口部は風景を存分に堪能できるよう、柱の存在感を極力無くし、そこに全開口できる木製の建具をはめ込んだ。また西日やどのような天候にも対応できるように、奥行き２ｍ以上の庇と広々とした縁側を設けた。この深い縁側は、ダイナミックで刺激的な開口部をヒューマンスケールに近づけるバッファゾーンとしての役割も果たしている。

私も竣工時に２日ほど滞在させていただいたが、日の出から日没まで、時と共に変化する風景は、それぞれが忘れがたい映画の１シーンのようであった。

South Elevation


Powder room


Bath room

◆スローライフのカギ

「素朴な小屋のような建物を」というオーナーのイメージを実現するため使用材種を限定し、唐松＋保護着色仕様とした。

外部にはラフ仕上げの唐松材を用いることで、光の余分な反射を抑え景観に馴染むように配慮した。三角形の外観は背後に控える南房総の山々の稜線に馴染むような高さに抑えている。　内部は雄大な自然の景観に向かう居住者に対し、背後をしっかりと包み込むように唐松材の背景を設置した。大きな開口部に対してその他の開口部を限定することで、着座した際に空間の落ち着きを与えている。

Sun-set from Terrace

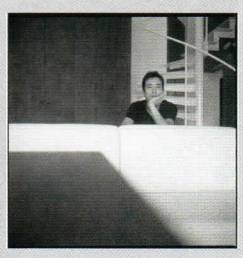
縁側先端には全開口できるルーバー扉を設置した。このルーバー扉は、強烈な西日を美しく変化させるとともに、夜間や不在時の防犯機能も備えている。このルーバー扉を閉じることで、夏季などは網戸のみで夜を過ごすことができる。

この他にも、２重屋根・２重壁による外壁～屋根一体通気や、リサイクル素材による高気密高断熱仕様（セルロースファイバー充填断熱工法）、処分竹を利用した竹炭の床下敷込み、雨水再利用の予備配管など、スローライフにこだわった。

◇おわりに

事務所を独立してから７年が経過した。大学を卒業してから紆余曲折があっての独立であったが、その間様々な人々出会い助けられながら現在に至っている。幸いなことに住宅建築を中心に集合住宅や施設建築などの設計の機会に恵まれ、また、谷口先生より今回本誌のお声掛けいただき、有難く掲載させていただくことにした。ご助力いただいた全ての方にこの場を借りて御礼申し上げたい。

吉田　立 Tatsuru Yoshida



一級建築士事務所
リツデザイン建築設計事務所

www.ritsu-design.com
rda@ritsu-design.com

●略歴

1972 年　神奈川県生まれ
1991 年　神奈川県立瀬谷高校卒業
1996 年　工学院大学工学部建築学科卒業（谷口研究室）
1996 年　野村ホーム株式会社
1999 年　株式会社秋田設計
2002 年　リツデザイン建築設計事務所設立

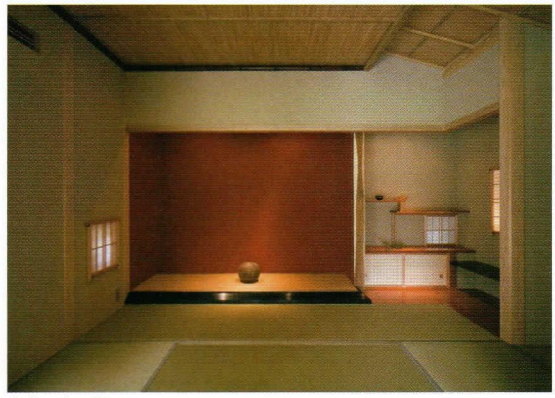
NICHE GALLERY

伊豆高原ゲストハウス

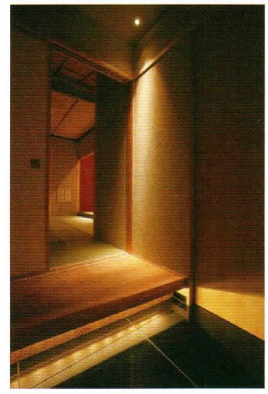
鍋田 雅生

NABETA DESIGN ASSOCIATE
株式会社　鍋田設計事務所

階段 /photograph:chiaki Yasukawa



和室・床の間 /photograph:chiaki Yasukawa



和室 /photograph:Masayoshi Inoue

浴室 /photograph:chiaki Yasukawa

エントランスホール /photograph:Masayoshi Inoue

日経アーキテクチュアの平成21年10月26日号に掲載された作品を今回のＮＩＣＨＥにと谷口教授からお話いただきました。卒業してから35年、事務所を開いてから20年の節目に発表させて頂けた事に感謝いたします。

◆クライアントとの出逢い

我々設計の仕事は、理解あるクライアントにいかに「巡り逢う」かが重要だと思います。

今回は10年前に設計した病院の工事を請負ったゼネコンの社長でした。当社のデザインの良さと監理の厳しさに「仕事を請けるのは大変で嫌だが、施主になるならとても良い･･･」と感じていたそうです。

６年後数多くの候補地から伊豆高原に「会社のゲストハウスとして品格と、リゾート施設としての癒しがある建物」を建てたいとの設計依頼がありました。

◆敷地の環境

環境への配慮として１０６０坪の敷地の１／３をサンクチャリーとして残す事が決められました。高台の敷地ではあるが、２階のレベルでサンクチュアリーの樹木の合間を縫って海がやっと見える程度でした。

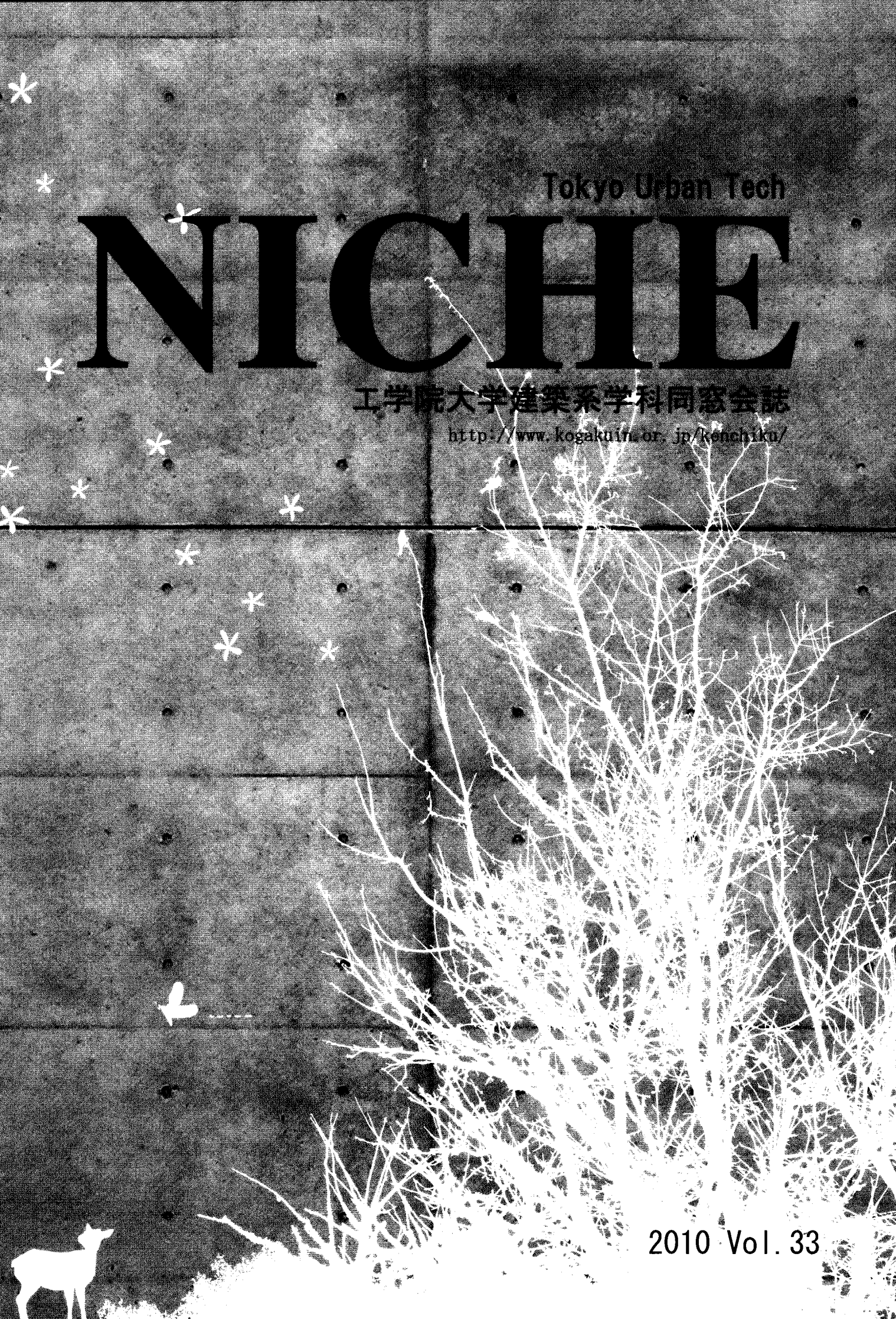
「海を見ながら、語らい美酒に酔う」そんな癒し空間を目指していたのに・・・富士箱根伊豆国立公園内で階数は２階まででそれ以上高く建てられない。考えた末、階数の入らない３階レベルのルーフバル

Tokyo Urban Tech

NICHE

工学院大学建築系学科同窓会誌

http://www.kogakuin.or.jp/kenchiku/



2010 Vol.33